

大原芸術研究所

紀要

Bulletin of Ohara Art Institute

第2号 2026

大原芸術研究所

OHARA ART INSTITUTE

大原芸術研究所

紀要

Bulletin of Ohara Art Institute

第2号 2026

大原芸術研究所

OHARA ART INSTITUTE

目次 | Contents

5 | 研究論文

近代絵画における下層の創造的活用(3):
ジョルジュ・ルオー《道化師(横顔)》(1925-29年)を中心に
小林俊介・大下浩司・塚本貴之

Creative Utilization of the Underlayer in Modern Painting (3): With Focus on *Clown* (1925-29) by Georges Rouault
KOBAYASHI Shunsuke, OSHITA Koji, TSUKAMOTO Takayuki

27 | 研究論文

植民地期朝鮮の女性洋画家の越境と芸術——白南舜(1904-1994)を中心に
申旼正

Women Artists Who Crossed Borders in Colonial Korea and Their Art—With Focus on Paik Namsoon (1904-1994)
SHIN Minjong

41 | 研究論文

濱田庄司の備前焼
柳沢秀行

Bizen Ware by Hamada Shoji
YANAGISAWA Hideyuki

55 | 資料紹介

児島虎次郎日記 1920年(大正9年)
吉川あゆみ

Kojima Torajiro's Diary for 1920 (Taisho 9)
YOSHIKAWA Ayumi

(5) | 資料紹介

大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について-2
水島博・柳沢秀行

On the Letters from Kojima Torajiro to Ohara Magosaburo, Part 2
MIZUSHIMA Hiroshi, YANAGISAWA Hideyuki

(3) | 編集・投稿規定

近代絵画における下層の創造的活用(3): ジョルジュ・ルオー《道化師(横顔)》(1925-29年)を中心に

Creative Utilization of the Underlayer in Modern Painting (3): With Focus on *Clown* (1925-29) by Georges Rouault

小林俊介 (山形大学教育学部教授)

KOBAYASHI Shunsuke (Professor, Faculty of Education, Yamagata University)

大下浩司 (吉備国際大学外国語学部外国学科教授)

OSHITA Koji (Professor, Department of Foreign Studies, Faculty of Foreign Languages, Kibi International University)

塚本貴之 (公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員)

TSUKAMOTO Takayuki (Conservator, Curator, Research Department, Ohara Art Foundation)

要旨

本稿ではジョルジュ・ルオー(Georges Rouault, 1871-1958)の絵画技術について、大原美術館蔵の《道化師(横顔)》(1925-29年)を中心に科学調査の結果を踏まえながら考察を行った。当該作品は近代日本の洋画家、とくに松本竣介の重層的な技法の形成に大きな影響を与えたと考えられる旧福島コレクション作品のひとつであり、ルオー中期の技法やマチエールが看取できる。今回、当該作品に対して行った科学調査は斜光写真、紫外線写真、赤外線写真、X線写真の撮影と蛍光X線分析法(XRF)である。

科学調査の結果は、福島繁太郎や伊藤廉らによって報告されているような、塗りと削りを繰り返すルオー中期における重層的な技法を裏付けるものであった。X線写真には削りや拭き取りの痕跡が顕著に観察された。XRFでは各測定点から当該色や近接色以外の絵具の成分が多数検出され、制作過程における絵具の欠片や微細な粉末の散在、また目視では判別できないほど薄い絵具層の断片的な広がりが見えられた。加えて、人物部分における描画密度の高さや、道化師が被る帽子の周囲における円蓋を想起させるような筆致は、ルオーによる作品の「受肉」・「荘厳」の造形的な現れとみなすことができる。

ルオーにおけるカトリックの信仰と古典絵画の技法やマチエールに対する接近は、失われた「古典」の探求と復興という意味において通底している。正確に言えば、ルオーは古典絵画を参照しながら、近代以降常套的になったプリマ画法を相対化するような、まったく新しい絵画技術を創出したといえる。その技法における重層性は当時における古典絵画技法研究の水準と対応しているが、今日の研究ではプリマ画法による古典絵画作品も少なくないと考えられているからである。

In this study, the painting techniques of Georges Rouault (1871-1958) are examined based on scientific investigation on mainly *Clown (Profile)* (1925-29) in the Ohara Museum of Art collection. This painting was once part of the former Fukushima Collection, which is presumed to have had a significant influence on modern Japanese *yoga* (Western-style painting) artists, especially the formation of Matsumoto Shunsuke's multilayering technique. It shows the techniques and *matières* Roualt employed in the midterm of his career. The scientific investigation undertaken on this painting this time consisted of diagonal light photography, ultraviolet photography, infrared photography, X-ray photography, and X-ray fluorescence (XRF) analysis.

The results of the scientific investigation confirmed Roualt's mid-period multilayering technique of repeated painting and scraping, which has already been reported by Fukushima Shigetaro, Ito Ren, and others. X-ray photographs revealed marked traces of scraping and wiping off. XRF analysis detected many ingredients of colors other than the paint concerned or that in adjacent areas, suggesting that fragments of paint or fine powder got scattered and that thin layers of paint indistinguishable to the naked eye extend fragmentarily. Furthermore, the density of the depiction of the figure and the brushstrokes around the clown's hat alluding to a dome can be regarded as Roualt's implications of "incarnation" and "solemnity." The Catholicism in Roualt's works and his approach to classical painting techniques and *matières* share an underlying interest in pursuit and revival of lost "classics."

To be precise, one could say that while referring to classical paintings, Roualt created an entirely new painting technique relativizing the *alla prima* technique, which had become the standard from modern times onward. That is because, although the multilayered character of Roualt's technique does correspond to the standard of studies on classical painting techniques of the time, present-day studies consider that not a few classical paintings employed the *alla prima* technique.

はじめに

ジョルジュ・ルオー (Georges Rouault, 1871-1958) の《道化師 (横顔)》(1925-29年、68.5×50.0cm、キャンバスで裏打ちされた紙に油彩、大原美術館蔵)【図1】は、1920年代、ルオーの中期 (1918年頃から1934年頃まで¹⁾) における絵画様式が看取できる典型的な作品のひとつである。この作品は福島繁太郎 (1895-1960) による、いわゆる「福島コレクション」の中核的作品のひとつとして将来されたものである。1934年2月に東京数寄屋橋の日本劇場で開催された同コレクション展観は、松本竣介 (1912-1948) や難波田龍起 (1905-1997)、鬘光 (1907-1946) らをはじめとする昭和戦前期の洋画家に多大な影響を与えたものとして特筆される²⁾。

松本らに衝撃を与えたのは、ルオー作品が有する骨太の線と暗い背景に浮かび上がる大胆な色彩対比による絵画様式もさることながら、塗り重ねによる透明性と触覚性を感じさせるマチエールであった。それは当時の洋画壇において通有的だった不透明描法を中心としたプリマ画法³⁾とは決定的に異なるものだったからである。ルオー作品との遭遇以後、就中、その実作が多数展観された福島コレクション展観 (1934年2月) 以後、彼らの作品に触覚的なマチエールへの志向がみられるのはこのためである。

そもそも松本らが技法やマチエールへの関心を持つ契機となったルオー自体の技法は如何なるものであったろうか。拙稿「近代絵画における下層の創造的活用 (1): 松本竣介《都会》(1940年)を中心に」(2025年)⁴⁾では松本竣介の絵画技法が、マックス・デルナー (Max Doerner, 1870-1939) が主唱するような、西洋古典絵画の技法、就中その重層的な技法の探求に基づくものと結論づけたが、本稿では大原美術館蔵の《道化師 (横顔)》を中心に、

文献調査ならびに科学調査の結果を踏まえながらこの問題に接近したい。なお本稿は「はじめに」および「1. 技法・表現の特徴とその背景」、「3. 考察」、「おわりに」を小林が、「2. 科学分析調査」を大下・塚本が執筆し、三者で協議のうえ全体の表記を調整した。

1. 技法・表現の特徴とその背景

1-1 作品の来歴について

本作品は「道化の首」や「青い鼻」など、様々な題名が附されてきた。ルオー作品のレゾネではO.P.896「道化師 (横顔) / Clown (Profil) / 油彩」となっている⁵⁾。福島コレクション関係の図録で「青い鼻」となっているのは、同じ旧福島コレクション作品の《赤鼻の道化師》(1925-29年、ブリヂストン美術館蔵、O.P.898) との区別からつけられた題名であると思われる。実際、《道化師 (横顔)》の鼻部分には背景と同系統の緑色による賦彩が認められる【図2】。

冒頭で述べたように、《道化師 (横顔)》は画商・美術評論家の福島繁太郎のコレクションとして将来されたものである。福島が同作を購入した時期は詳らかではないが、福島コレクションが多数紹介された『美術新論』4巻2号 (1929年2月) に図版が掲載されていることから、おそらくは福島が渡仏しルオー作品を購入し始めた1925年春頃から1929年初頭までの時期に購入されたものと思われる。当該作品は1953年の東京国立博物館における「ジョルジュ・ルオー展」や、1955年および1966年の「旧福島コレクション展」でも展示されたほか、美術雑誌等の図版等でも数多く紹介されてきた。大原美術館に所蔵されたのは1954年である⁶⁾。

図版の紹介としては、『美術新論』4巻2号 (1929年2月) で「道化の首 (1928年作 十二号)」として、

1 ルオーの絵画様式の区分については、以下を参照した。「ジョルジュ・ルオー展 内なる光を求めて」展図録、出光美術館、2015年。
2 《道化師 (横顔)》が1934年の同展観に展示されたかどうかは不明。題名等から考えると「福島コレクション展観目録 (第9回国画会展覽会目録と同冊)」における「道化役者 一九二九年作 (目録番号廿)」が該当するかもしれない。同目録によればルオーの出品は9点 (目録番号十四～廿二) である。「メール・ウグー 一九一七年作 (目録番号一六)」は《ユピュ母さん》(1918年、O.P.1021)、「赤い鼻 一九二五年作 (目録番号十七)」は《赤鼻の道化師》(1925-29年、アーティゾン美術館蔵、O.P.898)、「女の顔 一九二五年作 (目録番号十八)」は《ピエロ》(1925年、アーティゾン美術館蔵、O.P.911) に該当すると思われる。なお、ルオーのカatalogレゾネにおける作品番号については以下を参照し、絵画作品の場合はO.P.以下にその番号を記した。ベルナール・ドリヴァル本文、柳宗弦・高野禎子訳、『ルオー全絵画』、岩波書店、1990年。
3 以下を参照。小林俊介「難波田龍起・松本竣介・鬘光の油彩技法について」、『美術史』、145冊、1998年。
4 小林俊介、大下浩司、塚本貴之、「近代絵画における下層の創造的活用 (1): 松本竣介《都会》(1940年)を中心に」、『大原芸術研究所紀要』、1号、2025年。
5 カタログレゾネの作品番号については註3を参照のこと。
6 大原美術館の台帳上の記録による。当時の作品購入では、購入に伴う諸手続きよりも早く作品自体を美術館に搬入し展示していた場合があり、書類上の記録と実態に齟齬が生まれていたケースもある。

次いで同誌5巻2号（1930年2月）に「道化の首（12号）1926年」として、また美術新論社出版のルオー画集（1930年6月）に「道化の首 1926年作（12号）」として、伊藤廉（1898-1983）解説によるアトリエ社刊行の画集（1932年11月）に「道化役者」として紹介されている。

題名が示すように本作は横顔の道化師（Clown）を描いたもので、この時期は曲馬団の道化師やピエロ、女曲馬師などが主な題材であった。帽子を被った道化師の横顔、左方によった黒目、正面に向けた目線などは同時期の《赤鼻の道化師》（1925-29年、アーティゾン美術館蔵、O.P.898）【図3】に似るが、明暗対比が激しい同作の背景に対し、《道化師（横顔）》では暗い青緑色の背景に大きな顔が明るく浮かび上がる構成となっている。



【図3】ルオー《赤鼻》c.1925-26、アーティゾン美術館蔵

1-2 技法・表現の特徴

1-2-1 加筆修正を繰り返す重層的な技法—福島繁太郎・伊藤廉・黒田重太郎の報告—

多くのルオー作品と同様、本作も紙の上に描かれている。紙はキャンバスで裏打ちされ、木枠に貼られている。脇にはテープが貼られ、テープの破れた箇所からは裏打ちのキャンバスが露出している【図4】。このような裏打ちは当時よくおこなわれていた。作品の大きさは68.5×50.0cmでルオーの当該時期の作品としては標準的なものである。

作品は一見触覚的な印象があるが、実際にはそれほど極端な凹凸はなく、むしろ平滑で全体に艶がある。ルオーの中期作品における技法、すなわち塗っては乾かし、ナイフで削ったり、あるいは



【図4】作品の左側側面下部テープの破れた箇所からは裏打ちのキャンバスが露出している（白丸部分）。

ナイフで絵具を押しつけたりという工程が繰り返された結果、平滑な薄い層が重なるような形でマチエールが形成されているようにみえる。

ルオーの中期作品における「塗っては削る」という工程は、身近にその過程を見ていた福島繁太郎やその妻の慶子、また伊藤廉や黒田重太郎（1887-1970）といった洋画家によって報告されている。以下の記述はパリの福島宅に来訪して自作を加筆修正するルオーの「仕事振り」を示すものである。本作にみられる、触覚性に富みながら平滑で透明感のあるマチエールは、以下で福島が述べるような工程から産み出されていると考えられる。なお以下の記述における制作の時期は1929年4月頃とされている。

仕事は早速その翌日の夕方からかゝった。昨日の話し合いで材料を揃えておいたが、絵の具はブロックスが良いだろうと言う私の意見に賛成してこれにした。

色の種類は、

オートル・メール（ウルトラマリン）
ヴェール・カドミウム（カドミウムグリーン）
ヴェール・エムロード（エメラルドグリーン）
ルージュ・ド・カドミウム・フォンセ（ディープカドミウムレッド）
ブラン・ダルジャン（シルバーホワイト）
ジョーヌ・ド・カドミウム（カドミウムイエロー）
オークル・ジョーヌ（イエローオーカー）
ノアル・ディヴォアール（アイヴォリーブラック）

ブラン・ルージュ（ブラウンレッド）
油としては、
ウイル・ド・ラン（リンシード油）
シカチフ（乾き油）

パレットナイフは腰の固いもの。

白毛の丸筆、数本。

この頃の作家の余り使わないものでは、黒鏡、これは、鏡の裏が黒くなっているもので、ヴァールールを見る為に昔はよく使ったものである。

それにパステル一組の準備をしておいた。

〔中略〕

黒で太々と輪郭を直してしまった。彼はカンバス〔筆者注：多くの場合カンバスで裏打ちされた紙〕を画架にかけて描かない。カンバスをテーブルの上に平に置いて懸腕直筆で描く。初めからパレットナイフを用いることはめったにない。

油壺のリンシードにはシカチフを少し混ぜ、これに筆をどっぷり浸した上、チューブから絞り出したまゝの絵の具をつける。絵の具をパレットの上で混ぜるようなことはない。前にベルネーム・ジューンで二度目に買った裸婦の、半身像の、肉体の色は、ブラウンレッド（ライトレッドのような色）で描きこれが乾いた後、白を上からパレットナイフでおさえている、と書いたことに注意して頂きたい。こうすると、パレットの上で絵の具を混ぜるのとは違って色彩の鮮度がよく保たれて、ある所は白がそのまゝ残り、ある所はブラウンレッドに白が混っても色彩の鮮度を落さずに色を薄める事が出来る。

線をひく場合は、“えい”と力を入れて描く。一応描き終わると、黒鏡に照して明暗の調子を見る。鏡の裏の黒い塗料が色彩を吸収してしまうから、明暗の調子が見易いのである。〔中略〕

一応描いたタブローは、一週間位そのまゝにしておいて、絵の具が殆ど乾いた時にパレットナイフでごしごし削り取る。あとには薄い絵具の層が研ぎ出されたように残る。こうして、その上にまた描くが、前の形に拘らないから、いくら形の変ることもある。一応描いてまたそのまゝにして、一週間位たって絵の具を削り取

り、また描くという風で、この制作工程を何度繰り返すかわからない。かくして絵の具の薄い層が次第に雲母の如く重って、美しい独特のマチエルを形造る。これがルオー中期の制作工程である。

描いては削り取り、削り取っては描いて、形や、色彩やマチエルが、自分の気に入るまで何度も繰り返すが、これがあきれるほど埒があかない。〔中略〕

私の所で直し出したのが1925年の春であるが、その間夏や秋に休んだことはあるとしても、1933年の秋、日本に引き上げるまでには、一つも出来上がらなかった⁷。

このようなルオーの重層的な描画過程を、マックス・デルナーが述べるような、不透明な塗りと透層（グレーズ）を繰り返して画面を構築していく古典的な絵画技法の応用とみる見方も存在した。伊藤廉や黒田重太郎の見解はその典型的なもので、伊藤はルオー中期の技法をそれ以降の厚塗りの技法と比較しながら次のように述べている⁸。

武者さんの持つて来られた小品は、受け取るときまだ絵具がぬれてゐたといふのだから、近頃の作風をあの作品で推察することが出来るわけだ。大変白くなつてゐる。それよりもごりごり硬い小刀で塗り込んだ絵具をけづりとり、またその上に絵具を塗り、また削る、とぎ出すといったやうな技法が捨てられてゐることである。絵具はいつまでも塗り重ねられてゆく。黒い輪郭線の中の白色の塊はその中央部にむかつて蒲鉾形に厚くなつてゐる。そしてところどころ薄紅色が、がしやつと重ねられてゐるが、これはトランスパーランとは違ふ。薄紅は透明色が用ひられてゐるのではないから。

もともとルオーの絵は正当な意味のトランスパーランで仕上げられてゐるのではないが、不透明色と透明色との重なり具合や続き具合の様子には通じたものがあつた。例へばたしか「バンリュ」といふ題の絵だが、月が出て地上に三人の親子がゐる風景画の建物の屋根にあたると

7 福島繁太郎、『ルオー画集』、新潮社、1958年、pp.44-47。

8 伊藤廉、「ルオーに就て」、『みづゑ』387号、1937年5月、p.421。

ころ、白い色の横一文字の上に黒の生まが溶液で薄められて置かれてゐる。絵具の薄膜をとほして反射して来る色合を作ることは、トランスパーランである。この方法の利用がところどころにあつた。それもない。

「武者さんの持つて来られた小品」とは1937年の第12回国画会展に特別陳列された《ピエロ》【図5】で、1930年代のルオー作品に見られる、明部に白色を盛っていく技法が看取できる⁹。また「バンリュ」とは、やはり第12回国画会展に特別陳列された旧福島コレクション作品である《郊外のキリスト》(Le Christ en banlieue, 1920-24年、O.P.856、アーティゾン美術館蔵)【図6】を指している。1920年代以降描かれるようになった点景にキリストが登場する「郊外」(Banlieue)の風景画である。建物の屋根部分をはじめ随所に希釈された黒系の絵具が透明に塗り重ねられているのがわかる。

また、黒田はその大著『洋画メチエー 技法全科の研究』の中で、ルオーの技法について「唐突な明暗の対置は油絵なら盛り上げとグラシとの巧妙な使ひ方であらば水彩なら紙の地が、適当に利用される」¹⁰と伊藤と同様な見解を述べており、1928年という出版の時期から見ても、ルオー中期の技法を評したものと見てよいであろう。



【図5】「ピエロ ルオー 第12回国展特別陳列・武者小路氏蔵」(『みづゑ』、387号、1937年5月)

1-2-2 度重なる加筆修正の痕跡

福島繁太郎らが報告する度重なる加筆修正の痕跡は、《道化師(横顔)》における撮影時期の異なる図版を比較検討することによっても確認できる。当該作品においては、顔を中心とした人物と背景との関係、とくに顔の輪郭線であると同時に暗部でもあるような、両義的な性格を持つ黒く太い線と背景との関係について試行錯誤が行われたようだ。

この時期、この両義的な黒く太い線の機能についてルオーが考察を続けていたことは、当該作品と関連作品との比較によって明確になる。先述のように、当該作品は帽子を被った道化師の横顔という点で《赤鼻の道化師》に似るが、同作の背景は明暗対比が激しく、右側背景部分にある明るい緑色をした厚塗りが道化師の影を強調するとともにその横顔を明るく浮かび上がらせている。一方、《道化師(横顔)》の背景には、輪郭線とも横顔の影とも解釈しうる黒く太い線が認められるが、この黒い線は暗い緑色の背景に馴染んでおり、《赤鼻の道化師》ほど背景との明暗差はない。やはり同時期の《横向きのピエロ》(埼玉県立近代美術館蔵、1925年、O.P.900)においては、鼻側の輪郭線はより背景と馴染んでいるように見える。

当該作品における加筆修正の過程は、以下に述べるように、1929年から1932年にかけて雑誌や画集に掲載された本作の図版と現状の写真を比較す



【図6】ルオー《郊外のキリスト》c.1920-24、アーティゾン美術館蔵

9 《ユゼーブ》(Euèsbe, 清春白樺美術館蔵)や、《二人の道化師》(Les clowns, 1929-39年、O.P.2176、パナソニック汐留ミュージアム蔵)など、この時期の作品には生っぽい白が明部に塗られている。

10 黒田重太郎、『洋画メチエー 技法全科の研究』、文啓社書房、1928年、p.611。

ることによって分かる。福島が帰国する1933年までの間に少なくとも2回の改変、加筆修正が行われているものと推定される。

先述のように、戦前期の日本における《道化師（横顔）》の図版紹介は『美術新論』4巻2号（1929年2月）、同誌5巻2号（1930年2月）、また美術新論社画集（1930年6月）およびアトリエ社画集（1932年11月）があるが、これらのうち美術新論社の出版物に掲載された図版は構図が同一で、同じ原板によるものと思われる。おそらく1928年頃までに撮影されたものであろう【図7：写真A】。次いでアトリエ社画集に「道化役者」として図版が掲載されているが、掲載図版の黒い描線は写真Aとは異なっている【図8：写真B】。帽子上部右側の黒い線は写真Aでは帽子のツバに向かって直線的に描かれているが【図9：写真A-1】、写真Bでは丸みを帯びてツバの付近で左側に巻き込んでいる【図10：写真B-1】。これを可視光線による作品の現状写真【図11：写真C】と比較すると、写真Cではふたたび直線的に描き直されている。額の右側から鼻筋の右側にかけての黒い線についても、写真Aと写真Bでは微妙に異なり、写真Bの方がより太く、より濃く描かれているようである。また耳の下から顎に続く黒い線も修正されており、写真Aでは顎のつけ根あたりでいったん途切れているが【図12：A-2】、写真Bでは連続している【図13：写真B-2】。

明暗の調子も変更されている。写真Aでは顔の肌部分が全体的に白っぽく平面的な印象があるが、写真Bでは肌部分の濃淡の変化があり、頬や顔の側面部分が額や鼻部より暗くなっており、首も顎の下部分である右側がより暗くなっている。また、背景も写真Bの方が画面左隅の背景部分や帽子右側など、暗部がより強められている印象がある。加えて、顔の背景部分について比較してみると、写真A・Bでは帽子のまわりの筆触は左右に八の字のような形で塗られているのに対し、写真Cでは帽子の周囲に、西洋の古典的な宗教画における円蓋のような形で半円を描くように塗られており、写真Cでは帽子との明暗対比がより強められてい

るようにみえる。ちなみに当該作品は美術出版社刊行の『旧福島コレクション』（1955年）に「青い鼻 5号 1925～'29 Georges Rouault Le nez bleu」として掲載されているが、写真の光源や露出等による見え方の変化を考慮すれば、写真Cに見る明暗や構図と変わらないものと考えて良いであろう。

これらの観察と旧所蔵者である福島の証言を勘案すると、当該作品は1929年から1932年頃までの間に加筆されたと考えて良さそうである。先の引用で示したように、福島は1929年にルオーが初めて福島の自宅を訪れ、以降しばしば自宅で福島邸にある自作に加筆し、また結局それらの完成が福島の帰国する1933年には間に合わなかったと述べている。当該作品は1929年の『美術新論』誌上で紹介されていることから、帰国の年である1933年には間に合わなかったという証言とは辻褄が合わないものの、福島の所蔵となった後、加筆がなされたと考えるのが自然であろう。

これまで指摘されてきたように、長期にわたって加筆・修正を続けるルオーの描画過程がしばしばルオー作品の制作時期や「完成」の見極めを困難にしているが、本作もまたそのようなルオーの制作のあり方が反映された作品とみるべきである。

2. 科学調査

絵具の種類や絵画技法を明らかにすることを目的として、各種写真の撮影およびXRF（蛍光X線分析法）による科学調査を実施した。まず、他作品との合同調査として2021年1月に東京藝術大学保存科学研究所の協力のもとX線写真を撮影し¹¹、2022年12月にはルオー《道化師（横顔）》の状態を観察するため紫外線写真【図14】、可視光線写真（通常写真）【図1】、斜光写真【図15】、赤外線写真【図16】を撮影した。さらに、2023年12月、本作品に使用された絵具の種類を推定するために、XRFによる科学調査を行った。

紫外線写真、可視光線写真（通常写真）、斜光写真の撮影にはNikon製デジタル一眼レフカメラD5100を使用し、赤外線写真の撮影にはPENTAX製デジタル一眼レフカメラ645D IRを用いた。本

11 撮影作業は同研究室の塚田全彦氏、小椋聡子氏、塚本が行い、同研究室教授（当時）の桐野文良氏及び大学院生であった堀口明日馨氏にもご協力頂いた。なお、撮影装置については、アールテック株式会社製の携帯型X線撮影装置IPF-21、ならびにGE Inspection Technologies製のイメージングプレートとイメージングプレートスキャナCRxFlexを用いた。



【図7】写真A：美術新論社画集、1930年



【図8】写真B：アトリエ社画集、1932年



【図9】写真A-1：美術新論社画集、1930年



【図10】写真B-1：アトリエ社画集、1932年



【図11】写真C：可視光線写真（白黒化したもの）



【図12】写真A-2：美術新論社画集、1930年



【図13】写真B-2：アトリエ社画集、1932年

稿に掲載した写真は、構図の調整のためにトリミングを施している。斜光写真については明度とコントラストを補正し、赤外線写真は視認性を高めるためグレースケールに変換した。

絵具の分析には既報のXRF装置を用いた¹²。そして、検出された元素の結果をもとに『新装版 絵画材料事典』に記載された情報を参照し、絵具に含まれる顔料と絵具の種類を推定した¹³。ここでは紙面の都合上、科学調査の結果を中心に報告する。

2-1 紫外線写真

絵画表面からの蛍光を観察するため、ルオー《道化師（横顔）》に対して紫外線を照射し、紫外線写真を撮影した【図14】。撮影は、調査環境の照明を薄暗くした状態で、絵画に対して右手前から紫外線を当て行った。調査環境における照明の可視光線が紫外線写真に写り込まないようにシャッター速度を適切に調整し撮影した。

撮影した紫外線写真では、絵画表面全体がやや暗く写っているものの、弱いながらも蛍光が確認された。絵画に対して左右の両端および左右上部の角部では、これらの周辺部と比較して暗く沈んだ撮像が認められる。これは、額縁との摩擦などにより、絵画表面のワニスが部分的に剥がれたことなどが原因として考えられる。撮影時に目視で観察したところ、絵画表面には全体的に光沢が認められた。以上のことから、《道化師（横顔）》の絵画表面にはワニスが塗布されていると考えられる。このワニスについては、3節において考察している。

2-2 斜光写真

絵画表面の微細な凹凸を観察するため、ルオー《道化師（横顔）》の斜光写真を撮影した【図15】。撮影は、絵画表面に対して右側から白色光を照射し正面から行った。

斜光写真と可視光線写真【図1】を比べると、可視光線写真では絵画表面が平面的に感じられるが、斜光写真では絵画表面の微細な凹凸を確認できる。このように、斜光写真からは、可視光線写真や目視では感じられなかった作品表面の質感や筆

跡、絵具の重なり等も感じられる。

例えば、道化師の帽子や顔、首などの部分には、可視光線写真では捉えられなかった微細な凹凸が、斜光写真によって確認できる。これらの凹凸は、描写に伴う絵具層の起伏や、経年によって生じた画面の折れなどが要因として考えられる。斜光写真に認められる凹凸の多くは、調査時に目視では確認できないほど微細なものであった。さらに、可視光線写真にも写っている道化師の額から画面右端にかけての折れのような凹凸は、目視でも確認できる程度のものであり、斜光写真でも明瞭に捉えられている。この凹凸に関しては、後述の2-4節に考察を記している。

2-3 赤外線写真

赤外線写真は、絵画表面および下層の状態を観察するために撮影した【図16】。絵具が赤外線を反射する場合には明るい撮像が得られ、反射しない場合には暗い撮像が得られる。また、絵画表面の絵具が赤外線を透過せずに反射または吸収する場合は絵画表面の撮像が得られ、透過する場合は下層の撮像が得られる。撮影は、絵画に対して左右の手前から赤外線を照射し正面から行った。

赤外線写真では、赤外線が絵画表面の絵具層を透過して白色の基底材に到達した場合、その基底材上に描かれた素描を観察できることがある。これは、素描に用いられた色材が赤外線を吸収することで暗い撮像を示し、一方で赤外線を反射しやすい白色の基底材は明るい撮像を示すからである。しかし、ルオー《道化師（横顔）》の赤外線写真【図16】では、表層の描写以外に素描とみられる構図は確認されなかった。このことから、本絵画には素描が存在しない可能性が高い。ただし、撮影時に絵画に対して照射した赤外線は、描写層の絵具の一部を透過している。

例えば、道化師の鼻の部分には、可視光線写真【図1】から緑色の描写が認められる。しかしながら、同部分の赤外線写真には、この緑色の撮像は認められない。赤外線写真の同部分には、赤外線に対する陰影がないことから、この緑色は赤外線を透過していることがわかる。次に、道化師がか

12 下山進、野田裕子、『分析化学』、49巻12号、pp.1015-1021、2000年。

13 『新装版 絵画材料事典』、R.J. ゲッテンス、G.L. スタウト著、森田恒之訳、初版、美術出版社、1999年。

ぶった帽子の後部について、可視光線写真と赤外線写真を比べると構図が異なる。可視光線写真および目視では、帽子の頂点から後頭部にかけて、白色様の絵具を用いて帽子の後部が薄く塗られているように見えるが、赤外線写真ではこの描写は認められない。また、赤外線写真には、帽子の頂点から後頭部にかけて、赤外線を吸収した黒色様のラインが写っているが、可視光線写真にも、このラインにそって、白色様の薄い絵具層の下に黒色様の描写が認められる。このため、帽子後部の描写に使用された白色様の絵具層は、表面に薄く塗られていることから赤外線が透過し、下層に描かれた帽子のオリジナルの輪郭が赤外線写真に写ったものと考えられる。これに関することは、絵画技法の観点から、前述の1節および後述の3節に述べられている。

赤外線写真では、上述のようにその透過の性質を利用した絵画の観察に加え、反射・吸収の性質から作品を観察することもできる。赤外線写真には、赤外線を反射しやすい部分は明度が高く、吸収しやすい部分は明度が低く写る。このことから、赤外線に対する色材の反射・吸収の性質は異なるため、赤外線写真に写った撮像の明度は色相間で差が生じる。このとき、赤外線写真から絵具に含まれる色材の種類を同定することはできないが、異なる種類の色材が塗られていることはわかる。

例えば、前述した道化師の額から画面右端にかけての折れのような凹凸の部分は、可視光線写真および斜光写真から、この凹凸部分は緑色様に見える、この周辺の背景部は比較的明度の低い緑色様で描かれている。しかし、赤外線写真には、この凹凸部分は暗く写り、この周辺の背景は、比較的明るい撮像が得られた。このことから、この折れのような凹凸部分には、周辺の背景とは異なる緑色の色材が使用されている。後述の2-4節でも述べられているように、この折れのような凹凸の部分は、本作品の制作時あるいは制作後の早い段階で、基底材である紙が破れ、この補修のために背景色に合わせて緑色様の絵具が補彩されたものと考えられる。

2-4 X線写真

X線写真の撮影では、目視観察では知り得ることができない作品内部の情報を画像として得ることができる。絵画作品にX線を照射すると、質量の小さい元素を主成分とする顔料はX線を透過しやすく、逆に質量の大きい元素を主成分とした顔料はX線を吸収しやすく透過しにくい。X線写真上では、この差を白(X線を不透過)と黒(X線を透過)のグレースケールで読み取ることができる。ただし、X線写真上にて確認できる透過と不透過の差は、絵具の密度にも影響を受ける。すなわち、質量の小さい元素からなる顔料の絵具でも幾重にも重ねられて密度が高い場合は、白く写る可能性がある。

《道化師(横顔)》のX線写真では、一見しただけではその像を正確に読み取ることが困難な複雑な画像が得られた【図17】。そのため、可視光線写真とX線写真を重ね、視覚的に照らし合わせやすいようにした合成画像¹⁴もここに示す【図18】。まず、作品上部に注目すると道化師が被る帽子の周囲に弧を描くような像が認められる。可視光線写真でも弧を描くような筆の流れが見られるが、X線写真ではより明確にその痕跡が認められる。また、目視観察や可視光線写真、さらに斜光写真からは、作品右端から道化師の額と帽子の境目に掛けて折れのような跡があり、これに沿って絵具層が盛り上がっている。同様に、作品下部から道化師の首の中央あたりにも確認できる。一方、X線写真では、当該部分がX線を透過して亀裂と同じ像に見えており、さらにその周囲がX線を透過せず周辺より白く見えている【図19】。目視観察および可視光線写真、斜光写真では盛り上がった形状であり、折れのような跡に沿って絵具層が裂けていないことを鑑みると、制作過程の比較的初期または中期の段階で、場合によっては基底材(紙)ごと絵具層が裂けたあと、その上から絵具を新たに描き足していると考えられる。あるいは裏打ち時の接着過程で紙が引っ張られ、破れてしまった可能性も残される。なお、裏打ちされているカンヴァスを裏から確認しても当該箇所に裂けたような跡は確認できなかった。X線写真で黒く写った線の周囲が

14 MicrosoftOffice365のWord上で明るさ+40%、コントラスト+35%、透明度を60%にした可視光線写真と、修正を行っていないX線写真を重ねた。

(色相が同じにも拘わらず) X線を吸収して白く写っているのは、この亀裂に対して垂直になるように画面の上あるいは下から絵具を塗り付けていった際に、亀裂に沿うように絵具が溜まった結果ではないかと考えられる。

2-5 蛍光X線分析法による絵具の推定

蛍光X線分析法(XRF)により、ルオー《道化師(横顔)》に使用された絵具の種類を推定した。測定点を【図19】に示し、分析結果を【表1】にまとめた。

本作品は紙に描かれており、これをキャンバスで裏打ちしている。測定点1は、この裏打ちのキャンバスが表面に露出しており、これをXRF測定した。測定点1からはFe(鉄)、Zn(亜鉛)、Pb(鉛)が検出された。いずれの元素も検出されたピークは小さく微量であった。また、キャンバスが紙の裏打ちに使用されていることから、キャンバスには白色下地は塗られていないと判断した。一般的に基底材の紙は、白色下地などを施さないことから、XRFにより検出された元素は、絵画表面の描写層に使用された絵具に由来するものとしてデータを解析した。このことから、Fe、Zn、Pbの検出元素は、絵画表面の描写に使用された絵具に由来するものであり、他の測定点の分析結果から、Feは茶色のバーントシエナ、PbとZnは白色のシルバーホワイトとジンクホワイトと推定される。

次に、絵画表面の描写をXRF測定した。白色について、測定点6、7の緑味のある白色、測定点8、9の灰色からは、いずれからでもPbが検出された。このことから、白色は、Pbを成分とするシルバーホワイトと推定される。測定点8、9からは、Pbに加えてZnも検出された。このため、Znは、白色のジンクホワイトと推定される。【表1】から、Pbは全ての測定点から検出されたが、Znは測定点5、6、7、16からは検出されず、これら以外の測定点からは検出された。このことから、ルオーは、シルバーホワイトとジンクホワイトを使い分けて作品を制作していることがわかる。

青色の測定点2および3からは、いずれからでもFeとCo(コバルト)が検出された。Feを成分とする青色としてプルシャブルー、Coを成分とする青色としてコバルトブルーが挙げられる。プルシャ

ブルーは赤外線をよく吸収するため、赤外線写真では暗い撮像が得られるはずであるが、これらの測定点における赤外線の吸収は弱い。このため、測定点2および3の青色はコバルトブルーと考えられる。

緑色は、測定点4、5、12、16に加え、緑味のある白色の測定点6、7、8から絵具の種類を推定した。これらの測定点からはCr(クロム)が検出された。このため、これらの測定点に使用された緑色は、クロムを成分とする絵具のオキサイドクロムまたはビリジアンである。XRFでは、これらの成分からはCr以外の元素を検出することができない。また、色相からも判別できないことから、いずれかの絵具に絞り込むことはできなかった。なお、緑味のある白色または緑色で描かれた測定点5、6、7の帽子のつばは、白色成分としてZnは検出されずPbのみが検出されたことから、白色のシルバーホワイトと緑色のオキサイドクロムまたはビリジアンを用いて表現されている。

黄色は、測定点17を測定した。測定点17からは、Cr、Co、Zn、Se(セレン)、Cd(カドミウム)、Pbが検出された。これらのうち、黄色の成分として考えられるのはCd、Cr、Pbであり、Cdを成分とするカドミウムイエロー、CrとPbを成分とするクロムイエローなどの黄色が考えられる。しかし、本測定から、いずれの黄色であるかは判別できない。本作品制作当時、ルオーが使用していた絵具を調べるなどして種類を絞り込む必要がある。

茶色については、測定点14、15からFeが検出されたことから、茶色はFeを成分として含むバーントシエナと同定される。

次に、赤色は、測定点13および18から検出された元素をもとに絵具の種類を推定した。いずれの測定点からでもCdとSeが検出された。このことから、赤色は、CdとSeを含むカドミウムレッドと同定した。

そして、黒色は、測定点10、11、19の測定をもとに推定した。黒色は、絵具の候補としてボーンブラックとランプブラックが挙げられる。XRF測定すると、ボーンブラックではCa(カルシウム)が検出され、ランプブラックではXRFでは検出できない軽元素のみからなるため何も検出されない。測定点10、11、19からはCaが検出された。また、

黒色以外の他の測定点からは、Caは検出されなかった。このため、黒色はボーンブラックと推定された。ただし、他の測定点について、近接色または黒色の混色・重ね塗りされたと思われる描写があるが、本調査に用いたXRF装置はCaに対する感度は低い。このため、測定点におけるCaの存在量が少ない近接色または黒色の混色・重ね塗りされた測定点からはCaが検出されず、測定点におけるCaの存在量が多い黒色の測定点のみからCaが検出されたと考えられる。

最後に灰色について述べる。灰色は測定点8および9を測定した。灰色は、黒色と白色を混色したものと考えられるが、前述の黒色の記述の通り、本調査に用いたXRF装置はCaに対する感度が低い。測定点8および9からはCaが検出されなかった。しかし、黒色の測定点からはボーンブラックが推定されていることから、灰色の描写には黒色のボーンブラックが使用されたと考えられる。そして、白色は、ZnとPbが検出されたことから、ジンクホワイトとシルバーホワイトが用いられたと推定される。

以上のように、XRF測定に基づき、各測定点における当該色の絵具の種類を推定した。なお、【表1】には、各測定点における当該色の絵具の種類以外にも、XRF測定により検出された元素から推定される顔料の種類も記している。本調査で使用したXRF装置では、装置の特性上、各測定点の中心から半径12mmの範囲にある元素が検出される。このため、各測定点付近に塗られた絵具も同時に検出される。また、X線は透過しやすいため、下層に塗られた絵具も検出される。さらには、後述の3節で述べられているように、ルオーは、絵画制作時、絵具を塗っては削るという工程を繰り返したり、薄い絵具層を積層していた。このことから、絵具が混ざったり、削る工程で生じた絵具の欠片や微細な粉末が絵画表面に散在している可能性や、目視では判別できないほどの薄い絵具層や膜のようなものが断片的に広がっている可能性もある。このようなことから、各測定点からは、当該色や近接色以外の絵具の成分が検出されたものと考えられる。

【表1】 ルオー《道化師（横顔）》の蛍光X線分析による結果

測定点	色相	検出元素	絵具名(顔料の化学式) ¹⁵
1	基底材である紙を裏打ちしたキャンバスの白色	Fe、Zn、Pb	絵画表面の白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) ジンクホワイト (ZnO) 絵画表面の茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
2	濃い青色	Fe、Co、Zn、Pb	青色：コバルトブルー ($\text{CoO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) 白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
3	淡い青色	Cr、Fe、Co、Zn、Pb	青色：コバルトブルー ($\text{CoO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) 白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3) 緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($\text{Cr}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$)
4	濃い緑色	Cr、Fe、Zn、Pb	緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($\text{Cr}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$) 白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
5	淡い緑色	Cr、Pb	緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($\text{Cr}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$) 白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$)
6	緑味のある白色	Cr、Pb	白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) 緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($\text{Cr}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$)
7	濃い緑味のある白色	Cr、Co、Pb	白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) 緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($\text{Cr}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$) 青色：コバルトブルー ($\text{CoO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)
8	緑味のある灰色	Cr、Fe、Zn、Pb	白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) ジンクホワイト (ZnO) 黒色：ボーンブラック (測定点10、11、19より推定) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3) 緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($\text{Cr}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$)
9	白味の強い灰色	Fe、Zn、Pb	白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) ジンクホワイト (ZnO) 黒色：ボーンブラック (測定点10、11、19より推定) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
10	黒色	Ca、Fe、Zn、Pb	黒色：ボーンブラック ($\text{C} + \text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2 + \text{CaCO}_3$) 白色：シルバーホワイト ($2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)

次頁へ続く

15 XRFでは、絵具に含まれる顔料の成分元素を検出し、これをもとに顔料を判別して絵具の種類を推定した。表中には、絵具名を示し、() 内には顔料の化学式を記した。

表1 ルオー《道化師（横顔）》の蛍光X線分析による結果（続き）

測定点	色相	検出元素	絵具名(顔料の化学式) ¹⁵
11	黒色	Ca、Fe、Zn、Pb	黒色：ボーンブラック ($C+Ca_3(PO_4)_2+CaCO_3$) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
12	濃い緑色	Cr、Fe、Zn、Pb	緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($Cr_2O_3 \cdot 2H_2O$) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
13	赤色	Fe、Zn、Se、Cd、Pb	赤色：カドミウムレッド ($CdS(Se)$) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
14	淡い茶色	Fe、Zn、Pb	茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO)
15	白味の強い淡い茶色	Fe、Zn、Pb	茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO)
16	緑色	Fe、Cr、Pb	緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($Cr_2O_3 \cdot 2H_2O$) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)
17	黄色	Cr、Fe、Co、Zn、Se、Cd、Pb	黄色：カドミウムイエロー (CdS) or クロムイエロー ($PbCrO_4$) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3) 赤色：カドミウムレッド ($CdS(Se)$) 青色：コバルトブルー ($CoO \cdot Al_2O_3$)
18	茶色味の強い赤色	Cr、Fe、Zn、Se、Cd、Pb	赤色：カドミウムレッド ($CdS(Se)$) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO) 黄色：クロムイエロー ($PbCrO_4$) 緑色：オキサイドクロム (Cr_2O_3) or ビリジアン ($Cr_2O_3 \cdot 2H_2O$)
19	黒色	Ca、Fe、Co、Zn、Pb	黒色：ボーンブラック ($C+Ca_3(PO_4)_2+CaCO_3$) 白色：シルバーホワイト ($2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$) ジンクホワイト (ZnO) 青色：コバルトブルー ($CoO \cdot Al_2O_3$) 茶色：バーントシエナ (Fe_2O_3)

3. 考察

科学調査の結果は、塗っては削るという工程を繰り返すルオー中期の技法が、薄い絵具の積層による重層的な構造を持つことを支持している。X線写真【図17】からは、画面全体に細かい筋や絵具が擦れたような跡があり、福島繁太郎らが伝えるような、塗っては削るという激しい制作の痕跡が現れているものと考えられる。斜光写真【図15】からは、全体に微細な凹凸が感じられるとともに、可視光線写真の印象に反して、全体に薄塗りの積層によって画面が成立していることが分かる。

XRFにおいて各測定点から当該色や近接色以外の絵具の成分が多数検出されていることも、ルオー中期の技法の特徴を顕著に示しており、2-5でも述べたように、制作過程において多様な絵具が画面中に拡散していることを示している。また、そのような制作過程から重層的な画面が成立しているため、表層とは異なる色相による描画が下層に存在していることも考えられる。例えば、多くの測定点でFeが検出されており、当該色や近接色以外の顔料（バーントシエナ）の存在が推定されている。具体的には、測定点1（キャンバス下地の白色）、測定点2（濃い青色）、測定点3（淡い青色）、測定点10（黒色）、測定点13（赤色）などである。

X線写真や赤外線写真からは、度重なる加筆修正の中で構図がたびたび変更されるルオーの作画過程の一端が窺われる。X線写真がおぼろげな人物像しか示さないことは度重なる構図の変更を示唆しており、また赤外線写真は帽子の形態の変更を捉えている。

科学調査の結果から、絵具の塗り重ね方について具体的に推定できる部分も多い。例えば、XRFにおける測定点13の赤色部分については、目視からも下層に肌色様の色があることが確認できるが、当該色であるカドミウムレッドの他にバーントシエナやホワイトの存在も推定されており、バーントシエナと白色で肌色が調製・塗布された後で、唇部分の赤色が塗られていると推測できる。1-2-1の引用でも述べられているように、ルオーは彩度を保つためパレットで混色をせず画面上で混色していた。福島繁太郎は《道化師（横顔）》と同時期



【図21】ルオー《女曲馬師（人形の顔）》c.1925、パナソニック汐留美術館蔵

の作品である《女曲馬師（人形の顔）》（1925年頃、パナソニック汐留美術館蔵、o.p.897）【図21】について「肉体や、コルサージ（乳当）は、薄いライトレッドに、後で白を塗って、こてでなすったもの」¹⁶と書いているが、本作も同様な方法で描かれたと考えられる。具体的には、バーントシエナなどFeを含有する赤色が生乾きの間に上から白色をおき、ナイフによって画面上で混色して肌色を調製し、その上層にカドミウムレッドが塗られていると考えられる。実際、目の下の肌色部分の拡大写真【図22】をみると、ナイフで押しつけられたような平滑な塗りが存在する。

また、造形的に人物を強調しようとする意図も見取れる。1-2-2で述べたように、ルオーは両義的な黒い線と背景との関係をめぐって加筆修正を繰り返しているが、作品上部の道化師が被る帽子の周囲の円弧を描くような筆致がX線写真ではより明確であり、古典的な宗教画における円蓋を想起させる。X線写真が示す顔部分の描画密度の高さもまた、このことを示しているといえるだろう。

ちなみに、今回の科学調査は、松本竣介の《都会》（1940年、大原美術館蔵）に対する科学調査と同様に¹⁷、赤外線写真と可視光線写真の比較によって絵具層の上下や下層の状態が確認できることを示している。例えば、可視光線写真では鼻の中間部分に緑色が認められるが【図2】、この箇所は赤外線写真には写っていない。《都会》においても、

16 福島繁太郎、前掲、p.43。

17 小林俊介、大下浩司、塚本貴之、前掲、p.19。

上層のグレーズ的な薄塗りの層は赤外線写真では薄い撮像となっている。

道化師の額から画面の右端にかけてある折れのような跡は、基底材の紙の破れに起因するものと考えられることは、科学調査の各項目で述べたとおりである。紙の上に激しい制作過程によって描かれたがゆえの結果といえるかもしれない。なお当該部分のXRF測定をしていないので断定は出来ないが、可視光線による当該部分の写真【図23】でも、当該部分とその周辺における緑色の色調の差異が感じられるため、それぞれ異なる顔料によって彩色されている可能性が高い。

終了ワニスについては、肉眼による観察でも作品全体に艶があることから、紫外線写真の分析と考え併せると、塗布されていると考えるのが妥当であろう。ルオーは「軽く柔軟なニスは、グレージング(額縁に取り付けるガラス)の非常に便利な代替品である」¹⁸と述べている。また、ルオーは「空気、ほこり、暖房の様々な様式でぼろぼろになるから、画面をこれらの破壊因子から守る効果的な保護手段を施すようにしなければならない。理想的なのはニスを使わないこと、画面はつやのない、深い、力強い、そして必要ならば極彩色の美しさで堅固なフレスコのようなものであってほしい」¹⁹と述べている。画面保護の目的では終了ワニスを使用したいが、表現上はできる限りワニスを使いたくない(ワニスによるツヤ感などを出したくない)という意味であろう。それゆえ、「軽く」且つ「柔軟な」ワニスを用いること、表現上の問題が生じにくい保護ワニスを用いることが理想であると語っているように思われる。

最後に、XRFから推定された顔料と、福島繁太郎が報告する顔料との対照表を示す【表2】。推定される顔料はジンクホホワイト、シルバーホホワイト、コバルトブルー、オキサイドクロムグリーンまたはビリジアン、ボーンブラック、カドミウムレッド、バーントシエナ、クロムイエローまたはカドミウムイエローである。これらを先述の福島が報

告する絵具と比較すると、異なるのは白色顔料ではジンクホホワイト(福島の報告ではシルバーホホワイト)、緑色顔料ではオキサイドクロムグリーンまたはビリジアン(福島の報告ではエメラルドグリーン、カドミウムグリーン)、黄色顔料ではクロムイエロー(福島の報告ではカドミウムイエロー、イエローオーカー)、赤色顔料ではバーントシエナ(福島の報告ではブラウンレッド)である。

ただし、福島の報告はあくまでも当時パリの福島宅での加筆に用いられた顔料であり、ルオー自身のアトリエで使用された顔料とは異なる可能性がある。これを踏まえて考えると、本調査では多くの箇所Fe(鉄)が検出されており、イエローオーカーやブラウンレッドなど鉄を含有する顔料も存在する可能性がある。黄色顔料については、福島の報告からはカドミウムイエローである可能性が高いと判断されるが、クロムイエローである可能性も否定しきれない。

なお、白色については、シルバーホホワイトとジンクホホワイトが推定されているが、両者を使い分けている可能性もある。なぜなら、Pbのみが検出される箇所があるからである。Pbのみが検出されているのは測定点5、6、7すなわち帽子の下部、ツバの部分と、測定点16すなわち鼻の部分である。同系統の色でも、測定点8、9すなわち帽子の上部ではZnが検出されているのに、なぜツバの部分では検出されていないのか、また肌色部分である測定点14、15ではZnが検出されているのに、なぜ測定点16の鼻の肌色部分では検出されていないのか、という疑問がわいてくる。

仮説ではあるが、このことはルオーが下層と上層で白色を使い分けていたとすると説明できる。今日ではジンクホホワイトは下層で使うと鹼化を起し亀裂や剥落を生じさせることが分かっている。当時においてもジンクホホワイトは亀裂を生じやすいことが報告されており、また、シルバーホホワイトが大気中の硫化物に直接触れることを防ぐ意味でも、ジンクホホワイトを最後の層で使うことが推

18 武者小路訳では当該部分は「…しかし軽い、しなやかなニスはとても有利にグラッシのかわりになると打ちあけなければならない。」と訳されている(ジョルジュ・ルオー、武者小路實光訳、『芸術と人生』、座右宝刊行会、1976年、p.64)。しかし原文を確認すると、以下のようである「il faut avouer qu'en vernis legeret souple remplace tres avantageusement une glace」(Georges Rouault, *SUR L'ART ET SUR LA VIE*, Denoël, Paris, 1971, p.72, 下線筆者)。文末はune glace de une glaciis(グレーズ・透層)ではない。従って、「軽いしなやかなニスはグレージング(保護ガラス)の代わりになる」と読むべきであろう。

19 ジョルジュ・ルオー、武者小路實光訳、前掲、pp.64-65. Georges Rouault, *ibid.*

奨されていた²⁰。当時は、シルバーホワイトが大気中の硫化物や硫化物を含有する絵具に反応して黒変することが強く懸念されていたのである²¹。

もしこの仮説が妥当ならば、ジンクホワイトが使われている箇所は比較的上層であると判断できる。例えば、帽子の上部は比較的最後に描かれ、ツバの部分は比較的最初に描かれた絵具層がそのまま残っているということになる。同様に、鼻の肌色部分は比較的初期に塗られた絵具層がそのま

ま残されており、頬の肌色部分は比較的上層であると判断される。実際、【図22】にも見られるように、目の下、頬のあたりの肌色部分の下層には、上層のナイフで押しつぶされたようなマチエールとは異なる性格の肌色がある。しかしながら、本調査ではクロスセクション（断層写真撮影）を行っていないので断定はできず、本件についてはなお検討の余地がある。

【表2】 XRF から推定される顔料と福島繁太郎の報告する顔料との対照表

	推定される顔料	福島繁太郎の報告
白色顔料	ジンクホワイト	—
	シルバーホワイト	シルバーホワイト
青色顔料	コバルトブルー	—
	—	ウルトラマリン
緑色顔料	オキサイドクロムグリーン または ビリジアン	—
	—	エメラルドグリーン
	—	カドミウムグリーン
赤色顔料	カドミウムレッド	カドミウムレッドディープ
茶色顔料	バーントシエナ	—
	—	ブラウンレッド
黄色顔料	クロムイエロー または カドミウムイエロー	カドミウムイエロー
	—	イエローオーカー
	—	—
黒色顔料	ボーンブラック	アイボリーブラック (ボーンブラック)

20 Conrad Kickert, La technique de la peinture à l'huile, *L'Amour de l'art*, 3, 1922, p.149. 石原雅夫編訳、『油絵具の研究 第1輯』、求龍堂、1925年（再版）、p.18。

21 例えば、Vibert, J. G., *La science de la peinture*, Paris, 1891, pp.280-282. Moreau-Vauthier, Charles, *La peinture*, Paris, 1913, pp.185-187. モロオ・ヴォチエー、大森啓助訳、『絵画』、春鳥会、1942年、pp.163-165。

おわりに

今回の調査によって、塗っては削るという工程を繰り返すルオーのルオー中期の作品が、薄い絵具の積層による重層的な構造を持つことが科学的にも確認できた。X線写真には削りや拭き取った後のような痕跡が顕著にみられる。また、可視光線画像からは想起できないような顔料成分が多数の箇所から検出されたことは、下層に表層とは異なった顔料が存在すること、すなわち画面の重層的な構造や、塗っては削るというルオー独特の工程から画面全体に多様な顔料が拡散したことを示唆している。部分拡大写真からは、一見一様の色彩に見える箇所でも実は様々な色彩が存在しており、しかもそれは印象派的な並置ではなく、福島繁太郎が報告するような、削りによる下層の色彩の露出や、ナイフで押しつけながら混色する技法によることがわかる。

このようなルオーの描画工程が、マックス・デルナーが唱えたような、重層性を特徴とする古典絵画技法に対するルオーの知識と探求から生じていることは、ルオーのレンブラント (Rembrandt van Rijn, 1606-1669) やルネサンス期の絵画に対する見解から見て取れる。3-1で述べたように、ルオーは「画面は堅固なフレスコのようなものであってほしい」と述べているし、以下のようにレンブラントや初期ルネサンス絵画のマチエールを賞賛する発言を残している。

マチエールへの肉感的な愛があることを私は知っている。〔中略〕ギュスタヴ・モローが言っていたように、「レンブラントのすばらしい泥」もある。〔中略〕しかしながら、あるプリミティブたちは他の理由でいいものである。銀色の心地よいマチエールの、イタリアのプリミティブの小さな流派の作品がある。ある人びとはこのマチエールなしですませることができ、燃えあがる、輝かしい赤を伴ったパオロ・ウッチェロの勇壮な鳴り響きを出すことができる²²。

ルオー中期の作品にしばしば見られる、暗い背景に人物の肌色部分が浮かび上がる構成は晩年のレンブラント作品を思わせるし、薄い絵具の積層によるマチエールは初期ルネサンス絵画、とくに初期フランドル絵画の技法を想起させる。また、《道化師 (横顔)》の唇部分に見られるような鮮やかな赤色は同時期の《女曲馬師 (人形の顔)》の耳飾りにも見られるが、これらはウッチェロの「輝かしい赤」に対応する。

ルオーによれば、「削り」の技法もまた、古典絵画の技法に由来するものだという。福島繁太郎は以下のように述べている。

ルオーの説によると、コロネイユ・ド・リオン Corneille de Lyon の様なフランスの古画は、板に絵具で描き、乾いた後に表面の滑かな堅い石で丁寧にかすつてはまた其の上に描いたものと云ふ²³。

コロネイユ・ド・リオン (Corneille de Lyon, 1500～10-1575?) はハーグで生まれたオランダの画家で、技術的には透明な薄塗りを重ねるフランドル派の技法であったと考えられる。また、レンブラント作品に関しても「削り」の技法が使われていたとする記述が当時なされていた。「画面を活活とさせるに非常に有効な方法がある。それはグラシが充分乾いた時に、其層を少しけづるのである。するとフレッシュな下塗が其儘現はれてざらざらした割目から非常に気持のよいニュアンスが出て来る〔中略〕レンブラン〔ママ〕の絵は皆此手段によつてゐる。〔中略〕グラシしたものや画面をけづり落したものは厚く盛つたのや下塗なしに描いたのに較べると非常に神秘的な感じが出る」²⁴という記述は、ルオー中期の技法にもそのまま該当する。

ルオーは熱心なカトリック信者であり、現代に宗教画を復活させた画家として評価されている。ルオーにおける古典的なマチエールへの接近は、絵画における「受肉」、換言すれば絵画を「荘厳」する手段だったのではないだろうか²⁵。先の引用に

22 ジョルジュ・ルオー、武者小路實光訳、前掲、pp.118-119。Georges Rouault, *op.cit.*, p.132。

23 福島繁太郎、『エコール・ド・パリ I』、新潮社、1950年、p.244。

24 Conrad Kickert, *op.cit.*, p.148。石原雅夫編訳、前掲、pp.14-15。

25 ルオーのマチエールについては以下の研究から大きな示唆を得た。後藤新治、「ルオーの『ミセレーレ』における *matière* の問題」、デ・アルテ、2号、1986年。後藤新治、「ルオーの連作油彩画『受難』における *matière* と色彩の問題」、デ・アルテ、3号、1987年。

みるように、ルオーはマチエールを絵画における肉体と考えていた節がある。道化師や曲馬師といった「卑俗な」人々に聖性を見出そうとするルオーの芸術において、その執拗なマチエールに対する探求は彼らに聖性を付与する行いであったと解釈できる。X線写真において明確に視認できるように、人物部分における描画密度の高さや、道化師が被る帽子の周囲における円蓋を想起させるような筆致は、ルオーによる作品の「受肉」・「荘厳」の造形的な現れとみることができる²⁶。

ルオーにおけるカトリックの信仰と古典絵画のマチエールに対する接近は、失われた「古典」の探求と復興という意味において、ルオーの内面で堅く結ばれていたと考えられる。ルオーの周囲にはレオン・ブロワ (Leon Bloy, 1846-1917) やジャック・マリタン (Jacques Maritain, 1882-1973) ら、当時のフランスにおけるカトリック文化の復興に関わった芸術家や知識人が多数存在していた。また、ルオーの師であるギュスターヴ・モロー (Gustave Moreau, 1826-1898) や『過去の巨匠達』の著者フロマンタン (Eugene Fromentin, 1820-1876) らによる、失われた過去の巨匠たちの技術の回復という願望をルオーが共有していたことを我々は想起すべきであろう²⁷。

もっとも、ルオーのマチエールや絵画技術は、「過去の巨匠たちの技術の回復」といえるものであろうか。《道化師 (横顔)》のX線写真が可視光線写真にみるような明確な画像を結ばないことは、レンブラントの油彩画におけるX線写真がしばしば単色による可視光線写真とほとんど変わらない画像を示すことと対照的である。また、「削り」の技法は古典絵画にも使われていたとはいえ、マチエ

ールが強調され、「削り」という行為や試行錯誤自体が前景化するような作画のあり方は革新的なものであった。

むしろルオーは、古典絵画を参照しながら、まったく新しい絵画技術を創出したというべきかもしれない。古典絵画のマチエールの探求を通じて、ルオーは近代以降常套的になったプリマ画法、就中印象派的な技法を相対化するような、独自の技法を開発したのである。近年の研究においては、レンブラントの作品など、実際にはプリマ画法で描かれている古典絵画も少なくないと考えられている²⁸。ルオー自身も述べているように、当時高まりを見せていた古典絵画の技法研究の背景には、近代以降の作品における保存上の脆弱さや修復の問題が生じていたことがある。この問題は多くの絵画技法書が生み出される要因となったが、当然ながら、その中で説かれる絵画技術は当時の研究水準を反映しており、今日ではその妥当性を欠いてしまっている記述も少なくない。

松本竣介、難波田龍起、鬘光ら、ルオーの影響を受けた近代日本の画家たちもまた、マックス・デルナーの述べるような「古典的」な重層技法に接近している²⁹。いうならばそれは古典絵画技法の探求という名のもとに行われた「新たな技法の創出」であった。しかしながら、「古典絵画技法」という作業仮説なしには、ルオーや松本らの探求における豊かな成果は得られなかったのではないだろうか。

26 後藤は中期以降のルオー作品においては、厚塗り (haute pâte) の使用が特定の人物 (キリスト) の顔、衣服、及びその周縁部に集中していると述べている。後藤、前掲、「ルオーの連作油彩画『受難』における matière と色彩の問題」、p.81。

27 ビエール＝ルイ・マチュー著、高階秀爾、隠岐由紀子訳、『ギュスターヴ・モロー その芸術と生涯 全完成作品解説カタログ』、三省堂、1980年、p.53。

28 土師広、「レンブラント作『トゥルプ博士の解剖学講義』の絵画技法研究」、東京藝術大学大学院美術研究科、2010年 (平成21年度修士論文)。当時の絵画技法研究の記述と実際の古典絵画における技法との齟齬については以下の文献も参照。小林俊介、「須田国太郎の絵画技術について」、『美学』、75巻1号、2024年。

29 以下を参照。小林俊介、前掲、「難波田龍起・松本竣介・鬘光の油彩技法について」。小林俊介「近代日本洋画におけるルオーの受容 ―技法・表現の側面から―」、「ルオーと日本 響き合う芸術と魂―交流の百年」展図録、パナソニック汐留美術館、2020年。

[附記] 本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（科研費）基盤研究（C）（課題番号：21K00125および25K03654）の支援を受けました。ここに感謝の意を表します。

図版出典

- 【図1】 本研究調査による撮影画像。
- 【図2】 本研究調査による撮影画像。
- 【図3】 「戦後洋画と福島繁太郎——昭和美術の一側面」展図録、山口県立美術館、1991年。
- 【図4】 本研究調査による撮影画像に加工。
- 【図5】 『みづゑ』、387号、1937年5月。
- 【図6】 Fabrice Hergott, ROUAULT, Ediciones Poligrafa, S.A., Barcelona, 1991.
- 【図7】 美術新論社編、ルオー画集、美術新論社、1930年。
- 【図8】 伊藤廉編、ルオー画集、アトリエ社、1932年。
- 【図9】 美術新論社編、ルオー画集、美術新論社、1930年に加工。
- 【図10】 伊藤廉編、ルオー画集、アトリエ社、1932年に加工。
- 【図11】 本研究調査による撮影画像に加工。
- 【図12】 美術新論社編、ルオー画集、美術新論社、1930年に加工。
- 【図13】 伊藤廉編、ルオー画集、アトリエ社、1932年に加工。
- 【図14】 本研究調査による撮影画像。
- 【図15】 本研究調査による撮影画像。
- 【図16】 本研究調査による撮影画像。
- 【図17】 本研究調査による撮影画像。
- 【図18】 本研究調査による撮影画像。
- 【図19】 本研究調査による撮影画像。
- 【図20】 本研究調査による撮影画像。
- 【図21】 パナソニック汐留美術館編、ルオーコレクション名作選 新装版、2018年。
- 【図22】 本研究調査による撮影画像。
- 【図23】 本研究調査による撮影画像。



【図1】ルオー《道化師（横顔）》の可視光線写真



【図2】《道化師（横顔）》の鼻部分の緑色



【図14】紫外線写真



【図15】斜光写真



【図16】赤外線写真



【図17】X線写真



【図18】可視光線写真とX線写真の重ね合わせ



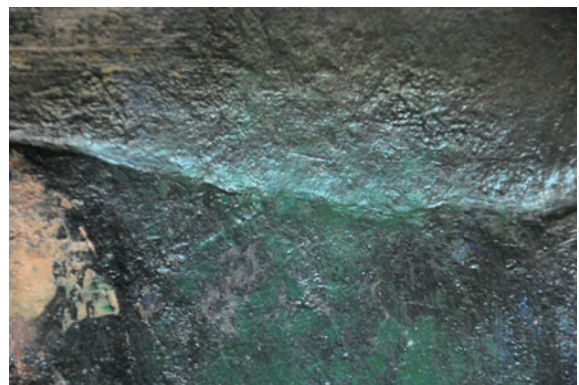
【図19】X線写真の拡大図



【図20】ルオー《道化師（横顔）》の
蛍光X線分析法による測定点



【図22】目の下の肌色部分



【図23】道化師の額から作品右端にかけてある折れのような跡

植民地期朝鮮の女性洋画家の越境と芸術—— 白南舜(1904–1994)を中心に

Women Artists Who Crossed Borders in Colonial Korea and Their Art—With Focus on Paik Namsoon (1904–1994)

申旼正 (韓国外国語大学特任教授)

SHIN Minjong (Adjunct Professor, Hankuk University of Foreign Studies)

要旨

本稿は、フェミニズム美術史が批判してきた「偉大な美術家」を支える制度や規範の偏りという視点に立ち、近年進む女性芸術家の再検討の流れを踏まえて、植民地期朝鮮の女性洋画家・白南舜(1904–1994)の歴史的な位置づけを捉え直すことを目的とする。日本や韓国では女性芸術家の研究や展覧会が相次ぎ、忘れられてきた画家の歩みを掘り上げる試みが積み重ねられている一方、女性がなお当然の中心として語られにくい状況も残っている。白南舜は朝鮮、日本、フランスを横断し、官展入選やパリでの学習経験を持つ数少ない女性画家であったにもかかわらず、戦争と移住による作品散逸、そして女性画家に向けられてきた視線のもとで、長らく断片的に触れられるにとどまってきた。1981年、美術評論家の李龜烈による調査と閔英順の所蔵作《楽園》(1936年頃)の公開を契機に白が再び語られはじめたことは、単なる「発見」にとどまらず、韓国近代美術史の空白と男性中心の叙述を問い直す出来事であったと言える。

本稿は、白の残存作《楽園》を核に、新聞・雑誌記事や書簡などの史料を照合し、近代知識への接触と異文化経験を制作の資源としつつ職業画家として生きることが、当時の朝鮮の女性芸術家にとってどのような意味を持ったのかを検討する。具体的には、20世紀初頭の女性教育の広がりを概観した上で、白の日本留学と帰国後の活動をたどり、自己形成の過程を日本との関わりの中で考察する。さらに白の渡仏後の学習と生活に関する史料から、画家としての活動と女性としての生活条件が絡み合う中で、制作の方針や表現の形がいかに定まっていたのかを明らかにする。最後に、作品と活動の軌跡を通じて、越境経験が植民地期朝鮮における制作と自己形成をどのように方向づけたのかを示し、女性芸術家を歴史の中に位置づけ直すことが、美術史の枠組みや評価の物差しを問い返す契機となり得ることを提示する。

Based on the trend in recent years to reexamine women artists, the purpose of this article is to reconsider the historical status of Paik Namsoon (1904–1994), a woman artist of colonial Korea, from the point of view of the unbalanced system and standards supporting “great artists,” which have been criticized by the history of feminist art. Studies and exhibitions on women artists have been undertaken successively in Japan and Korea, and attempts to scoop up the progress of forgotten artists have been accumulated. On the other hand, there is still a situation in which it is difficult for women to be narrated as the natural center. Paik Namsoon traversed Korea, Japan, and France. Despite being one of the few women artists whose works were accepted at government-sponsored exhibitions and who experienced studying in Paris, Paik’s works were scattered and lost through war and migration, and she has long been referred to only fragmentarily under the conventional view cast on women artists. Following a survey conducted by art critic Lee Gu-yeol and the exhibition of *Paradise* (c. 1936) belonging to Min Young-soon in 1981, Paik began to be discussed again. This proved more than a mere “discovery” and can be considered as an incident which shed renewed light on the gap in modern Korean art history and male-oriented descriptions.

With focus on *Paradise*, a work by Paik that remains, I have checked archive materials such as newspaper or magazine articles and letters to consider what it meant for a Korean woman artist of the time to live as a professional artist by producing her works based on contact with modern knowledge and experiences of foreign culture. To be more precise, I began by surveying the expanse of female education at the beginning of the twentieth century, and traced Paik’s activities while studying in Japan and after she returned to Korea in an attempt to examine how her involvement with Japan affected the process of building her identity. Furthermore, through archives on Paik’s studies and life after going to France, I have uncovered how she determined her policies on producing art and her style of representation amid the intertwinement of working as an artist and a woman’s living conditions. Lastly, by tracing the trajectory of her works and activities, I have revealed how her experiences of crossing borders defined the course of her work and the shaping of her identity in Korea during the colonial period. I hope this reconsideration of the historical status of women artists will prove an opportunity to reexamine the framework of art history and art criteria.

はじめに

女性芸術家という限界と可能性

リンダ・ノックリンは、1971年の論考「Why Have There Been No Great Women Artists?」において、「偉大な芸術家」の誕生を支える社会制度的な条件そのものに疑問を投げかけた。芸術は卓越した個人の自由で自律的な活動としてのみ成立するのではなく、教育機関や美術制度、芸術家像の神話化、さらには「芸術家＝男性」という規範を含む制度的な枠組みが、主体の形成から作品の価値判断に至るまで深く関与することを示したのである。すなわち「偉大な女性芸術家」が見えにくい理由は、才能の欠如というよりも、制度と規範が生み出す偏りにあるということである¹。

この問題提起からすでに半世紀以上が経ち、ノックリンの問いはフェミニズム美術史の出発点の一つとして広く共有されてきた。今日では常套句のように受け取られることすらあるが、この「定着」こそが、各地で女性芸術家の不在を改めて問い直す動きを支えてきたと言える。日本や韓国でもこの潮流は明確になりつつあり、日本では近年、女性芸術家をめぐる研究・展覧会・出版が相次ぎ、従来の制度や受容史の空白に光を当てる議論が深まっている²。韓国でも同様に、女性美術史の再編に関わる刊行物や企画が注目を集めている³。

しかし、こうした再検討が繰り返し行われてきたこと自体、なお多くの画家や作品が制度や受容史の枠組みの外側に置かれてきた事実を示している。ゆえに近年の取り組みは、散在する資料と断片的な記述を丁寧に組み直し、未整理の領域を輪郭づけていく作業を一層促している。

白南舜の再発見

本稿が白南舜（1904-1994）に注目するのも、以上の問題意識に基づく。白は植民地期朝鮮を基盤に日本およびフランスへと移動し、制作経験を重ねたにもかかわらず、その名と作品は韓国近代美術史の主要な叙述において必ずしも十分に位置づけられてこなかった。その背景には、女性画家をめぐる受容の偏りに加え、戦争と移住によって作品群や履歴を裏づける史料が散逸・断片化した事情がある。朝鮮戦争の混乱の中で白は作品の多くを失い、また戦争勃発直後に夫は連行され生死不明となった。さらに白は1964年、子どもたちと共に米国へ移住し、結果として韓国の美術界における受容や記述の枠組みから見えにくい位置に置かれる状況が長く続いたのである。

白が改めて注目されるようになったのは1981年であった。美術批評家の李龜烈が白の足跡と作品を追ひ、その成果を『季刊美術』に発表したところ⁴、これを読んだ白の友人・閔英順が所蔵していた『楽園』を公にしたのである。これにより、白の戦前期作を具体的に論じるための手がかりが得られた。しかし、その後も白の活動と芸術が十分に検討されてきたとは言い難い。1981年の「再発見」によって端緒は開かれたものの、白を主題として扱う研究の蓄積はなお限定的にとどまっている⁵。

以上を踏まえて本稿は、白の現存作品、当時の記事、関連資料を照合しつつ、彼女が獲得していた「近代性」の諸相と、それが同時代の女性として置かれていた社会的条件といかに結びついていたのかを検討する。とりわけ、女子美術学校での学びと在朝日本人画家との接点を資料に即して整理し直し、植民地期朝鮮における越境経験が制作

- 1 本論考の初出はLinda Nochlin, "Why Have There Been No Great Women Artists?" *Art News* 69, no.9 (January 1971): 22-39, 67-71. のちにLinda Nochlin, *Women, Art, and Power and Other Essays* (New York: Harper & Row, 1988), 145-178に再録された。本稿では所持本である1989年版（同書、145-178）を参照した。
- 2 日本における、女性芸術家の再検討に関する近年の研究として、中嶋泉『アンチ・アクション——日本戦後絵画と女性画家』（ブリュッケ、2019年）を参照。展覧会としては、「アンチ・アクション——彼女たち、それぞれの応答と挑戦」（2025年12月16日-2026年2月8日、東京国立近代美術館）など。
- 3 韓国では、尹蘭芝ほか『彼女たちもいた——韓国近現代美術を作った女性たち』（ソウル：나무연필（ナムヨンピル）、2024年）など。
- 4 李龜烈「半世紀ぶりにニューヨークのアトリエを公開した最初の夫婦画家白南舜氏」『季刊美術』1981年夏号（中央日報社、1981年）15-18頁；李龜烈「近代の先駆者的女性画家・白南舜をご存じないでしょうか」『女性東亜』通巻167号（東亜日報社、1981年8月）136-145頁。
- 5 白南舜に関する先行研究としては、강정화（カン・ジョンファ）「白南舜の芸術世界研究——近代期の作品を中心に」『東洋芸術』第61号（韓国東洋芸術学会、2023年）69-91頁がある。そのほか、이지희（イ・ジヒ）「1920年代パリ留学画家研究」修士学位論文（ソウル大学大学院、2011年）；김현화（キム・ヒョンファ）「韓国近代女性画家たちの西欧美術の受容および再解釈に関する研究」『アジア女性研究』第38号（淑明女子大学・アジア女性研究所、1999年）117-151頁；尹凡牟「近代期女性美術の形成、羅憲錫と白南舜の場合」『羅憲錫研究』第2号（羅憲錫学会、2013年）167-191頁；김지혜（キム・ジヘ）「美術家から先覚者へ、近代帝国を経験した女性美術家たち」『羅憲錫研究』第8号（羅憲錫学会、2016年）7-31頁などで、白を部分的に扱っている。

の枠組みや自己像の形成において持ち得た意味を考察する。その上で、女性が画家として活動することが同時代においていかなる意味を帯びたのかを捉え直したい⁶。

1. 近代朝鮮における女性洋画家の形成 「新女性」と女性教育

20世紀初頭、日本の植民地支配下の朝鮮では、近代的な技術や生活様式が制度と市場を通じて急速に導入され、人びとの感覚や日常の規範を揺さぶった。新聞や雑誌では「新生活」、「新家庭」、「新教育」といった語が反復され、「新」という一字が近代的な自己像を呼び寄せる合言葉のように共有されていった。

1920年前後から広く用いられるようになった「新女子」や「新女性」も、そうした時代の空気の中で輪郭を得た語であった⁷。19世紀末から20世紀初頭にかけて英語圏で語られた「ニューウーマン (New Woman)」という潮流は日本にも受容され、とりわけ1911年創刊の『青鞥』を一つの契機として女性の権利や自己表現をめぐる言論が勢いを増した⁸。朝鮮においても、この動向と響き合いながら「新女性」という語が用いられ、女性の教育や就労、社会活動をめぐる議論、さらには恋愛や結婚をめぐる新たな価値観と結びつきつつ、旧来の規範から距離をとりながら自らの人生を設計しようとする女性像を指す語として受けとめられていった。【図1】

こうした「新女性」の登場と活動を支えた背景には、女子教育の拡大と識字率の改善、そして就労機会の増加があった⁹。1886年に設立された梨花学堂に加えて1906年に進明女学校が設立され、また1908年に公布された「高等女学校令」に基づき官

立漢城高等女学校が開かれるなど、20世紀に入ってから制度的枠組みが段階的に整えられていったのである¹⁰。女子の就学者数も1920年代から増加し続け、1910年まで約44,000名であったものが、1920年には約107,000名、1924年は約374,000名へと増大した¹¹。このような量的な拡大は、女子教育の裾野を押し広げ、「新女性」の社会的登場を支える基盤の一つとなったと言える。

ただし、こうした中等教育の拡充に比して、大学に相当する高等教育を受ける道はなお限られていた。そのため、朝鮮で中等教育を受けた女子学生の一部は、より高度で専門的な教育を求めて日本への留学を選択した。植民地期に日本に留学した朝鮮人女性の数は、1910年代に約30名、1920年代には毎年40-80名だったとされ¹²、こうした教育機会と進路の広がり、画家を目指す女性たちにとっても「留学」を具体的な選択肢として射程に収めていく土台となった。

女性洋画家の誕生——制度化された美術教育と女子美術学校を中心に

こうした社会的背景のもとで、美術を専門的に学び、将来の職業として制作活動を志す女性が現れはじめた。朝鮮初の女性洋画家として知られる羅恵錫 (1896-1948) が日本留学後に帰国し、官展である「朝鮮美術展覧会」(以下、朝鮮美展) に出品したのは1922年のことである。羅が在学した女子美術学校 (以下、女子美) は、1900年に「私立女子美術学校」として東京・本郷弓町に創立された美術専門教育機関で、「女子の美術的技術を發揮せしめ、専門の技術家及び教員たるべき者を養成」し¹³、女子に「自活の道」を講ずることを設立目的として掲げた¹⁴。1929年に専門学校へ昇格し、戦後

6 本稿では、女子美術学校や「朝鮮美術展覧会」などにおける制度上の区分名 (西洋画科、西洋画部など) は、同時代表記に従い「西洋画」を用いる。他方、制作のあり方や画家としての自己定位、団体を介した活動を述べる場合には、「洋画」(女性洋画家、洋画団体など) と表記する。

7 金秀珍「植民地近代の万華鏡、新女性」国立現代美術館編『新女性、到着する』(ソウル：国立現代美術館、2017年) 198頁。

8 同上。

9 植民地期朝鮮における女性の中等教育に関しては、金秀珍『新女性、近代の過剰：植民地朝鮮の新女性談論とジェンダー政治、1920-1934』(ソウル：ソミョン出版、2009年) 57-76頁を参照。

10 国立現代美術館編、前掲図録、68頁。

11 김경일 (キム・キョンイル)『女性の近代、近代の女性』(ソウル：푸른역사 (プルンヨクサ)、2004年) 283頁；金秀珍、前掲書、62頁から再引用。

12 박정애 (パク・ジョンエ)「1910年代~20年代初頭に日本へ留学した女子留学生に関する研究」修士論文 (ソウル：淑明女子大学校、1999年) 19頁；金秀珍、前掲書、65頁から再引用。

13 『女子講義 第3回前期 (14)』(大日本女学会、1900年) 41頁。

14 「女子美術学校設立ノ趣旨」(東京公文書館所蔵資料)；山田直子「私立女子美術学校／女子美術学校 (1900-1929) における西洋画科教育」『女子美術大学研究紀要』第41号 (女子美術大学・女子美術大学短期大学部図書館、2011年) 3頁から再引用。

の学制改革を経て1949年に女子美術大学となる¹⁵。

同校には創立当初から、西洋画、日本画、彫塑のほか、蒔絵、編物、造花、刺繍、裁縫など複数の専門が設けられており、女性の入学が長らく制限されていた東京美術学校に代わる現実的な進学先となった。教育内容については、1903年当時のカリキュラムに、木炭画、写生、図案、油絵などの実技に加え、解剖学、修身、国語、外国語、歴史、音楽、体操などが含まれていたことが確認される¹⁶。臨画より写生に重心を置く方針には東京美術学校の影響が窺える一方、家事管理や育児、看護などの家事教育も組み込まれており、近代期の女性教育が期待した役割が専門教育の内部にも折り重ねられていたことが読み取れる。

第二次世界大戦の終戦までに女子美で学んだ朝鮮人学生は約180-200名で、うち117名が卒業したとされる¹⁷。卒業者の内訳は、西洋画15名、日本画5名、編物と洋裁が4名であり、残る94名が刺繍科で（うち1名は複数専攻）、卒業生全体の8割以上を占めていた。美術専攻者のうち実用系である刺繍の比重が大きい点が目立つが、このような専門上の偏重は、「良妻賢母」の養成を重視した近代女性教育の方針と重なり合うと同時に¹⁸、近代的知識や技術を身につけた女性の主要な就職先として女子学校が想定され、教職が経済的自立につながりやすかった事情とも関わっていた¹⁹。1915年以来、刺繍科や造花科の修了者には検定試験を経ずに中等教員資格が付与され、1921年からは裁縫科にも同等の扱いが及んだ²⁰。そのため、卒業後の就職を視野に入れる女性にとって、刺繍や裁縫は実利的な選択肢になり得たと考えられる。

一方、西洋画科では、羅恵錫を嚆矢として、李淑鐘、金明華、尹時善、李仁福、鄭温女、李甲郷らが卒業し、帰国後に朝鮮美展へ出品した²¹。そし

て、本稿で取り上げる白南舜も女子美で学んだ一人であった。卒業には至らなかったものの、帰国後の活動の厚みは、在学期間の長短とは別に、「新女性」の人生において絵画が占めた存在感を示している。

2. 白南舜の越境：日本留学と朝鮮での活動

白南舜は1904年、自営業者の白樂駿の2男1女の一人娘として生まれた。父は早くから西欧文化を積極的に受け入れた人物であり、二人の兄は1919年の三・一運動に参加したのち米国へ渡って、学業と仕事を続けたという。父が白の名の漢字を、従順を想起させる「順」から、聖王を指す「舜」へ改めたことも、女性の役割や価値を考え直すこうした開化的な思想的背景と無関係ではなかっただろう²²。

白が女子美に入学したのは1923年のことであった。入学してまもなく関東大震災に遭い、震災後の情勢のもとで学業の継続が困難となったため、在学はおおよそ1年で中断を余儀なくされた。在学期間がきわめて短かったこともあり、白の日本滞在についてはほとんど知られていないが、当時の女子美では岡田三郎助（1869-1939）が西洋画科の指導にあたり、写生やデッサンを重視する教育が行われていたことから、白もこうした基礎訓練に触れたのではないかと考えられる²³。

短い留学ではあったものの、この経験は白にとって学ぶことの意義を実感させ、知識と教養を携えて社会で働くという志向を形づくる一つの契機になったと考えられる。例えば、朝鮮初の女性洋画家として知られる羅恵錫は、日本留学期に洋画の技法を修得しただけでなく、女性の権利や社会的役割に対する自覚を深めていったことで知られている²⁴。羅は1913年から1917年にかけて女子美に

15 権幸佳「美術と技芸のあいだ：女子美術学校出身の女性画家たち」『新女性、到着する』（ソウル：国立現代美術館、2017年）226頁。

16 木本勝太郎編『遊学案内 東京の女学校』（金港堂書籍、1903年）107-127頁；山田直子、前掲論文、6頁から再引用。

17 戦前期の女子美術学校における朝鮮人卒業生・在学生に関する情報は、権幸佳、前掲論文、230頁を参照。

18 権幸佳、前掲論文、227頁。

19 国立現代美術館編、前掲図録、158頁。

20 西洋画科と日本画科出身者には1924年から無試験教員資格が付与された。権幸佳、前掲論文、229頁。

21 権幸佳、前掲論文、231頁。

22 白南舜の幼少期については、尹凡牟「最高齢画家・白南舜夫人のニューヨーク画室探訪（1）」創刊号『ガナアート』（ガナアートギャラリー、1988年）103頁を参照。

23 岡田三郎助は週1回の出講日を有していたとされるが、実際に学生が指導を受け得た回数は1学期あたり4-5回程度であったと伝えられる。文貞姫「女子美術学校と羅恵錫の美術：1910年代留学期の芸術思想と創作態度を中心に」『韓国近現代美術史学』第15輯（韓国近現代美術史学会、2005年）161頁。

24 羅恵錫のフェミニズムと日本留学の関係については、김형필（キム・ヒョンピル）「羅恵錫の生と文学」『外国文学研究』第9号（韓国外国語大学・外国文学研究所、2001年）93-116頁；노영희（ノ・ヨンヒ）「羅恵錫、その『理想的夫人』の夢——東京留学体験と日本の新女性たちとの出会いを中心に」『翰林日本学』第2巻（翰林大学・日本学研究所、1997年）34-54頁を参照。

在学し、当時日本で広がっていた女性解放論を含む自由思想に強く惹かれた。留学中には、女権について論じた「理想的婦人」をも朝鮮人留学生の同人誌『学之光』に発表しているが²⁵、こうした歩みの背景には平塚らいてう(1886-1971)や与謝野晶子(1878-1942)ら『青鞥』への関心が反映されていたと考えられる²⁶。

白は羅のようにフェミニズム的主張を前面に掲げた人物ではなかったとしても、早くに米国へ渡った兄たちに代って親の扶養を担い、自ら働いて留学資金を得ようとした点には²⁷、生活と制作を両立させようとする志向が読み取れる。また、20代半ばで、当時としては珍しく女性単身で渡欧留学を断行したことは、専門職としての道を切り開こうとする意志の表れとも解しうる。白は「良妻賢母」という近代的規範の只中に置かれながらも、それに全面的に従うことなく、自らの進路を確保しようとしたのではないだろうか。こうした観点から見れば、日本留学とそれに続く朝鮮での活動は、彼女が「一人で歩く画家」としての自己像を形づくる過程において重要な位置を占めたと考えられる。

日本から帰国後、白は1924年より薬峴聖堂附属の加明学校で図画教師として教鞭を執りつつ、画家として活動する場を模索した²⁸。白は、当時朝鮮画壇で活動していた洋画家・山田新一(1899-1991)の指導を受け、1925年から1927年にかけて朝鮮美展に入選する。山田は東京美術学校で学び、植民地期朝鮮に拠点を置いて活動した在朝日本人画家であった²⁹。1925年には洋画団体の朝鮮美術協会を組織し、洋画教育と展覧会活動を展開した。さらに1928年からは約2年間フランスに留学し、エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャンに師事したとされる。山田が西洋女性像を生涯の主題の一つとし

て追求したことを踏まえれば、フランス留学およびアマン＝ジャンとの出会いは、山田にとって女性表現をめぐる方法を更新する重要な手がかりとなったと考えられる。【図2】

朝鮮の初期画壇において、白は留学経験をもつ数少ない画家であると同時に、女性画家として注目を集めた。1925年の第4回朝鮮美展に《静物》が入選し、1926年の第5回展では《卓上静物》と《静物》の2点が³⁰、1927年の第6回展では《風景》と《静物》の2点がそれぞれ入選したことが確認される³¹。

初入選の年である1925年、『毎日申報』は白を羅恵錫に続く女性芸術家として紹介しつつ「女性洋画家」の登場を「大きな喜びであると同時に驚異」と述べて歓迎した³²。作品についても「女性の柔らかな筆致による、女性らしく可憐で、安穩で内省的、かつ端正な絵である」と評しており³³、価値づけの重心が「女性」という属性に置かれていたことが窺える。【図3】

他方、第6回展の出品作については、「女性の筆によるものとは想像しがたいほど、きわめて男性的な趣を帯びている」と評され³⁴、わずか2年の間に評価の語彙が大きく転じている。【図4】注目に値するのは、1925年と1927年の批評のいずれにおいても、評価の言語が「女性的／男性的」といったジェンダー化された対概念に依拠している点である。つまり当時の白の作品は、それが「女性的」であれ「男性的」であれ、「女性」という枠組みのもとで読まれ、評価されていたことを示唆する。

そうした過程では、師である山田の指導や画風が一定程度影響した可能性もある。実際白の作品は「第2回高麗美術会展」や第6回朝鮮美展などで、しばしば山田との共通点が指摘された³⁵。また白は、山田主催の「第2回朝鮮美術協会展」(1927年6

25 羅恵錫「理想的婦人」『学之光』第3号(学之光発行所、1914年)13-14頁。

26 「理想的婦人」の本文中で羅は、理想の類型として「(…)天才的に理想を抱くらいてう女史、円満な家庭の理想をもつ与謝野女史(…)」などを挙げ、婦人がそれぞれの理想を自覚的に担う必要を説いている。羅恵錫、前掲記事、1914年、13頁。

27 「画壇の新星、白南舜嬢」『毎日申報』(1925年6月6日)。

28 薬峴聖堂は、1892年に建てられた西洋式レンガ造りの聖堂である。ドゥーセ神父が1895年に薬峴書堂を開設し、改編を経て1909年に加明学校として整備された。

29 山田新一の植民地朝鮮における活動とその位置づけについては、申政正「近代美術の「中心と周縁」——山田新一(1899-1991)の越境を中心に」『日本学』第60集(東国大学・日本学研究所、2023年)21-42頁を参照。

30 「美展審査発表」『時代日報』(1926年5月12日)。

31 「第六回朝鮮美術展覧会入選作品発表」『毎日申報』(1927年5月21日)。

32 「画壇の新星 白南舜嬢」『毎日申報』(1925年6月6日)。

33 「写真説明」『毎日申報』(1925年6月7日)。

34 「女流芸術家(3) 白南舜氏」『東亜日報』(1926年5月22日)。

35 安碩柱「第二回高麗美展を観て」『朝鮮日報』(1924年10月27日)；安碩柱「美展を観て(三)」『朝鮮日報』(1927年5月29日)。

月5日～9日、三越呉服店)には会友として《静物》と《秋》を出品し³⁶、同年の「第3回朝鮮美術協会展」(11月20日～26日、来青閣)では《静物》、《風景》、《奨忠壇スケッチ》の3点を展示したことが確認される³⁷。【図5】

このように白は、朝鮮で取りうるさまざまな道筋を通じて絵画の世界へ近づきながら、自らの様式を確立していった。洋画壇がなお形成途上にあった当時の朝鮮において、日本の美術教育制度や画壇との接点は洋画習得の現実的契機の一つであり、そうした植民地的な非対称性を孕む環境のもとで、展覧会活動や指導を媒介に、日本人画家と朝鮮人画家のあいだに実践的な接触や限定的な協働が成立する場合もあった。山田との関係は、両者が相前後してパリへ渡った後もしばらく続く。

3. パリに留学した朝鮮人女性画家

1928年5月8日、『朝鮮日報』は白のフランス留学の消息を大々的に報じた。留学自体は以前から計画されていたものの、学費などの工面が難しく、渡航の実現までに時間がかかったという内容であった³⁸。渡仏にあたってはカトリック教会の支援を受け、出発時には東京のカトリック神父が同行したとも記されている³⁹。【図6】

植民地期朝鮮において女性の行動や進路にはなお多くの社会的制約が伴っていたことを踏まえるなら、白の渡仏は注目し得る選択であったに相違ない。当時は、貞節や従順を重んじる規範に加え、「良妻賢母」に代表される近代的ジェンダー規範も重なり合っており、女性の自己形成や社会的活動のあり方はしばしば家庭的領域に収められやすかった。そうした状況のもとで、白が結婚を前提とせずフランスへ渡ったことは、当時の支配的価値観と一定の緊張関係をなしていたのだろう。その断行の背景には、女子美での学びに加え、キ

リスト教系学校での勤務を通じて培われたヨーロッパ文化への関心、そして画家として生きようとする志向が折り重なっていたと考えられる。それで白は、すでに米国にいた兄から渡米を勧められたにもかかわらず、縁故の乏しいフランス留学を選んだのである⁴⁰。

パリでは、アカデミー・ド・ラ・グラン・ショミエールおよびアカデミー・スカンディナーヴで学んだ。特にアカデミー・スカンディナーヴには、オトン・フリエス(1879-1949)やシャルル・デュフレヌ(1876-1938)らが教員として名を連ねており、白も彼らの指導のもとで、ヌード・デッサンや野外写生など実技中心の訓練に触れたと推測される⁴¹。フリエスはフォーヴィスムの画家として知られ、デュフレヌはサロン・デ・チュイルリーの創設に関わった画家の一人で、アラブの场景などオリエンタリズム的な主題を扱った作品でも知られていた⁴²。

また生活面では、当初寄宿舍で暮らし、厨房の手伝いと引き換えにフランス語の手ほどきを受けながら学業を続けたという⁴³。のちにはパリ第1区のフランス人宅に身を寄せたとされ、その家は経済的に余裕があり芸術への理解もあったため、白が郊外へ出て写生を重ねられるよう便宜を図るなど、支援者としての役割を果たした。白に課されたのは、毎朝ミサに参加し、帰りに牛乳を買ってこることだけであったとされる。

パリでの生活は、画家としての白の視野を大きく広げる契機となった。まず1929年、サロン・デ・ザルティスト・フランセに《ヌード》が入選し、サロン・デ・チュイルリーには《エルブレー風景》、《春》、《風景》の3点を出品するなど、留学の成果を示した⁴⁴。さらに近年の調査により、白が「仏蘭西日本美術家協会展」にも出品していたことが確認されている。同協会は1929年にパリ在住の日本人

36 『朝鮮美術協会第二回洋画展覧会出品目録』(1927年)、リウム美術館アーカイブ(李龜烈コレクション)所蔵。

37 『朝鮮美術協会第三回洋画展覧会陳列品目録』(1927年)、リウム美術館アーカイブ(李龜烈コレクション)所蔵。

38 「画壇才媛白南舜嬢——芸術の国仏蘭西へ」『朝鮮日報』(1928年5月8日)。

39 同上。

40 김해리(キム・ヘリ)「樂園、そして「新女性」の夢」尹蘭芝ほか『彼女たちもいた——韓国近現代美術を作った女性たち』(ソウル:ナムヨンビル、2024年)30頁。

41 白南舜のパリ留学については、尹凡牟、前掲記事、106-107頁を参照。

42 이지희(イ・ジヒ)「1920～30年代におけるパリ留学作家研究」『人物美術史学』第8号(人物美術史学会、2012年)190-191頁。

43 白南舜のパリ滞在中の生活ぶりについては、尹凡牟、前掲記事、107頁を参照。

44 尹凡牟「近代期女性美術の形成、羅憲錫と白南舜の場合」『羅憲錫研究』第2号(羅憲錫学会、2013年)171頁。

画家らを中心に組織された美術団体で、藤田嗣治(1886-1968)が会長を務め、あわせて3回の展覧会(パリ2回、ブリュッセル1回)を開催した⁴⁵。白はこのうち「パリ第2回展」(1929年10月15日～31日、ギャラリー・ジャヴァール・エ・ボルドー)に「白ジャンヌ」という名前で4点を出品しており、個々の作品の内容は不明であるものの、目録では4点とも《Peinture》のタイトルであったことが確認される⁴⁶。東京留学や朝鮮での洋画団体における活動を経た白が、パリにおいても在仏日本人画家を中心とする展示に参加していた事実は、当時の移動と発表の枠組みが、帝国の制度や人的ネットワークと密接に結びついていたことを窺わせる。

一方で、白のパリ生活は、女性の生き方や役割を考え直す契機としても語られる。白は1931年正月に『朝鮮日報』へ寄稿した文章の中で、フランスでは中年期以降の女性たちが関心の幅を保ち、趣味や仕事に意欲的に取り組む姿を目にした経験を踏まえ、朝鮮社会にみられる「無気力な早熟さ」を批判し、より快活に生きる必要を説いた⁴⁷。また、フランス家庭の食事準備の簡素さに触れ、「二人の食事なら十分ほどで数品の副菜を整えられる」と述べ、家事の負担が軽くなることで制作に充てう時間が生まれるという実感も記している。

もちろん、こうした記述から両社会の女性の生活を一般化することはできないだろう。ただし、少なくとも白が、制作を生活の中心に据えるための条件を、パリでの経験を通じて具体的に捉え直すとしていたことは確かである。とりわけ、絶えることのない好奇心と意欲を保つこと、そして家事に費やす手間を抑えて時間と余力を確保することが、制作の条件として意識されていたのである。

白はパリでヨーロッパの生活様式や価値観に触れる中で、自身の生の組み立て方を捉え直してい

った。とりわけ生活上の自立をめぐる感覚は、朝鮮で当然視されていた規範を相対化する視点をもたらしたと考えられる。この点は、羅恵錫がパリでの体験を踏まえ、「私は自分が女性であることを悟った。しかして、女性とは偉大なるもの、幸福なる者であることを悟った」と述べつつ、女性の権限や自立をめぐる認識を深めていったこととも一定の共鳴をなす⁴⁸。二人の女性画家にとってヨーロッパは、制作の場であると同時に、自己像を更新する場でもあったのであろう。

朝鮮の画壇を彩った二人は、実際パリでも接点を持った。羅は1927年に夫の金雨英(1886-1958)と欧米へ渡り、1929年頃まで各地を巡りつつパリにも数ヶ月滞在して制作と研鑽を重ねたが、その滞在中、白と共に美術館を訪ねるなどの交流を持ったのである⁴⁹。さらに二人は、パリでアトリエを共有する構想を語り合ったともされるが、羅の夫の意向により実現には至らなかった⁵⁰。白は後年、この構想が果たせなかったことを生涯の後悔の一つとして挙げている⁵¹。

一方で、白はパリ滞在中に任用璉(1901-没年不詳)と結婚している。制作を生活の中心に据えるとあった当初の決意からすれば、結婚は予期しない展開であったが、相手の求婚を受けて結婚に至ったとされる⁵²。相手の任は、1919年に南京の金陵大学に学んだのち渡米し、シカゴ美術研究所付属美術学校およびイエール大学で絵画を学んだ青年画家であった。1929年、イエール大学の奨学金などを背景に渡欧してパリに滞在し、白の兄・白南瑤(1898-?)を介して白と知り合ったという⁵³。【図7】

二人は1930年4月、パリ近郊エルブレー(Herblay)で結婚式を挙げ、新婚生活をはじめた。任の数少ない現存作の一点である《エルブレー風景》(1930年、韓国国立現代美術館所蔵)は、新婚期に暮らした住まいから俯瞰した集落とセヌ川の景観を

45 仏蘭西日本美術家協会および同協会展の概要については、徳島県立美術館ほか編『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録(共同通信社、1998年)を参照。

46 白南舜の「仏蘭西日本美術家協会展」への出品については、徳島県立美術館ほか編、前掲図録、25頁、108頁、137頁を参照。

47 「先進として後進に送る言葉：我が女性はいかに生きるべきか、正月の新しい抱負と希望」『朝鮮日報』(1931年1月6日)。

48 羅恵錫「ああ、自由の巴里が懐かしい——欧米漫遊後の私」『三千里』第4巻第1号(京城：三千里社、1932年1月)43頁。

49 羅恵錫の欧米旅行の記録については、羅恵錫著・山田裕子訳『朝鮮女性、初の世界一周記』(展望社、2024年)を参照。

50 尹凡牟、前掲記事、108頁。

51 同上。

52 任用璉との出会いと結婚に至る経緯については、尹凡牟、前掲記事、108-109頁を参照。

53 任用璉の経歴については、尹凡牟『韓国現代美術100年』(玄岩社、1984年)107-116頁を参照。

描いている⁵⁴。【図8】しかし、白と任のフランス生活は長くは続かなかった。家の事情により1930年に帰国せざるを得なかったのである⁵⁵。二人にとって海外で制作を続け、画家としての射程を広げることは重要であったが、その構想は帰国という現実の前に早々に頓挫した。

4. 白南舜の「楽園」——女性画家が紡いだ理想と影

白と任夫婦は帰国後まもなく、1930年11月上旬に東亜日報社で「滞欧作品展覧会」を開催し、朝鮮国内での本格的な活動をはじめた⁵⁶。李光洙(1892-1950)も指摘するように、夫妻による帰国展という形式自体が当時の朝鮮では先駆的であり、さらに両者がパリのサロン入選経験を有していた点は稀有な事例として注目を集めた⁵⁷。

留学以前には官制展である朝鮮美展に積極的に出品していたが、帰国後には、しばしばそれとは別の位相に置かれてきた「書画協会展」へと出品の場を移したことも大きな変化の一つであった。なお、1930年代前半には朝鮮美展の審査や水準をめぐる不満が画家たちの間で語られはじめており、白が同展から距離を取った背景にも、制度への違和感があったのかもしれない。実際、1933年の第12回朝鮮美展をめぐる批評は、白や任夫妻を含む有力画家の不参加に触れ、入選や入賞を狙って「穏健中庸」の制作へ傾くことは「芸術家としての自尊心と良心を損なうこと」と記している⁵⁸。

一方、1934年から白は、朝鮮人画家を中心に油彩画のあり方を模索した牧日会(のちの牧時会)に参加した⁵⁹。「純西洋画的風」を標榜する牧時会への参加は、白がフランスで身につけた西洋絵画の様式を保持しつつ、それを朝鮮の文脈の中で公に掲げ、同様の志向をもつ同人たちと共に定着させ

ようとした姿勢として理解できる⁶⁰。同会には、東京美術学校で学んだ李鍾禹(1880-1951)や李馬銅(1906-1981)らが参加していたほか、「徹底した反鮮展」画家と評された具本雄(1906-1952)も活動しており⁶¹、この布陣は、彼らが共有した「新しい油彩表現」の可能性を示唆する。

白の帰国後の作品については、現時点では実物の所在が十分に確認できないが⁶²、そうした状況の中で1930年11月1日付の『東亜日報』に掲載された《夫の肖像》の白黒図版は、白の制作の一端を示す貴重な資料となる。【図9】図版には、室内の机に向かい、窓を背にして紙に何かを書きつけるように身を屈めた任用璉の横顔が捉えられている。画面左には花の生けられた花瓶が置かれ、窓外には建物の輪郭が見えることから、生活空間の要素が画面に取り込まれていることが窺える。

白黒図版という制約はあるものの、輪郭線の扱いに加え、明暗の付け方や奥行き処理から、画面に立体感と空間の厚みを与えようとする意図が読み取れる。渡仏以前の出品作にしばしばみられるような、モチーフを整えて配置し、静かに画面を構成する静物的な処理と比べると、本図は身近な日常の一場面を手元の距離で捉え、時間の気配ごと描き留めようとする方向へ踏み出している。この点から推測するに、パリで重ねた写生経験は、対象を完成形として固定するのではなく、日常の流れの中に現れる一瞬として捉える視線を白に与えたと考えられる。生活のただ中にある瞬間を掬い取り、画面へ定着させようとする、そうした「近さ」と「即時性」の感覚こそ、留学経験を経て形成されていた表現であったのだろう。

一方、1936年頃に制作したとされる《楽園》は、東洋の理想郷を思わせる景に、西洋のパラダイスを連想させる要素を重ね合わせた作品である。【図

54 「近代美術鑑賞② 任用璉《エルブレー風景》」『現代の美術ニュース』第25号(1983年6月1日)。

55 「新家庭訪問記(9)」『毎日申報』(1930年12月3日)。

56 「白氏夫妻洋画展」『朝鮮新聞』(1930年11月1日)；「任用璉氏夫妻 名作展覧会」『毎日申報』(1930年11月1日)；「任波・海儂両氏夫婦展開催」『東亜日報』(1930年10月29日)など。

57 春園「任氏夫妻展 素人印象記」『東亜日報』(1930年11月9日)。

58 「蕭條落寞した美展——特選級出品大減」『朝鮮日報』(1933年5月10日)。

59 牧日会は1939年まで活動を続け、会員各自が身につけた西洋美術の様式を踏まえつつ、朝鮮の伝統との折衷可能性を探った団体である。展覧会名は時期により「牧時会展」(1937年6月10日～17日)、「同人展」(1937年12月)、「洋画同人展」(1938年11月23日～27日、1939年7月1日～5日)へと移行しつつ、計5回の団体展を開催した。会場はいずれも和信画廊であった。

60 具本雄「集団から分散へ——丁丑年の美術界(上)」『東亜日報』(1937年12月10日)。

61 尹凡牟「画壇裏面史：逸話で編む『明暗100年』」『京郷新聞』(1985年4月13日)。

62 白南舜および任用璉の作品の多くは、朝鮮戦争期の混乱の中で焼失・散逸したと伝えられている。尹凡牟「白南舜夫人のニューヨーク画室探訪(2)——分断民族と芸術家の挫折」1988年7・8月号『カナアート』(カナアートギャラリー、1988年)122-123頁。

10】油彩による八曲一隻形式の大作で、山並みや水の流れを骨格とする山水風の構成を土台としながら、椰子や半裸の人物像といった異国趣味のモチーフが加えられている。武陵桃源を想起させる静かな世界に、アルカディア的な気配が入り込み、複数のイメージが同じ画面の中で響き合う。

注目されるのは、モチーフの取り合わせだけではない。白は油彩という西洋の画材を用いながら、支持体にキャンバスではなく八幅屏風を選んだ。これはイーゼル絵画の枠にそのまま収まるのではなく、油彩表現を屏風という形式に即して組み替えようとした選択として読める。屏風は折れや継ぎ目を含む連続した面であるため、視線は一枚の画面に留まらず、扇の切れ目をまたいで移動する。モチーフの配置もその動きに沿って受け取られ、見る者の目を横へ運びながら全体を一つの景として立ち上げる点に、屏風形式ならではの効果がある。

さらに、173×372cmという大画面そのものも、白がこの主題に強い意欲を注いでいたことを物語る。細部の描写にとどまらず、広い空間を一息でまとめ上げ、一定の世界を丸ごと描き出そうとする志向が窺えるのである。要するに《楽園》は、題材の選び方に加え、画材と支持体の取り合わせ、そして画面規模のいずれから見ても、白が自身の表現を押し広げようとしていた時期の作品として注目に値する。加えて、1930年代半ばに伝統や「朝鮮的なもの」への関心が美術界でも強まっていく状況を踏まえると、本作はそうした同時代の関心とも無縁ではなかったと考えられる⁶³。

なお、白は《楽園》を加明学校で共に働いた閔英順に贈っており、1981年に公にされるまで個人蔵として保持されてきた⁶⁴。作品の公開後、白は制作の背景を次のように回想している。

帰国即後、いまやこの身は祖国に置かれてい

る！私が恋い慕ってきた祖国の山川よ！なんと美しいことか、なんと荘厳なことか！昨日まで西洋風に浸っていた生活〇〇が、〇〇を契機として次々に頭に浮かぶのを免れず、喜びは合奏曲となって、愉快に筆が躍り、われ知らず素早く描き上げられました。これこそ、芸術の喜び以外の何ものでもないのであります⁶⁵。[〇〇は判読不能]

この回想は、帰国直後の白が、祖国の山川に改めて心を動かされ、その印象を絵に留めたいと感じた経験を語ったものである。異国で培った「西洋風」の感覚が、帰国という転機を通して一旦ほどけ、身近な風土が以前にも増して切実に立ち現れたと、白は述べている。すなわち白は、外地で得た視点を携えたまま足もとの景観の価値を再認識し、その高揚を制作の喜びとして言葉にしたのである。

以上を踏まえるなら《楽園》は、海外での経験と修練が帰国後の実感と結びついたところから生まれた作品であり、白に蓄積された経験と風土への親近感が一つの画面に凝縮されたものと見做せるだろう。

他方、白のその後の歩みを辿ると、制作を取り巻く条件は大きく変化していく。戦後、植民地支配の終結と解放の余韻も束の間、朝鮮半島は戦争へと突入した。白は、夫・任用璉が戦時下で連行され、その後の消息が確認できないという事態に直面する。こうした状況のもとで、白が厳しい生活条件のなか就労を続けたことは、生計を支える必要に加え、生活を立て直すための自立の意志とも結びついていたと考えられる。夫の不在後、白は子どもたちを伴って釜山へ避難し、ソウル大学の臨時校舎で約1年間、美術を講じた⁶⁶。さらに、1964年の米国への移住は、彼女にとって生涯最後の越境となった。

63 1930年代後半の朝鮮における「朝鮮的なもの」への関心の高まりと、その美術史的な文脈については、박영택 (パク・ヨンテク)「金煥基の白磁壺の絵と『文章』誌の尚古主義——柳宗悦と李泰俊の影響を中心に」『美術史学』第30号(韓国美術史学会、2010年) 315-345頁; 명지은 (ミョン・ジウン)『近園金塔俊(1904-1967)の絵画論研究』修士学位論文(ソウル大学校大学院・美学科、2016年)を参照。

64 《楽園》の伝来については、閔英順の結婚祝として白が贈ったとする説明が通説である。ただし白は李龜烈宛の書簡において、本作は結婚祝というよりも、以前から「作品を渡す」と約束していたことを果たすために制作した旨を記している。したがって、本作の贈与をめぐる動機づけについては、従来の説明を再検討する余地がある。白南舜「李龜烈宛書簡」1987年8月20日、リウム美術館アーカイブ(李龜烈コレクション)所蔵。

65 「白南舜が李龜烈に宛てた書簡」1987年8月20日、リウム美術館アーカイブ(李龜烈コレクション)所蔵。

66 キム・ヘリ、前掲論文、34頁。

米国移住後、白は教会に身を寄せ、韓国で再び注目されるまで、公の場では画家としての活動を前面に出さず、奉仕に携わったとされる⁶⁷。こうした生活の影響もあってか、再注目された以後に制作された作品群、ならびに国立現代美術館へ寄贈された作品には、題名や主題の選択に宗教的含意が濃く認められる⁶⁸。

白は1926年、朝鮮美展の入選に際して「世の中で成功することよりも、筆を握って絵を描くその瞬間が幸福である」と述べた⁶⁹。また「私は筆を手に取り、生命を捧げることが自分の使命である」と常に語っていたと伝えられる⁷⁰。これらの言葉が示すように、白にとって絵画とは外的な成功の代替ではなく、生を支える実践そのものであった。そしてそれは、いかに厳しい状況にあってもやり続けなければならない抛りどころでもあったのだろう。戦前と戦後にまたがる作品および関連資料は、その実践の輪郭を辿る手がかりであると同時に、彼女が生きた歴史的條件を読み解くための重要な手がかりにもなっている。

おわりに

1981年、白と《楽園》が広く知られるようになったことは、彼女の活動を美術史叙述の中で捉え直す契機となり、研究対象として位置づける動きを促した。その後、白は制作を再開し、1992年には国立現代美術館の「原老作家絵画展」への参加や作品の寄贈を通じて晩年の活動を示しつつ、1994年に米国で生涯を閉じた。

1982年、白は自身の来歴を語る中で羅恵錫との記憶を呼び起こし、次のように述べている。

誠に懐かしい先輩よ、一般には公開されていなかった「ギャラリー」の名品を見せてくださったこと、私と共にパリに残り、アトリエに籠って作品に没頭しようと語られたこと。私たちは朝鮮美術史の一頁を照らすべき重責を担うのだ

と、使命感を呼び覚ましてくださったこと。パリと別れることをあれほどまでに悲しみ、痛惜しておられたこと。いま改めて回想すれば、そのすべてが骨身に沁みるほど懐かしく、ただ恋しくてならない⁷¹。

羅との思い出を手がかりとするこの回想は、白のうちに長く沈黙していた画家としての欲求と自負を呼び戻す契機になったとみられる。回想に繰り返し現れる痛惜と追慕は、パリでの別れに対する私的感情にとどまらず、同時代の女性にとって制作の時間・場・支援の確保が容易ではなかったという現実をも反映している。

一方、白の回想の焦点となる羅恵錫は、1948年12月10日、ソウルの養護施設・慈済院で生を終えた。それにもかかわらず、後に続く女性たちにより人間的な生の可能性を手渡そうとした羅の実践と言葉は、朝鮮の女性たちが社会の場で自己を表明しうる条件が拓がる過程に一定の影響を与えたと考えられる。白にとってもそれは、制作と生活を支える励ましとして記憶に残ったに違いない。米国へ移住したのちも、長い空白期を挟みつつ制作へ回帰した白の歩みには、羅から受け取った言葉の力が折り重なっている。

白の越境と創作は、単に「女性」という枠に還元できるものではない。朝鮮、日本、フランスを移動しながら示された西洋絵画への熱意は、当時の若者たちが抱いた「近代」への希求と自己形成の過程の具体的な軌跡を照らし出している。

他方で白の活動は、女性教育の拡大や「解放」の価値が語られた時代においてなお、女性画家が直面した可能性と限界をも浮かび上がらせる。批評の言語それ自体が「女性的」、「男性的」といった区分に依拠し、画風や振る舞いをジェンダー化された語りの中に組み込んでいった事実は、当時の社会が女性芸術家に課した位置取りの条件を逆照射する。

67 尹凡牟、前掲記事、1988年創刊号、104頁。

68 国立現代美術館（MMCA）の所蔵品解説によれば、十字架や棕櫚の枝、蠟燭といった宗教的モチーフを随所に配した《勝利》（1990年）や、暗い背景に渦を巻く光の表現によって宗教的な輝きを感じさせる《栄光》（1987年）など、題名や図像の画面に信仰に結びつく意味合いが読み取れる。こうした作例からは、再注目以後の制作において宗教的な主題や象徴表現が選択されていることが窺える。

69 「女流芸術家（三）白南舜氏」『東亜日報』（1926年5月22日）。

70 「画壇才媛白南舜嬢 芸術の国仏蘭西へ」『朝鮮日報』（1928年5月8日）。

71 「『韓国最初の女流画家は羅恵錫さま』元老白南舜氏投稿で明らかに」『美州東亜日報』1982年1月、リウム美術館・李龜烈アーカイブ所蔵。

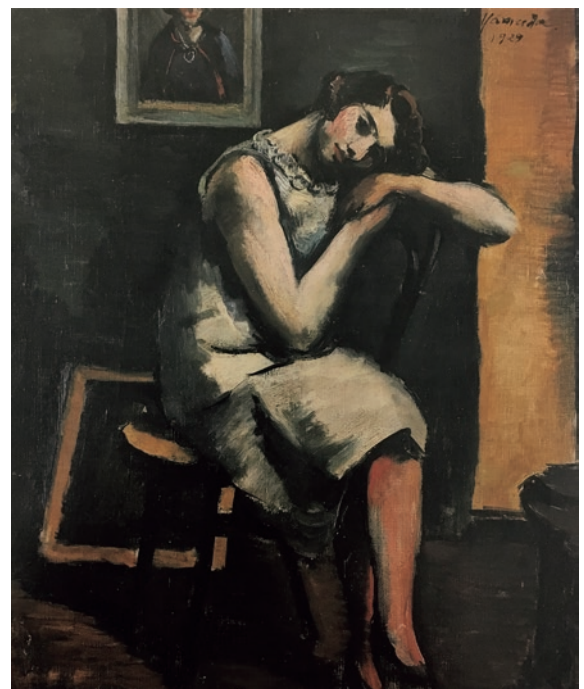
こうした呼称や評価の枠組みは、歴史の中で誰がどのような「資格」や「範疇」を付与され、何か記録されるのかという問いを改めて呼び起こす。従来ほとんど語られてこなかった多様な女性芸術家と作品は、なお埋もれたままである。それらを掘り起こし、史料として位置づけ直すことは、単に一人の芸術家を「再発見」することにとどまらない。むしろそれは、「歴史に書かれる／歴史に残される」芸術家を規定してきた既存の基準や範疇に異議を差し挟み、同時代の美術をより立体的に理解するための足場となるだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、リウム美術館アーカイブセンターのご担当者様より多大なるご協力を賜りました。ここに記して深く感謝申し上げます。



【図1】『新女性』第5巻第11号（開闢社、1931年11月）表紙。



【図2】山田新一《椅子に凭るY嬢》、1929年、油彩・キャンバス、54.6×45.5cm、宮崎県立美術館。



【図3】白南舜《静物》(1925年頃、油彩〔推定〕、支持体不詳、寸法不詳)。現存未確認、所蔵不詳。



【図4】白南舜《風景》(1927年頃、油彩〔推定〕、支持体不詳、寸法不詳)。現存未確認、所蔵不詳。



【図5】朝鮮美術協会展会場における同人集合写真(撮影年・会場詳細不詳)。第二列左から3人目：山田新一。



【図6】白南舜、渡仏の際の写真。



【図7】任用璉（左）と白南舜（右）の夫婦写真。撮影者・撮影地・撮影年不詳。



【図8】任用璉《エルブレ風景》、1930年、油彩・厚紙、24.2×33cm、国立現代美術館（MMCA）。



【図9】白南舜《夫の肖像》（制作年不詳、技法不詳、支持体不詳、寸法不詳、所蔵不詳）。



【図10】白南舜《樂園》、1936年頃、油彩・キャンバス・八曲一隻屏風、173×372cm、国立現代美術館（MMCA）。

参考文献

1. 一次資料（新聞／雑誌／書簡／目録）

『京城日報』、『時代日報』、『朝鮮新聞』、『朝鮮日報』、『東亜日報』、『毎日申報』、『三千里』、『学之光』

『韓国最初の女流画家は羅恵錫さま』元老白南舜氏投稿で明らかに『美州東亜日報』1982年1月（リウム美術館・李龜烈アーカイブ所蔵）。

「近代美術鑑賞② 任用璉〈エルブレ風景〉」『現代の美術ニュース』第25号、1983年6月1日。

白南舜「李龜烈宛書簡」1987年8月20日、リウム美術館アーカイブ（李龜烈コレクション）所蔵。

「朝鮮美術協会第二回洋画展覧会出品目録」（1927年）リウム美術館アーカイブ（李龜烈コレクション）所蔵。

「朝鮮美術協会第三回洋画展覧会陳列品目録」（1927年）リウム美術館アーカイブ（李龜烈コレクション）所蔵。

2. 展覧会図録

徳島県立美術館ほか（編）『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展覧会図録、共同通信社、1998年。

国立現代美術館（編）『新女性、到着する』ソウル：国立現代美術館、2017年。

3. 研究書（単行本）

【日本語】

羅恵錫（著）山田裕子（訳）『朝鮮女性、初の世界一周記』東京：展望社、2024年。

【韓国語】

キム・キョンイル『女性の近代、近代の女性』ソウル：プルンヨクサ、2004年。

金秀珍『新女性、近代の過剰：植民地朝鮮の新女性談論とジェンダー政治、1920～1934』ソウル：ソミョン出版、2009年。

朴宣美『近代女性、帝国を経て朝鮮へ回遊する——植民地文化支配と日本留学』坡州：創批、2005年。

尹蘭芝ほか『彼女たちもいた——韓国近現代美術を作った女性たち』ソウル：ナムヨンビル、2024年。

尹凡牟『韓国現代美術100年』ソウル：玄岩社、1984年。

4. 論文・紀要・雑誌記事

【日本語】

山田直子「私立女子美術学校／女子美術学校（1900～1929）における西洋画科教育」『女子美術大学研究紀要』第41号、女子美術大学・女子美術大学短期大学部図書館、2011年、1-13頁。

【韓国語】

李龜烈「半世紀ぶりにニューヨークのアトリエを公開した最初の夫婦画家白南舜氏」『季刊美術』1981年夏号、中央日報社、15-18頁。

——「近代の先駆者的女性画家・白南舜をご存じないでしょうか」『女性東亜』通巻167号、東亜日報社、1881年、136-145頁。

イ・ジヒ「1920～30年代におけるバリ留学作家研究」『人物美術史学』第8号、2012年、179-218頁。

カン・ジョンファ「白南舜の芸術世界研究——近代期の作品を中心に」『東洋芸術』第61号、2023年、69～91頁

キム・ジヘ「美術家から先覚者へ、近代帝国を経験した女性美術家たち」『羅恵錫研究』第8号、2016年、7～31頁

金在赫「忘却の中の女流画家・白南舜（77）の生々しい証言——思いどおりになるものか」『季刊美術』1981年夏号、中央日報社、19-26頁。

金秀珍「植民地近代の万華鏡、新女性」『新女性、到着する』ソウル：国立現代美術館、2017年、193-210頁。

キム・ヒョンピル「羅恵錫の生と文学」『外国文学研究』第9号、2001年、93-116頁。

キム・ヒョンファ「韓国近代女性画家たちの西欧美術の受容および再解釈に関する研究」『アジア女性研究』第38号、1999年、117～151頁

キム・ヘリ「楽園、そして「新女性」の夢」尹蘭芝ほか『彼女たちもいた——韓国近現代美術を作った女性たち』、ソウル：ナムヨンビル、2024年、28-35頁。

権幸佳「美術と技芸のあいだ：女子美術学校出身の女性画家たち」『新女性、到着する』ソウル：国立現代美術館、2017年、225-240頁。

申政正「近代美術の『中心と周縁』——山田新一（1899-1991）の越境を中心に」『日本学』第60集、東国大学・日本学研究所、2023年、21-42頁。

ノ・ヨンヒ「羅恵錫、その『理想的夫人』の夢——東京留学体験と日本の新女性たちとの出会いを中心に」『翰林日本学』第2巻、1997年、34-54頁。

パク・ヨンテク「金煥基の白磁壺の絵と『文章』誌の尚古主義——柳宗悦と李泰俊の影響を中心に」『美術史学』第30号、韓国美術史学会、2010年、315-345頁。

文貞姬「女子美術学校と羅恵錫の美術：1910年代留学期の芸術思想と創作態度を中心に」『韓国近現代美術史学』第15輯、2005年、143-171頁。

尹凡牟「最高齢画家・白南舜夫人のニューヨーク画室探訪（1）」『ガナアート』創刊号、ガナアートギャラリー、1988年、103-109頁。

——「白南舜夫人のニューヨーク画室探訪（2）——分断民族と芸術家の挫折」『ガナアート』1988年7・8月号、ガナアートギャラリー、117-123頁。

——「近代期女性美術の形成、羅恵錫と白南舜の場合」『羅恵錫研究』第2号、2013年、167-191頁。

【英語】

Nochlin, Linda. "Why Have There Been No Great Women Artists?" In *Women, Art, and Power and Other Essays*, 145-178. New York: Harper & Row, 1989.

図版出典

【図1】出典：『新女性、到着する』展図録（ソウル：国立現代美術館、2017年）28頁（原資料：『新女性』第5巻第11号）。

【図2】出典：『画業70年の軌跡 山田新一展』（宮崎県立美術館、2002年）27頁。

【図3】出典：朝鮮総督府・朝鮮美術展覧会編『朝鮮美術展覧会図録』（京城：朝鮮写真通信社、1925年）43頁（白黒図版）。

【図4】出典：朝鮮総督府・朝鮮美術展覧会編『朝鮮美術展覧会図録』（京城：朝鮮写真通信社、1927年）40頁（白黒図版）。

【図5】出典：『画業70年の軌跡 山田新一展』（宮崎県立美術館、2002年）108頁。

【図6】出典：『朝鮮日報』1928年5月8日付、第3面、記事「画壇才媛白南舜嬢——芸術の国仏蘭西へ」掲載写真（白黒写真）。閲覧：NAVER ニュースライブラリ（NAVER News Library、閲覧日：2026年2月6日）。

【図7】出典：『中央日報（The JoongAng）』オンライン版、2024年2月20日付、記事「龍山のある家で発見——李健熙が探した『伝説の女流画家』」掲載写真。閲覧日：2026年2月6日。

【図8】出典：共有マダ（共有庭）「共有著作物」掲載画像（ダウンロードデータ）。URL：<https://gongu.copyright.or.kr/gongu/wrt/wrt/view.do?wrtSn=13364693&menuNo=200018>。閲覧日：2026年2月6日（ダウンロード日：2026年2月6日）。

【図9】出典：『東亜日報』1930年11月1日付、第4面、写真キャプション「来月5日から9日まで本社楼上で開催される『夫婦展』に出品予定の白南舜女史《夫の肖像》」掲載写真。閲覧：NAVER ニュースライブラリ（NAVER News Library、閲覧日：2026年2月6日）。

【図10】出典：キム・ヘリ「現代美術コラム」（21）楽園を描いた『新女性』白南舜『ソウルアートガイド』（キムダグジン美術研究所運営サイト）掲載画像。URL：<http://www.daljin.com/column/18417>。閲覧日：2026年2月6日。

濱田庄司の備前焼

Bizen Ware by Hamada Shoji

柳沢秀行（公益財団法人大原芸術財団シニアアドバイザー）

YANAGISAWA Hideyuki (Senior Advisor, Ohara Art Foundation)

要旨

濱田庄司（1894–1978）は、栃木県益子町を拠点に、実作者としては重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されたように同時代を代表する陶芸家であり、かつ、柳宗悦（1889–1961）、河井寛次郎（1890–1966）などと共に1920年代半ばから民藝運動を長く主導した存在である。

大原美術館を創設した大原孫三郎（1880–1943）と、その息子總一郎（1909–1968）は、2代にわたり民藝運動を手厚く支援し、また実作者としての濱田や河井の作品を認め、その主要作を収集した。それらの作品は、柳宗悦没後に日本民藝協会会長をも引き受けた大原總一郎が、大原美術館内に1961（昭和36）年に設けた濱田、河井、そして富本憲吉（1886–1963）、バーナード・リーチ（1887–1979）を加えた4作家それぞれの展示室で公開されることとなる。

その總一郎が、1948（昭和23）年に、東京駒場の日本民藝館に次いで、岡山県域さらには西日本の民藝運動の拠点として創設した倉敷民藝館には、濱田庄司が手掛けた7点の備前焼が所蔵されている。これらはいずれも1951（昭和26）年に岡山県工業試験場からの指導要請によって濱田が岡山県内の窯業地を巡り、そのひとつとして備前焼の産地である備前市伊部を訪ね、当地の作り手たちと交友したことから制作されたと想定される。

本稿では、この7点の濱田庄司の手になる備前焼を基点にして、民藝運動と大原家の関りや、当時の備前焼の状況を振り返る。さらには、刊行から間もない、中島岳志『縄文 革命とナショナリズム』（株式会社太田出版 2025年6月）が「濱田庄司の縄文土器づくり」と一章を設けて考察した1950（昭和25）年の濱田庄司とその弟子でやはり重要無形文化財保持者となる島岡達三（1919–2007）による縄文土器再現に関わり、その直後における、濱田による備前焼制作の意義について考察する。

Hamada Shoji (1894–1978) produced pottery with his base in Mashiko-machi, Tochigi. As a leading potter of his time, he was designated as a holder of Important Intangible Cultural Property (Living National Treasure). Moreover, together with Yanagi Muneyoshi (1889–1961), Kawai Kanjiro (1890–1966), and others, he was a longtime leader of the Mingei movement from the mid-1920s onward.

Ohara Magosaburo (1880–1943), founder of Ohara Museum of Art, and his son, Soichiro (1909–1968), handsomely supported the Mingei movement over two generations. They acknowledged Hamada and Kawai as realizers of this movement, and collected major works by such artists. After Yanagi Muneyoshi's death, Ohara Soichiro assumed the chairmanship of Nihon Mingei Kyokai (The Japan Folk Craft Association), and the works collected by father and son were put on public view at Ohara Museum of Art in separate galleries set up in 1961 (Showa 36) featuring the four artists Hamada, Kawai, Tomimoto Kenkichi (1886–1963), and Bernard Leach (1887–1979).

It was also Soichiro that established Kurashiki Mingeikan (Kurashiki Museum of Folkcraft) in 1948 (Showa 23). This was the second folkcraft museum after Nihon Mingeikan (Japan Folk Crafts Museum) in Komaba, Tokyo, and was intended as a base for the Mingei movement in Okayama Prefecture and surrounding areas in Western Japan. Seven works of Bizen ware produced by Hamada Shoji are kept at Kurashiki Mingeikan. In 1951 (Showa 26), the porcelain kiln at Okayama Prefectural Industrial Laboratory asked Hamada to come and give them advice. Hamada toured the potteries in Okayama, one of which was Inbe in Bizen-shi, where Bizen ware was produced. The works in the Kurashiki Mingeikan collection are presumed to have been the fruit of Hamada's encounter with the local potters on that occasion.

In this article, with the seven works of Bizen ware produced by Hamada Shoji as the starting point, the Ohara family's involvement in the Mingei movement and the situation of Bizen ware in those days are looked back on. In a recent publication, *Jomon, kakumei to nashonarizumu* (Jomon: revolution and nationalism) (Ohta Publishing Co., June 2025), by Nakajima Takeshi, there is a chapter on "Hamada Shoji and Jomon Pottery Making." In 1950 (Showa 25), Hamada Shoji and his apprentice Shimaoka Tatsuzo (1919–2007), who also became a holder of Important Intangible Cultural Property, were involved in reproducing Jomon pottery. This incident and the significance of Hamada's production of Bizen ware immediately after this project are also examined.

はじめに

濱田庄司(1894-1978)¹は、栃木県益子町を拠点に、実作者としては重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されたように同時代を代表する陶芸家であり、かつ、柳宗悦(1889-1961)、河井寛次郎(1890-1966)などと共に1920年代半ばから民藝運動を長く主導した存在である。

大原美術館を創設した大原孫三郎(1880-1943)と、その息子總一郎(1909-1968)は、2代にわたり民藝運動を手厚く支援した。また実作者としての濱田や河井の作品を認め、その主要作を収集した。それらの作品は、柳宗悦没後に日本民藝協会会長をも引き受けた大原總一郎が、1961(昭和36)年に大原美術館内に設けた濱田、河井、そして富本憲吉(1886-1963)、バーナード・リーチ(1887-1979)を加えた4作家それぞれの展示室で公開されることとなる²。

その總一郎が、1948(昭和23)年に、東京駒場の日本民藝館に次いで、岡山県域さらには西日本の民藝運動の拠点として創設したのが倉敷民藝館である。初代館長となった外村吉之介(1898-1993)は、同館を拠点に長らく地域の民藝運動を牽引するのみならず、民藝第一世代とも呼ぶべき柳や濱田が逝去した後も、長らく日本全体の民藝運動を支えた。

この倉敷民藝館に濱田庄司が手掛けた7点の備前焼が所蔵されている。これらはいずれも1951(昭和26)年に岡山県工業試験場からの指導要請によって濱田が岡山県内の窯業地を巡り、そのひとつとして備前焼の産地である現在の備前市伊部を訪ね、当地の作り手たちと交友したことを契機として制作されたと想定される。

本稿では、濱田の手になるこの備前焼を考察の対象とする。そのためには、1950年代における岡山県域での民藝運動や、当時の備前焼の状況を振

り返る。さらには、刊行から間もない、中島岳志『縄文 革命とナショナリズム』(株式会社太田出版 2025年6月)が、「濱田庄司の縄文土器づくり」と一章を設けて考察した1950(昭和25)年の濱田庄司とその弟子でやはり重要無形文化財保持者となる島岡達三(1919-2007)による縄文土器再現との関りにも注視しつつ、その直後になされた濱田による備前焼制作の意義について考察する。

1. 倉敷民藝館所蔵の濱田庄司による備前焼

倉敷民藝館に残る手書き台帳によると、濱田庄司作の7点の備前焼は、いずれも1951(昭和26)年に制作され、1967(昭和42)年7月16日に濱田より寄附されている³。

同台帳は、「品名」「寸法」「色彩」「模様」「材料」「手法」「産地」の項目に各作品の情報を記したうえ、「記事」欄として手描きの線描による簡略なスケッチが添えられている。スケッチ以外の情報は下記となる。便宜的に本稿のための作品の通し番号(○)と共に記載する。

- (1)「鉢」「径20 高6.5」「茶」「菊花」「陶」「押紋」「備前土による」【図1】
- (2)「鉢」「径20 高6.5」「茶・白茶」「渦」「陶」「いっちゃん」「備前土による」【図2】
- (3)「角鉢」「径30 高6.5」「茶」「矢」「陶」「押紋」「備前土による」【図3】
- (4)「角鉢」「径25×19.5 高7」「茶」「矢」「陶」「押紋」「備前土による」【図4】
- (5)「碗」「高9.5 径12」「茶・一部黄茶」「矢模様」「陶」「押紋」「伊部備前土による」【図5】
- (6)「碗」「径14.5 高8」「茶」「矢模様」「陶」「押紋」「備前土による」【図6】
- (7)「土瓶」「高24 径16.5」「茶」「(空欄)」「陶」「押紋」「備前土による」【図7】

1 本稿での姓の表記については、原則「濱田」とし、引用文中などでは、そのまま表記して「浜田」も用いる。また民藝の表記についても、原則「民藝」とし、引用文中は「民芸」のままもありとする。

2 拙稿「大原美術館 工芸館の創設」(『高梁川 80号』高梁川流域連盟 2022年12月)。「大原孫三郎、總一郎と柳宗悦」(『高梁川 81号』高梁川流域連盟 2023年12月)

3 寄贈の経緯を確かめようと『山陽民藝』などをあたった。寄贈の翌月刊行の同誌70号(1967年8月)には「倉敷民芸館だより」として寄贈品28件の記載があるが、その中に濱田からの寄贈品は記されていない。次号71号(1967年12月)には、11月に岡山市にある天満屋デパートで開催された益子門窯展に際して、濱田を囲む小集会有ったことを伝えるがその他の記述はなかった。ちなみに1950(昭和25)年11月の大原美術館開館20周年記念行事に際し、柳宗悦に関わる雑誌「白樺」と、濱田など民藝運動の関係者多数が倉敷を訪れ、その間に濱田は関係者一行と共に倉敷考古館を訪問していることが同館の日誌で確認できる。『民藝867』(2005年3月 日本民藝協会)の特集「民藝運動と縄文」の中で、佐々風太が紹介する濱田窯所蔵の濱田庄司のスケッチブック写真2図(P20)の上の右側のスケッチは、倉敷考古館所蔵の縄文土器と類似しており、濱田が上記のような機会に同館での縄文土器観察をした可能性も考えられる(この事項については、同館学芸員伴祐子氏のご教示を賜った。)いずれにせよ寄贈の経緯は不明であり、それに伴い記載された制作年も確定的なものではない。

これら濱田による備前焼7点は、台帳の項目「模様」「手法」に記された内容のように、押印による凹紋、そして1点だけ化粧土のイチチン描きで、シンプルな装飾紋が施される。見方を変えれば、備前焼の加飾方法ともいえるべき、稲藁を巻きつけての緋襷や、松割木（薪）の灰が降りかかったの胡麻、灰に埋もれての棧切、他の器などと重ねての牡丹餅、そして緋色に発色する窯変などは一切見られない。あえてそれらを避けた焼成を行ったか、あるいはそうした焼成の出にくい窯、つまりは備前焼ではない窯での焼成可能性が考えられる。この点は、後に考察することとする。

それから、(3)「角鉢」は「型」による成形、(4)「角鉢」は「たたら作り」による成形が想定される。1951（昭和26）年の時点で備前焼の食器では「型」や「たたら作り」による成形はほぼなかったといつてよいだろうが、これに関わる事象についても後述する。

2. 濱田庄司の備前訪

1946（昭和21）年に創設された岡山県民藝協会が刊行する雑誌「山陽民藝」によって、濱田庄司の動向をたどってゆく。なお以後、引用部分は適宜新字体に改める。

まず『山陽民藝15号』（1951年5月）の「岡山県民芸協会だより」には、かねて岡山県民藝協会は都窪郡山手村（現在の総社市）にある県工業試験場から指導を求められていたが、「此窯のみならず伊部、新見、大原、羽島、酒津、諸窯の指導方針を建ててもらふため、五月初旬濱田氏の御来県を願った」とする。伊部とは、備前市中心部の地名であり、また備前焼を伊部焼と称する場合もあるように、現在でも備前焼生産の中心地である。

次16号（1951年9月）では、「浜田氏の岡山県窯めぐり」と題して、濱田がその伊部を訪ねて備前焼の作り手たちと交友したことについて以下のように記している。

「伊部の備前焼は以前から多くの問題を含んでいて、今度の浜田氏巡回の正念場というべき所である。窯の築造、手法と製品との十分な探索。経営方針の提唱、技術の実技指導に浜田氏の全幅の発露があって、地元もこのような啓導を未だかつて

受けたことがないという喜びであった。

何様古い窯場で窯造りや技法の根強い力と確かさがあると共に、趣味商品的な技巧の過剰、品種の煩雑が招いた弱さと迷いがある、土地の人もそれをよく知りつつ半工半農で生活が成り立って行くところから反省や打開にかけたままで進んでいるのである。しかし土建用品や土瓶等の量産をめざす業者もあり、将来にまつものも多くある。此处でも浜田氏は皿や瓶、トン、急須等の手本を示す約束を去れた。同氏が此窯に滞在して仕事をされたら、その精神の露堂々たる境地を展開されるであろうと思われるが手本だけでも必度大きな影響を与えるにちがいない。」

この記事から2年経った『山陽民藝22号』（1953年8月）は、バーナード・リーチの久々の訪日を受け、柳と濱田、リーチを岡山県民藝協会が招聘し、県内各地をめぐる様子を、前号とあわせて伝えている。その中で、浜田が一時大阪へ向かった5月17日に柳とリーチが伊部を訪ね、金重陶陽（1896-1967）、山本陶秀（1906-1994）、三村陶景（1885-1956）など備前焼の作り手たちと面談したことを伝える。その記述の中で「今日は浜田氏は一行中に居られなかったが、二年前にここを来訪され、一夜土地の人々と懇談されて、言々句々非常な感銘を与えられた。」とされる。

この2年を隔てた二つの記述から、以下のことがわかる。1951（昭和26）年夏に濱田が伊部を来訪して、備前焼の作り手たちと交流し、その出会いは有意義なものであったこと。しかしその時も、そしてその後も伊部に滞在しての制作の可能性は低いこと。そして1953（昭和28）年5月の柳とリーチとの岡山県域での滞在の際は、残念ながら濱田は伊部を共に訪ねなかったことである。

3. 岡山県域における民藝運動の状況

次に確認しておきたいことが、濱田庄司や柳宗悦、バーナード・リーチが招かれた1950年代初頭の岡山県域における民藝運動の状況である。

冒頭に記したように、大原孫三郎、總一郎は父子二代にわたり、柳、そして濱田や河井が主導する民藝運動を強く支援した⁴。とくに大原總一郎は、

4 拙稿「日本民藝運動の主導者たちと倉敷」（『大原美術館 紀要第3号』大原美術館 2009年12月）

柳逝去の後、日本民藝協会会長を務めたほどだが、第二次世界大戦直後からの岡山県域においても迅速かつ重要な活動を果たす。

まず終戦の翌年1946(昭和21)年に岡山県民藝協会が結成されたことはすでに記したが、それを主導したのも總一郎である。そしてその翌1947(昭和22)年に岡山県民藝振興公社を起し、新たな作品の生産と流通を強化したうえで、1948(昭和23)年に倉敷民藝館を創設する。そして館長に迎えられた外村吉之介が、同館を拠点としつつ、岡山県民藝協会の活動として、県内の民家調査、生産品調査、そしてその復興を目指す。つまり倉敷民藝館は、たんに過去の品を集めたMUSEUMではなく、社会の中で生きて働くMUSEUMとしての活動を活発に展開する拠点であった。濱田が、当時稼働していた岡山県内の窯場を訪ねて、そのテコ入れにあたったのも、まさにこうした産地の復興運動の一端であり、その中でも日本の六古窯に数えられる備前焼は、重要なポイントでもあったのだろう。

そしてここでいささか長くなるが、濱田の招聘に直接的な関与はないが山口泉(1902-1972)について触れておきたい。

山口の活動については、自身による「回想の柳先生」⁵、そしてそれに拠りながら手際よく全体像をまとめた萩原茂「山口泉と民藝運動」⁶がある。萩原によると、1927(昭和2)年に内務省入りした官僚であった山口は、全国各地に赴任し、最後は岐阜県内政部長(副知事)の要職を務める。しかし第二次大戦後は官僚を辞め、1947(昭和22)年に「いずみ工芸店」を東京の荻窪に開き、民藝の品々を商いつつ、民藝運動の重要な基点の一つを形作っていく。

この山口と民藝運動との関りのきっかけは、柳宗悦の著作に影響を受けたことであり、埼玉県商工課長を務めていた1934(昭和9)年から翌年頃に

柳宗悦その人とも面識を得る。その埼玉県商工課長在任時の山口が民藝運動関係者に知らせたのが埼玉県小川町の「和紙」である。以後、その品への注目が高まり、染紙の研究を委嘱された芹沢銈介(1895-1984)は⁷、この和紙作りの里の光景を自作のモチーフとして採用することにもなる。

それから民藝運動と山口との関りで、最もよく知られているのが、山口が半年ほどの短期間ながら沖縄県学務部長を務めた際、1938(昭和13)年暮れに柳を沖縄に招き、そこから柳の沖縄への注視、そしていわゆる「方言論争」が巻き起こったことであろう⁸。

その山口が、官吏として岡山県にも二度赴任していた。最初は1931(昭和6)年夏頃から2年間を、新設された岡山地方職業紹介事務局の局長として過ごす⁹。この在任中、おそらく1933(昭和8)年頃、山口の兄が京都府土木部監理課長を務めていた縁で、京都在住の画家太田喜次郎(1883-1951)、そして河井寛次郎とも知り合うこととなる。太田は、大原美術館の礎となる西洋美術品の収集にあたったことでも知られる洋画家の児島虎次郎(1881-1929)がベルギーのアントワープに滞在する契機を作るなど、児島とは生涯にわたって昵懇の間柄であった。また河井も、児島が収集した古陶器片の調査を通じて、遅くとも1923(大正12)年には児島と知り合い、互いの作品をもちあう関係であった。さらに1930(昭和5)年を過ぎる頃から、柳や濱田と共に倉敷の人びとと関係を深め、ちょうど山口と出会った頃となる1933(昭和8)年6月には倉敷で個展も開催している。

京都で初めて河井と出会った際、山口は、河井の陶房を訪ね、その生活の在り方を羨ましく思い、ここから民藝運動との関わりが深まったという¹⁰。また山口は同じ頃に、大原孫三郎が創設した倉敷労働科学研究所の初代所長を務めた暉峻義等(1889-1966)が、やはり大原が創設した倉敷中央

5 山口泉「回想の柳先生」(鈴木大拙著者代表・蛭名則編『回想の柳宗悦』八潮書店 1979年7月)

6 萩原茂「山口泉と民藝運動」(『民藝』547巻 日本民藝協会 1998年7月)

7 前掲 山口泉「回想の柳先生」p.205。他にも小川和紙に関する記載は同文献、および雑誌『工藝59号』(日本民藝協会 1935年11月)による特集に詳しい。

8 柳は、最初の訪問から間髪入れず3ヵ月後の1939(昭和14)年4月に再来訪するがその際には濱田庄司、河井寛次郎、芹沢銈介、外村吉之介など同人揃っての訪問となり、またこの時にいわゆる方言論争が起こる。ただ、前掲 山口泉「回想の柳先生」によると、山口は内閣情報部書記官に転出のため、彼らとは1日だけ沖縄で過ごすというすれ違いとなる。

9 山口泉「職業紹介事業に携わりて(手書き)」(岡山地方職業紹介事務局 1933年5月)

10 前掲 山口泉「回想の柳先生」p.203

病院に入院中なのを見舞い、その際に酒津焼などの倉敷の工芸について語り合っている¹¹。酒津焼については、1920年代から大原孫三郎や、暉峻も含め大原周辺の者によって組織された倉敷文化協会による復興が目指され、そして民藝運動関係者と倉敷の関りが深まった1930（昭和5）年以降は、濱田やりーちも酒津へ指導に入り、さらなる振興が図られる最中であった¹²。こうした状況を、山口は暉峻から「京都の河井寛次郎氏、益子の濱田庄司氏等が、柳宗悦氏を中心に指導したので、今日これまで育成したばかり」と聞くこととなる¹³。

こう見てくると、山口は内務省から派遣された県職員として、最初の着任時から大原孫三郎周辺の倉敷の者や、民藝運動の主導者のひとりである河井寛次郎と関係をもっていたことがわかる。

その後、山口は福岡県を経て埼玉県に着任し、1934（昭和9）年頃から小川町の和紙の復興に携わり柳とも面識をもつことになるわけだ。そして1938（昭和13）年の沖縄着任となり、その後、戦争が本格化してからは「香川県に満2年、岡山県に満3年」経済部長として着任する¹⁴。

この1944（昭和19）年から翌年にかけてと想定される二度目の岡山県への着任は¹⁵、第一経済部長としてであった。この時の活動として、これまでも知られているのが倉敷市一帯で江戸時代から栽培が盛んであったイ草製品の活性化であった。山口は、イ草製品を生産、販売する三宅松三郎商店を基点として花筵の生産と流通を促進するが、そのために芹沢銈介と、戦後間もなく倉敷民藝館初代館長となる外村吉之介を招き、この二人による新たな花筵の意匠が創出されることとなる¹⁶。

このように見てくると、山口泉は内務官吏として赴任した各地で、その本務を民藝運動との関りを活かしながら遂行したといえよう。そして二度

目の岡山県赴任時には、棟方志功（1903-1975）の岡山滞在の世話をするなど¹⁷、前回の着任時以上に、民藝運動関係者との人的つながりを深めたうえで活動している。当然、岡山県域での民藝運動の中心人物で、戦後に倉敷民藝館館長となる4歳しか歳の違わぬ外村吉之介とは、山口が東京へ戻ってから関係は続いている。

また東京で「いずみ民芸店」を開いてからは、1950年代初頭には、濱田庄司の益子の窯が開けられる際には、山口に連絡が入り、早々にその品を引き取れるほど、濱田と山口の間に信頼関係が築かれていた¹⁸。こうしたことから、外村をはじめ第二次大戦後に岡山の民藝運動をけん引する関係者とも深い関りをもつ山口が岡山県庁の要職にあつて、産業振興の観点から地場の特産品創出など民藝運動と重なる活動に関与したことは、1951（昭和26）年の濱田招聘への直接の関りこそなくとも、そうした活度が展開される土壌を耕すには大きな貢献があったであろう。

4. 濱田来訪当時の備前焼の状況

それでは、一方の備前焼の状況はどのようなものであつたであろうか。

地元の山陽新聞が長年の取材の蓄積を活かして刊行した「備前焼ものがたり」（監修上西節雄 2012年11月）によると、第二次世界大戦前で窯元や作家で自前の窯をもつものが30軒あまりであったが、戦中戦後の苦境もあつて20軒あまりに減ってしまった。1951、52年頃までは、備前焼を、金を出して購入する人は少なく、米や野菜との物々交換も多かったという。制作する品も、水甕、急須、徳利など農家や一般家庭の日用品ばかりで、生産コストを下げるために品質の悪いものも少なくなかつた¹⁹。こうした状況ゆえ、濱田庄司の伊部来訪を

11 前掲 山口泉「回想の柳先生」p.204

12 前掲 拙稿「日本民藝運動の主導者たちと倉敷」

13 前掲 山口泉「回想の柳先生」p.204

14 前掲 山口泉「回想の柳先生」p.208

15 「備前焼 創刊号」（備前焼宣揚会 1942年10月）掲載の同会役員についての記載では、岡山県経済部長は三木秋義とあり、山口の着任は、これ以降と考えられる。

16 『民藝 昭和19年11月号』（日本民藝協会 1944年11月）が、この事業の特集号となっている。とくに「花筵と技術保存（座談会）」は、山口泉、柳宗悦、式場隆三郎、芹沢銈介、濱田庄司、棟方志功など民藝協会関係者と、制作にあたった三宅松三郎が揃い、多角的な検証が行われている。

17 前掲 萩原茂「山口泉と民藝運動」pp.24-25

18 前掲 萩原茂「山口泉と民藝運動」pp.26-27

19 「備前焼ものがたり」（山陽新聞社 2012年11月）p.134

伝える『山陽民藝16号』(1951年9月)が、「伊部の備前焼は以前から多くの問題を含んでいて」「半工半農で生活が成り立って行くところから反省や打開にかけたままに進んでいるのである。しかし土建用品や土瓶等の量産をめざす業者もあり」と指摘することになったのであろう。

しかしながら、同文中「窯の築造、手法と製品との十分な探索。経営方針の提唱、技術の実技指導に浜田氏の全幅の発露」とまで書き及ぶほどに、備前焼の作り手側が何もしなかったわけではない。

三村陶景は、1913(大正2)年に備前焼の指導所といえる伊部陶器学校を開設し、そこには、指導者として、また学び手として多くの陶工が集った。そして陶景は、弟子筋となる初代小西陶古(1899-1954)との共同窯で人工的に棧切を出すことに成功する。棧切とは、本来は登窯の各部屋(房)を繋ぐ狭い開口部付近で、松割木(薪)の燃え残りや灰が器に干渉することで生まれるもので、無釉焼き締め備前にとっては、装飾的な景色となる。この棧切を人工的に生み出すために、窯の側面の焚口などから炭を投入する方法を、陶古と陶景が確立し、それが伊部の作り手に広まったという。

それから、現代に連なるほど射程大きく備前焼の土壌を整えたキーマンは、紛れもなく金重陶陽であろう。備前六姓と呼ばれる窯元の家に生まれた陶陽は、当初、当時の主流であった細工物を手がけるが、1916(大正5)年に備前の登窯にはじめて棚板を採用して、松割木の灰が自然釉となって器に降りかかり「胡麻」と呼ばれる景色の作品が大量に焼きあがる構造へと改良した²⁰。また陶陽は三村陶景、小西陶古とほぼ同時期、あるいは先立って人工的な棧切を生み出すことに成功していた²¹。そのためには、小型の窯を使用したという。つまり陶陽は、自ら窯の構造を探求し、多様な備前焼の焼けあがりの姿を実現していたのである。

また陶陽は、1942(昭和17)年、川喜多半泥子(1878-1963)の呼びかけで、美濃の荒川豊蔵(1894-1985)、萩の三輪休雪(10代休雪 1895-1981)と共に桃山茶湯の復興を目指す「からひね会」結成に加

わる。これを契機として、抹茶碗のみならず、茶湯に関わるいくつもの器形が、改めて備前焼のレパートリーに加わることとなる。

さらに陶陽は、藤原啓(1899-1983)、山本陶秀らの6作家と共に1949(昭和24)年に備前窯芸会を結成。1952(昭和27)年には日本工芸会設立の検討メンバーに加わり、1955(昭和30)年の同会結成に参加する。そして同会が主体となって制定する重要無形文化財保持者(人間国宝)にその翌年に認定される。やはり濱田庄司も、この時に重要無形文化財保持者となっているが、金重陶陽は、一地方作家の枠組みを超えた評価を1950年前後から得ていた存在なのである。

それから地元での支援も忘れてはならない。

1942(昭和17)年10月には、現在でも岡山県域で最も影響力のある山陽新聞の前身となる合同新聞社の社長橋本富三郎(1886-1955)が会長、正宗敦夫(1881-1958)が副会長となる「備前焼宣揚会」が作られ、数号とはいえ雑誌『備前焼』が刊行されている。橋本は、倉敷紡績(現在のクラボウ)へ入社し、倉敷中央病院事務長、倉敷絹織(現在のクレレ)工場長と大原孫三郎が経営する事業体の要職を務めており、この合同新聞社も大原が経営する中国民報と山陽新報が合同した新聞社であった。正宗は、現在の備前市出身で同地を拠点とした国文学者で、兄の白鳥(1879-1962)は文学評論家、弟の得三郎(1883-1962)も画家として著名である。この会長、副会長以外にも、岡山県知事、岡山市長、県域から選出の国会議員や民間の主要団体関係者が役員、理事、監事に名を連ね、まさに岡山県域を挙げて戦時下における備前焼を支えようとする体制が構築されていたわけである。そして雑誌『備前焼』の内容も、古備前研究から、同時代の作り手の紹介にわたり、また1942(昭和17)年12月には、東京帝室博物館学芸委員奥田誠一、美術研究所員田沢坦が来岡し、各窯元諸氏へ「備前焼の将来と希望」の講演を行ったこともわかる²²。そして注目されるのが、山口泉も、岡山県経済部長の肩書で顧問に名を連ねていることである²³。名誉職

20 黒田草臣『備前焼千年』(阿部出版株式会社 2025年3月) p.247

21 前掲 黒田草臣『備前焼千年』 p.219

22 「備前焼 第一巻三号」(備前焼宣揚会 1943年3月)

23 前掲「備前焼 第一巻三号」巻末

的な面もあるかと思うが、この組織を通じて、山口が備前焼関係者とどのような交友を持ち、そして民藝運動を知る立場からどのような意見交換を行っていたのか興味深い。

こう見てくれば、第二次世界大戦が終わり1950年代を迎えた頃の備前焼は、生産体制のありようこそ「山陽民藝」が語る通りであるが、一方で金重陶陽をはじめ、伊部を拠点とする備前焼の作り手たちがそれぞれ主体的な探求を行い、窯の改良や焼成方法のバリエーションを増やしていたわけである。そして戦中期からの、岡山県域挙げての支援体制は、弱体化したとはいえ、継続されていたと考えるべきであろう。

5. 柳とリーチ、魯山人とノグチ

こうした状況にあった備前焼の産地伊部に、濱田庄司、そして柳宗悦とバーナード・リーチが来訪したわけである。ただ濱田来訪の後、柳とリーチに先立って、大きな影響を残した来訪者があった。北大路魯山人(1883-1959)とイサム・ノグチ(1904-1988)である。

すでに戦前から魯山人は金重陶陽を幾度となく訪ねていたが、1952(昭和27)年5月に、ノグチの強い希望を受け、二人は1週間ほど陶陽宅に滞在し旺盛な制作を行う。その際、魯山人は、針金などで土を板状にスライスする「たたら作り」の技法で各種の食器を作り、ノグチは「型」も用いてのユニークなオブジェを制作した²⁴。

この滞在制作を、その後の備前焼の隆盛を担う陶陽の弟・素山(1909-1995)、山本陶秀、藤原啓、その甥の藤原建(1924-1977)、中村六郎(1914-2004)、二代藤田龍峰(1913-1973)、各見政峯(1921-2017)などが目の当たりにしたこともあって²⁵、以後、備前焼のパラダムに、茶湯由来以外の食器、そしてオブジェが加わることとなる。

この魯山人とノグチの来訪を間に挟んで、濱田、そして柳とリーチの来訪があるがゆえ、とくに、柳とリーチに関わる備前焼の作り手の反応は、魯山人とノグチとの比較が織りまぜられることとな

る。改めて『山陽民藝22号』(1953年8月)から、1953(昭和28)年5月の柳とリーチの備前訪問を見ておこう。

「リーチ・柳・濱田三氏岡山県訪問日記(承前)」では、夕刊に次のように出ているとして、「リーチ、柳氏等は現代備前焼陶工や作品などにはほとんど関心を向けず窯元の店頭にある雑器ばかりを観賞、五十円のスリ鉢や焼き物屋の主婦が、これは焼けが悪いからという花器を買ったり、従来の備前焼愛好家が軽視するような物ばかりに興味を向け、地元側を戸惑いさせた。」と、民藝運動の側からすると、さもありなんというリーチと柳の行動をまづ伝えている。

備前焼は、一回の窯焚きに際して、千点を超える品を焼成する。その中で、いかに胡麻や棧切、緋襷、牡丹餅、そして部分的に朱赤に発色する窯変など希少な焼けの品を生み出すかが作り手の苦心である。逆に、ただ焼締まって土味だけを見せる品は「焼けが悪い」と見なされる。そうした品をいかに減らすのかが、同時代の作り手、さらには現代に至るまでの課題なのだが、そのような価値観をもつ伊部の者からすれば、柳やリーチの価値観はまるで異なるものと受け止められざるを得ない。一方、民藝運動を推進する柳やリーチの側からすれば、日常の普段使いに耐える、廉価な品を評価するわけであるから、希少な焼けの品には目もくれず、こうした行動に出るわけであろう。はからずも、この一文は民藝運動の目指すものと、戦後の復興に向かう備前焼の作り手たちの価値観が、まるで異なる方向を向いていたことを如実に伝えることとなる。

さらにこの訪問を伝える記事には、柳とリーチに対する各作り手の意見も紹介されるが、そこでちょうど1年前の滞在制作で、大きなインパクトを残した魯山人とノグチも引き合いに出されることとなる。

まず金重陶陽だが「イサム・野口の備前焼や魯山人のものをテンデ問題にしない口ぶりだったが、魯山人にいわすとリーチは情熱的でないとか、美

24 『イサム・ノグチと北大路魯山人』展図録(セゾン美術館他 1996年3月)には、この滞在時に制作された作品が多数紹介されている。また『日本美術館』(小学館 1997年11月)掲載の拙稿「イサム・ノグチと日本」pp.96-97も参照。

25 金重陶陽は、魯山人が北鎌倉の自邸に備前焼の窯を構える協力をし、その窯詰め、窯焚きは藤原建があたっている。こうした継続的な関係の中で、特に備前焼の食器の多様性が高められることとなる。

に打ち込んでいないとか批評している。リーチ氏は日本でも今日の民藝を見てこなしているがそれ以上を出ていない感じがする。」と手厳しい。さらに山本陶秀は「リーチ氏は土の話をまるで出さなかった。リーチ氏にはよくいわれなかったがイサム・野口は備前の土が判る点えらいと思った。」とする。石井不老(1899-1964)は「リーチの作品は画と焼物が一緒になっており、画があつて焼物の真価が判りにくい。画のない焼物を作った場合どうなるか」と逆にリーチの仕事について批評的/批判的な言を残している。

そしてこの記事の終わりに、濱田の来訪を思い起こしての、すでに紹介したこうした記述がある。「浜田氏は一行中に居られなかったが、二年前にここを来訪され、一夜土地の人々と懇談されて、言々句々非常な感銘を與えられた。今日は時がたりなくてはなはだ残念であつた。」

では、濱田と備前との出会いの意義について、あらためて倉敷民藝館に残された7点の備前焼を通じて考えてみたい。

6. 濱田庄司作備前焼の意義

倉敷民藝館所蔵の濱田庄司の手になる備前焼について見ていくが、最初に、現時点では明らかにし得なかった課題があることを率直に述べておく。それは、どこで、どのように成形から焼成の作業が成されたのか、そしてそれゆえに同時に想定されるのは、数量は倉敷民藝館に残る7点だけなのか、ということである。

これまで見てきたように濱田が備前焼の中心地である伊部での制作をしていないとすると、想定される可能性は、以下の二者択一となる。

[工程1] 濱田が備前土を持ち帰り、益子で成形の後、備前の誰かに送付して焼成された。

[工程2] 益子で成形から焼成まで行った。

備前焼は本来、1週間以上の長い時間をかけて1度の窯炊きで焼き締める、いわゆる無釉焼き締め陶器である。つまり成形した粘土の形を素焼で固定したうえで施釉してもう一度焼くというプロセスはとらない。そうした焼成手順、そして土の成分からも、焼成前後の収縮率も、自ずと濱田が日ごろ親しんだ益子の土とも異なる。それから、備前焼以外の構造の窯でも1200℃程まで焼成温度

が上がりれば、備前の窯と同等の焼き上がりとはなるが、それでも燃料となる薪の消費量などの生産コストを考えても、さらには窯内の火の流れをコントロールすることを考えても、相応の数の品を窯に詰めることとなる。仮に[工程1]ならば、誰か備前焼の作り手の窯炊きの際に一緒に焼成するであろうから、濱田作品の数が少なくとも問題ない。ただ、その場合、成形だけは終えた柔らかい粘土のままの状態のものを、益子から伊部まで送るのは困難であろう。

また濱田庄司から現在は孫の濱田友緒氏に引き継がれている益子の濱田窯には、庄司による備前焼が残されており、また庄司の息子で友緒の父である濱田晋作より、庄司が備前焼を試みながらうまくいかなかったと伝え聞いたことを友緒氏よりご教示いただいた。また濱田窯には、倉敷民藝館所蔵の(1)「鉢」と同型で同じ菊花の押紋が施された濱田庄司作の施釉陶器が現存する。このことを考え合わせて、やはり[工程2]となる、益子の濱田窯での焼成の可能性が極めて高いであろう。

その場合、いずれも益子の濱田窯に現存する1943(昭和18)年築窯の大型の登り窯、そして1954(昭和29)年に塩釉作品を本格的に試みるために築窯された窯(以下、塩釉窯)とも、いずれも基本的には作品は置かず薪をくべるために最手前に設けられた部屋(以下、大口)に十分な容積があり、やはり友緒氏によれば大口では薪の灰はかなり積もるが、器に付着して、備前におけるサン切りや胡麻、あるいは灰かぶりのようなことは起こらないという。濱田庄司生誕120年を記念して、その息子晋作の連続インタビューが雑誌『民藝』に掲載されているが、「濱田庄司と益子のこと」インタビュー③『民藝741』(日本民藝協会 2014年9月)において、塩釉の窯の大口を大きめに作り、そこで「信楽や備前のように、ガサガサに作る、そういう手法でね、大口をやってみよう」と庄司が試みたことを語っている。

倉敷民藝館所蔵の備前焼の制作年が1951(昭和26)年だとすると、大型の登り窯での焼成となるが、仮にこの制作年が異なっている場合は、晋作が伝えるように、塩釉窯での焼成の可能性も生まれるわけである。

ただ一方で、濱田なりの見本としてその備前焼

が伊部の作家に示されたならば、伊部周辺に濱田の手になる備前焼が残るだろうが、これまでそうした作例は確認出来ない。まだどこかに濱田の手になる備前焼が眠っているのだろうか。いずれにせよ制作過程を検討するこれ以上の資料もなく、陶芸制作に関わる専門的な知見がない筆者には手に余る課題であるため、極めて「工程2」の可能性の方が高いと想定しつつ、どこで、どのように、どのくらい制作されたのかという課題は今後の調査を継続したい。ただ、その時に、1951（昭和26）年の備前焼制作に先立つ1950（昭和25）年に、濱田庄司と島岡達三による縄文土器の復元があったことは極めて興味深い。

改めて、倉敷民藝館が所蔵する濱田庄司作の備前焼を見ておきたい。

(1)「鉢」、(2)「鉢」、(3)「角鉢」、(4)「角鉢」、(5)「碗」、(6)「碗」、(7)「土瓶」の7点のうち、(3)「角鉢」、(4)「角鉢」、(7)「土瓶」の3点については、その器形を見れば、台帳へ記載されたデータを参照せずとも、濱田庄司作品である可能性が極めて高いと想定できる。それほど《掛分文打指描土瓶》(1940年作 個人蔵)【図8】や《黒釉抜絵丸文青差大角鉢》(1942-43年作 大原美術館蔵)【図9】のような既知の濱田作品と相似形であり、サイズもあまり変わらない。また(5)「碗」も、濱田が抹茶碗として制作したものに良く形状が似ており、なによりその高台の削りが、濱田の特徴を示しているであろう。なにより(1)「鉢」と同形同模様の作が濱田窯に現存しているわけである。

注目すべきは、7点中の6点に施された押印による凹紋様である。とくに(3)「角鉢」、(4)「角鉢」、(5)「碗」など複数の作品で試みられた矢型の連なる押印による凹紋様は、一度に3個から6個の矢型が、おそらく木製のハンコ状の道具によってつけられたものであろう。そして、作品台帳では「矢」として記されたこの連続紋様は、前出の中島岳志『縄文 革命とナショナリズム』の一章「濱田庄司の縄文土器づくり」が取り上げた濱田と島岡による縄文土器再現からの影響を考えるべきであろう。

その土器再現事業の詳細な経緯は同書に委ねるが、教育見本として縄文と弥生の土器再現を依頼

された濱田は、考古学者となっていた芹沢銈介の長男長介（1919-2006）を導き手とするように明治大学や東京大学の研究者からの学術的な支援を受けながら同事業に取り組む。その際、原形制作を濱田が担い、土造りや型抜きによる量産を島岡が担当、そして組紐師であった島岡の父米吉が縄目模様を付けるための撚紐を手掛けた。この過程で、濱田は考古学者たちからの教示で、焼成温度は700-800℃と見据え、そのための小型の窯を新たに設けた。また撚紐による縄文のみならず、木片の角や篋での紋様作りに取り組むなど、細やかな対応を行っていく。よく知られるように、この経験を「縄文象嵌」としてその後の制作に大きく活かしたのが島岡達三である。一方で、濱田にとっても、この経験は自身の作陶にも相応の成果として取り入れられたようである。すでに濱田は、篋による削り紋様を手掛けていたが、この土器再現事業に関わり、後には東京民芸協会が刊行する『民芸手帖』編集長を務めることとなる白崎俊次は、「この土器の復元のために研究されたことが、浜田先生の作品に用いられ、その年の三越の展覧会にも出品され、浜田作品に縄文時代が生まれたのであった。」と述べている²⁶。

この言葉からしても、縄文土器再現事業で得た知見を濱田が継続的に探究したことがうかがえ、その直後に制作された倉敷民藝館所蔵の備前焼をその実践の一つと見ることができるだろう。

その時に、「浜田作品に縄文時代が生まれた」と語られた1950（昭和25）年の三越での出品作が気になるが、この詳細も把握には至らなかった。ただ、大原美術館には同年作とされる《塩釉櫛目文藍差角皿》【図10】（同作裏面【図11】）が所蔵されている。

濱田の塩釉作品については、佐々風太「濱田庄司の塩釉に対する柳宗悦の解釈－「他力」と無施釉をめぐる」²⁷という優れた論稿がある。佐々によれば、濱田が本格的に塩釉に取り組むのは、1952（昭和27）年5月から翌年にかけて柳らと欧米各地を巡った後の1954（昭和29）年に益子に塩釉専用の窯を築いてからとされる。そのため、《塩釉櫛目文藍差角皿》をそれに遡る1950（昭和25）年の制作と

26 白崎俊次「土器を作った浜田先生」『民芸手帖 118号』1978年3月）

27 佐々風太「濱田庄司の塩釉に対する柳宗悦の解釈－「他力」と無施釉をめぐる」『芸術学論集2023年4巻』芸術学研究会 2023年12月）

するのは検討が必要であるが²⁸、この作品の制作年が、そこから大きく離れることはないと考えたうえで同作を見ておきたい。

《塩釉櫛目文藍差角皿》は、ここに示した図版を比較するだけでも、備前焼(3)「角鉢」とほぼ同形であることは明らかだ。サイズも、縦横の最大幅がいずれも30cmほどで、両作の誤差は1cmもない。ただ、【図12】として、(3)「角鉢」の裏面写真も紹介しておくが、高台のサイズや形状はいささか異なるものである。型の形状が反映される高台部分は、備前焼の方が全体に小さい。もし同じ型を使っていたとしたら、合理的な現象である。さらに大原美術館には、1936年から1963年にかけて制作された同形の角皿7点が所蔵されるが、長辺の差も備前焼(3)「角鉢」から最大3cm程であり、制作時期が近いものほど、《塩釉櫛目文藍差角皿》と同じようなサイズである。

さらに《塩釉櫛目文藍差角皿》を見てゆこう。まず表面には、シンプルな櫛目文での装飾が施されている。また高台下へ付着防止のために貝殻が使用されている。濱田が櫛目文を使った作例は、それに遡って確認出来るし、貝殻の使用例は、古くから他の窯業地や作家にも見受けられる手法ではある。ただこの作品が1950(昭和25)年作だとすれば、縄文土器でも不要な紋様を消すために貝殻を使うことを知った濱田が、おそらくはまだ取り組み始めたばかりの塩釉作品に使用した例として興味深い。また焼成の途中で窯へ塩を投げ込む塩釉作品は、窯のケアや他作品への影響から小型の窯で焼成を行うことが多いが、この小型の窯という点でも、同年の土器再現用に制作された小型窯との関係も考えてみたいところである。なにより確実なことは、塩釉という無施釉の状態で焼成を始め、仕上がりの段階で塩を投げ込む制作方法は、備前

焼や丹波焼のような無釉焼き締め陶器における、松割木の灰が自然と降りかかる灰被りと同じイメージでとらえられることである。この点は、前出の佐々の論稿も濱田の塩釉と丹波の灰被りの関係を丁寧に検討しているが、濱田庄司の手になる7点の備前焼は、そうした考察にとっても有用な検討対象となろう²⁹。

このように見てくると、濱田の手になる備前焼は、同時代の備前焼作家が目指した焼成による各種の装飾(景色)の創出ではなく、シンプルな形象の連続だけで加飾するアイデアという点で、縄文土器再現からの影響を表すものであろう。また土器再現による小型窯と、塩釉作品のための小型窯の関係も含めて、小型窯というハードと、その焼成ノウハウの継続的な活用という課題を検討してゆくためにも、7点の備前焼は、濱田が縄文と弥生土器、備前焼、塩釉と無釉焼き締め陶器に連続的に取り組む流れを担う意義があるだろう。

7. 終わりに—備前焼へのインパクト

これまで濱田庄司作とされる備前焼を伊部周辺などで確認することは出来ていない。また倉敷民藝館が所蔵する7点に見られる、押紋によって装飾をする試みが、その後の備前焼作家に広まった形跡も薄い。「型」や「たたら作り」をベースとした成形も、濱田ではなく、魯山人の手法が後に影響を及ぼしたと見るべきであろう。

そもそも倉敷民藝館への寄贈の経緯も明らかでないように、この備前焼の制作や濱田の伊部訪問自体がこれまで検討されることもなかった。おそらく濱田による実作が備前焼の作り手たちに示されることもなかったのではないだろうか。

本稿では、民藝運動が産地の活性化を目指す活動を展開し、とくに岡山県域では、倉敷民藝館を

28 大原美術館に残る台帳では、《塩釉櫛目文藍差角皿》は大原總一郎より寄贈とある以前の来歴は追えない。大原總一郎が、その個人所有品を大原美術館の蔵品として、濱田たちの展示室を設けたのが1961(昭和36)年ゆえ、台帳記載のデータも濱田が確認していると想定されるが実態は明らかではない。また本作には共箱があるが、制作年を示す墨書きや購入先などを示す付属物もない。《塩釉櫛目文藍差角皿》の裏面には「日本工芸会」と読み取れる活字印刷されたシールが貼られている【図11】。1950(昭和25)年の制作なら、日本工芸会の発足検討会の前となる。日本工芸会の展覧会が長らく三越で開催されていることを考え合わせると、1950(昭和25)年にこのシールが貼られることとなる展覧会が同所で開催された可能性もあろうが、制作年そのものを日本工芸会創設以降と考えるか、あるいは制作は1950(昭和25)年ながら、時間をおいて1955(昭和30)年の日本工芸会発足以降の展覧会へと出品された可能性も残る。また同作品の台帳の展覧会出品履歴には、当初の記述に追加されて「浜田庄司新作陶展(東京)1957」の記載があり、それに従うなら、濱田が本格的に塩釉に取り組んだ以降の制作年とすべきであろう。

29 前掲の佐々風太「濱田庄司の塩釉に対する柳宗悦の解釈—「他力」と無施釉をめぐって」では、濱田が1953(昭和28)年の渡欧以降に塩釉に本格的に取り組んだ、その同じ時期に柳宗悦が丹波焼への注目を高めたこととあわせて、濱田による塩釉への取り組みを解釈する興味深い議論がなされている。同じ無釉焼き締めの丹波焼への柳の関心に対応するように、濱田が塩釉と備前焼に取り組んでいたことは今後さらに検討したい。

拠点に、同館館長の外村吉之介が積極的に基礎的な調査をベースにした活動を展開し、そして濱田や芹沢もが産地の活性化に尽力したことを見てきた。そうした岡山県域での状況に関わり、山口泉の存在にも注視した。

そして濱田庄司作の備前焼は、濱田という作り手個人にとっては、縄文と弥生の土器再現事業からの継続を見ることの出来る実例と位置付けることが出来るであろう。その土器再現事業は、弟子の島岡達三のような顕著な表れこそないが、シンプルな凹紋の採用のみならず、塩釉作品への取り組みなど、その後の濱田の作域を広げるものであり、その中途を考えるためにも7点の備前焼が存在する意義はある。

一方で、やはり、イサム・ノグチと北大路魯山人が備前焼に成した貢献に比して、濱田庄司の貢献はほとんどなかったというべきだろう。本稿が取り上げた、濱田の伊部訪問や、濱田が備前焼の実作まで行ったことに、これまで注視されることがなかったこと自体が、そのひとつの証左ともなろう。そして伊部周辺で濱田の備前焼が確認されることもなく、そして彼が試みた、シンプルな押紋による加飾だけで、ただ焼けてしまっただけの備前焼を生かすような取り組みが、備前の作り手の側にまるで痕跡を残していないことも³⁰、である。

このことを確認する時、「時がたりなくてはなはだ残念であった。」の言葉が強い実感を伴ってくる。せめて、濱田が、ノグチや魯山人と同等の日数を伊部に過ごし、同じように備前焼の作り手とコミュニケーションを取ることがあれば、すこし状況も変わったろう。柳とリーチが、数時間の滞在で、焼けの悪い備前焼を購入し、また作り手たちともけして有意義な交流とはならなかったのは、民藝運動の求める価値観と、当時の、そして現在に至るまでの備前焼の作り手の価値観が真反対を向くようなすれ違いをしていたからだった。そうした価値観のすり合わせ、あるいは濱田のもつ陶工としてのスキルを備前に生かすためにも、濱田ならば相応の結果を出せたと考えられるだけに、やはり時が足りなかったのは、残念なことである。

追記

本稿を成すにあたり公益財団法人鹿島美術財団による「美術に関する調査研究助成」の支援をいただきました。また、濱田友緒氏には濱田庄司の制作に関わり極めて有益なご助言を賜りました。そして伊勢崎紳氏には備前焼に関わる多岐にわたる助言をいただきました。記して謝意を表します。

30 焼成による加飾とは別に、備前焼には、古くからへら目により器台に凹凸を付ける技法もある。それゆえ、濱田の備前焼が同地の作家へ示されたとしても、大きな影響にはならなかったのではないか。



【図1】 (1) 「鉢」



【図5】 (5) 「碗」



【図2】 (2) 「鉢」



【図6】 (6) 「碗」



【図4】 (4) 「角鉢」



【図7】 (7) 「土瓶」



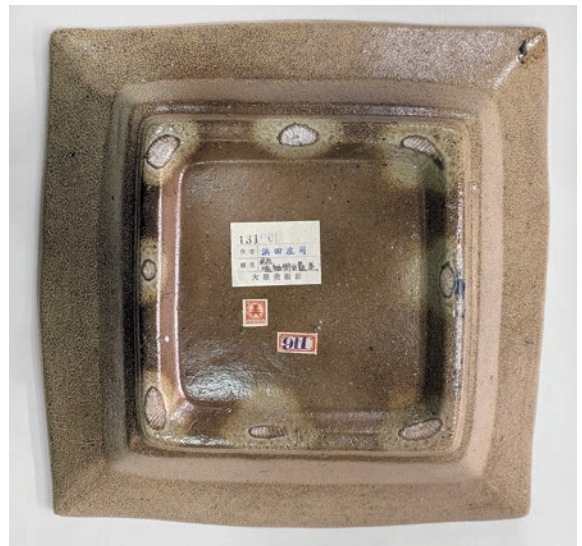
【図3】(3)「角鉢」



【図12】(3)「角鉢」裏



【図10】《塩釉櫛目文藍差角皿》1950年作 大原美術館蔵



【図11】《塩釉櫛目文藍差角皿》裏



【図8】《掛分文打指描土瓶》1940年作 個人蔵



【図9】《黒釉抜絵丸文青差大角鉢》1942-43年作 大原美術館蔵

図版出典

図1～7、11、12 倉敷民藝館提供

図8 「人間国宝 濱田庄司」図録（2008年 川崎市民ミュージアム他）

図9 「生誕100年・益子と出あって75年 濱田庄司人と作品展」図録（1995年 陶芸メッセ益子）

児島虎次郎日記 1920年(大正9年)

Kojima Torajiro's Diary for 1920 (Taisho 9)

吉川あゆみ(公益財団法人大原芸術財団特命上席研究員)

YOSHIKAWA Ayumi (Senior Curator, Ohara Art Foundation)

要旨

明治末から昭和初頭、即ち、1900年代の終わりと1920年代にかけて活躍した洋画家児島虎次郎(1881-1929)は、フランスの国民美術協会展を主な発表の舞台とし、評価を得た人物である。同時に児島は、実業家・社会事業家である大原孫三郎(1880-1943)の賛同と出資により、ヨーロッパ近代絵画やオリент古美術を収集し、日本に招来したことで知られる。「日本の芸術界のために」という公益を目的に掲げて収集された美術品は、日本に到着して間もなく一般公開され、1930年の大原美術館開館以降は同館で常設展示されることとなる。児島は画家としての業績とともに、日本におけるヨーロッパ近代およびオリент美術の受容という点でも重要な業績を残したのであった。

本稿は、児島虎次郎の日記を翻刻・紹介するものである。本誌前号では、児島の第二次滞欧初年となる1919年の日記を取り上げたが、今号ではこれに続く1920年の日記を取り上げる。スペインやベルギーへの制作旅行、サロンへの出品準備、新たな大作への挑戦など、精力的な制作活動の傍ら、来仏した日本人の世話や、エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャンとの間で持ち上がった現代日本絵画展構想への対応、そして、後の大原コレクションの収集活動と、制作以外でも多忙な児島の滞欧生活が続けられている。

児島の日記は、そこに記された情報自体の重要性はもちろん、今後、児島に関連する諸資料が持つ情報をつなげ、編み上げていくにあたって、核としての役割が期待されるという点でも、重要性の高い資料である。しかし、極めて難読な資料でもあり、現時点の翻刻は残念ながら十分な精度に達しているとはいえない。児島日記の解読には多くの情報を参照することが必要である。現時点での成果を公開することが新たな情報につながる契機となることを期待するものである。

The *yoga* (Western-style painting) artist Kojima Torajiro (1881-1929), who was active from the end of the Meiji era to the beginning of the Showa era, i.e., from the end of the 1900s to the 1920s, presented his works mainly at the Salon de la Société Nationale des Beaux-Arts in France and earned a reputation there. At the same time, having received approval and funds from the businessman and entrepreneur Ohara Magosaburo (1880-1943), he collected modern European paintings and Middle Eastern antiquities, and brought them back to Japan. These artworks collected in the interests of the public, “for the Japanese art world,” were put on public view soon after they arrived in Japan. Once the Ohara Museum of Art was opened in 1930, they were put on permanent view there. Together with his achievements as a painter, Kojima's accomplishments from the point of view of the reception of modern European art and Middle Eastern art in Japan were significant too.

This article is a transcription and introduction of Kojima Torajiro's diary. In the previous issue of this Bulletin, the diary Kojima wrote in 1919, the first year of his second stay in Europe, was introduced. In this issue, the diary he wrote the following year, in 1920, is introduced. It describes his travels and work in Spain and Belgium, preparation to submit works to the Salon, attempts at creating new large works, etc. While working hard to produce his own art, he was also kept busy looking after Japanese visitors to France, working on a plan drawn up together with Edmond-François Aman-Jean to organize an exhibition of contemporary Japanese paintings, and gathering works for the Ohara collection.

Needless to say, the information written in Kojima's diary is important. Furthermore, in order to hereafter connect and compile the various pieces of information in the diverse reference materials related to Kojima, his diary is expected to play a pivotal role as a principal document. Nevertheless, this diary is extremely difficult to decipher, and, at present, the transcription is unfortunately not yet fully accurate. The deciphering of Kojima's diary requires cross-references to a vast amount of information. By publicizing our findings to date, we hope that it might lead to new information.

本稿は、前稿¹に引き続き、大原美術館の礎となる美術品の収集にあたった洋画家児島虎次郎(1881-1929)の日記(個人蔵。以下、「児島日記」とする。)を翻刻し紹介するものである。大原美術館は、児島が没した翌年の1930(昭和5)年、彼の業績を記念する美術館として設立された。大原美術館にとって児島虎次郎は、創立者大原孫三郎(1880-1943)と並ぶ生みの親であり、その足あとを物語る日記の翻刻は長年の課題でもある。この課題に対する取り組みの現時点での成果を、本誌を通じて順次紹介していくこととし、²その手始めとなった前稿では、児島の第二次滞欧の初年である1919(大正8)年の日記を取り上げた。本稿ではそれに続く1920(大正9)年の日記を取り上げる。³

なお、児島日記を含む児島虎次郎関係資料の概要、および児島日記研究の現状と課題については、前稿⁴をご参照頂きたい。

1920年の児島虎次郎

1920年の児島日記は、表紙に「Agenda 1920」、扉に「AGENDA DE BUREAU POUR 1920」と印字されたフランス版の卓上予定帳(縦22.3×横14.0×厚さ1.7cm、総ページ数248)を用いて記されている。ただし、児島は前年の12月中旬からスペイン旅行に出かけ、旅先で年を越したため、1920年の1月1日から21日までの日記⁵には、引き続き前年の日記帳が用いられている。

児島は1920年の幕開けをスペインで迎えた。1月の日記には、グラナダで過ごした半月間を中心に、朝に夕にと精力的にスケッチに取り組む児島の様子とともに、旅の充実感が記されている。ひと月半にわたるスペイン旅行を終え、1月下旬にパリに戻ると、児島は早速グラナダでの取材をもとにタブロー制作に取り組んだ。この制作と並行して、4月開催の国民美術協会展に向けて、日本から持参した出品予定作の修正が進められていった。

季節が春を迎えると、児島は春景色を求めてパリ郊外にたびたび写生に出かけた。夏には、延び延びとなっていたベルギー旅行がようやく実現する。ブリュージュとアントワープで過ごしたこのひと月半の成果は、夏の終わりから秋にかけて、パリのアトリエでそれぞれ100号の大作にまとめられることとなる。⁶第一次滞欧時の約2年間をベルギーで

過ごした児島にとって、この旅のもうひとつの成果は、恩師や旧友たちとの再会であった。第一次世界大戦を経験した彼らにとって、それは言葉に尽せぬ重みをもった再会だったことだろう。

詳細な時期は明らかでないが、児島は遅くとも前年の秋頃までに、大原に対してフランス絵画をはじめとする美術品の収集を提案していたと考えられる。⁷ベルギー滞在中も終わりに近づいた8月の半ば、大原がようやくこの提案を受け容れたという知らせが児島のもとに届く。美術品の収集という大仕事⁸が加わることによって、パリに戻ってから児島の毎日は以前に増して多忙になった。それでも児島は制作の手を緩めず、むしろより精力的にカンヴァスに向かった。残された滞在期間の中で、できるだけのことを成し遂げようという児島の気概が感じられよう。

10月に入ると、児島は本格的に美術品収集に動き出す。画廊やオークションハウス、そしてアーティストたちのもとへ何度も足を運び、フランス現代絵画を買い集めていった。作品の同定が難しいものの、オリエントの陶器類も一定数購入していることが確認できる。これらの美術品が収集され、日本に招来されたことの意義は言うまでもないが、これらの収集が児島個人にもたらした意義にも注目しておきたい。様々な画家に直接会い、その作品とともに制作現場—アトリエ—や暮らしの様子を目にした経験は、画家児島の自己形成にとって少なからぬ意義を持つものであったに違いない。児島は、ジョルジュ・デヴァリエール(Georges Desvallières, 1861-1950)を訪ねた際のことを、「Devallier訪問記」と題して特別に紙数を割いて記している。その美しい文体からは、デヴァリエール訪問が児島の心を震わせる体験であったことを感じ取ることができる。

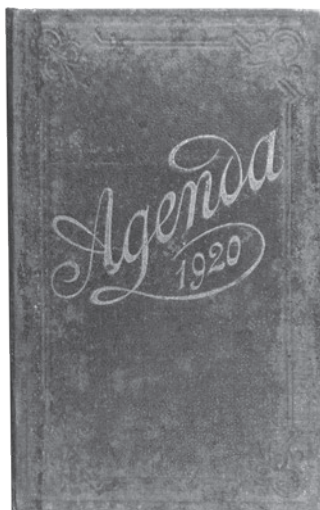
制作、収集、人付き合い、帰国に向けた荷造りや手続きと、多忙で濃密な毎日を過ごす中、1920年は終わりへと近づいていった。12月27日、児島はパリをあとにし、マルセイユ港で船の入港を待ちながら新年を迎えた。1921年1月2日、児島と収集作品を乗せた三島丸は日本に向けてマルセイユ港を出発することとなる。

日記帳の限られた記入スペース内の記述ではあるが、1920年の日記に記された事柄は実に多岐多

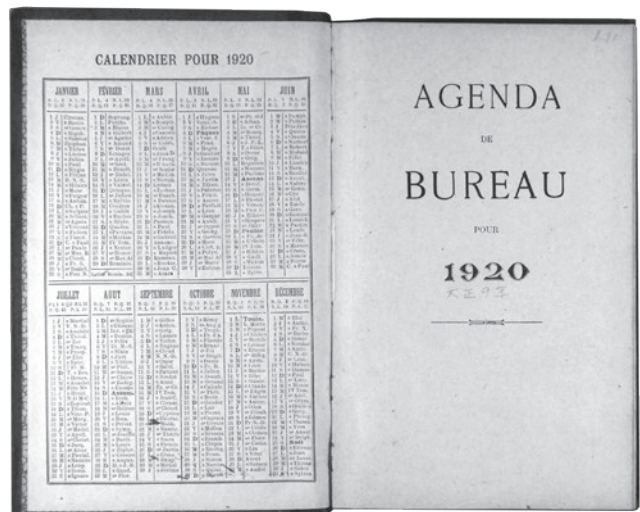
様である。訪れた場所、登場する人物の人数も他の年に比べて格段に多いように感じられる。1920

年という年は、児島にとって非常に動的な一年であつたということであろう。

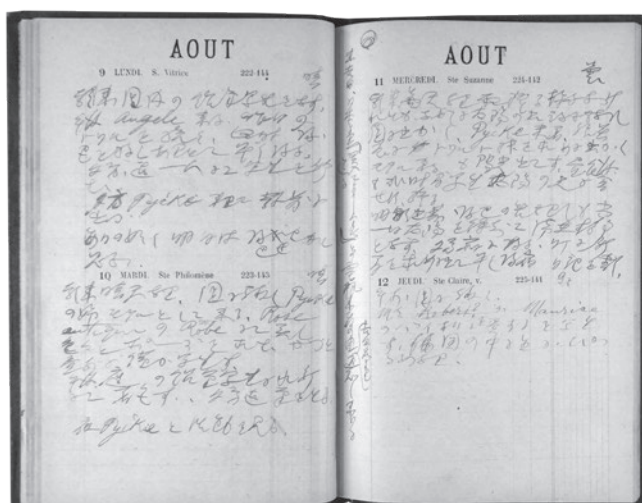
- 1 吉川あゆみ「資料紹介 児島虎次郎日記1919年（大正8年）」『大原芸術研究所紀要』第1号、公益財団法人大原芸術財団、pp.(57)-(169)
- 2 児島は、1919年6月27日にイギリスのサウサンプトンに着港後、7月1日にル・アーヴルよりフランス入りし、およそ1年半後の1921年1月2日にマルセイユを出港し帰国の途についた。児島の第二次滞欧は以上の期間に相当し、主な滞在地はパリである。なお、第一次滞欧は1908年3月より1912年10月まで、主な滞在地はフランスのパリおよびグレ＝シュル＝ロワン、ベルギーのゲント、第三次滞欧は1922年6月より1923年3月まで、主な滞在地はパリである。
- 3 児島日記は、1908年から1928年まで（ただし、1911年、1917年を除く。）のものが確認されている。本来なら年を追って順に紹介すべきではあるが、第二次滞欧期の児島の動向を明らかにすることは大原コレクションの形成過程を知る上で重要であり、そのため、この時期の児島日記を先に取り上げることとした。
- 4 前掲書（注1）、pp.(58)-(60)
- 5 児島は、1919年12月11日にパリを出発してスペインに向かった。フランスに再入国したのは1920年1月25日、パリに帰着したのは同月27日であつた。1920年1月1日から21日の日記は前年の日記帳の補遺欄に記され、22日以降の日記は1920年の日記帳に記されている。フランス再入国あるいはパリ帰着の日と、1920年の日記帳の使用開始の日が一致しないが、これは児島が数日分を振り返って日記を記したためと考えられる。同様に、後日、数日ないし数週間分を振り返って日記を書いた形跡が、児島日記においてはしばしば確認される。
- 6 前掲注2参照
- 7 児島直平『児島虎次郎略伝』児島虎次郎伝記編集室、1967年、p.118
1919年12月5日発信の児島発三橋玉見宛書簡が引用されており、その中で大原孫三郎に対して現代フランス絵画の収集を提案していることが述べられている。
- 8 正しくは「Desvallières」



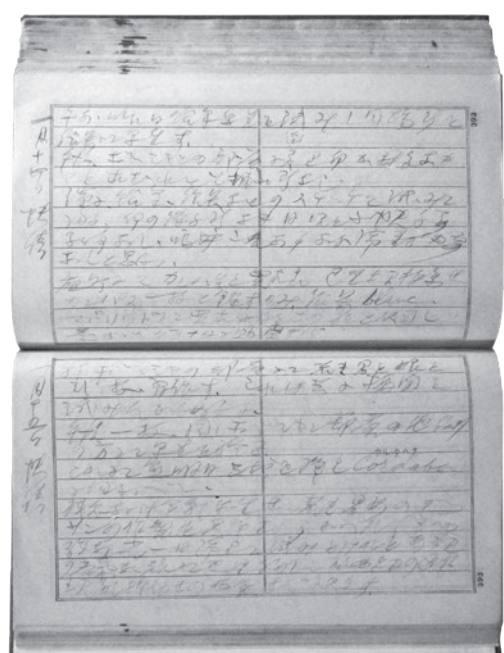
児島虎次郎日記 1920年 表紙



同 扉



同 8月9、10、11、12日欄



1月14、15日欄（児島虎次郎日記 1919年 巻末補遺欄）

挿図は全て公益財団法人大原芸術財団撮影

【凡例】

1. 収録内容について

- 本稿は、児島虎次郎の日記のうち1920（大正9）年の日記（個人蔵）を翻刻収録したものである。
- 児島が日記に使用した1920年版卓上予定帳（以下、「1920年日記帳」とする。）には、1920年分の日記以外に、12月備忘欄に1921（大正10）年1月1日の日記、出納記録欄に1920年1月22日から12月末までの出納記録が記されているが、本稿ではこれを対象としない。
- 1920年1月1日から21日までの日記は、1919（大正8）年の日記帳（以下、「1919年日記帳」とする。）の補遺欄に記されたものである。

2. 記入欄について

- 1920年日記帳は、1ページに2日分の記入欄が設定され、日付・曜日などの他に出納記録を想定した縦横の罫線が印刷されている。本稿では、印刷された日付の下のスペースを「本文欄」と呼ぶこととし、それ以外のスペースは「欄外右上」「欄外左側」のように、本文欄との位置関係で表した。これらの記入スペースを「【本文欄】」のように【 】内に示し、これに続けて当該スペースに記された本文を掲載した。
- 1920年1月1日から21日までの日記は、本来縦書き用の1919年日記帳を反時計回りに90度転倒させた上で横書きで記されている。本稿では、枠で囲われた罫線内を「本文欄」と呼ぶこととし、それ以外の記入スペースは横書き状態を正位置とした本文欄との位置関係で示した。
- 原文が欄をまたいで記入されている場合は、「【欄外上側・本文欄】」のように、記入されている欄を「・」でつないで示した。また、異なる欄に文が続く場合は、「【本文欄～欄外右側】」のように、「～」を用いて記入順を示した。
- 空欄となっている日については、日付・曜日のあとに「（記入なし）」と記した。

3. 書式等について

- 1920年の日記は基本的に横書きで記されており、本稿は原文に準じて横書きのレイアウトとした。例外的に縦書きで記されている箇所については、その旨を【 】内または脚注に示した。
- 改行は原則として原文に従った。本誌誌面の都合上、原文にない改行が生じた場合は、その箇所を「↵」で示した。
- 原文において、内容を区切る意図や空白を残す意図をもって行間や文字間を空けていることが明らかな場合は、これを反映した。

- 原文において、明らかに内容の区切りにあたるが、間を空けることなく文字が続けられている場合は、句読点の有無に関わらず、原文と同様文字間や行間を空けていない。これによって誤解が生じると判断した箇所については、5の③のとおり補足情報を付した。
- 原文の字下げは一部の例外を除き原則的に反映していない。

4. 文字および文字列について

- 文字および文字列については、引き続き翻刻の精査を進めることを前提に、その便を考慮して次のように扱った。
 - ①漢字の旧字、異体字等は、可能な限り原文のとおりに掲載し、新字体への置き換えは行わないこととした。ただし、文字コードの制約等によりパソコンでの使用が難しい文字は、同意の近似する文字で代替した。
 - ②変体仮名は現代仮名に置き換えた。
 - ③判読できなかった文字は□で示した。
 - ④児島本人によって、取り消しや訂正が加えられた文字は、「~~赤青~~」のように二重取り消し線で示した。ただし、重ね書きによる訂正を除く。
 - ⑤挿入線などを用いて追加された文字は、指示された箇所を追加した。
 - ⑥児島以外の筆跡による書き込みは本文として扱わず、注にその内容を示した。

5. 翻刻者による補足情報について

- 読みやすさを考慮し、次のとおり情報を補った。
 - ①明らかな誤字については、適宜（ ）内に正しい文字を示した。
 - ②明らかな誤字であるが、正しい文字を補わない場合は、「ママ」を付した。
 - ③本文で示された名称等がわかりづらいものについては、今日一般的に用いられる名称・呼称などを適宜〔 〕内に示した。ただし、同日内に繰り返し登場する名称については、初出のみにこれを示した。
 - ④翻刻に疑いの残る文字については、「？」を付した。
- 外国語のカナ表記の誤りや揺れは、言語による発音の違い、時代による一般的外来語表記や呼称の違い、また、児島による外国語の文法・つづり・発音の誤り、さらには単純なカナの誤りなど、様々な要因が混在・複合して引き起こされている。これを踏まえて、次のように取り扱うこととする。
 - ⑤欧文の単純なスペルミスや文法の誤り、カナの

誤りについては、正しい文字・つづり等を適宜（ ）内に示した。なお、原則的にフランス語表記を正として扱った。

⑥欧文のアクセント記号や連結記号の欠落については、煩雑を避けるためこれを修正しない。対して、不必要なアクセント記号や連結記号が付いている場合は、（ ）内に正しいつづりを示した。

⑦カナ表記の元となる欧文や、その日本語訳、今日の一般的呼称などの補足情報を適宜（ ）内に示した。

⑧補足情報として地名を取り上げる場合は、煩雑を避けるため、日本で一般的に用いられている表記を採用した。現地での呼称や発音と異なる場合があることをご了承いただきたい。

・児島に特有の用字・用語については、次のように情報を補った。

⑨原文では、仮名の濁点は殆どの場合省略されているが、原文のまま掲載することとした。濁点の省略は誤字として扱わず、濁点の省略によって理解が損なわれると判断した箇所については、「〔エジプト〕」のように、（ ）内に濁点を補った単語、または一般の名称・呼称を示した。ただし、児島は「す」に相当する変体仮名「須」を打ち消しの助動詞「ず」に限って用いていることから、変体仮名「須」が用いられた箇所には「ず」を付した。

⑩「額椽（額縁）」など、当時比較的一般であった用字、「カンパス（キャンパス）」など、児島が日常的に用いていた用語は誤字・誤記として扱わない。ただし、誤解を避けるために、適宜（ ）内に一般的用字・呼称などを示した。

⑪児島は「寝」「憩」を常に独自の文字（誤字）で表す。これらについては、正しい文字に置き換え、その傍に「*」を付した。

⑫児島は、いわゆる「くの字点」（二字以上の文字列の繰り返しを表す記号）を横書きでも用いており、縦書きの場合と同様に縦位置で配置している。本稿ではこれを実際の字形に近い「ㄣ」に置き換え、その傍に「*」を付した。

・以上①～⑫の補足情報および記号は、本文当該箇所の上に配置した。

・（ ）および〔 〕内に示した補足情報自体に疑いが残る場合は、（ ）または〔 〕内に補足情報に続けて「？」を付した。

・その他の補足情報を脚注に示した。

・文中に登場する人物の特定・推定が可能な場合は、初出のみ、極簡単な人物情報を脚注に示した。初出以外については、200～211ページの人名索引を参照されたい。なお、これらは前後の日記や関係資料などから現時点で得られた情報をもとに人物の特定・推定を試みたものであり、更なる精査を要する段階のものであることをご了承いただきたい。

・脚注中、人物の特定・推定に用いた資料として、「児島の住所録」がたびたび出てくる。児島が使用した住所録としては、手のひらサイズのアドレス帳が5冊（ただし、そのうち2冊は主にメモとして使用されている。）、1922（大正11）年および1923（大正12）年の日記帳巻末の住所録が確認されており（いずれも個人蔵）、本稿ではこれらを参照した。

・脚注中で児島作の特定の油彩画作品に言及する場合は、「児島油彩画総目録No.」として、公益財団法人大原芸術財団「児島虎次郎 油彩画総目録（ウェブ版）」https://www.ohara.or.jp/collection/kojima_reisonne/（2025年12月31日現在）掲載の作品番号を示した。

・様々な分野から情報提供とご協力を賜りたいと考え、美術分野においては基本的ともいえる情報をあえて補った箇所が多くある。煩雑の嫌いがあることは承知しているが、意図をご理解の上ご容赦いただければ幸いである。

6. その他

・一部、現代の社会通念や人権意識においては不適切と思われる用語・表現、またはプライバシーに関わる内容を含むが、当時の社会的背景や本資料の学術的意義を鑑み、原文のまま掲載した。本稿を活用される場合は、多様性の尊重、個人の権利への配慮をもって活用されるようお願いしたい。

本稿をまとめるにあたり、児島虎次郎の孫である児島塊太郎氏に格別なるご高配とご助言を賜りました。ここに記して、感謝の意を表します。

1月1日 木曜¹

【欄外左側（縦書き）】

一月一日 晴

【本文欄～欄外下側】

空は朝来快晴なり、絵具箱を携へて海岸傳にて
東進す、市外に出て、砦の跡らしきものある丘に上る、
海濱の人家を眼下に眺み打寄する地中海の
波と共に写生す、小雨ありたれとも快晴に復す
〔セビリア〕
Sevillaにて入浴したるためなるか感冒の氣味
ありて体だるし、昼食後、市中の店頭閉しられ
て何となく日曜の如なるに日記を取出して探れば
今日は元旦なり大正九年にして1920なり余生れ
て四十年に未たかつて今年の如く元旦の来りしを知さりし
年なし今年の生に幸あれ！！ 午後町の中央に聳ゆる丘に
登り阪道の写生をなす風強く吹荒れて砂礫を昇す、

1月2日 金曜

【欄外左側（縦書き）】

一月二日 発信大原²

【本文欄】

午前十時〔マラガ〕³〔グラナダ〕⁴ Malaga 発 Granada に向ふ途中
〔ボバディージャ〕
(Bobadilla) Badabile 迄式時間余の沿道は実に絶
景とも称すべし流れ沿たる田園の密柑畑[?]
には柿の熟したる如く密柑の熟して今此の^(蜜)
快晴の天空の下に数多の野人梯子に上して[?]
密柑の採集中なり、遠き連山はオリブの畑^(蜜)
に彩られ往年ナホリの旅を思ふ、^(ナホリ)
Badabile に近く岩質の高峯聳へ墜道多く^(隆)
谷深くして水走り観光に價するものあり、
式間の延着にて六時過 Granada 着、^(式時間)⁵
Pension Carmona に就く (アルハンブラ)⁶

1月3日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

一月三日 新年はかきを数多
書く

【本文欄】

朝先づアルハンブラを参観す、建築壮美を欠くと
一度廃タイしたるを修復せし所非常に多く比較的
巧妙に修繕され居るも其の修繕の場所の面積
多きと殆ど原状に復し居らざる様の所ありて
何となく変な氣持する箇所尠ならず[?]

- 1 1月1日より21日までの日記は、1919年の日記帳巻末の「大正八年当用日記補遺」欄に記されている。
- 2 大原孫三郎（おおはら・まごさぶろう、1880-1943）。実業家・社会事業家。倉敷紡績社長ほか。児島の制作活動を支援し、のちに児島を記念するために大原美術館を設立した。
- 3 鉛筆にて「マラガ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 4 鉛筆にて「グラナダ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 5 鉛筆にて「時」と書き加えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 6 正しくは「Villa-Carmona」。同日分宿泊料の請求書兼領収書が現存しており（個人蔵）、これによりホテル名が確認できる。
- 7 鉛筆にて「アルハンブラ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

欧州のローマンルネサンス⁸などの大建築を見
てこのアラブ建築に對せは如何にも小細工
にして貧弱たるを□れず然し何所となしに建物
に親しみのあるは不思議なり、午後 Alcazaba^{〔アルカサバ〕}
を見る、夕方^{〔ロマ、ジプシー〕} Jitanoi の部落に散歩した、
Malaga^{〔マラガ〕} の暖かさに比して此地の寒き事
はトレト^{〔トレド〕} 以上である、夜ストーブを燃て貰たか
なかに燃へない^{*}

1月4日 日曜

【欄外左側（縦書き）】

一月四日 夜新年のはかきを
書く

【本文欄】

午前 Generalifa^{〔ヘネラリフェ〕} に趣く空曇りてあまり陰気な
る感しす、暑の烈光の日訪れて見たき心地す、
谷に下り Jitanoi^{〔ロマ、ジプシー〕} の部落を散歩す、此の
部落の様子は全く夢に見るか昔話に聞く様の
所なり、
午後アルハンブラに写生に趣く中庭の噴水
の辺を描く、描きかけて曇りとなり只デッサン
のみ描きて帰る、
夕方、アルハンブラの門前より向ふ⁹のアラブ
の部落を眺めて写生す、

1月5日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

一月五日 夜はかきを書く

【本文欄】

朝宿の前の Moseque^{〔モスク〕}
の側にて十五号
の写生を始む途中日曇り来りたれば
昼前中止す、
午後アルハンブラに趣き昨日の續きを描
く天明に晴れず、

1月6日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

一月六日

【欄外上側】

午後曇り Alhambra に趣かす向か丘なる Sacro^{〔サクロ〕}
mote^{モンテ} に行き丘の上にて子供と野羊を描く¹⁰

- 8 鉛筆にて「ルネサンス」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 9 鉛筆にて「向」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 10 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.423 《(グラナダ郊外)》26.7×34.3cm、個人蔵
なお、スペインでの児島の制作については次に詳しい。
孝岡睦子「児島虎次郎 西班牙の旅」
『生誕130年 児島虎次郎—あなたを知りたい』図録、大原美術館、2011年、pp. 171-181

【本文欄】

(モスク)
(Mosquée)
午前Mosequeの写生を續け午後¹¹は
Alhambraの写生を續る事昨日の如¹²し
朝日光のよく当る場所に画架を据へて居る
のて暖かすぎる位で少しも寒を感じる事はない、
それでも此辺朝は霜と地は凍て固まつて
(アルハンブラ)
居る、Alhambraの庭は日の当らぬ場所
あるか仕事して居る間は寒を感じる様の事は
ない、日か暮れは下町に趣く散歩と
(カフェ)
カツフェに寄る宿で夕食の八時頃帰る
この間寒くなし。宿の室のストーブ煙突か
壊れ居るのでなか^{*}くコークスか燃焼へぬ大抵一時
間位で黒く消へて終ふ 十時就床

1月7日 水曜

【欄外左側（縦書き）】

一月七日 快晴

【本文欄】

(モスク)
(Mosquée) (アルハンブラ)
午前Mosequeに午後Alhambraに趣
き式枚共描き終る三日つゝ費したり、
Alhambraの庭の噴水から描て居る間に
太い水が噴出して来た実に嬉しい心地
かした、
¹¹
今日は終日快晴で昨日一昨日の
如く曇り勝ちて写生の不便であつた
¹²
様の事ハ無かつた、
下町にL□□ho de Parisか来て居る此頃
(セーヌ川)
(Seine)
巴里は毎日雨でSeinに出水甚しく若し
数日続けは又前年の洪水を現出するらしい

1月8日 木曜

【欄外左側（縦書き）】

一月八日 快晴

【本文欄】

(インファンタスの塔)
(la Tour des Infantes) ¹³
朝tour Inphantaを觀る（宿の裏なり）、十時より其附
近にて写生を始む（十五号）寺の塔と、向の丘を遠く
¹⁴
眺めたる所、午後、大急きてSacro moteの下
(サクロモンテ)
(Sacromonte)
路の古寺に趣き石の十字架を前に遠くアラブの町を
見たる所を写生す（十五号）¹⁵ 今日一日にて描き終る
積なりしも日脚短かく山端にかくれ、僅か
二時間不足にて日没す、五時半宿に帰り夕食

- 11 1月4日より7日にかけてアルハンブラで制作した作品は次に該当すると考えられる。
児島油彩画総目録No.419《アルハンブラ宮殿》68.5×56.5cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4068）
- 12 鉛筆にて「不」と書き添えられている。
児島本人の筆跡ではない。
- 13 スペイン語の「Infanta」によつたものか。以下同。
- 14 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.425《スペインの村》56.5×68.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4099）
- 15 サクロモンテの聖墳墓礼拝堂からの眺めを描いた油彩画（個人蔵、児島油彩画総目録未収録）が確認されており、これに該当するものと思われる。

迄は毎の如下町を散歩す、
宿の室には寒くしてとても居たまらず、写生を
終りて夕食迄は二三時間あれ此間なにか日記
旅行記様のもの書て見る積てあつたかとても寒い
のて在室不可能なり

1月9日 金曜

【欄外左側（縦書き）】

一月九日 快晴

【本文欄～欄外下側】

昨日の如く朝来快晴無風、春の如く
夏の如し 終日寒さ感する事少しもなし日光
冬なるも尚猛し 北に皚々たる雪山脈を
眺むるは此所は殆ど兩三日冬を忘れたり[?]
〔インファンタスの路〕 〔サクロモンテ〕
(Infantes) (Sacromonte)
午前、Inphantaに午後Sacromote
の下に昨日の如く仕事して忒枚を
終る、尚滞在して、写生すべき哉
明日出発して帰る途中何所か適當の場所に
留て写生を試むべきかにつき色々考へた仕事す
るには非常によい所である宿は氣樂にして夜寒い
他何のうれいなし殆ど他郷に淋しくあるの心地
せず、然し明日当地を辞せんと決す、朝は^(ず)
七時頃宿を出発せねはならず、たまゝ宿の主人今日不在^(ず) *
明日の出発不可能となる

1月10日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十日 午後快晴

【本文欄】

尚今日一日滞在する事となり ~~Hotel Wasington~~
~~の前の廣路を上りて~~ ~~日 Cimmitiereの手前にて右~~
~~に折れ坂道をたれば、板のスケッチ板箱を携へて~~ 〔スケッチ〕
〔アルハンブラ〕 〔ライオンの噴水〕
AlhambraのlionのFountainの写生
を試む朝霧深し、午後スケッチに 〔ホテル・
ワシントン・アーヴィング〕 [?]
Washingtong Irvingの前の廣路を上りて
〔共同墓地〕
(cimetière)
数町、Cimmitierに裏より雪山を望み
て夕方写生す、噫、雪は何所にて何時
見ても美しきものまして暮の雪春の雪は
最も美しき哉明日の出発と今日昼宿の主人
に告けたるも尚滞在してこの雪の写生を紀念
としたし往年アルプスの旅を思ふ[?] 深し

1月11日 日曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十一日

【本文欄】

^(共同墓地)
^(cimetière)

朝 Cimmitier の前を横に坂道の下□

行けば左方にこの辺のボヘミヤン^(ロマ、ジプシー)部落の寺院

あり彼等の居宅と同じく穴造りなり内部諸

室を穿つ、其の傍らにて一枚写生を終る、¹⁶

午後より暮迄、昨日スケッチせし雪の山

の写生をなす、日脚斜[?]にして暮近し

今日一日に終るべかりし写生も中途にし

て宿に帰る、

1月12日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十二日 快晴

【本文欄】

^(ロマ、ジプシー)

午前ボヘミヤンの部落にてスケツ^(スケッチ)をなす、

穴屋の前に驢馬の繋ある傍にて主婦子供

の髪を揃る、¹⁷

午後雪山の写生をつゞく大急ぎにて描

きたれとも、尚時間の不足をうらむ、[?][?]

1月13日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十三日 快晴

【本文欄～欄外下側】

^(ロマ、ジプシー)

午前ボヘミヤンの部落より Granada^(グラナダ)¹⁸の

市街を□下したる、鉛筆の写生を昼迄つゝ

く、

Granadaにて描きたるもの数枚、然し皆風

景の写生にして製作の資料となるべきも

の一もなし、巴里或は酒津に帰りて何か習[?]

作を試むべきものを少し試作して帰りたく、

このボヘミヤン部落にて何かエチード^(習作)^(エチュード)を試む

る希望を起す、

午後昨日終りたるべき雪の写生を携

へて三度修作を試む、

山と眼下の村落の位置をコンポー^(composer 構成)^(コンポーゼ?)

せしたるため

調子の不和を生じたるためなり¹⁹

16 次の作品とその関連作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.415《ジプシー地下寺院》57.5×67.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4067）

同目録No.416《(スペイン風景)》

92.5×117.5cm、倉敷紡績株式会社蔵

17 次の作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.421《スペインの村》25.5×33.2cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4082）

18 鉛筆にて「グラナダ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

19 1月10日より13日にかけて雪山を題材に描いた作品は次に該当すると考えられる。

児島油彩画総目録No.417《スペインの風景》57.5×79.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4069）

1月14日 水曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十四日 快晴

【本文欄】

午前昨日鉛筆写生を試みし同場所を
絵具にて写生す、
午後、^{〔ロマ、ジプシー〕}ボヘミヤンの部落²⁰に至り何か材良なき^{（料）}
やと求むれとも捕ふ所なし、
僅に、鉛筆、絵具などのスケッチを試みて
帰る、何の得る所なき日ほと不快不安
なる事なし、嗚呼こんな事なら滞まる必要
なしと思ふ、
夜町にて^{〔カンヴァス〕}カンパスを買求む^{ママ}巴里より持参せ
カンパス一枚を餘すのみ、絵具^{〔白〕}blanc、
^{〔マドリッド〕}マドリッドにて甲斐求めたるもの殆ど使用し
盡すもグラナタに販賣せず

1月15日 木曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十五日 快晴

【本文欄】

^{〔ロマ、ジプシー〕}朝ボヘミヤの部落にて若き男と娘を
式枚習作す、これは共に構図を
試みんかためなり、
午後一枚、同じ^{〔ロマ、ジプシー〕}ボヘミヤン部落の他側
の方にて写生を終る、²¹
これにて愈明日当地を降り^{〔コルドバ〕}Cordaba²²
に向ふべし、
残念なるは今朝写生せし若き男女のデッ
サンの作製を見さりし事かへす^{*}も心
残なり尚一日滞りて試みたけれとあまり
の吞氣なる旅にて巴里に帰りて故国よりの通信
も見たし持合せの西貨すでに欠乏す、

1月16日 金曜

【欄外左側（縦書き）】

十六日 快晴

【本文欄】

午前七時^{〔グラナダ〕}Granada宿を出発、^{〔コルドバ〕}Cordobaに着したるは
午後七時着、
グラナダにては毎日快晴つゝきにてよく働
けたり働きたり、かなり描きたり、其の
作品の佳なるもの悉無なりとしても余は

- 20 鉛筆にて「至」と書き添えられている。
児島本人の筆跡ではない。
- 21 ロマ（ジプシー）の集落にて描かれた
「若き男と娘」の絵、およびその関連作
は次に該当すると考えられる。
〈a〉児島油画総目録No.431《スペイン
人》66.7×51.5cm、所蔵不明
〈b〉同目録No.430《習作—スペインの少
女》66.5×51.5cm、大原芸術財団 大
原美術館蔵（所蔵品登録No.4090）
〈c〉同目録No.429《スペインの丘》87.5
×114.0cm、同所蔵（同登録No.4102）
〈c〉については後掲注38参照。
- 22 鉛筆にて「カルタヘナ」と書き添えられ
ている。児島本人の筆跡ではない。

この十数日の働きか今旅の中にて最も
愉快なり^{ママ}記念たらむ？ 日にも焼けたり
少しは労れも覚へたり、
然し巴里の天候を思て巴里の寒さと
比せよ、何と云ふ幸福なる旅であろう
去て後この^(グラナダ)グラナダの^{?23}半月の客たりしを
感謝する事深からむ

- 23 鉛筆にて「茂」(ただし消字されている)、「楽」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
24 鉛筆にて「バレンシア」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

1月17日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十七日快晴

【本文欄～欄外下側】

^(大聖堂)
(cathédrale)
朝、cathedraleを観る、世界にて第二位に
置かれたる大寺院なると云ふなるほど廣大
なものなり建築の美は完き所なきも岩と
壮との美は^す尠からず、堂奥のアラブ時代
^(モザイク)
モザイクの尚□□として残り其の光と
色の壮美優麗[?]は余をして其前を去る事を
得さらしみ尚午後再ひ此の前に佇む事を
^(為さし)
し為さめたるほど実に美しきものなり
古代朱と深藍と金色の調和の完き
事は実に何れの時代の装飾比してもこれ
ほどの美しき調和せしものはあるまし然し
其の壮と重みある事の最もな□は得□き遺品たらむ
か、午後市中を散歩す、夜^(アルカサル)
^(Alcázar)Alcazarに向ふ、

1月18日 日曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十八日快晴

【本文欄】

^(アルカサル)
(Alcázar)
Alcazarに着したるは朝の九時なり三時間
延着、^(バレンシア)Valencia²⁴に向ふ^{ママ}き汽車は今夜
十一時発のもの、^(なし)外なり、其の間この寒村に
て時を送る観る所も写生するものもなし、
^(レストラン)
停車場のRestaurantにて時を待つ

1月19日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十九日快晴

【本文欄～欄外下側】

昨夜駅の宿の主人に余の^(バレンシア)Valenciaに向ふ事

を告げ Valencia 迄は乗換のなき事を
たしかめ置たるに正午過車掌の切符を検
□□事 ^(アリカンテ) Alicante に向ひつゝありて
乗換を要すべき所なりし一時間ほど
前過し駅に帰る必要ありとて換越賃を
拂さる、幸にして引返したる余の過ぎし時発
すべかりし Valencia 行の汽車は尚停
車しあ□てつまり Valencia 着は少しも遅
延したる所はなりしも□ ^(なかり?) ^(ベセタ) 63pts 支拂と
□れたり、午後三時半 Valencia 着、
²⁵ ^(クレディ・リヨネ銀行) ^(Crédit Lyonnais)
Hotel Oriente 泊 Credi Lionais にて
佛貨を西貨に換ふ、夕方市中散歩、
^(フラン?) 700f □ s

1月20日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

一月二十日晴

【本文欄（横書き）～欄外右側（天地逆さに縦書き）】

^{(地方博物館(バレンシア美術館))}
朝、Musee Provincial に趣く、
* ^(ベセタ) ^(か) ^ず ^(Velázquez) 26
なかゝ見るものもの尠□らず、Velasques の
自像小品なれとも力あり、
^(Sorolla?) 27 ^(習作)
Zorala の etudes あれと優れ□□もの
なし Goya の作品数多ありて□に
或画家の肖像あり□最も優れ□作
たり、他に Degrain の式室に満ち
たるコレクション ^(なかなか?) [?] なか不思議なる作品なり
正午□の列車□□ ^(サグント) ^(Sagunto) Segunto に向ふ
三時頃着駅 ^(停車場) 停車前のホテルに荷物を
運ひ置きて直に ^(ローマ時代の劇場遺跡) ^(la ruine du théâtre romain) Ruin Theatre Roman
及アラブの城砦を觀る夜この見物の途出會せし
バリトン音楽家の独奏を
^(カフェ) カツフェに聞く

1月21日 水曜

【欄外左側（縦書き）】

一月二十一日

【本文欄】

今朝、写生道具を携へてローマ劇場の傍に
て方々位置を求めて終りに前に劇場の廃
跡を□望に遠く丘の上に連々たる城砦
を据し直前に□杏花と梨花の咲き
盛りたる園ある民家の一角を写す、³⁰

- 25 1920年1月20日付の請求書兼領収書(1月19～20日宿泊分)が現存する(個人蔵)。それによれば、ホテル名は「Gran Hotel y Restaurant de Oriente」。
- 26 ディエゴ・ベラスケス(Diego Velázquez, 1599-1660)。スペインの画家。
- 27 ホアキン・ソローリャ(Joaquín Sorolla, 1863-1923)か。スペインの画家。
- 28 フランシスコ・デ・ゴヤ(Francisco de Goya, 1746-1828)。スペインの画家。
- 29 アントニオ・ムニョス・デグライン(Antonio Muñoz Degrain, 1840-1924)。スペインの画家。なお、鉛筆にて「スルバラン」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 30 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.424《スペイン風景》68.0×56.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.4093)。同作には「au mois de janvier à Sagunto」の裏書きがある。

午後も位置探りに時を過し夕方大急
きにて丘上より寺院を瞰下したる写生
をなす夜散歩す静かにして淋しき
町なり、セレノの呼声暗に美しく響く
静かなる床に就く、

【欄外下側】

一月二十二日より日大正九年、1920の日記帳に写す、

1月22日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今日尚滞在せむかと種々思定めたれと、
巴里に帰る事のなんとなく心忙しきまゝ此地
を去る事となす、朝早起窓外の丘と
町街を小さく写生す、
午前十時発車、午後四時過
(タラゴナ)
(Tarragone)
Taragone 着、Hotel de Paris
に泊す、
夕方散歩に出づなんとなく面白
そふな古き町なり海岸に望みて
見晴よし此地にも羅馬朝の遺跡
なかゝに見るものあり
夜、活動を観る

1月23日 金曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

早朝より写生帳を携へて遺跡訪問
にかけ廻る、此地のmusee archeoragic
見るもの多し
午後Taragonaの市街の周囲は、
非常に美しい所計りてある写生
する積りなれば幾日でも滞在か
出来よう
午後、五時過発車Balacelona
に向ふ八時過着？
Hôtel Oriente
に泊す、
夜散歩寄席に入る、

- 31 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.426《風景》57.0×68.0cm、所蔵不明。同作品は城砦の丘よりサグントの聖母生誕教会を描いたものの。
- 32 鉛筆にて「バルセロナ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 33 1920年1月23日から26日利用分のホテルの請求書兼領収書が現存する（個人蔵）。それによれば、ホテル名は「Gran Hotel de Oriente」。

1月24日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

〔博物館・美術館〕
早朝より Musée 見物に出かく

絵画の新旧のコレクション

なかゝ*豊富なり 考古品の陳列

〔ローマ時代の〕
〔Roman〕
中、Roman のもの最も多数

にして見るものあり、

午後市中を散歩す

此の都は現今〔スペイン〕西班牙第一の

盛繁なる府にして首都〔マドリッド〕マドリット

を駕するものあり

港に多く見る雑騒の感あれとも

其の盛なる事は慥に南欧の首都の

如し、

1月25日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄～翌日欄外右上】

午前九時発、愈々今一ヶ月余の〔スベ
イン〕西班牙

牙の旅を去りて佛国に入らむとす、

午後四時頃？ Port Vendre
〔ポール＝ヴァンドル〕
〔Port-Vendre〕

に下車す、国境税関の荷物

検査も甚た無事て済む

〔Port-Vendre〕
Port Vendre は佛国の西南

端の都なり〔ミモザ〕ミモサ咲き満つ

小山を背にして静かなる地中

海の青波に影したる貧村なり、

ホテルに荷物を托して隣村なる、

〔コリウール〕
Collioure に散歩す燈の頃にて港の水

美し

1月26日 月曜

【欄外左上】

晴

【本文欄】

〔画布〕
朝式枚のトワルを携へて〔コリウール〕Collioure

の隣村に写生に趣く、式里足らず

の道なり、午前と午後に各一枚の写生

をやつと終り點燈後、〔ポール＝ヴァンドル〕
〔Port-Vendre〕Port Vendre

に帰る、Collioureの港は案内
書によりてPitoresquの港村
なる事を知り下車を望みたれと
汽車の直行なるもの停車せずPort
Vendreに泊所を定めたるなり
静かなる気持にて日を過す、旅も
終りに近づきて頃は春の盛なり
南欧に遊子か旅情なかに^{*}に思出
深し

1月27日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄～欄外左側（縦書き）】

午後三時Port Vendre発愈々巴

里の帰途に就く、Perpinang³⁴

にて日暮る。

明日は巴里の寓に帰る得らるゝ[?]

と思へはこの長旅の労れも

慰め得られむ?

殆と旅行中雨にも出會せず、まし

て南方にて写生に過せし³⁵日

快晴のみつゝきて空に雲さへ

なく都合よし携へたる布も使用し尽し

たり苦しかりし旅の忙しさも過ぎてみれば○³⁶

○又^{ママ}楽しみの浅からずもの

なる哉³⁷

1月28日 水曜（記入なし）

1月29日 木曜（記入なし）

1月30日 金曜（記入なし）

1月31日 土曜（記入なし）

2月1日 日曜（記入なし）

2月2日 月曜（記入なし）

2月3日 火曜（記入なし）

- 34 鉛筆にて「ペルビーニヤン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
35 鉛筆にて二重取り消し線が引かれ、右下に「44日」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
36 ○印から○印へ文章が続くという意。
37 以上2行は縦書きとなっている。

2月4日 水曜 (記入なし)

2月5日 木曜 (記入なし)

2月6日 金曜

【本文欄】

暁頃より腹痛を催し醒む痛み軽からず
便所に弐三度通たれと便通さほとなし
朝のシヨコラ^(ココア)を喫して後再び便通を催す、
氣持あしく頭重し、
終日ホヘミアン^(ロマ、ジプシー)の絵を描く空腹³⁸を堪
へて夕方に至り少し食をとる、
夜に来るも快よからず終日懷爐を
用ゆ、夕食に外出する事さへ退氣なり
遂に出でず
夕方より夜にかけて手紙数通を
かく、

発信青³⁹の、久保田⁴⁰、木村⁴¹、都志、

2月7日 土曜

【欄外左上】

快晴

【本文欄】

朝、gitanos^(ロマ、ジプシー)の絵をつゝく昼前松永氏⁴²
来室右眼に何か飛込て痛む事限りなしと
て小生眼瞼をかへして改むるも何物もなし
其後全く痛止たりとて昼食後二人連
立ルーブル^(ルーヴル美術館)を觀る、伊太利初期ル
ネサンス、西班^(スペイン)、佛蘭西初期及び
カーモンド^(カモン・コレクション)のコレクションの各室先月
末頃より開館さる、未だ全般の画堂⁴³
の開くる迄には尚かなりの時日を要
する事ならむ、夕方、帰宿、留守中、日本
より来佛のKawaguchi氏⁴⁴来訪夜宿を訪問す、

2月8日 日曜

【欄外左上】

快晴

【本文欄】

Kawaguchi氏、朝来訪、青山君⁴⁵の宿を
訪る不在、中川氏⁴⁶の宿を訪れ昼食

- 38 前掲注21参照。パリに戻って後、サクロモンテでの取材をもとに児島油彩画総目録No.429《スペインの丘》の制作を進めているものと考えられる。本作品即ち「ボヘミアン」「Gitanois (Gitanos)」の絵の制作に関する記述は、3月16日まで確認できる。
- 39 青野俊一郎。児島と同郷の親友で、倉敷紡績に勤めていた。
- 40 木村半蔵。2月12日欄参照。1919年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船していた人物。児島の住所録に名前がみえ、パリの住所とともに、連絡先として「Agence Inabata & Co」と記されている。
- 41 都志太郎であろう。大原孫三郎が経営する倉敷銀行で取締役をつとめた人物。児島の近所に住んでおり、家族ぐるみの付き合いがあった。
- 42 松永津志馬（まつなが・つしま、1893-1966）。洋画家。
- 43 第一次世界大戦の影響により閉室となっていたギャラリーが再開室したことを述べている。
- 44 川口軌外（かわぐち・きがい、1892-1966）であろう。洋画家。
- 45 青山熊治（あおやま・くまじ、1886-1932）。洋画家。
- 46 中川紀元（なかがわ・きげん、1892-1972）か。洋画家。

を共にして帰る

^(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
午後、gitanos⁴⁷を続ける

五時には室内点燈を要する位の

暗となる、数日来気温寒からず

快晴続きて春の気持ち室内

に在る事の馬鹿らしき感しす、

【欄外下側】

発信長尾⁴⁷、自宅、井川、原、⁴⁸□島

2月9日 月曜

【本文欄】

^(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
午前中、修作、gitanos

午後、青山岡田、松永、山口の諸

君と同伴してAman Jean⁵⁰氏

の画室を訪問す、

夕方カフェと夕食を諸氏と共

に夜半迄再カフェに語る

2月10日 火曜

【本文欄】

終日外出せず修作す、

2月11日 水曜

【欄外右上（縦書き）】

来電

大原、

来信

加藤⁵¹

【本文欄】

殆と終日外出せず修作

夕方夕食に支那飯に趣く、

2月12日 木曜

【欄外右上（右から左へ）】

来信小林⁵²

【本文欄】

朝より午後すぎ迄修製、支那劇と

^(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
gitanos昼めしの菜殆となし

^(リエージュ通り)
(Rue de Liège)
四時Rue Liègeに木村氏を

訪れ為替の保証人の事を

依頼せん事を相談す、

夕方久し振りに入浴す、

47 額縁店磯谷商店の長尾建吉（ながお・けんきち、1860-1938）、またはその息子長尾一平（ながお・いつべい、1886-1978）。4月27日の記述から、この頃額縁見本に関して一平とのやりとりがあったことが確認できるため、一平の可能性が高いと考えられる。

48 原澄治（はら・すみじ、1878-1968）であろう。大原孫三郎の右腕として倉敷紡績などで活躍。のち、倉敷町長。社会事業も多く手がけた。

49 岡田毅（おかだ・みのる）か。洋画家。

50 エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン（Edmond-François Aman-Jean, 1858-1936）。フランスの洋画家。児島と親交が深く、児島に制作上の助言を与えたほか、大原と児島によるフランス絵画収集に協力した。

51 御木本真珠の加藤虎之助。1919年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。

52 小林寿美太（こばやし・すみた）。児島と同郷の友人。大阪で菓子店を営んでいた。

一ヶ月振以上なり、
(クローズリー・デ・リラ)
(Café Lilas)⁵³
夜 Café Lira の會合に夜
を深して帰る

2月13日 金曜

【欄外右上（縦書き）】

発信

大原、加藤、

【欄外左上（縦書き）】

来信

久保田、

小林

遠山⁵⁴

【本文欄】

朝より支那劇⁵⁵の修製をつゝくモデル
なしにて随分長い間改修をつゝけたる
ものなりこれも一つの経験となす
べきか冠の女の顔を少し描き改め
マ マ (ロマ、ジプシー)
(gitanos)
てて見た、午後Gitanoisの五十
号のキャンパス^(カンヴァス)先日より只かきつゝけた
のみにて全体の調子とゝのわす、夕方
迄少しづつ[?]筆を加へた、
夕方、遠山君を訪れ佐々木氏を訪ふ⁵⁶
遠山君は兩三日前アメリカより来佛、
美術学校出身にて巴里に留学の目的なり

2月14日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

発信、太田⁵⁷、斉藤⁵⁸、

2月15日 日曜（記入なし）

2月16日 月曜（記入なし）

2月17日 火曜（記入なし）

2月18日 水曜

【欄外左側（縦書き）】

発信

書留大原柿原へ手紙着次第学資

(アマン = ジャン)
アマンジャン作品代送金を

申送る

- 53 モンパルナスのカフェ、クローズリー・デ・リラ (La Closerie des Lilas) で毎週木曜日に日本人の会合が開かれていた。児島は頻繁にこの会合に参加している。
- 54 遠山五郎 (とおやま・ごろう、1888-1928)。洋画家。
- 55 「支那劇」は次の作品を指している。児島油彩画総目録No.349《小放牛》196.2×113.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.4127)
本作は、1918年の中国旅行での取材をもとに日本で制作を進め、1919年の渡欧にあたってパリに持参された。パリ到着後も修正が続けられており、国民美術協会展出品前の3月5日まで本作品の修正についての記述が確認できる。
- 56 佐々木信造か。児島の住所録に名前がみえ、住所はパリおよび大阪となっている。
- 57 太田喜二郎 (おおた・きじろう、1883-1951)。洋画家。児島と共にゲントの王立美術アカデミーで学んだ。
- 58 斎藤豊作 (さいとう・とよさく、1880-1951)。洋画家。児島の東京美術学校時代の友人。

2月19日 木曜

【欄外上側】

ラモレル⁵⁹へ注文、サロン出品作品枠寸法

1.^m14×2.^m_____

1.^m36×2.^m_____

{ 1.^m36×2.^m3
1.^m36×2.^m3

【本文欄】

午前ラモレルへ枠、^(額縁)椽（出品画の分）注文、

午後加藤氏来訪、両三時して同道、

加藤氏の宿に趣き今タマルセー

ユに発せらるべく、リヨン停車場

に送る、八時二十五分発、

帰途^(クローズリー・デ・リラ)カッフエリラの會合に寄り

夜半帰寓、

非常に温暖にして外套を要せ

さる位なり、

2月20日 金曜

【本文欄】

午前中修作、

2月21日 土曜

【欄外右上（縦書き）】

来信、

小笠原⁶⁰

2月22日 日曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前中小^(放)牧牛を修作、

午後松永氏と連立ちて散歩

* ^{ 競 売 場 ? }
^(hôtel de ventes ?)

かたゝ Hotel V□□dに下見

に出かく買て見たきものなし、

夜早く帰りて又久し振りに

松永と合奏を試む、

【欄外左側（縦書き）】

来信、吉田、⁶¹矩一、⁶²乙骨⁶³

- 59 ラモレル (A. Lamorelle)。パリの画材店。作品輸送や出品の手配なども行っていた。
- 60 小笠原長丞 (おがさわら・ながまさ、1891-1968)。子爵。1919年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。
- 61 吉田苞 (よしだ・しげる、1883-1953)。洋画家。現岡山市出身。児島と最も親交の深い画家のひとり。
- 62 児島矩一 (こじま・くいち、1896-1934)。児島虎次郎の甥。彫刻家。
- 63 乙骨安昌であろう。児島の住所録に名前があり、住所は岡山国富五百羅漢となっている。「五百羅漢」は国富山少林寺 (岡山市) を指すと考えられる。

2月23日 木曜

【欄外右上（縦書き）】

来信

加藤、切山⁶⁴

藤島、⁶⁵

近藤

西村⁶⁶

「黒田、満谷⁶⁷

より為替来る、⁶⁸

【欄外左上（縦書き）】

晴

発信

小笠原

【本文欄】

午前新聞来る通読、

昼過迄、小放牛の画面に金箔を置く

昨夜深く就眠、今朝□に郵便

夫に醒せられ睡気強し

午後、サロンに出品すべき四点に

記名を終る

夕方支那食に趣き直に帰寓、

夜深く迄日本への返信をかく

2月24日 火曜

【欄外右上（縦書き）】

来信

柳井⁶⁹

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

朝十時頃、岡田君来訪

昼食後、ふらゝ Port Royale の^{*〔ポール＝ロワイヤル〕}

通を歩て、Gar de Lyon に向た、<sup>〔リヨン 駅〕
(Gare de Lyon)</sup>

加藤君、午後三時帰着の出迎

である、汽車一時間ほど遅延

加藤君と Grand Hotel に趣て

小憩^{*}、支那飯へ夕食を共にし

た 午後夜十時頃帰寓、

両三日又再び寒さが増して

来た様であつたか今日は又

非常に暖かくなつて来た

【欄外左側（縦書き）】

64 切山篤太郎か。兄島の友人。岡山県矢掛町出身。朝鮮総督府で判事をつとめていた。

65 藤島武二（ふじしま・たけじ、1867-1943）。洋画家。兄島の東京美術学校時代の恩師。

66 西村磯右衛門であろう。江商株式会社
の重役で、1919年に兄島が渡欧する際、
同じ船に乗船していた。

67 黒田清輝（くろだ・せいき、1866-1924）。
洋画家。兄島の東京美術学校時代の恩
師。

68 満谷国四郎（みつたに・くにしろ、1874-
1936）。洋画家。現岡山県総社市出身。

69 柳井新太郎。兄島と同郷の友人で、郷里
成羽で呉服商を営んでいた。

発信、妻⁷⁰、黒田、満谷、近藤、藤島
切山、吉田

2月25日 水曜

【欄外右上（縦書き）】

来信
遠藤、
青の、

【欄外左上】

快晴
夕方より雨

【本文欄】

サロン出品の小放牛の修作も一兩日前
にて全く終り、今日は加藤君商用にて
別に案内の労を要せずとの事にて
朝より快晴なるまゝ□□外出した
散髪をして古道具屋へ一式軒
廻た^{（エジプト）} エジプトの小さなものを
数点買ったか其中に如何にして
も模造品らしいものかあつたので
主人へ返した、
夜早く帰った少し頭か痛む

2月26日 木曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前、^{（マラガ）}Malagaの写生を
二十五号に描くべく始筆す、
午後加藤氏来寓
昼食後、ルクサンブール公
園^{ママ}しより其附近の装身具店
を廻り、^{ママ}て夜^{（シャトレ座）}Chateliet
^{（マリココ）}^{（Malikoko）}71
を観る mari Koko
^{（アルザス）}アルザス^{（マル）}に於ける佛軍
□通の幕は非常に大規
模のものなり
【欄外左側（縦書き）】
◎発信小林、矩一
（小林君に矩一へ学資送金の事
を頼む

70 児島友（こじま・とも、1890-1971）。児島虎次郎の妻、岡山孤児院の創立者石井十次の娘。

71 アンドレ・ムエジ=エオン（André Mouëzy-Éon, 1880-1967）脚本による喜劇『マリココ、黒人の王（Malikoko, roi nègre）』。

2月27日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{〔マラガ〕}
午前午後 Malaga のスケッチを
二十五号に引延して描た、
夕食を松永氏と支那飯に
趣く隣席に支那人数名ありて
流暢なる日本語にて軽[?]くの
會話を試み終に朝鮮問題
の及はす、彼れには只□□
なる理解のみありてアメリカの野心
などにつきては少しの注意も拂ひ居
らさる如し、

2月28日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

^{〔マラガ〕}
午前中、Malaga の絵を描く
午後加藤氏の宿を訪ひ
^{〔ルーヴル百貨店〕}
(Grands Magasins du Louvre)
同道して magasin Louvre
^{〔ボン・マルシェ百貨店〕}
及 Bon marche を一覽
す、
夜支那□に加藤氏及、
^{ママ}
目加藤氏に取引先の人と
會食す、
夜手紙をかく

2月29日 日曜

【欄外右上（縦書き）】

発信、
妻、
乙骨
青の、

【欄外右上（横書き）】

快晴

【本文欄】

朝加藤氏を訪問、
^{〔アン・デ・バン・ダン展〕}
(Salon des indépendants)
午後 Salon Independent
^{〔エッフェル塔〕}
(Eiffel)
を觀て Effert 塔に
^{〔トロカデロ〕}
(Trocadero)
昇る、夕方 Toracadero

を廻り、日本倶楽部に
夕食す、長岡外史⁷²などあ
り、

【2月備忘欄外左側（縦書き）】

来信、直平⁷³、矩一、

3月1日 月曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中^(マラガ) Malagaを描く、
午後松永氏と^{(marchand}
□ Marchand^商
^{de tableaux)}
des Tableauxに展覧会を参
観す、
夕食後帰寓、留守中に加
藤君来訪、明日戦場見物
にて不在の由報し置かる、

3月2日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中^{(マラガ) ?} Malagaを描く
昼食後、散歩、
夜加藤君を訪問不在

【欄外左側（縦書き）】

来信三橋⁷⁴、岡崎⁷⁵

3月3日 水曜

【欄外右上】

快晴

【欄外左上（縦書き）】

来信
山田⁷⁶穆

【本文欄】

午前速達郵便にて河原君⁷⁷より紹介
されたる大阪、綿花専務の山田氏⁷⁸
来訪の旨報せらる、正午前来訪、
佛国当代作家の作品購画
の希望なれば相当の人撰擇
されたとの事、早速^(アマン=ジャン)アマンシアン氏
の宅を訪れ先つ氏の作品式枚を

- 72 長岡外史(ながおか・がいし、1858-1933)。陸軍軍人。
- 73 児島直平。児島虎次郎の甥、山陽新聞記者。のちに、『児島虎次郎略伝』(児島虎次郎伝記編集室、1967年)を著した。
- 74 三橋玉見(みはし・たまみ、1882-1939)。大原家の主治医で、大原孫三郎の文化面でのブレンでもあった。
- 75 岡崎常太郎(おかざき・つねたろう、1880-1977)か。現岡山県高梁市出身の教育者・生物学者。学習院教授。児島の住所録に名前がみえ、東京の住所のほかに連絡先として「四谷学習院」と記されている。
- 76 日本綿花副社長の山田穆(やまだ・あつし)か。同日本文欄参照。
- 77 河原賀市であろう。倉敷紡績で重役を務めた人物。
- 78 鉛筆書きにて「専」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

求めらる、後氏より紹介を得て
Simon⁷⁹を訪る Simonは直接賣⁸⁰
渡しを断らる、後、Menardを訪れ
忒枚を求めらる
〔オペラ座〕
(Opéra)
夜加藤氏と Operaに Fhaiseを観る

3月4日 木曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

〔グラン・ホテル〕
朝 Grand Hotelに加藤氏を訪
問同氏正午12.0の汽車にてロン
〔北 駅〕
(Gare du Nord)
ドンに帰途につかる、Gard Nord
〔ジョルジュ・ゲアルグス〕
(G e a r g e s)
午後山田氏を同道して George
〔プチ画廊〕 〔ベルネーム画廊？〕
Petit) (B e r n h e i m)
Petit及 Bernehaimeに立
〔ドクトル・ブランシュ通り〕
(rue du Docteur Blanche)
docteur Blanche)の閉店を
〔オートゥイユ〕
(Auteuil)
Autouilを訪る
作品多数あれと肖像画のみにし
て山田氏の意に適せず
花の静物のもの一枚を
求めらる、夕方 Simonの高弟の
某氏の所に立寄るも購ふほどのものなし
〔クロゼリー・デ・リラ〕
(Café Lilas)
夜、Café Liraに會す、

3月5日 金曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

一度修製を終りたるべき小放牛
の作品又今朝加筆す、
〔ルーヴル美術館〕
午後松永氏とルーブルと
〔装飾美術館〕
(Musée des Arts Décoratifs)
Musée art decotativeを観
〔ルーヴル美術館〕
る Louvreは英国及佛十九
世紀の作品の假陳列あり
〔装飾〕
(Musée des Arts Décoratifs) (Salon de
Musée art decotativeには Salon
〔芸術家協会展〕
la Société des artistes décorateurs)
artiste decorateur開会さる
夕食後帰宅、夜松永氏と語る、

- 79 リュシアン・シモン (Lucien Simon, 1861-1945)。フランスの画家。
80 エミール＝ルネ・メナール (Émile-René Ménard, 1862-1930)。フランスの画家。

3月6日 土曜

【本文欄】

午前在宅

(ギメ美術館)
(Musée Guimet)

午後Musée Guimeに趣

久しく留守宅より来信なし、
三橋氏より先日中廣子⁸¹流行性
感冒にて高熱なりしも其後全
快したる旨報し来る

あまり手紙来たらねば国元の
事共懸念に堪^ず

【欄外左側（縦書き）】

発信、三橋、自宅

3月7日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(マラガ)
午前中Malagaの絵を描く

午後、遠山氏来訪、夕方迄

話さる、

四五日前より蟲下し^(ママ)を服用、

し今日下[?]日[?]剤を服す、

夕方一寸外出したるのみにて

籠屋す、

3月8日 月曜

【欄外右上】

晴曇

【本文欄】

朝中川氏来訪

伊太利ナポリにて重患なりし

廣瀬勝平氏⁸²薬石効なく

終に去る一日逝去されたる

報都鳥氏⁸³より来信に旨

傳へらる、同氏は昨年三月来

巴殆と一ケ年を過し伊太利

旅行を終へられて早々帰朝の

途に就かるべかりしに終に不帰

の客となる故国の遺族達の心

情察するに堪へざるものあり

(アマン=ジャン)
午後アマンシヤン氏を訪問す、

【欄外左側（縦書き）】

- 81 児島（のち木村）廣子。児島虎次郎・友
の第二子。1916年生まれ。
- 82 広瀬勝平（ひろせ・かつぺい、1877-1920）。
洋画家。
- 83 都鳥英喜（ととり・えいき、1873-1943）。
洋画家。

来信加藤、太田、長尾、

3月9日 火曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

朝ラモレルに趣く、
昨日よりの寒さ今日もなか^{*}
強し、
午後、在宅
夕方、夕食に出て、帰る、
夜松永氏来談
夜半一時過青山君来り
宿に戸を明け呉れされはとて
一泊を乞はる、

【欄外左側（縦書き）】

発加藤

3月10日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝、ラモレルよりサロン出品絵
を受取に来る
〔朝 顔〕
Belle-de-matin a }
Belle-de-matin b } 〔二連画〕
〔秋〕 dyptique
Automne
〔小放牛〕〔明時代の歌劇〕⁸⁴
Chohannue (Opera dynastie Ming)
〔ジョルジュ・ブティ画廊〕〔Société
〔Société
〔四旬節の中日〕
午後シヨザプチに Societe
nationale des beaux-arts 国民美術協会〕
nationale)
Nationaleの幹部達の展覧會
を觀に行く
夕食後、松⁸⁵廣瀬哲士氏の
所により夜半迄話す、

【欄外左側】

発信柳井、長尾[?]

3月11日 木曜

【欄外右上】

晴

【欄外上側】

ミカレム

【本文欄】

- 84 この年、児島が国民美術協会展に出品した作品は、次の4点と考えられる。
児島油彩画総目録No.301《朝顔》大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4050）、同目録No.366《朝顔》同所蔵（同登録No.4111）、同目録No.367《朝顔》同所蔵（同登録No.4112）のうちいずれか2点
同目録No.349《小放牛》同所蔵（同登録No.4127）
同目録No.365《秋》ポンピドゥー・センター/パリ国立近代美術館蔵
児島の国民美術協会展ほかサロンへの出品については次に詳しい。
サラ・デュルト「児島虎次郎のサロン出品について」『生誕130年 児島虎次郎—あなたを知りたい』図録、大原美術館、2011年、pp. 160-170
- 85 広瀬哲士（ひろせ・てつし、1883-1952）。フランス文学者。岡山県津山市出身。

午前在宅

午後松永氏とMusée廻

^(ロダン美術館)
~~母をなす~~ Musée Rodinに趣き、

^(クローズリー・デ・リラ)
^(Café Lilas)

夜cafe Liraの會合に趣く

^(Bénédite)⁸⁶
Mr Beneditを訪れロダン⁸⁷

作品の價格の問合せをなす、

(山田氏のた目め)

^(グラン・ブールヴァール)
夕方迄Grand Brdにミカレム

の景氣を観る

【欄外左側 (縦書き)】

来、須田⁸⁸

発、須田

86 レオンス・ベネディット (Léonce Bénédite, 1859-1925)。フランスの美術史家。リュクサンブール美術館館長、ロダン美術館館長をつとめた。

87 オーギュスト・ロダン (Auguste Rodin, 1840-1917)。フランスの彫刻家。

88 須田国太郎 (すだ・くにたろう, 1891-1961)。洋画家。

3月12日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

数日前迄の暖氣急に失して

寒さ加る

^(ロマ、ジプシー)
^(gitanos)
午前中Gitanoisを修作、

^(競売場)
^(hôtel des ventes)
午後Hotel de Vendに支那及

日本品の入札を見物に行く

夕方松永氏と散歩して

^(映画)
夜活動を観る

夕方ラモレルのアトリエにてサロン

出品の自作四枚の額^(額縁)を見る

3月13日 土曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

製作はとても出来ぬ、

旅行したいか何とか種々の事で

巴里に滞在して居らぬと心済ぬ

様な氣かする

日本から多数の人か来るので此等

のために色々の用事が生するのである

昼前モンマルトル迄遊ひに出かけ

^(ルーヴル美術館)
た午後ルーヴルに覗き夕方帰宅

日本への手紙数通をかく

夜松永氏来談、

3月14日 日曜

【欄外右上】

午後雨

【本文欄】

午前午後室内のとりかたつけを

やつた

昼食に外出少し雨は止た様

か降そふてある、日曜て人

出か多くて散歩するのも面白く

ない

午後降雨となる、

◎太田君から絵具の事を依頼し来る、

自宅より一向返信なし

病人のあるにあらずやと懸念

に堪す

^(ロマ、ジプシー)
^(gitanos)

夕方Gitanoisの絵を加筆す

【欄外左側（縦書き）】

来太田

発兄上、妻、遠藤、金山、藤⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹

3月15日 月曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

^(ロマ、ジプシー)
^(gitanos)

午後在室、Gitanoisを描く

^(リュクサンブール公園)
午後珍ルクサンブールを散歩して

^(アカデミー)
珍らしくアカデミにクロッキー

に寄る

3月16日 火曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

^(ロマ、ジプシー)
^(gitanos)

午前中Gitanoisを修作、

^(クリュニー美術館)
午後Musée Clunyを観る、

夕方少し散歩して寄寓、

一昨日頃より少し風邪の氣

味にて喉悪し、

夜久し振に一人 ^(ヴァイオリン) Violon を奏す

【欄外左側（縦書き）】

来信、須田

- 89 兄島の兄兄島徳太郎（1874-1947）のこと。兄島の実家は徳太郎が継いだ。
- 90 金山平三（かなやま・へいぞう、1883-1964）であろう。洋画家。
- 91 藤彦衛（ふじ・ひこえ、1897-1968）か。洋画家。現岡山県高梁市出身。兄島の住所録に名前がみえる。

3月17日 水曜

【本文欄】

(クリュニー美術館)
(Musée Cluny)
午前Musée Clunyに皿絵の

模写に行く

午後クロッキにアカデミーに

過す、

国元の誰れからも一向音信かない

郵便の遅延なる哉 或は国元

に何か異変かありて発信を何れ

も見合せ居られるや音信のなきは

実に心細くて心配のものである

夜数多の日本への書信を書く

【欄外左側（縦書き）】

来信ラモレル

3月18日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

(クリュニー美術館)
午前クリニーに皿絵の模写

(ルーヴル美術館)
午後松永氏とルーブル

(クローズリー・テ・リラ)
(Café Lilas)
夜Café Lilaの會合に出席す

(すっかり)
数日前よりの風邪かすかり

抜けぬ様である

少し暖かくなったら郊外にて

も出かけて写生か試み度、

或は田舎へ旅行して見た

くもある、

【欄外左側（縦書き）】

発、妻、柿原、林、石井、青の、

94
上田、小林

3月19日 金曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

(クリュニー美術館)
(Musée Cluny)
朝十時Musée Clunyに趣く

ペルシャ皿の模写

昼岡田君の所による

午後帰宅、模写絵を修正、

夕方前ラモレルにより

(クロッキー)
(croquis) 95
AcademieにCroquis

- 92 林源十郎〔十一代源十郎、甫蔵〕（はやし・げんじゅうろう〔ほぞう〕、1865-1935）であろう。林源十郎は薬種商を営む倉敷の実業家・社会事業家。その息子桂二郎は倉敷紡績に勤め、1922～23年に実施された児島と大原による西洋美術の収集・公開活動に深く関わった。1921年の児島の日記では、桂二郎やその兄彪太郎を指す場合、「林桂二郎」「林桂」「林彪」などと記して個人を区別しており、このことから、1920年の日記に「林」姓のみが記される場合は、十一代源十郎（甫蔵）を指す可能性が高いと考えられる。
- 93 児島の妻友の実家である石井家のことであろう。
- 94 上田喜平か。児島の同郷の友人。児島の住所録に名前があり、兵庫県武庫川の住所のほか、連絡先として中野貿易神戸支店、ニューヨークの「KONGO SHOKWAI」が記されている。
- 95 鉛筆にて「クロッキー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

に行く夕方散歩して帰る
夜バイオリンを少し練習
した

【欄外左側】

(アマン=ジャン)
来信アマンジャン

3月20日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(フォントネー)⁹⁶
午後松永氏と Fontenay

に写生に趣く

(スケッチ)
スケツ式枚して帰る

夕食後シネマ

3月21日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(競売
hôtel des
場 ?)
ventes?)
昼前モンマルトル迄出かく Hotel

Vendに立寄るも閉門

(オテル・デ・グランゾム)
Hotel des Grands Hommes⁹⁷

により、目京都羽田氏の在宿

の否やを尋ぬ、ロンドン直行

されたる由、後廣瀬氏の所にて

聞く、夕方迄同氏の所にて話

し夕方ルクサンプル^(リュクサンプール公園)を散

歩して帰る、

3月22日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(フォントネー)
早く昼食を終へて Fontenay

に写生に出づ

(都合)
電車直通にて都よし

終点の附近の梨花の庭を描

く夕方五時過迄にて終る

帰宅後少し散^{ママ}して夕食後

帰宅す、

【欄外左側 (縦書き)】

98
来中原

96 3月26日欄に、「フォントネー」からパリに向かう途中シャティヨンに立ち寄ったことが書かれている。このことから、この時期児島が頻繁に訪れている「フォントネー」とは、フォントネー=オウ=ローズのことであると推測できる。

97 羽田亨 (はねだ・とおる、1882-1955)。東洋史学者。

98 中原實 (なかはら・みのる、1893-1990)。洋画家、歯科医師。

3月23日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前ラモレルに趣く、
昼食を正午に済して^(フォントネー)Fontenay
に写生に出かく
昨日描きたる直傍の所にて
梨花の園を描く
夕方迄日光輝絶へず^ず五時
半写生を終り帰宅、夕方散歩
夜支那飯

【欄外左側】

発妻、

3月24日 水曜

【欄外右上】

曇、

【本文欄】

午前十一時写生に^(フォントネー)Fontenay
に出かく
昼食もせず^ず午後四時半迄写
生をつゝく、二十号、
五時過帰宅、飯を炊きて食事す、
夕方、^{(ラモレル(画材店))99} Lamorelle に^(画布)トワルを
求に行き松永氏と散歩
夕食を共にして九時過帰る、
日本より沢山の書信来る、
妻より広子、発熱にて苦心せしと
貯金絶へたる由申来る、

【欄外左側】

来信、妻、柿原、石井、青の、日本倶楽部
^(武内、矩一)
¹⁰⁰武内矩一

3月25日 木曜

【本文欄】

昼前在宅、
午後^(フォントネー)Fontenay に趣く
写生の場所見出せず^ず、暫時
附近を歩む、
先日中の近くの場所にて
梨杏の園を描き始む

- 99 鉛筆書きにて「ラモレル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 100 武内潔真(たけうち・きよみ、1888-1981)であろう。倉敷紡績で電気技師などを務め、のちに大原美術館初代館長となった。

急雨来りてとても写生
を終りそふになし
只デッサンのみ試みて
帰途につく

【欄外左側】

発信妻

3月26日 金曜

【本文欄】

午前九時過^(フォントネー)Fontenay
に写生に出かく
昨日描きかけし写生をつ
ゝく曇天の図なるもよく太陽
輝き時々雲を散[?]のみ
午後二時頃写生を終す
持参の味パンを食す、
四時前^(シャティヨン)Chatillonの附近の丘
より巴里を望みて写生を
始む終り頃小雨降る
七時前写生を終て巴里に
帰る今日一日よく勤めたり

【欄外左側】

太田君より為替^(フラン)千法
藤島先生より金百法¹⁰¹来着

3月27日 土曜

【本文欄】

朝ラモレルに趣き太田君より
依頼されし油絵具の
注文をなす、^{(リュクサンブール}
^{? (Musée}
午後松永氏とMusée
^{美術館)}
^{Luxembourg)}Luxanbeulgに出かく
夕食後直に帰宅、
昨日少し無理をして写生
をつゝけたるためにや身体
腰部少し痛むを覚ゆ

3月28日 日曜

【本文欄】

午前中在宅^(フォントネー)Fontenayの写生な
と修作す、
^(ギメ美術館)
^(Musée Guimet)午後Musée Guiméを観

101 日記巻末の4月出納欄欄外に「太田君より千法絵具代来る別途／藤島先生より百法マンシヤン作品送料来る、」と記されている。また、前年12月8日の日記には、アマン＝ジャンが藤島・児島に自作を贈っていること、同月10日の日記にはその作品を藤島宛に送付することについて、児島がラモレルに相談していることが記されている。これらのことから、「マンシヤン作品」は「アマン＝ジャン作品」の誤記であり、藤島から送金された100フランは、アマン＝ジャン作品の輸送料であると推測できる。

る、夕方散歩を終へル^(リユク)
サ^{サンプール公園}ブルに一時間ほと憩^{*}ふ
暮色清雅にして渺しの間
に黒き梢は新緑の若葉に
化し終れり
夕食後帰寓

【欄外左側（縦書き）】

発信太田、鈴木、山下、武内¹⁰²
石井来長谷川¹⁰³

3月29日 月曜

【本文欄】

午前絵具箱を携へてル^(リユク)
サ^{サンプール公園}ンプルに散歩す、
写生^ずせず憩ふ事一時間帰
宅昼食、
午後モ^(モデル)デル来る 十号にクロツ
キーを始む
ホテルは先日アカデミーにて
雇ひ置たるもの、
然し来て見ればさほど美
しくもなし、

【欄外左側（縦書き）】

発信石井、矩一、大原、林
長谷川

3月30日 火曜

【本文欄】

午前チュリップの花を写生す、
卓上に辰砂の壺に挿入す、
このチュリップはオルタンシヤ^(Hortensia アジサイ?)
との合種らしくローズにして
花瓣八重にて花輪大なり、
香もオルタンシヤの如し
午後モ^(モデル)デル来る 五十号に写
生を始む
立ちて読書しつゝある所、
折角描きたれとデッサンに
不慥^ずの所渺¹⁰⁴からず、
夕食外出、

【欄外左側（縦書き）】

発信原、
来信三宅

- 102 山下新太郎（やました・しんたろう、1881-1966）か。洋画家。児島とは、東京美術学校の同期卒業。
- 103 長谷川潔（はせがわ・きよし、1891-1980）。版画家。
- 104 この日制作にかかったのは、次の作品と考えられる。
児島油彩画総目録No.408《読書》116.7×90.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4101）
以降、4月22日までに見られる「チューリップ」「周囲の家具」「五十号」「赤きコルサージュ」「Corsage Rose」などの記述も同作品、またはその関連作である次の作品に関するものと考えられる。
児島油彩画総目録No.409《(婦人像)》45.7×38.0cm、個人蔵

小包にて太田君よりの
菓子来着、

3月31日 水曜

【本文欄】

午前中チューリップを描く
午後^(モデル)モデル写生、
夕食外出直に帰宅、

昨日小包にて、太田君より菓子
三箱来着
マルセーユ上陸の筈なりし京大
羽田亨氏の来欧に托されしもの
同氏直行ロンドンに向れしたためマルセ
ーユ^{ママ}より郵送されしなり、

【欄外左側（縦書き）】

来信、吉田、金沢、¹⁰⁵矩一、
岡崎、¹⁰⁶足立

4月1日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前今朝来着の為替金受取の
ため日佛銀行に趣かんとする
時、都鳥氏来訪、午前中在室
廣瀬氏の永眠の事につき
物語らる、¹⁰⁷
午後^(モデル)モデル来る 夕方迄写生
夕食方ラモレルに行き太田君
の絵具代支拂、
夕食後^(クロズリー・デ・リラ)
^(Café Lilas)Café Lelaの會合
に趣く、

【欄外（縦書き）】

発金沢
◎来柿原為替五、六〇〇〇来る

4月2日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前中、^(モデル)モデルの周囲の家具を

- 105 金沢巖であろう。児島と同郷の人物で、東京で薬局を経営。岡山県人会の世話人をしていた。
- 106 足立桂次か。岡山孤児院出身者で、中国天津で薬店および雑貨店を経営していた。
- 107 3月8日欄参照

描く

午後、ホテル写生夕方迄、
夕食に外出して帰る

柳井君より余か忠告し送りたるに
より、四十一日間すてに禁酒
しありと報し来る、

【欄外左側（縦書き）】

来信、柳井、林、
発信、矩一、岡崎、太田、

4月3日 土曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前五十号にモデルの周囲を
描く午後ホテル写生
一先づ描き終りたるもモデル
のデッサン何となく不正確
にて今一度描き正すの要あ
り、
夕方外出夕食後帰宅、

【欄外左側（縦書き）】

発信大原、

4月4日 日曜

【欄外右上】

雨曇

【本文欄】

午前早起 左耳と頭の左方
少し痛む、
午前中何事もせず吉田君へ
の手紙をかく
吉田君渡佛希望にて其準備
に要する諸注意
午後松永氏とルクサンブー
ルのミユゼを観る数日前
より全部開館されたる由、
大分新旧の差換られて陳列
されたるものあり、
夕方散歩、夕食後帰寓、

【欄外左側（縦書き）】

発吉田、

108 第一次世界大戦の影響により閉室とな
っていたギャラリーが再開室したこと
について述べたものと思われる。

4月5日 月曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前室内の取かたづけをなす、
午後、小倉 青山、遠山氏など
来訪、
夕食外出

【欄外左側（縦書き）】

発信柿原、原、

4月6日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

朝日佛銀行に日本よりの為替金の受取
に趣く5,6000
〔アマン＝ジャン〕
午後アマンシヤン氏を訪問不在、
久し振りに古道具屋を廻る、
書籍店にてペルシヤ美術□及、
〔シャヴァンヌ〕¹⁰⁹
シヤバンヌの支那彫刻□を
購ふ、
留守中、伊、独の旅行中なり
し山田氏来訪さる

【欄外左側（縦書き）】

来信、金沢、加藤、中原

4月7日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄～翌日欄外右上】

〔ホテル・ラ・ペルーズ〕
昨夜Hotel La Perouseの山田
氏に今朝訪問の事を約し居りたる
ため午前九時過訪問、
山田氏は明朝帰朝の途に発せらるゝ
由、〔アマン＝ジャン〕
アマンシヤン氏へ作品代金支拂
れ尚、ロダンの作品購入の事を
約せらる、午後アマンシヤン氏を訪
ひ大原よりの作品購入金1,2000
〔フラン〕
法を渡す、
アマンシヤン氏に導かれて〔グラン・パレー〕
に趣く、殆と陳列済なり¹¹⁰ 夕方より廣瀬氏

- 109 エドゥアール・シャヴァンヌ (Édouard Chavannes, 1865-1918)。フランスの東洋史学者。
110 国民美術協会展の展示のことを述べている。同展は同年4月14日よりグラン・パレーで開催された。

4月8日 木曜

【欄外左上】

晴

【本文欄】

午前外出書籍店に趣く、

^(シャティヨン)
(Châtillon)
午後Chalillonに写生具を

携へて出かけたれと少し眠

氣催して何となく氣進ます

二三時間散歩して帰る、

郊外は今桜花の満開

にて菜種も花盛にて美しき

事限りなし

夕方帰宅、壺の修繕をなす、

^(クローズリー・デ・リラ)
夜カッフェLilasに趣くも誰も

會集なし

【欄外左側（縦書き）】

来信、羽田亨堀久

^(アマン＝ジャン)
アマンジアン

4月9日 金曜

【欄外右上】

雨

【本文欄】

午前中手紙を書く、

午後、堀久（縣人）をHôtel

に訪ふ

夕方帰宅

【欄外左側（縦書き）】

発信、加藤、山中、木村、羽田

4月10日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中在室、

^(シャティヨン)
午後Chatillonに写生に趣く丘上

桜花の咲き満ちて芳香の

優れたるものあり、

巴里を望て一枚写生を終る、

夕方帰宅

夕食に出て活動〔映画〕を観る

【欄外左側（縦書き）】

来鈴木、三宅、

4月11日 日曜

【本文欄】

午前廣瀬氏を訪問不在、

靴を求む、

午後五十号の絵の描き足

らぬ所を画き続く、

【欄外左側（縦書き）】

発信足立、金沢、柳井、三宅

林、自宅、~~三宅~~妻、兄

4月12日 月曜

【本文欄】

午前在室、

午後モデル来る、

クローキー〔クロッキー〕を僅か試みし

のみにてモデル帰る、

夕方外出散歩

【欄外左側（縦書き）】

発三宅、須田、

4月13日 火曜

【本文欄】

Mlle Poulette

94, Bd^d Sebastopole,

午前Grand Palaisに

Vernisage〔内覧会〕に趣く¹¹²

本年は陳列作尠少にて非

常に静かなり、余の作三点は

階段つき当りの大なる室の

一隅によき光線に對して陳列

されたり、他の支那〔女優〕の作は隣

室に置れたり、クロース先生〔クロウス〕に場¹¹³

内にて面會す、午後モデル¹¹⁴

4月14日 水曜

【欄外右上】

晴

112 国民美術協会展の内覧会。前掲注110参照。

113 児島の「支那（女）優の作」は《小放牛》を指す。前掲注55および84参照。

114 エミール・クラウス（Emile Claus, 1849-1924）。ベルギーの画家。児島は第一次滞欧時、クラウスに制作の助言を受けていた。

【本文欄】

朝少し寒氣を覚ゆ
絵具箱を携へて（リュクサンブール公園）ルクサンブールに写生に出かけ寒冷にて
（風邪）風を引そうふなり（美術館）ミューゼに入る
（モデル）午後モデル来り夕方迄描く、
岡田君、松永君来室九時過
迄談合す、

【欄外左側（縦書き）】

発鈴木、三宅
来小野田、¹¹⁵ 疋田、¹¹⁶
¹¹⁷ Duthu

4月15日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前外出、
（モデル）午後モデル写生、
（リュクサンブール公園）夕方ルクサンブルに写生
に趣く、
（クローズリー・デ・リラ）夜lirasに會合、
【欄外左側（縦書き）】
来信 来信鈴木

4月16日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

（グラン・パレ）午前グランパレーにてClaus氏
と會遇の事先日約しありしたため
早朝出かく、Claus氏に會し
たるに急に帰国の事となりたれば、
今日面會出来ずと思ひ一昨日
発信して置きたりと
（モデル）午後モデル写生、
何か少し大なものを描て
見たく（クロッキー）クロッキー数枚を
試む

【欄外左側（縦書き）】

（クラウス）来信クロウス、¹¹⁸ 平塚、廣瀬、羽田、
発信、疋田、

- 115 小野田鉄弥（おのだ・てつや、1864-1948）
か。児島の岳父石井十次とともに岡山
孤児院の運営にあたった人物。
- 116 疋田直太郎であろう。児島の従兄で医
師。岡山県高梁市で眼科医院を営んだ
のち九州帝国大学医学部助教授。その
後、福岡市で開業した。
- 117 ローラン・デュトゥ（Laurent Duthu, 1865-
1932）。パリ外国宣教会の宣教師として
来日し、岡山ほか西日本で活動。児島は
デュトゥのもとでフランス語を学んでい
た。
- 118 平塚英吉（ひらつか・えいきち、1888-
1984）であろう。農学・蚕糸学者。1919
年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船し
ていた。

4月17日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝絵具屋に趣く、

午後^(モデル)モテル写生

○夕方アマンジャン氏来訪、サロン出

品中の同氏の作品は大原氏の購入の

ものなるに他に懇望[?]の人あれば他の

ものと変換し呉れとの依頼、承諾す

夕方シモン氏の宅を訪ふ、

サロン出品評に関する新聞切抜数

種、Le Lynx 及、

Argus de la Presse¹¹⁹

より¹²⁰送付し来る、

119 「Le Lynx」「L'Argus de la Presse」ともに新聞切り抜きサービスの会社。

120 セルヌスキ美術館か。

121 ポール・デシャネル (Paul Deschanel, 1855-1922)。第10代フランス大統領。

4月18日 日曜

【曇雨】

曇雨

【本文欄】

午前中殆ど何事もせず消過

昼前少し五十号の先般中描

きしものを修製す、壁の色を暗

く更めた、大分全体の調和

を得る様になりかけた

午後松永氏と Parc Monceau^(モンソー公園)

の傍の musée^(美術館)に出かけるか

尚閉館中であつた

方々散歩して夕方帰宅した

夜バイオリンを試奏

天候不定この頃雨多し、

4月19日 木曜

【欄外右上】

晴

【欄外上側】

△

【本文欄～翌日欄外右側】

先日アマンジャン氏より今日サロンの會

場に大統領デシャネル氏か¹²¹ I^(開会式?)□□□ glation

に来場さるべければ来れよとの事

なりしたため午前同会場に趣く余はバル

トロメ氏¹²²に面會して御無沙汰を謝せん
ものと出かけしか余はわさと、一行
の十時頃入場せしを避けて他室に在
りしにFlandrin<sup>(フランドラン)
(Flandrin)123</sup>の室に於て一行
と會しアマンジャン氏によりデシヤネル氏に紹
介され握手を求められたり氏に余の
作を賞賛されて^(derrière)derrière votre tableau ^(J'aime)J'ai une petite ^(violette)violet
と語られたる様聞へたり
午後、^(モデル)モテル習作 夕方羽田氏の用事にて書籍店に趣く13,[✓]
^(ジャコブ通り)Rue Jacob

- 122 ポール＝アルベール・バルトロメ (Paul-Albert Bartholomé, 1848-1928)。フランスの画家・彫刻家。児島が出品していた国民美術協会の会長をつとめていた。
123 ジュール・フランドラン (Jules Flandrin, 1871-1947)。フランスの画家。
124 Librairie orientaliste Paul Geuthner。東洋学専門の出版社・書店。

4月20日 火曜

【欄外右上】

晴曇

【本文欄】

午前赤き^(corsage 胸衣)コルサージの五十号

を修作

午後^(モデル)モテルを五十号に写生

を始む

夕方再び羽田氏用事にて

^{(ポール・ゴートナー 東洋学出版) 124}Librairie Paul Geuthner に

趣く

夕食後帰宅書信をかく

晴天なるに吹寒く冷氣

を覚ゆ

【欄外左側 (縦書き)】

来羽田、須田、奥村 La Revue Mo^(Moderne?)□□□□

発、羽田、妻、青の、三橋 Duthu

4月21日 水曜

【本文欄】

此の頃の天候は晴雨不定日勝

ちてある大低^(抵)毎日少しつゝの降雨

はある然し霽れて日の出る事も

珍らしくない

午前赤い^(胸衣)コルサージの絵を改

めた、

午後^(モデル)モテル来り少し写生した、

夕食かてら外出して夜新聞を読

む、

【欄外左側 (縦書き)】

○発信羽田、小野田、大原

4月22日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(バラ色の胴衣)
午前 Corsage rose の修作、
^(モデル)
午後 モデル 来る、
掃除日五時外出
^(クロゼリー・デ・リラ)
^(Café Lilas)
夜 cofé Lilas の集会に興
く、

【欄外左側（縦書き）】

来信、小林、直平

4月23日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

昨夜都鳥氏とサロン同行する事を
約したため朝出かけ午前
中在館、昼食を共にして帰る、
午後モデル写生
夕方散歩外出、

【欄外左側（縦書き）】

来信妻、直平矩一へ写真を
送る

4月24日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前日佛銀行に金の引出に興く
^(モデル)
午後モデル来りて写生
夕方夕食かたゝ散歩す
此週描きし五十号は小女
若き女か机の前椅子に
よりて茶碗と tasse を
^(カップ)
手にしたる側面より
最始より少し面倒なる構
図なりしたためなかゝにまと
まり難し 背後に花
瓶に花を盛りて写生す¹²⁵

125 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.532《コーヒーを飲む婦人》116.5×91.0cm、高梁市成羽美術館蔵

4月20日の「午後モデルを五十号に写生を始む」は本作の着手について述べたものであろう。以降、4月28日まで本作の制作に関するものと思われる記述が確認できる。

4月25日 日曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

五十号の昨日描た部分はとうも
何となく変て画面の調和を
害したる事甚たし 心痛に止
ます、午前中、□調の技の不能
なるを嘆す[?]
午後ルーヴル美術館^(ルーヴル美術館)に趣く、都山君
と會遇同君の宅に立寄り
作品を一覧す、
支那飯より帰りて松永氏と¹²⁶
直傍のホアルの曲馬を観る^(foire 緑日)

4月26日 月曜

【本文欄】

午前外出ペルシャの鉢を求む110
午後モテル来る、^(モデル)
顔面の改作に勉む、[?]
光□の調子を強く改めたる
ため何となく之までのものよ
り力強きものとなりこれなれ
は纏たるものと終るべく思はれ
来る
夜近所のホアルにて曲馬^(foire 緑日)
Cirqueにスケッチに趣く^(サーカス)

【欄外左側（縦書き）】

来信青の、~~半~~生余の餞別として小林
上田、柳井、青の、吉田氏より千法
来る、

4月27日 火曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

午後製作
夕方外出散歩

長尾一平氏より額縁^(額縁)見本
全部到着の由報し来る

【欄外左側（縦書き）】

来信矩一、青の
長尾

4月28日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前外出、
午後製作今日は手の辺デッ
サン不慥なりしを改む
曇天にて都合悪し
夕方外出散歩

【欄外左側（縦書き）】

来信小笠原

4月29日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前外出、
〔モデル〕
午後モデル写生、
〔クローズリー・デ・リラ〕
夜リラの會合に趣く

【欄外左側（縦書き）】

発信、長尾、小笠原、
平塚

4月30日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前外出書籍店に趣く
〔リュクサンプール公園〕
ルクサンプールの園樹新緑尚
鮮快碧空の下に陽光
明く初夏を偲ふ如し
〔モデル〕
午後モデル写生
夕食外出、

5月1日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今日の五月一日を期して各方面に同^{〔ス〕}

トライキ〕
盟罷工を起すべく予報あり
先つ各新聞共休刊にて、電燈
瓦斯は、支給を中止されさりし
も交通機関は総特志家によ^(篇)
りて夕方迄運転されたり
午前景況を見るべく外出、^{〔ルーヴル美術館〕}Louvre
に至るも閉館せらる、
午後モデル^{〔モデル〕}写生、
八号に顔を描く

5月2日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{〔フランス芸術家協会展〕}
^(Salon des artistes français)
午前Salon Artists Francais
を観る、殆と平年の如し、出品数
もあり巨作も尠^ずからず
^{〔国民美術協会〕}
^(Société nationale des beaux-arts)
Société Nationaleに寄り日本
倶楽部の昼食、
^{〔裝飾美術館〕}
^(Musée des Arts Décoratifs)
Musée art Decorativeに^手
^{〔チェコスロバキア〕} ^{〔民衆美術〕}
半Tchéco-Slovaqueのart
populaireの展覧會を観る、
家具服装に非常に趣味
あるもの多し、
夕方より雷雨あり、

5月3日 月曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

^{〔リュクサンブール公園〕}
午前外出ルクサンプールの公園を
散歩す、
^{〔モデル〕}
午後モデル来る、
十五号に横りて読書し
つゝある所を写生す

【欄外左側（縦書き）】

発信、妻、青の

5月4日 火曜

【欄外右上】

晴曇

【本文欄】

午前外出、静物を描んとて
花果を購ひ帰る、
午後^(モデル)モテル来る七八才の
女子を依頼し置きたれは連[?]
来る、
二人を^(階)階段の傍に佇して
十二号に写生を試む
夕方迄に描く、¹²⁷
夕食に外出する迄静物
のデッサンを造る

【欄外左側（縦書き）】

来吉田、

5月5日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来机上のペルシヤ壺に插花
して井に果物を盛れる静物[?]
を描く午後二時迄つゝく
^(モデル)
モテル来る五時迄デッ
サンを試む
五時より八時頃迄静物
をつゝけ描き終る、二十五号¹²⁸
今日は朝より外出せず筆を
とりたるため何たか労れた様
なり夕食外出散歩して帰る

【欄外左側（縦書き）】

来信、直平、伊藤、近藤¹²⁹
Pycke

5月6日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中昨日描きし静
物の写生を修作す、
午後^(モデル)モテル来る、子供の方
すてに嫌氣のさしたるや
なかゝ^{*}静かにポーズ
せず^ず
夕方迄写生、
夕方紙に静物（花）の

- 127 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.395《厨房 習作》
60.5×50.1cm、大原芸術財団 大原美術
館蔵（所蔵品登録No. 4095）
以降、6月24日まで、同作品および関連
作品（100号大）の制作に関する記述が
みられる。関連作品（100号大）につい
ては、11月1日に手直しを加えているこ
とが確認できる。
- 128 この日の朝から翌日にかけて取り組んで
いる25号の静物画は次の作品に該当する
と考えられる。
児島油彩画総目録No.438《鉢と盆》81.0
×65.5cm、個人蔵
- 129 フランソワ・バイク（Francois Pycke,
1890-1970）。ベルギーの画家。児島の第
一次滞欧時代からの友人。

写生を始む

130 下田将美 (しもだ・まさみ、1890-1959)。
新聞記者・経済評論家・随筆家。

5月7日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(小笠原?) 朝早く小笠氏を ^{(ホテル・} Hôtel Lutetia ^{リュテシア)} に訪ふ、
^(モデル) 午後ホテル来る 夕方迄写生、
小供欠勤、
夜新聞を読む

夕方、花の写生をつゝく、

【欄外左側 (縦書き)】

来信、松永

5月8日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(小笠原?) 朝小笠氏をホテルに訪問す、
時事新聞の下田将美氏¹³⁰と共に
同宿三人連立ちてサロン
^(装飾美術館) (Musée des Arts Décoratifs)
を観る、昼食後、Art decorative
を観夕方シネマに入り夕食
後帰宅

【欄外左側 (縦書き)】

来信、松永、平塚、羽田、

5月9日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

終日在宅、

5月10日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(ロンドン) 平塚氏ロンドン^(ロンドン)より来巴
^(ホテル・ノルマンディ) (Hôtel Normandy)
午前 Hôtel Normandi?
^(パスツール研究所) (Institut Pasteur)
に訪れ Institut Pasteur

に案内し午後製作を据
へ居るため 昼食後、帰宅、
夕方迄写生、

夜半松永氏^{〔モンティニー〕}Montigny
より帰宅、^{ママ}し明朝再び
出かくる由語らる
【欄外左側（縦書き）】
来信

5月11日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前平塚氏を案内してサロン
見物に出かく昼食を日本
人倶楽部にして帰宅

子供病気にて来る不能とて
女一人来る、
松永氏のモンチニー行に
同行すべく急に写生の道
具を^{？？}支度して午後四時
の発車にて^{〔Gare de Lyon リヨン駅〕}カールトリヨンに
趣く夕食頃モンチニー着、

【欄外左側～翌日欄外左側（縦書き）】
平塚氏明朝リヨンに向けて出発の由

5月12日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

中原氏女を連れて来村、
合計四人昨夜物語に
夜半を過く、
午前中、散歩して午後
水辺にて一枚の写生
を試む、
数日前より巴里に於て
肩の辺に何たか小な
吹出物様のもの出来て
痛みを感す何か毒虫の
類に刺れたる様の心地し

て氣持悪し

今日は道首より□の辺に擴大す

5月13日 木曜

【欄外右上】

□晴雨

【本文欄】

午前松永君の庭前にて
写生しつゝあるを写生す、
午後、雨にて室にて、夜
晩く迄語合ふ

5月14日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前庭の写生を鉛筆
にて試む人物を入れ
て描きたき構図なり
午後、十五位(少)の(モ)小女のモ
デルテルに来るべく先日約
し置きたれば向岸の
草原にて佇して描く、

5月15日 土曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前十時の汽車にて巴里
に歸るべく用意したれと
夕方七時の発車□のみ
なる由にて、
又写生道具をときて午前
午後向岸にて写生す、
午後七時の発車遅れて目
九時頃発、十二時前巴里
着、乗物なし荷物を携へて
歩み歸る、

5月16日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

肩より首の辺の腫物
一層烈しく痛み^目て
^{〔モンティニー〕}
Montigny 滞在中より
鬚をそる事不能、
朝薬店に趣て昇汞水¹³¹
と亜鉛華様の塗薬を求

む
^{〔塩?〕}
食監湯を造りて
終[?]□療治に尽す、

【欄外左側（縦書き）】

来、林、奥村、吉田、柳井、小林、
矩一、直平、

5月17日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午後モデル来る、
夕方迄写生す、
腫物療治の効ありて
少し快方なり、

5月18日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午後モデル来る
夕方迄写生、

5月19日 水曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午後モデル写生、

この数日療養のため
一^{〔切〕}斉^す外出せず、
終日室にあり、
外物に接せされは
何の心の防もなく却
て製作に集中する事
を得、

131 昇汞（塩化水銀）の水溶液。消毒液として用いられた。

5月20日 木曜

【本文欄】

午前在室、
〔モデル〕
午後モデル写生、
夕食後外出
〔クロースリー・デ・リラ〕
Cafe Lilasの會合
に趣く

5月21日 金曜

【本文欄】

午前在室、手紙をかく
〔モデル〕
午後モデル写生、
夕方松永氏と外出
絵具屋に趣く、
【欄外左側（縦書き）】
発信、林、青の、小林、
矩一

5月22日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔ルーヴル美術館〕
午前ルーブルに趣く、和蘭派
の開室ありて久し振り珍らし

〔モデル〕
午後子供のモデル来る、五才位
の女の子にて よく肥て愛
くるしあまり下層の家庭な
ず
らすと見へさほと貧相なる
哀感なし
夕方迄、紙上へ写生をなす、
【欄外左側】
来
Revue
Moderne

5月23日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔ルーヴル美術館〕
午前ルーブルに趣く
夕方迄散歩して歸る、

【欄外左側（縦書き）～本文欄下側（横書き）】

5月24日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中百号の下部の写生をなす、
午後^{〔モデル〕}モテル来らず^{〔モンティニー〕}Montugny
の写生を修作す、
四時頃モテル子供を連れ
^ずずして来る、姉の病氣進
みたるため病氣に見舞て
の帰りなりと、写生せ^ずず、
五時^{〔アマン＝ジャン〕}アマンシヤンを久振にて
訪問朝鮮人を描きたるもの、
愈々政府に買上る事と定まりたる
由報¹³²せらる、
夕方中川君を訪れ夕食を共にす、

【欄外左側（縦書き）】

発信、妻、柳井、青の

5月25日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

六月十三日記、

【本文欄】

モデルの姉病氣なりとて
午後來る事不能なる由なれ
は午前描く事としたり
今度描きつゝある百号の立
絵は構図に於て別に難
もなければとも非常になん
となく無理のある様の心
地して纏の一通の骨折
にては済ぬらし
☞先日の子来る、先日描き
かけし残の写生す、

5月26日 水曜 ～ 6月2日 水曜¹³³

【5月26日欄の本文欄】

此頃は半日のみ描くのみにし
て他は外出或は修作な
とに費す、時々日本の新聞

132 国民美術協会展出品作（前掲注84参照）のうち、朝鮮の民族衣装を着た女性像《秋》がフランス政府買い上げとなったことを述べている。

133 この期間日記を書くことを怠っていたため、この頃の自身の状況や考えを後日（6月はじめか）この期間の欄に記している。

なと来るため読む事あれと
も此頃佛書をよむの暇
なし

日記をかく事のすてに十余
日忘り^(意?)たりと日本への通信
なとも忘り^(意?)かちにて毎日
何となく氣かゝりなり
夜は仕事に勞れて早く眠
氣さし、朝は仕事に迫れて

【5月27日欄の本文欄】

ゆるゝ書筆^{*}とる事を得す、その日^{*}
の感想を記せねはとても十
餘日前の思出は不可能なり
時に書置たき事からなと生せ
しもすべき過ぎたる思出を呼
起す事の不可能なり
先月末迄に白耳義^(ベルギー)に趣かん
と決せしもモデル^(モデル)のよく通
勤するまゝに今一枚この作を
終へて後にせんと思ひ今月
早々には終了[?]をすべき筈

【5月28日欄の本文欄】

なりしも一度始めて見れば
とても急にかたつける事出来
ず今月もすてに終らむとして尚
仕事半に在り、
白耳義の旅は只の漫遊と
し趣くの□なれは一忒
週にて足らむ或は写生
にても試みんには短かくと
も一ヶ月を要すべし
早く出かけて歸らす^ずては夏^{ママ}
の仕事を得られさるべし
心の急きにな□それたけ

【5月29日欄の本文欄】

精力つゝかす、三日の仕事は一週
間に延ひてとても豫定通[?]
りに運ふ事一つもなし、
然し製作のために日の延
るは仕方なし、
朝は四時には明けて夜は
九時半には尚ほ日暮れやら
ず一日のなかきあき冬の倍

以上なり

其創合に氣持の□みにか仕事
なかゝ^{*}につゝ^ずかす折角なかき

【5月30日欄の本文欄】

日も働く時間は僅にして
却て冬の方働^(働きばえ)栄のする様なり
此の夏には何か屋外の大作
を試み度し
何れに地を撰ふべきに哉
如何なる主題によりて作^{ママ}図て
試みんか
興の乗り其境に接する迄
只ほんやりとして時日を
過すにはあま短^マかき滞^マ欧
の期日は貴重に過くるなり

【5月30日欄の本文欄】

五月もすきたり
昨年[?]の此頃は印度洋上に
する事なく毎日を船にゆられて
過せしと思へは一ヶ年は長き
様にもあり、
一ヶ年の間に何事をなしたる
か胸中必然に我と我[?]へ
か霊を以て接したる何事
ありや時は過したり多くの事
もなしたり然しそれ何物
物ならむ

【5月備忘欄】

宜[?]く家郷を去って余今
此地に何をか夢む
歸去来歸去来、我か
愛と思の家郷の地に
天地榮あれ我心は
愛に情に眞と誠の境
に□□活きん哉
何を望み何を夢てこの
他郷に□日の生をか
試みん哉

【6月1日欄の本文欄】

日記の怠り長きにつゝき其日の
記載を思出す事不能、
モテルの写生によりての製
作百号は毎日忘^(怠)りなし日曜

さへも、休みなし
然し其の進化甚た遅々と
し誠に心細し
途中子供の病氣^(かゝ)にかりて
より何事もな□□全体□□
り纏□に不都合生して
遺憾なり

【6月2日欄の本文欄】

調子は以前考へたるより
一層強きものとなりたり
全体の色調緑、青と
黒味かゝりたる、藍の色
にて今度の図には、
赤紅の色味、甚た稀な
り、光は殆と正面より受
けたれば画面の深味を
生ずる事の甚た、易からず、
子供の姿勢の比較的
困難ならさりしは幸なり¹³⁴

【6月1日・2日欄の欄外左側（縦書き）】

日記を十余日怠りたりこの間の手紙の往復
をなしたるものあれと今は記憶せず^す

5月31日 月曜¹³⁵

【欄外上側】

廣瀬哲士氏同道アマンジヤン氏を訪問
日本現作画サロン出陳の儀を再□
物語らる、¹³⁶

6月3日 木曜

【本文欄～翌4日本文欄】

午前中モテル来る、
今朝妻よりの来状にて琥一¹³⁷
郎先般中腹炎にて高熱
四十度を越へ遂に岡山より
醫を迎へ、日向の母に打¹³⁸
電して呼寄せたる迄の騒き
なりし由、幸に其後軽快
にして今は殆と全快心配
なしとの事、前も廣子の重
症なりしあり又琥一郎の病
みしと妻もこれ等子供の
病氣にての心労と、諸費用

- 134 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No. 396《厨房》161.8
×113.7cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No. 4070)
この題材、即ち、台所の階段傍に立っ
ている女性と子どもを描いた作品に5月8日
から取り組んでいることが確認できる
(前掲注127参照)。以降6月24日まで同
作品制作に関する記述がみられ、その後
11月1日に同作品修正の記述がみられる。
- 135 本文欄への記入内容については前掲注
133参照。
- 136 国民美術協会展で日本人作品の特別陳
列を行う計画のこと。廣瀬哲士が帰国
するにあたり、廣瀬に黒田清輝へ同計画
を伝達するよう依頼したものと考えられ
る(6月6日欄参照)。なお、この特別陳
列計画については次に詳しい。
松岡智子「日仏文化交流展と児島虎次
郎」『児島虎次郎研究』中央公論美術出
版社、2004年、pp. 341-380
- 137 児嶋琥一郎(こじま・こういちろう、1914-
1992)。児島虎次郎・友夫妻の第一子。
戦後、祖父石井十次の児童福祉事業を再
興し、児童福祉家として活動。
- 138 石井辰子(いしい・たつこ、1863-1927)。
社会事業家。児島虎次郎の義母で石井
十次の妻。十次の没後、岡山孤児院の院
長をつとめた。

の多^タ出にて経済も不充分
勝にて何かと心労多ければ
出来るだけ早く帰朝せよとの
事、余も何時帰るとも定め
居ら[？]さりしも家郷を思[？]ひ
妻の心労を察し子供の病
めるを思へはこの地に消日の
意義なきを思ふて帰朝の
期を決せんとす、

139 前掲注136参照。黒田からの回答につい
ては、9月27日欄参照のこと。

6月5日 土曜

【本文欄】

^(モデル)
午前モデル

毎日三時間位の仕事の
外殆となす事をなして日
を暮すにや
^(スペイン)
西班牙の旅にてもよく描き
たり帰春梨杏の花の頃も
郊外によく通ひ描きたり
この頃は大作に没頭する
とは云へ其の作の遅々た
る事甚しからず哉

【欄外左側（縦書き）】

発信、岡崎、近藤、金山、柳井、小林、
上田、三橋、妻、
◎林氏へ借金の事申送る、

6月6日 日曜

【本文欄】

^(モデル)
午前モデル

午後廣瀬哲士氏の朝帰朝
マルセーユに向け出発せらるゝ
^{(Gare de Lyon) ヨン駅}
をガールリヨンに送る、
廣瀬氏にアマンジヤン氏より
の明年或は明後年^(国民)Salon
^(美術協会展)
Nationalに日本画の特別
陳列の事を帰来黒田先生に
語らるゝ様申付て送る、¹³⁹
夕食を福田氏の所に御馳走
に案内されたるため、松永氏
と同伴す、

6月7日 月曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午前モデル写生、
午後アマンジヤン氏を訪問
松永中川氏同伴、
日本現代作品の特別陳
列につき
明年としては甚た急なれ
は或は明後年の事とな
りても差支なきものなる哉
に就て謀る、

6月8日 火曜

【本文欄】

午前モデル写生、
午後、辻永¹⁴⁰氏加藤静
児君¹⁴¹と来訪、
両三日前巴里着との事、なり、
何れにか宿を見出して一時
心易く落付たしとの事、
^{〔オテル・デ・グラン・ゾム〕}
Hôtel Des Grands Hommes
に同導したるに幸に両室
の明きたるものありて^(空)
明日、辻君の宿よりこの宿に
轉宅の事と定めらる、

【欄外左側（縦書き）】

発藤島、黒田、

6月9日 水曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午前中モデル百号殆と終了
午後松永氏来談
夕方より絵具屋及古道
具の辺を久振りにて散歩す
夕飯を都鳥氏、松永中
川の諸氏と共にす、
^{〔ラモレル〕}
ラモレに托し藤島先生パステル
運送料、残四十法を絵具を求め¹⁴²
て送付す、
右パステル箱代30fcs^{〔フラン〕143}、マルセーユ迄運送料30fcs
日本迄は郵船マルセーユ支店員の好意により
廣瀬の荷物として送料不要

【欄外左側（縦書き）】

- 140 辻永（つじ・ひさし、1884-1974）。洋画家。
141 加藤青児（かとう・せいじ、1887-1942）。洋画家。
142 前掲注101参照
143 児島はフランスフランの略記としてしばしば「fcs」を用いる。

発、加藤、Beaux arts、
aux
Salon、

6月10日 木曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午前中ホテル写生、今日にて久し
く描きつゝ、けし百号を一先
つ写生を終る事とす、
久し振りにて午後入浴に趣く、
^{〔クローズリー・デ・リラ〕}
夜Café Lilasの會合に出
席す
百号の女と子供の図はすてに
一ヶ月以上を費したりこの間
専心筆をとりたれば他に何
の作品もなし、

6月11日 金曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午前ホテル写生、
百号人物に女のバキオ<sup>〔ヴァイオ
リン〕</sup>
リン持ちて□せる図
を描かんとし大体の構
図は数日前より毎日作り
たり、大体の形と色をほとこ
す、午後はホテルの周囲を¹⁴⁴
下描す、
午後夕方散歩かたゝ外出、^{？ *}

【欄外左側（縦書き）】

来信、林、妻、矩一、吉田、青の
太田、石井、

【欄外右側（縦書き）】

発信、妻、林、矩一^{〔矩一、直平〕}直平

6月12日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午前ホテル来るも体の都合
あしくして充分ポーズする
不能、十一時頃帰る、
午後松永¹⁴⁵ 藤岡、辻、加
藤の諸氏来訪

- 144 次の作品について述べたものと考えられ
る。
児島油彩画総目録No.412《寓想》168.8
×132.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No. 4073)
以降、6月23日まで本作の制作に関する
ものと思われる記述がみられる。さら
に、9月18日から21日まで、本作の修正
に関するものと思われる記述がみられ
る。
- 145 藤岡昇（ふじおか・のぼる、1896-?）で
あろう。洋画家。

夕方外出

昨日と今日、吉田君より中

央美術来送さる

昨日大阪毎日沢山来着

通読するに忙し、

【欄外左側（縦書き）】

来信三宅

6月13日 日曜

【欄外右上】

曇雨

【本文欄】

午前^{〔モデル〕}モテル来る筈なりしも遂に

不参、午前中、百号の新らしきも

の、餘白の下塗をなす、

以前描きし百号の補修を

なす、

午後辻君来宅、同道して Menard¹⁴⁶

の宅を訪問せしも不在、

夕方□再び氏を同伴して帰る

夕食に外出す、

○加藤君より郵船の事返事ありて

一月始頃の三島丸に定めんかと考ふ

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、都鳥

発、三宅、~~田~~下田

6月14日 月曜

【欄外右上】

晴

朝九時頃モテル来る昨日は病院
にて注射をほどこしたるため終日発熱

にて就床せりと云ふ明日より入

院一週間ほど休みたければとの

事折角描きかけたるなれば今中

止されては如何もする不能白耳

^{〔ベルギー〕}義に出かけるに恰度都合よけれと

午後辻都鳥両氏と Menard の宅

を訪問す、^{〔Cottet〕 147} Cotte 氏あり、^{〔ベル・} Belle

^{ジャルディニエール百貨店〕} Jardiniere に洋服の假縫による

支那飯を共にして帰る

146 鉛筆にて「メナール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

147 シャルル・コッテ (Charles Cottet, 1863-1924)。フランスの画家。

〔正 会 員 〕
(Sociétaire) 148
サロンより Sociétaire の通知来る

【欄外左側（縦書き）】

来サロン

◎此日青野兄永眠の日

六月十九日

来電、¹⁴⁹

6月15日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前午後モデル来らず病気の勢か
或は事情の生して来勤する事を望
まさるや
終日百号を描きつゝ、く幸に今始
めつゝあるこの百号は人物は全画面
の凡そ四五分の一位の大きにて
室内の写生する処大部分なれば
モデルの欠勤もさほど差支を生せず
尚両三日は周囲の写生をつゝけらる
べし夕方平瀬君来訪なかゝ善^{*}
良なる性情の人なり、夕食に外出す、

【欄外左側】

発

Renée¹⁵⁰

6月16日 水曜

【本文欄】

朝製作に費す、先日メナール
の宅にて Cotte 氏に面會今日^{(Cotte) 151}
訪問の旨話し置きたれば午
食後訪問一時間余話合す、
画室の作品なか面白きもの^(なかなか?)
尠からず直接賣渡しをせ
ずとの事エッチング式枚を
買求む
午後帰宅を後れたるためモ
デル来りたるも不在なり<sup>(モ
デル)</sup>
しため帰る、

6月17日 木曜

【欄外右上】

旱[?]

- 148 鉛筆にて「ソシエテール」と書き添えられている。児島の筆跡ではない。
- 149 青野俊一郎死去の報に接し、後日、青野が死去した6月14日の欄に書き加えたものと考えられる。6月19日欄および6月備忘欄参照。
- 150 Renée Quinsi か。児島の住所録に名前がみえ、住所はパリとなっている。
- 151 鉛筆にて「コッテ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

【本文欄】

^{〔モデル〕}
朝ホテル来る昼迄写生す、
午後、外出
夕方前吉政氏来訪
午後製作に手を出せず、
夜、^{〔クローズリー・デ・リラ〕} Lilasの會に趣く

【欄外左側（縦書き）】

◎書留にて大原へ帰朝の事を申送る、

【欄外右側（縦書き）】

来信岡崎、原田瓊生、¹⁵²

- 152 原田瓊生（はらだ・たまお、1877-1960）。大原孫三郎の幼なじみ。高田商会取締役、日独貿易商会代表者などをつとめた。
- 153 新井完（あらい・たもつ、1885-1964）。洋画家。

6月18日 金曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
朝ホテル写生、
^{〔グランド・ホテル〕}
午後Grand Hôtelへ原田
氏を訪問す、不在明日
来訪を告置て帰る、
日佛銀行にて5000
受取る、
散歩後帰宅、

6月19日 土曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午前中ホテル来らされは昨日
の部分なる白百合譜面
臺の辺を描く、
^{〔グランド・ホテル〕}
午後Grand Hôtelに
原田氏を訪れ同道して
サロンを觀夕食後
^{〔オランピア〕}
^{〔L'Olympia〕}
Olimpiaに寄る、
夜半帰宅、
◎青野兄¹⁵³六月十四日永眠の
報来る 噫、

【欄外左側（縦書き）】

来電、青野兄の長逝を報し来る、国元、新井、加藤¹⁵³

6月20日 日曜

【本文欄】

朝、新井氏、来訪、昨日マルセ
^{〔リヨン駅〕}
^{〔Gare de Lyon〕}
ーユより今朝六時gard Lyon
着の旨と共に今朝来訪を電報
来らる、

154
ロンドンより加藤君再遊
訪問を受く午後松永氏と
四人連にて外出、
夕食後原田氏の独逸発をGar
du Nordに送りも入場し不
得す遂に面會する事を不得、

154 鉛筆にて「静児」とかき加えられているが、児島本人の筆跡ではない。なお、この「加藤」は「ロンドンより」「再遊」していることから、御木本真珠の加藤虎之助であると考えられる。本誌前号所収「資料紹介 児島虎次郎日記 1919年(大正8年)」p. 102, 120参照。

6月21日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(モデル)
午後モデル来る夕方迄描く、
夕方加藤氏来訪、
明日帰倫の筈、
夕方散歩して帰寓、

6月22日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、製作—
午後辻氏とBelle Jardi
ニエール百貨店
nièreに趣く
夕食後帰寓

6月23日 水曜

【本文欄】

午前中製作 殆と百号の絵
を描き終る、
午後辻、新井氏と後れて
都鳥氏、^(スペイン) 西班牙よりの須田
氏を同導して来訪、
日本食を作りて夜を
深し語る、

6月24日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、先日描きし臺所の絵の子供
の服の紫色にして全体の調子に
□さるため再應淡桃色の

服に改める事して午前中に
描き改む□以前より明部
の調子の整たると思ふ
午後須田氏の宿を訪れ
同導してサロン見物に出
かけて夕食を共にしCafé
デ・リラ
Lilasの會に出づ

【欄外左側】

発
? ?
Hoffmann
Eugene

6月25日 金曜

【本文欄】

午前モデル来るも氣持悪しとて
早歸、
午後、大使館に旅行券の事
につき出かく
夕方散歩して歸寓、

【欄外右上（縦書き）】

来信
加藤

【欄外左側（縦書き）】

発近藤、妻、原、郡、岡崎¹⁵⁵
? ?
Hoffmann Eugène

6月26日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前モデル写生、
午後Passyの活動館にて
日本のフィルムの撮写ありと
て案内され、趣くFranco-
japonaisの催しなり
夜支那飯にて同食す

6月27日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝須田氏を訪問し午後、

155 郡虎彦（こおり・とらひこ、1890-1924）
か。劇作家。兎島の住所録に名前がみ
え、住所はパリ近郊のムードンとなっ
ている。

(シ ヤ ン ゼ リ ゼ 座)
(Théâtre des Champs-Élysées)
Théâtre Champs Élysées

¹⁵⁶
に Isadora Duncan の

舞踏を観る、

(ラ・マルセイーズ(フランス国家))
(La Marseillaise)
終りに Marseillais

の歌につれて彼の試み

たる動作はよく其の

歌意を語るものありたり

○此の夜夢に誰人か来りて姉¹⁵⁷の死

せるを告ぐ

6月28日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ベルギー)
午前白耳義領事館に旅券

のため

午後、須田氏来訪、同導し

(アマン＝ジャン)
てアマンシヤン氏を訪れ

夕方迄、カフェに語る、

(グラン・ブールヴァール)
夕食後 G^d B^d を散歩して

帰宅、

【欄外左側（縦書き）】

来、矩一、林、原、金沢正田

柿原

6月29日 火曜

【本文欄】

(モデル)
午後モデルにて百号を

修正

寝

6月30日 水曜

【本文欄】

半日百号修作

(カジノ・ド・
夜細田氏 Casino de

(パリ)
Paris を観る

【6月備忘欄】

六月十九日夜半原田瓊生氏の来巴にて案内を

終り帰寓卓上式通の電報来信、

一つはマルセーユより新井完氏の発

一つは日本の誰よりか、「青野、五六月

156 イサドラ・ダンカン (Isadora Duncan,
1878-1927)。アメリカの舞踊家。

157 谷田タキ。兄島の実姉。

十四日死」すの通知なり、
一ヶ月半ほど前の同兄よりの来信、に目下^{ママ}
健康不良元氣も衰へたる様にて
文中、今一度、君に遇^{ママ}いたしとの
文句あり、其の悲惨読むに
堪す、兄の文言は常に病者に
類す、壮にしてかるゝ文言の一度
たりとも書中に在りしを見ず、彼れ
終焉前今一度面會して心逝く
別辞を呈し度きは余の望く所なるも
余は如何にしても兄と永遠の離
別の余か帰朝迄に来るべき事<sup>(来るべきから
ざる事)</sup>るべから
ざる事を確信せしか昨年五月初め
兄が令室の永眠の其日余の発途に
察し泣言其行を送られたるを思へ
は兄か終りの言葉を聞きしは実に
昨年の発途の其日に帰せし噫
彼に謝し彼に誓ふべきものは
余か今後の修養向上にのみ帰す
余か責は今一層の奮励を要す
べき哉

【六月備忘欄の欄外左側（縦書き）】

我最も愛する友よ静寂なる床と眠にあれ

7月1日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

昼前須田氏来訪
午後同道して Bon^{(ボン・}
marche 及 Louvre に趣^{マルシェ百貨店) (ルーヴル美術館)}
く、
夜 Cafe Lilas^(クローズリー・デ・リラ)

7月2日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

明日白耳義行のため荷造をなす、
午後 Gard du Nord<sup>(ベルギー)
(北 駅
Gare du Nord)</sup>にて
切符を求む
午後も荷造りをなす、

【欄外左側（縦書き）】

来、原田、疋田
加藤

7月3日 土曜

【本文欄～翌日本文欄内上部】

午前荷物など取纏のため
費す、
正午前（北 駅）停車場Nordに
向ふ
須田氏と同車して十二時
半発車、
途中検国境検の手續も至極
簡単にて延着七時過（ブリュッセル）ブル
クセル着Gard du Nordの
近（ホテル・セシル）くのCecilに宿す、
北佛の戦場沿道に眺めて
其の惨状は白耳義（ベルギー）に入りてより
以上烈しきものあり

【欄外左側（縦書き）】

発石井、妻、矩一、林、原、太田
加藤、小笠原、疋田

7月4日 日曜

【本文欄】
（サロン・デ・ブランタン）
（Salon de printemps）158

午後、Salon plintempsを觀、
Musée見物新159旧を見る、
余は夕方五時過の列車に
て（ゲント）ガンに向ひ七時頃着、
停車場前?のIbiseに宿る、
て（パイク）
（Pycke）160Pyke君の家を夕方訪問す、
和蘭旅行中にて不在
失望深し
市中を一巡したれとも誰れ
一人知人に會遇せず
思へはガンの生活は八年前の昔に
に過ママき去りたり

7月5日 月曜

【本文欄】

（デルヴァン）
午前テルバン先生を訪問
す、アカデミー休暇なるを

- 158 ベルギーの王立美術協会による第8回サ
ロン・デ・ブランタンであろう。
159 「新旧」は、王立近代美術館と王立古美
術館を指すと考えられる。
160 鉛筆にて「ピカ」と書き添えられてい
る。児島本人の筆跡ではない。

知らず先づ^(アカデミー)アカデミーに
 趣く後デルバン氏の宅を
 訪る、先生画室に在りて
 其所に訪る（大雨にてビシヨ濡れとなる）
 近年喉を痛められて話す
 事にも食事さるゝにも甚た不
 自由なりと聞く発音明瞭
 を欠く、或は咽頭癌の如
 きものなるや？¹⁶¹氣の毒千萬なり、
 午後Hoffenbomeを訪る、
 【欄外左側（縦書き）】
 昨日より¹⁶¹急雨よく降る、

7月6日 火曜

【本文欄】

正午前の汽車にて^(アステネ)Astenne¹⁶²
 にClaus先生を訪問す、
 先生相変らず¹⁶³元気よし
 四時先生同道にてMlle^(Montigny)164
 Montinieを訪れ、
 夕食の御馳走になりて
 九時過^(ゲント)ガンに帰る、
 日曜日より毎日の如く
 雨にて降れ通しなり
 「^(美術館)朝、Muséeを一覧す、先年
 ガンの萬博に出品せし^(大きな)夫きFemme au
 grand chapeau^(帽子の女)はデルバン先生に
 贈り[?]置たるに先生よりこのMuséeに¹⁶⁵
 寄附されてよき位置に出品され居れり

【本文左側（縦書き）】

小雨、 発信、松永妻、大原、

7月7日 水曜

【本文欄】

朝^(ブリュッセル)Bruxelle^(Bruxelles) 166 に向ふ、
 須田氏の宿を訪ねたれと
 不在、
 午後^(サンカントネル美術館)Cinquantnair^(エジプト)に埃及
 のCorect^(collection?)□□□を観る量に於
 て甚たからさるもなかに^{*}
 観るべきもの尠からず
 夕方¹⁶⁷須田氏に會ひ

- 161 児島の住所録に「Ernest Hoffenbom」とあり、住所はゲントとなっている。画材店。7月29日欄参照。
- 162 鉛筆にて「アスタミー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 163 鉛筆にて「クロース」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 164 ジュニー・モンチニー (Jenny Montigny, 1875-1937) であろう。ベルギーの画家で、エミール・クラウスの弟子。児島の住所録に「Melle J. Montigny」の名がみえ、住所はゲントとなっている。
- 165 次の作品を指している。
児島油彩画総目録No.193《大きな帽子をかぶる女》ゲント美術館蔵
同作は、1919年にジャン＝ジョゼフ・デルヴァンより同館に寄贈された。
- 166 鉛筆にて「ブルクセル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 167 鉛筆にて「會」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

夕食後十時の□□にてガ^(ゲ)
ン^(ント)に帰る、

【欄外左側（縦書き）】

小雨

7月8日 木曜

【本文欄】

朝Brug^(ブリュージュ)_{(Bruges) 168}に向ふ、沿道[?]
戦禍の様見られず、
昼前と昼後一通り廻
り歩く
昔のまゝにて何の異変なし、
午後六時ガ^(ゲント)ンに帰る、
ガンを夕方なと散歩しても町並も
店頭も殆ど八年前と何の異変なき
に何となくそれか変に感ぜられる事は
自分の境涯の差から生ずるのかそれ
とも、自分の周囲から来る種々[?]の事情
によりて自分の此の地か旅人として
取扱ふのであろうふか

【欄外左側（縦書き）】

小雨

7月9日 金曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

朝九時頃須田氏ブルクセル^(ブリュッセル)より来訪殆
と秋日方々の見物をなす、昼前Musée^(博物館・美術館)
に過し昼食後Chateau des comtes^(フランドル伯居城)
に入り、Sant Babo^(聖バーフ大聖堂?)□□より、
St Pierre^(サン=ピエール)の郊外の辺を散歩す、
須田氏は午後夕方の列車にてブル
セル^(ブリュッセル)に帰らる、Muséeの番人か
君は前に来て居た人であろふとよく
自分の事を覚えて居ったのは不
思議[?]な位であつた

7月10日 土曜

【欄外右上】

晴、

【本文欄】

168 鉛筆にて「ブルージュ」と書き添えられて
いる。児島本人の筆跡ではない。

朝七時四十幾分の列車にて^{(アントワープ) 169} Anvers
 に向ふ、今 Anvers に於て十八世紀
 より^(二十) 廿世紀迄の大家の作品陳列
 ありて見るべきもの^ず 尠からず (catalogue)
 年後、昼頃となりて^(美術館) Musée より^(エスコール・スヘルデ川) エスコ
 の川岸に出た、殆と十三番の日本郵船
 の船付の傍である、以前日本^(飯?) □屋の
 あつたのはこの辺なりしかと彷彿、
 戦争中、閉店したるも戦後新たに開かれ
 たりとて久し振りに^(蒲) 鰻の痛焼を味ふ
^(アントワープ三年展) 午後 Salon Triennial
^{(Frederic) 170} Frederique の大作賞嘆を深ふす、
^(ブリュッセル) Carte 氏の一枚出品せるも^(Bruxelles) Bruxelles
 の方、佳作とす、^(ゲント) 夕方ガンに帰る、

7月11日 日曜

【本文欄】

午前郊外の辺を散歩す^{(リス川(レイエ川)?)} Lise の^リ 辺なか
 *
 くに静寂なり、
 午後デルバン先生を訪問す、画室をたゝ
 きたるも不在先生の宅にて面會す、半
 時余話合す、^マ 久し話す事は先生を苦し
 めるのみなれば、と辞し帰る、
^{(サーカス) ママ} 夜 cirque に観る^(立ち見席) parterre にて二人
 の姉妹らしき若娘しきりに余に注目す
 後にて尋ねれば^(ゲント) 先年ガンにてよくモデル
 に雇ひし Angele なりと八年前の
 見覚殆となし

【欄外右上 (縦書き)】

¹⁷³ 発、成羽、宅
 太田岡崎
 金沢、辻
 妻、柳井、
 矩一、
 加藤、松永

7月12日 月曜

【本文欄】

午前中絵具箱を携へて町中を散歩
 す、描てみようと思ふ所^ず 尠からざるに
 なか^{*} 其描く場所を得ず、若し
 充分に何れなりと描く都合よき

- 169 鉛筆にて「アンベルス」と書き添えられて
 いる。児島本人の筆跡ではない。
- 170 レオン・フレデリック (Léon Frédéric,
 1856-1940)。ベルギーの画家。
- 171 アントワープ三年展に出品されていたレ
 オン・フレデリックの大作は次に該当す
 る。
 レオン・フレデリック《万有は死に帰
 す、されど神の愛は万有をしてよみがえ
 らしめん》大原芸術財団 大原美術館蔵
 (所蔵品登録No.1091)
 児島はのちの第三次滞欧 (1922~23年)
 の際、フレデリック本人より同作品を購
 入することとなる。
- 172 アント・カルテ (Anto Carte, 1886-1954)。
 ベルギーの画家。
- 173 成羽 (なりわ) は児島の故郷、現岡山県
 高梁市成羽町。ここでは、実家の児島家
 を指していると考えられる。

位置を求め得らるゝなれば、少しは
紀念の製作も出来得べきにと思ふ
午後、散歩をつゝく、夕方迄、
(ゲント旧市街)
Vieu Gandに雨をさけ、
夕方、Angeleと其従姉と
宿の夕食を共にす、

7月13日 火曜

【欄外上側】
(ブリュージュ)
Brugesにて

【欄外右上】

晴

【本文欄～翌日欄の欄外左側（縦書き）～翌日本文欄内上部】

午前殆ど何事をもなさず、
正午頃の汽車にて(ゲント)ガンを引
¹⁷⁴
揚げBrugesに向ふ
先日この地来たる時、(魚)marche
(市場)
aux poissonsの隅の所(運河)canale
(カフェ)
に面したるcafeにて(貸)chambre
(部屋)
a Loueの札かかり居りしたため
数日後に来るべき由話し置たり
れは直にこの画室の如く廣く
明るきしかも朝のカッフェ付て
(フラン)
3fcsと云破格の安價なり、に入る事を得
夕暮、(ベギン会修道院)ベギナーレの辺にて
スケッチをなす、
この夜何にも描かず町の間を散歩
して暮す、

7月14日 水曜

【本文欄】

朝宿の室内より魚市場の写生を
始む非常に都合よき場
所を得たり、
暑さと日光に戦て困難なる
仕事をなさずしてこの宿の中
のみにて幾枚にても描く事
を得
午後宿の廻廊より向岸を
眺める□写生を始む
こはなかく面白き構図を得られ
そふなり、¹⁷⁵

- 174 鉛筆にて「ブルージュ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 175 児島油彩画総目録No.388《ブリュージュ舟宿》の関連作のうち次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.385《ブリュージュ舟宿 習作》65.2×50.2cm、個人蔵
翌日まで制作が続けられていることが確認できる。

7月15日 木曜

【本文欄】

朝は大低七時半頃起床鬚剃してカツ
フエを宿の臺所に飲みに下りると大低八時^(抵)
半より九時頃となる、
昨日の魚市の画をつゝく、宿の奥部屋
は全明にて自分一人窓きわに立ちて^(空?)
ガラス窓越しに窓外的人群を写生する誰^(誰)
れも側に寄集まつて邪間するものもな
く非常に心静かに描く事が出来る、
午後は昨日の廻廊の描残りなる、向岸の
辺の写生をなして直に終る、
このスケッチに寄りて今少し大なるもの製作
して見たし、
夕方迄鉛筆に[?]同じ場所の写生をなす、

7月16日 金曜

【本文欄】

^(魚市場)
marche aux poissonsの絵は今日
一日描きつゝく要あり久しく筆を休
みたつためにや、なか^{*}く仕事はかと
らず、
式度の食事は^(大広場) Grand placeの側
^(レストラン)のrestaurantに通ふて居る、昼夕
□□、
午後廻廊の画の構図製作材良として^(料)
左方の柱の立並た所を至極大体
の色と形を写生す、其頃恰も宿の
^(マドモワゼル) Mademoiselleにて二十才位?の目
人この廻廊に來りて針仕事を始む
早速依頼して油にて単なる写生をなす、¹⁷⁶

7月17日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中宿の室より窓外を望みて
写生す、今日一日にて終了せず、
午後、廻廊^目の習作を一枚
作る、右部の櫓なと置き
たる方なり、¹⁷⁷
今日朝より日光強く暑さ烈

- 176 児島油彩画総目録No.388《ブリュージュ
舟宿》の関連作のうち次の作品について
述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.386《ブリュージュ
舟宿 習作》66.5×46.9cm、大原芸術財
団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4097）
177 児島油彩画総目録No.388《ブリュージュ
舟宿》の関連作のうち次の作品について
述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.384《ブリュージュ
舟宿》65.3×53.0cm、個人蔵

し

夕食前宿のAnnaなる七才位

の女の子に日光照射たる正面の

顔を写生す、¹⁷⁸

【欄外左側（縦書き）】

発妻、井上、加藤、

7月18日 日曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

今朝は早起して昨日より描きかけし窓

よりの画を描き終らむと希望せしも

朝来曇天にて如何ともなす様もなし

小さな写生箱を携へて附近を

散歩す、Notre dameに寺の

裏の方の石橋の辺に出て物珍しく

スケツ^{〔スケッチ〕}を始め数度雨に降られて[？]

軒下に憩^{*}ふ、正午頃より霽れて

明光鮮かし

午後、部屋の窓より写生を始む角岸の高い家と

樹木の式三本繁り聳ゆる辺り堀

割の水に向横岸の白亜、赤紅の家壁[？]

美しく影したり[？]

【欄外左側（縦書き）】

此の夜、クランプラス^{〔グラン・プラス、大広場〕}にて奏楽ありて

沢山の人出なりし

7月19日 月曜

【欄外右上】

発

Renée

晴

【本文欄】

朝曇り勝なり、昨日描きかけし

窓より、caillon^{〔鐘〕}の塔を望みて描き

かけし画をつゝく、空の晴れたるを求め

しもとても雲の去る様子もなければ飛

雲^{〔斑〕}の班々たる空に改む¹⁷⁹

午後宿の娘さんのデッサンを素描す、

これ位にして置てさへ尚帰つて画室で

製作するとすれはなか^{*}うまく行かぬ

178 次の作品について述べたものと考えられる。

児島油画総目録No.397《少女の顔》
41.0×32.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4078）

179 プリュージュの塔を描いた次の作品について述べたものと考えられる。

児島油画総目録No.391《プルーシュ風景》66.6×57.6cm、所蔵不明

事であろう、
夕方、窓外の角岸を画きつゝく、午後と
なり窓全^(空?)く雲なく晴れたりこの夕方の画
には雲の必要なるに、

7月20日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今日此の地を去り^(ゲント)ガンに寄て和
蘭の旅行を終り然して直に巴
里に帰る必要なく、或はガンにて
何か一枚製作をなし得るの
機会をあれは、一週間滞在
して描て今月末か来月始め
巴里に帰れはよきかと数日来の考
へ中なりしかさて今日となれば
何たかこれ迄描かけの絵か今少
し改作して見たく、尚^(コンポジション)コンポジション
の分の今少材料豊富にして帰らねは、
西班牙^(スペイン)の旅行の様な失敗を繰返
すやも知れず、
明日出立するとも、今日午前、午後前日の仕事
を□□□□

7月21日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前何か一寸とりかたづけをなしたると
鉛筆のスケッチをなす、午後列車
にて^(ゲント)ガンに趣く、明朝は和蘭の
旅を試むべし、これにて少し
つゝ旅行の数は終て行くも製
作の方は一向望むほどのもの
出来ず然し飛歩行旅にてはと
てもこれ以上の定まりたる事出来ず
和蘭は四五日間の旅程の筈にし
て今月中には巴里に帰り得んか

【欄外左側～翌日欄の欄外左側（縦書き）】

来[?]信[?]巴里より廻送
松永、原、妻、林、吉田、加藤 三宅、平塚 堀、柳井、小
林、柿原、須田

7月22日 木曜

【欄外右上】

雨曇

【本文欄】

午前七時過の列車にて^{(アントワープ) 180} Anvers 着、
同地十一時の列車にて^{(アムステルダム) 181} Amsterdam
に向ふ、税関の面倒あまりに事
なし列車の^(徐)除行なると国境乗換
などにて甚た手間とる、
午後五時半^(ヴィクトリア・ホテル)アムステルダム着
駅前のHôtel Victoriaに泊す、
直に須田氏の宿を訪る、須田氏<sup>(ロッテルダム)
(Rotterdam)</sup>
今日 Rotterdame に趣かれたる
由にて小生の電報は不在中に着し
たる由、夕食後散歩して宿に
つく、

7月23日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前須田氏と<sup>(国立美術館?)
(Musée Etat ?)</sup> Musée éta を観
^{(Rembrandt) 182}る、Rembrant の作品は以前
の記憶に在るもの見当らず未成品
にて[?]絵具の生なるもの盛に塗られたるも
の在りしと思ひしに一向に見当らざる
は如何なる次第なるか不思議千萬
にして夢の如し、^{(van Dyck) 183}Van Dyc と共に
この^(美術館)Musée にて見るべき只一つの
ものか新画の部に、^{(Segantini) 184}Segantiny
のデッサン?一枚あり、午後市の
Musée を見る此所にも観もの尠
からず¹⁸⁵ゴッホ等、

7月24日 土曜

【欄外右上】

雨

【本文欄】

^(ビザ)朝 Visa のため^(ベルギー)雨中白耳義
領事館門前に佇つ、大雨小
雨止みなし余は帽子より靴

- 180 鉛筆にて「アンベルス」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 181 鉛筆にて「アムステルダム」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 182 レンブラント・ファン・レイン (Rembrandt van Rijn, 1606-1669)。オランダの画家。
- 183 アンソニー・ヴァン・ダイク (Anthony van Dyck, 1599-1641)。フランドルの画家。イングランドで活動。
- 184 ジョヴァンニ・セガンティーニ (Giovanni Segantini, 1858-1899)。イタリアの画家。スイスで活動。なお、鉛筆にて「セガンチニー」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 185 フィンセント・ファン・ゴッホ (Vincent van Gogh, 1853-1890)。オランダの画家。

外套は裏迄水透してやつと
正午頃門内に入るを待たる時
直に閉館なるを告ぐ、午後と明日
は休みなりと折角雨に三時間
目も濡れて何の効もなし、
(ロッテルダム)
(Rotterdam)
Ratterdameにて受くる事として
再びこの苦しみを見ましこの日の苦痛
は終生忘れまじ
(博物館・美術館)
(m u s é e)
午後、Muséeに趣き僅か一
枚のスケッチをなす、
夕方須田氏を訪問す、

【欄外左側（縦書き）】

発 大原
矩一、妻、松永、吉田、小林、□□□□□
辻 夫原 林、三橋、柿原、都志、
柳井、兒島、

7月25日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

九時の汽車にて Amsterdam (アムステルダム) 186 を
発す、途中 Leiden (ライデン) 187 に下車、Musée (古代)
(Musée des Antiquités)
Antiquetie (博物館) を訪れむかためなり、
昼食後 musée (博物館) に来る、日曜なるため
午後二時より開館との事、忒時迄附
近を散歩して Muse (musée) を訪る、館中
(エジプト) (蒐集)
埃及の集蒐は最も驚くほと豊□な
るものとても、Bruxelle (ブリュッセル) などの比
(Bruxelles) 188
にあらず？三時半の列車に投せむとて
急遽停車 (停車場) に出つ日曜にてこの列車なし
五時半迄待つ間再び Musée (デン・ハーグ) 189 に引返
して参観五時半発 La Haye 夕食前
着往年投せし停車場前に泊す

7月26日 月曜

【欄外上側】

晴

【本文欄】

朝、日本領事館に趣く館員参
勤なし、Musée (美術館) 190 を観る Rembrandt (Rembrandt) 191

- 186 鉛筆にて「アムステルダム」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
187 鉛筆にて「レーデン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
188 鉛筆にて「ブルクセル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
189 鉛筆にて「ラヘー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
190 王立絵画館（マウリッツハイス美術館）を観覧していると考えられる。後掲注194参照。
191 鉛筆にて「レンブラント」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

の作品は往年より一層の光輝
(Potter)¹⁹²
を發したる如見ゆ、Potteyの
牛と羊の大絵は先年甚だ感心
せさりしか其左下部の羊と
(シャヴァンヌ)¹⁹³
草花のあたりはシヤンバンヌ以
上の装飾的効果を得てしかも、
其の麗氣愛すべきものあり、
(ロッテルダム)¹⁹⁴
〔ビザ〕Visa正午頃終る直にRoterdame
(ベルギー)¹⁹⁵
(Belgique)¹⁹⁶
に趣き一時半餘にしてBeliqu
のVisa終る、佛国領事館に趣し
(デン・ハーグ)¹⁹⁷
か其必要なしとの事夜夕方La Haye
に帰る

【欄外左側（縦書き）】

¹⁹⁸
發赤木、金山、太田、原、Duthu、疋田、

7月27日 火曜

【欄外左上】

(デン・ハーグ)¹⁹⁹
La Haye

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝早起、今日出發前Musée Mesdag
(メスダグ美術館)
を觀とす、やつと開館頃Muséeを
(美術館)
探し出す、前回見し時にはかくほと思
²⁰⁰
さりしかMilletの作品油絵三点内
(セガ
一枚の静物、パステル式枚あり、
ンティーニ)²⁰¹
ンニーのパステルはさほどの佳品に
ず (バルビゾン) (蒐集)
あらず、バルビゾン派の集蒐は欧州
にても有数なるものと云ふべし、
(アントワープ)²⁰²
正午過ぎの列車にてAnversに向ふ、
(停車場)
七時頃着停車前に宿し河岸の日本
飯屋にて夕食す、

7月28日 火曜

【欄外右上】

曇

(アントワープ)
Anvers

【本文欄】

朝散髪に趣きMuséeを觀る、後
(博物館・美術館)
(Steen?)²⁰³
St□□□のMuséeを觀る余には始め
てなれと見るもの殆となし、
(大聖堂)
(cathedrale)²⁰⁴
Catedralの前にて昼食を済せ

- 192 パウルス・ポッテル (Paulus Potter, 1625-1654)。オランダの画家。なお、鉛筆にて「ポッター」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 193 ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ (Pierre Puvis de Chavannes, 1824-1898)。フランスの画家。
- 194 次の作品について述べたものと考えられる。
パウルス・ポッテル《牛》マウリッツハイス美術館蔵
- 195 鉛筆にて「ロッテルダム」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 196 鉛筆にて「ベルギー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 197 鉛筆にて「ラヘー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 198 赤木萬二郎か。赤木は児島と同郷で、平壤中学校校長、平城師範学校初代校長を務めた人物。児島が1918年に朝鮮を旅した際、現地で世話になっている。
- 199 鉛筆にて「ラヘー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 200 ジャン＝フランソワ・ミレー (Millet, Jean-François, 1814-1875)。フランスの画家。
- 201 鉛筆にて「チ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 202 鉛筆にて「アンベルス」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 203 ステン城 (Het Steen) のことか。
- 204 鉛筆にて「カテドラル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

〔ブリュッセル〕
(Bruxelles) 205
三時の汽車にてBruxelleに趣

〔ヴィールツ美術館〕
(Musée Wiertz)
き直にMusée Wirtzを観る往

年見たるほどの深き感しを與へ

ず、書籍店と写真機屋に出つ何

も買物をせず、六時過の汽車にて

〔ゲント〕
ガンに帰る、

この日一日なかゝに馳廻り

〔ブルッセル〕
たり和蘭旅行も終り再びBrux
elles) 206
Elleに出る必要なし、

205 鉛筆にて「ブリュッセル」と書き添えら
れている。児島本人の筆跡ではない。

206 鉛筆にて「ブリュッセル」と書き添えら
れている。児島本人の筆跡ではない。

7月29日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

〔ピッケ〕
朝Pyike君の家を訪問す姉出て

ゝ君の不在を告げ町余の氏の画室に

〔ホッフェンボム(画材店)〕
(Hoffenbom)
来る、尚外出中にて不在余はHoffenbome

〔カンヴァス〕
に趣き絵具カンパスを求む

〔ピッケ〕
昼食後再びPyike君の家を訪れ

君已に家に在り同道して画室に

趣く、なかゝ大作尠からず然し在校

中に比して其の内面的進達を見さる

は残氣なり、夕食を共にし夜半

散歩して帰宿明日は再びブルー
〔ブルー
ジュ〕
ジに趣くべき哉

7月30日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

〔ブルーージュ〕
朝九時過ぎの列車にてブルーシに

向ふ、朝来陰鬱なり、再び旧

寓に一週餘日振にて帰る、壁に

貼したる写生絵は未だ充分乾

き居らず、〔カンヴァス〕〔白〕のため

ならむ、午後小雨仕方なしに

宿の臺所に在りてこの宿の老人

の働きつゝある、と室内を写生し

終る

〔ゲント〕〔ブルーージュ〕
ガンに居ればブルージ迄来るのか嫌

になってガンで描て見たくなり、

ブルージに来て見れば今少し長く居

て何か大作を試みて見たし、

【欄外左側（縦書き）】

(Angèle ?)
発 Angeles

7月31日 土曜

【欄外右上（縦書き）】

半晴

【本文欄】

午前朝寝したるため九時過より、郊
外に写生道具を運ふPorte St
の門) Croixの側の風車を描く、空曇
りて風あり、風車幾星霜すてに
廃せられて風あるも用をなさず、
午後、宿の廊下より岸を眺めたる
写生を始む
夜久しく音信せさる知友にはかき
を發せんとて夜半迄筆をと
る、日記及重要なる手紙など旅行
中(意?)忘り居りて一晚位の事にてはは
かきさへ終らず

8月1日 日曜

【欄外右上（縦書き）】

来信
(Angèle ?)
Angeles

半晴、

【本文欄】

朝早起、陰鬱なる空にて殆と
何所をも写生する氣持せず、
Annaを室に導きて三号の
カルトンに顔だけ写生した
かなり面白く出来た様だ今度の
旅での最もよい作品かも知れ
ぬ、午後昨晚からの日本への
はかきを書く、四時頃より昨日夕
方描き始めた、裏の廊下より岸
に撃きたるボートをと水とを望
みたものと画きつゝ夕方都合よく日輝く、

【欄外左側・翌日の欄外左側（縦書き）】

(Pycke)
発 Pyike

金山、黒田、河原、今関、伊藤、草野、林、Duthu、長原、
藤島、有島、山下、山本、山内、上田、田邊、富永
笹川、須藤、坂田、皿井、斉藤、妹尾、関、乙骨、岡崎、

- 207 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.397《少女の像》
27.0×22.0cm、油彩・厚紙、大原芸術財
団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4077）
モデルのAnnaについては、7月17日欄
および前掲注178参照。
- 208 今関天彭（いまぜき・てんぼう、1882-
1970）か。漢詩人・中国研究家。児島の
住所録に本名（今関壽磨）がみえる。
- 209 長原孝太郎（ながはら・こうたろう、1864-
1930）か。洋画家・東京美術学校教授。
- 210 有島生馬（ありしま・いくま、1882-1974）。
洋画家。
- 211 山本森之助（やまもと・もりのすけ、1877-
1928）か。洋画家。
- 212 山内愚僊（やまうち・ぐせん、1866-1927）
か。洋画家。
- 213 田辺至（たなべ・いたる、1886-1968）か。
洋画家。
- 214 富永勝重（とみなが・かつしげ、1884-
1958）か。洋画家。
- 215 笹川慎一（ささがわ・しんいち、1889-
1937）か。建築家。児島の住所録に名前
がみえ、「大阪住友建築部」と記されて
いる。
- 216 須藤祐七であろう。児島と同郷の友人。
上海で須藤洋行を営んでいた。
- 217 皿井立三郎（さらい・たつきぶろう、
1870-1945）であろう。岡山市出身の医
師で、大阪で医院を開業していた。児島
家の親類（虎次郎の従兄正田直太郎の妻
は皿井の妹）にあたるとのこと。
- 218 関五夫か。児島の住所録に名前が見え、
住所は東京、葉山、大連（大連運輸、満
鉄用度課）、ロンドン、ドンカスターほ
かとなっている。

岡本、松原²¹⁹、松尾²²⁰、小野、三原、正木²²¹
森田²²²、満谷、矩一、切山、妻、大原、原、武内、柿原得²²³、柿²²⁴↙
原政、林、奥島、柳井、三宅専²²⁵、
小林、三橋、石井、虬一郎

8月2日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(愛 の 湖)
朝Lac d'Amourの写
生をなす、只絵具にての
デッサンに終りたるも、其の
印象かなり現る、
午後朝早く、室より (鐘)
Carillon²²⁶
の塔の絵を改作す、
午後廊下の構図について
(種々?)²²⁷
種思考す²²⁸
夜手紙数多を認む²²⁹

8月3日 火曜

【欄外上側】

曇

【欄外上側～本文欄】

(愛 の 湖)
朝来曇にてLac d'Amourの写生できず
(野 菜 市 場)
朝Marche aux Legumesの小写生をなす、
(ブリュージュ)
昨~~日~~Bruges引揚を決心
(如)
す、幾何程望み案したりとて
なかゝに廊下の構図定まらず、
偶然昨日隣の画家の
廊下にて写生しつゝあるを思出
て幸に此の朝出會して其由を²³⁰
語りたるに昼すき表てポーズ
する事を話せられて一時間ほ
と写生す、遂に日光を見す終る、
夜荷物の支度をなす、

【欄外左側（縦書き）】

発輪 原、平塚、柿原 小林、林、堀、柳井、加藤
柳井はかき 原田、原田、橋本、都志、松尾

8月4日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

- 219 松原三五郎（まつばら・さんごろう、1864-1946）であろう。洋画家、岡山市出身。
- 220 松尾哲太郎か。第六高等学校教授を務めた人物。
- 221 正木直彦（まさき・なおひこ、1862-1940）であろう。官僚、東京美術学校校長。
- 222 森田恒友（もりた・つねとも、1881-1933）か。洋画家。児島とは東京美術学校の同期入学。
- 223 柿原得一（かきはら・とくいち、1881-?）。倉敷紡績で重役を務めるほか、大原孫三郎の手がけた各種事業を補佐した人物。
- 224 三宅専一（かきはら・せいいちろう、1883-1962）。倉敷紡績をはじめ中国民報社などで大原孫三郎の右腕を務めた。のちに代議士、宮崎市長、宮崎県高鍋町。
- 225 三宅専一か。大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』（大原孫三郎傳刊行会、1983年）p.75に、明治40年倉敷紡績入社者として名前がみえる。
- 226 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.381《恋が沼》55.0×66.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4057）
同作はブリュージュのミンネワール湖（別名「愛の湖」）を描いたもの。
- 227 7月19日欄および前掲注179参照。
- 228 「廊下の構図」は、次の作品について述べたものか。
児島油彩画総目録No.387《人物 ブリュージュ舟宿》53.0×65.1cm、倉敷紡績株式会社蔵
同作品は、同目録No.388《ブリュージュ舟宿》の習作にあたる。
- 229 前日欄参照
- 230 鉛筆にて「幸」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

朝九時^{〔ブリージュ〕}ブルージ発、^{〔ダント〕}ガン

に向ふ

²³¹Pyckeを直に画室に訪ぬ

~~不在なり~~ Hoffenbomeに趣

~~きてトワルを求む~~ 午前中、同道

して宿を求む、公園下の^{〔ホテル・}Hotel

^{トロカデロ?〕}Trocaderoに定む

午後、町中を廻りて散歩す、

方々写生に都合よき所少からず、^ず

少しては写生もして足を止め^{ママ}

たく巴里にも早く帰らさるべか

らす心定まらず^ず

8月5日 木曜

【欄外右上】

曇雨

【本文欄】

朝来²³²Pyckeを訪ねて外出

す、

午後雲と雨つゝきにて外

出さへ嫌なり

Pycke画室にて同氏の

肖像²³³写生を始む、

日暮迄かけて夕方より

外出す、

8月6日 金曜

【欄外右上】

曇雨

【本文欄】

午前散歩に費す、午後Pycke

の宅に趣きて昨日の肖像をつ

ゝく、夕方迄

雨よく降りつゝく、

肖像はなか^{*}くに面白く出来

たり

この如く雨つゝけは此地に滞

在したりとて、何のなす事も

なし今少し何か一枚位

製作始め得らるゝ^{ママ}れは結

構なるにと思ふ

231 鉛筆にて「ピカ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

232 鉛筆にて「ピカ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

233 鉛筆にて「肖像」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

8月7日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝Pycke君と氏の姉の宅に趣
き姉の宅の近くなる、庭に趣き
て小さな[?]Villaの建物の入
口を室内より描く、テーブル
の側に数脚の椅子ありて
^(Pycke)
Pyike氏の甥と[?]読書し
つゝある所を写生す、²³⁴
昼食後午後にも写生をつゝけて夕
方終る、

8月8日 日曜

【欄外右上】

晴、

【本文欄】

早朝より庭園に趣きて^(Pycke)Pyike
と同君の甥との鉛筆写生を
なす、
午後、Angele及^(Marguerite?)Margeritte
来る、Angeleの肖像を描く^{ママ²³⁵}
始む、僅か一時間ほどにて
明日を約して止む

8月9日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来園内の鉛筆写生をなす、
^(Angèle?)
午後Angele来る、昨日の
^(画布)
トワルを續く、四時帰、
宅を約しありとて早く帰る、
夕方、迄一人にて写生を修
む
夕方Pycke来りて散歩に
出づ
毎日の如く明日は帰ち巴塞むかと
思ふ、

234 次の作品について述べたものと考えられ
る。

児島油画総目録No.393《お茶時 習
作》58.2×68.5cm、大原芸術財団 大原美
術館蔵（所蔵品登録No.4100）

同作品は、同目録No.394《お茶時》の習
作にあたる。これ以降8月14日までゲン
トにて《お茶時》のための各種習作に取り
組んでいることが確認できる。《お茶
時》については、後掲注260参照。

235 「Angele（アンジェル）」（正しくはAngèle
か）については7月11日欄参照。児島が
第一次滞欧（1908～1912年）の際にモデ
ルとしていた女性であることが同日欄に
記されている。翌12日にアンジェルらと
会食、30日に書簡を発信、8月1日に受信
していることが各日欄に記されており、
児島が制作に先立って彼女にモデルを依
頼していたものと推察できる。

8月10日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来晴天なり、園に趣く Pycke
の姉^(モデル)モデルとして来る、Rose^(ローズ)
アンティーク色のワンピース²³⁶ Antique の Robe にて美し
色々とポーズを求むやつと
昼前に僅か写生す、
午後庭の鉛筆写生に水彩
にて着色す、夕方迄筆をとる、
夜 Pycke と活動を見る、

8月11日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝来曇天なり雨降る様子なけ
れとも、になかゝ^{*}太陽の出そふにもなし
園に出かく、Pycke 未着、絵具
屋に^(画布)トワルト紙を求めに出かく
モデル来るも陽光出てす、昼食後、
も式時間写生太陽の光に會
せず、終る
明朝出発、帰巴の筈なりしも尚
一日太陽を待ちて滞在する事
となす、夕方宿に帰る、町に新
聞を求めに出て早く帰宿 日記を書く、

【欄外左側～翌日欄外左側（縦書き）】

◎

来吉田、日本より「買てよし金送る」との電報来着の由吉田
君より通知し来らる²³⁷

8月12日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前園に趣く、
Mr ~~Robert~~^{ママ}? か Maurice
のバイオリンを奏するを写生
す、構図の中に置かむか
ためなり、

- 236 鉛筆にて「ロビ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 237 児島が前年来大原孫三郎に依頼していたフランス現代絵画をはじめとする美術品の収集について、大原より承諾と送金の旨を知らせる電報がバリの留守宅に届き、これを吉田苞が旅先の児島に知らせてきたという意。

8月13日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午後園に趣きて庭の写生をなす、
油にて

8月14日 土曜

【本文欄】

園に趣く、
毎日の如く太陽を待つ、
今日は巴里に歸らむか、と毎日
一日廿一日と日延す、
然し此地にて大作を始むる
ほと腰落付かず、又持歸る[?]
事なと考へて矢張巴里にて製作
する方好都合なるべし考て^{ママ}
見る□此度の旅行にては習作の
み試みる事とし愈々明日
出発の事に決し夜荷造を
なす、

8月15日 日曜

【本文欄】

此日朝九時、^(ゲント)Gand 出発巴里への歸途に
就く、^(トゥルコワン)Turcoing 及 ^(ムスクロン)Mouscron
の乗換に時を要し巴里に着したるは、
夕方、六時頃なりし、
吉田君と夜を深して語る、
車中、祭日なりしたため、²³⁸乗客多かりし、
国境沿道、戦場の跡を
過く原野市街の破壊のめ^{ママ}
様悲惨を極む、

【欄外左側・翌日欄外左側（縦書き）】

留守中の
来信 ²³⁹炭谷、²⁴⁰疋田 福島 原、平塚廣瀬阿藤須田、吉田、青
山
Duthu
小林、²⁴¹三宅克小林、岡本、林、^(岡崎、矩一)岡崎矩一、柿原、妻、

- 238 同日8月15日は聖母被昇天祭にあたる。
239 炭谷小梅（すみや・こうめ、1850-1920）
であろう。キリスト教の布教師。児島の
岳父石井十次による岡山孤児院の活動
を支えた人物。
240 阿藤秀一郎（あとう・しゅういちろう、
1888-1972）か。洋画家。現岡山県浅口
市出身。
241 三宅克己（みやけ・こつき、1874-1954）
であろう。洋画家。

8月16日 月曜（記入なし）

8月17日 火曜

【本文欄】

午後、
〔モデル〕
モデル来る、二十号に写生を始
む、上衣を悦して腰据たる図
なり、

8月18日 水曜

【本文欄】

ラモレルに注文したる百号のキャンバ
ス
ス来る、
〔プリュージュ〕²⁴²
Brugesの構図を始む
午後モデル写生、

8月19日 木曜

【欄外上側】

『◎此の午後、²⁴³我母の上に變事ありたるには
あらずや、^{（ざる）}面白からさ印象を受く

【本文欄】

〔プリュージュ〕^{（モデル）}
Brugesを午前 午後モデル

8月20日 金曜

【本文欄】

〔プリュージュ〕^{（モデル）}
Brugesとモデル

8月21日 土曜

【本文欄】

〔プリュージュ〕^{（かかり）}
Brugesの作にかりて日曜も外出
の暇なし、午後モ^{（モデル）}デルの写生に
追はる、帰朝も近づき夏の
製作も急かされは秋にせまらる、
心忙しき事限りなし、

8月22日 日曜

【本文欄】

〔プリュージュ〕
終日 Brugesの製作

8月23日 月曜

【欄外右上】

晴

【欄外左側（縦書き）】

- 242 児島が「プリュージュ（の構図）」と呼んでいる作品は次に該当すると考えられる。
児島油彩画総目録No.388《プリュージュ舟宿》130.0×162.5cm、高梁市成羽美術館蔵
7月から8月初旬にかけてのプリュージュ滞在時の取材と習作（7月13～17日、8月2日、3日各欄および前掲注175、176、177、228参照）をもとに100号大のタブローをまとめようとしていることがわかる。10月24日まで本作の制作に関する記述がみられる。
- 243 児島雪（こじま・ゆき、1856-1937）。児島虎次郎の実母。

来 林、矩一、Duthu

8月24日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、Brugesの作画、午後(ブリュージュ)モデル(モデル)

来りて写生夕方頃齊藤君迎氏

を同道して来る齊藤君は借屋[?]

探し迎氏は下宿屋探しなり

吉田君と齊藤君と三人にて

支那飯に夕食し帰宅、

白耳義(ベルギー)より帰寓以来夜は労

れて殆ど筆とる暇なし日

本へ送るべき書信及通書

怠り^{*}て日過ぐ

日記も怠りたり

【欄外左側（縦書き）】

来、須田

8月25日 水曜 （記入なし）²⁴⁴

8月26日 木曜

【欄外左側（縦書き）】

発矩一、三宅、小林、山下、福島、林、

妻、齊藤、阿藤、岡崎、岡本

8月27日 金曜 （記入なし）

8月28日 土曜 （記入なし）

8月29日 日曜

【欄外左上】

Mariette²⁴⁵

Duthu

(Pycke)

Pyck

? ?

Porre

【欄外左側（縦書き）】

来、佐藤

発原小林、妻兒島

244 8月25～31日欄は「デヴァリエール訪問記」に充てられている。各日の日記は記されておらず、受信記録のみ各日の欄外に記されている。「デヴァリエール訪問記」については、10月26日欄および後掲注282参照。

245 マリエット・ド・ブライン (Mariette De Bruyn) であろう。兒島の住所録に名前がみえ、住所はゲントとなっている。第一次滞欧時にしばしば兒島のモデルをとめた人物と考えられる。

8月30日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

発来乙骨、矩一、柳井妻岡崎矩一

迎、□□より 三宅

発三宅、東京三宅

8月31日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、関

9月1日 水曜

【本文欄】

午前旧作を引出して修製す、

午後モテル来る、

昨日 Bon Marchesにて求め

シアラブの上衣と支那の Jupe

を着さしむ美し、

昨日よりのデッサンを僅か

改むるのみにて大な□変化なく

描く事とす、

夕方、處用に外出、夕食後帰宅、

書信十数通を書くため夜を

深ふす

【欄外左側（縦書き）】

> 来妻： 林：、 矩一： 柳井、上田

藤島、金沢、

9月2日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中 Brugesの製作す

なかゝ半日位筆をとったのでは

如何ほとも描く事出来ず午後モ

テルをつゝくるため当分仕方

なき哉

午後モテル来る、昨日よりのデッサ

ンをつゝく

夕方 Belle Jardinièreに洋服の

假縫に趣く、

今夜 Lilasの會合あるも

少し労れたる様なれば、欠席す、

早く床に就く、

【欄外左側（縦書き）】

発

金沢

三宅、佐藤、乙骨金沢上田、炭谷

疋田、柳井、加藤、妻、焼一郎林

(矩一)

矩、藤島、岡崎柳井兒島

9月3日 金曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

朝来寒し瓦斯ストーブに点火す、

(ブリュージュ)

(Bruges)

午前中少し Bluges の絵を

(モデル)

描く、午後モデル来る、

(ホテル)

(Hôtel)

夕方、三越の伊藤氏を Hote

ル・ムールス

(Le Meurice)

Meurice に訪、十分□會談

夕食後帰宅、

今朝より頭痛す、

松永氏宛の電報着 Bruges

に廻送す、

十時就床、

うまく発汗せず

【欄外左側（縦書き）】

来三宅、松永 山田放天の著書着²⁴⁶ Pycke

発加藤、福島木内松永三宅

9月4日 土曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

(モデル)

午前モデル来る五十号の顔

面を描く、

午後先週約束せしモテ

(マドモワゼル)

Mlle 来る、近側通のプレテ

?

?(Pension ?)

ルタンの Panssion に在る

Mlle より顔美しからされとも

氣品あり

(肘掛け椅子)

(fauteuil)

Fautoille に椅子で読書しつ

ゝあるを描く、

夕方須田氏、独逸旅行よ

246 山田放天は当時國民新聞の記者で、のちに政治家として活動した山田毅一（やまだ・きいち、1887-1953）のこと。1919年に兒島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。この日、兒島が山田から受領したのは次の著書と考えられる。

山田毅一『戦後の欧米漫遊記』放天義塾、1920年

同書は第一次世界大戦直後の欧米の状況をレポートしたものであるが、渡欧の船中や寄港地の様子についても多く字数を割いており、船中での兒島の談話も収録している。なお、兒島文庫中に同書1冊が確認できる（大原芸術財団 大原美術館蔵）。

りの帰途なりとて立寄らる、
齊藤君来訪夕食を共にす
【欄外左側（縦書き）】
来 Mariette

247 ペルネーム＝ジュヌ画廊またはジョルジュ・ベルネーム画廊

9月5日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中昨日午後の^{〔モデル〕}モテルを描
く尚一回^{〔ポーズ〕}poseを要す、
午後、先週日曜午後描き始めし
^{〔管理人〕}Conciergeの娘と其友を描
きつゝく やつと四時に弐人
来室、今日は朝から仕
事の休みなかりし^{〔?〕}と、
心氣そ^{〔?〕}の労れを覚たる事甚たし
夕方吉田君と夕食かてら
散歩に出て中川氏と三人
會食す、夜半就床

【欄外左側（縦書き）】

発松永、福島

9月6日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来天候よし昨日の終日の働きのて
今朝は何となく労れを覚ゆ
ロンドンより来巴中の三越の伊藤氏を
^{〔ホテル・ル・ムーリス〕}
^{〔Hôtel Le Meurice〕}
案内すべく Hôtel Maurice に出か
^{〔ベルネーム〕} ^{〔ジョルジュ・プティ画廊〕}
^{〔Bernheim〕} 247 ^{〔Georges Petit〕}
く（九時）Bernehaime、Jauge Petit
^{〔グラン・ブールヴァール〕} ^{ママ}
Grand Bl.などを歩き廻つ支那
飯にて昼食す、午後同道して
帰寓、夕方まで話す、
夕食外出
天氣の晴^{〔?〕}朗なる日には室内
にこもりて製作するの愚なるを
思ふ郊外に散歩てもすれはと
度々思ふ

9月7日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝の中^(ブリュージュ)Brugesの製作午後^(モデル)モデル来る、
齊藤君訪問し来る、
五時モデルを終へて 夕食かたゝ^{*}散
歩に出て十時帰宅
一日中朝から夜迄殆ど頭の休
養する暇なし帰朝の近づきたるた
めに心賑しきに哉 白耳義^(ベルギー)より
帰りて早く製作を終へて何れ
へかへ旅行する筈なりしも不得、
この□青高なる天空を望みつゝ毎日同
し様の事をして室内に暮さねはならぬ

9月8日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、^(ブリュージュ)Brugesを描く、少し氣
抜したる氣持早く^(ゲント)Gandの
作にかゝりたし
午後、^(モデル)モデル来る、来客、^(スベ)西班牙
^(イン)牙行の事につき問合され
しと四時新井君の来訪とにて
ホテルを描暇なく過く、
夕方吉田君と三人連にて
^(ベル・ジャルディニエール百貨店)
Bel Jardinierに趣く
夕食を新井君の宅にて受く
須田氏を[?]Hôtel Grandに
訪問夜深して帰室

【欄外右側（縦書き）】

来村上松永

【欄外左側（縦書き）】

◎

発 大原、加藤

└青山君の事

申し送る

9月9日 木曜

【欄外右上】

◎

晴

【欄外左上（縦書き）】

◎発夫原、松永

Aman Jean

【本文欄】

朝吉田君とPetit Palaisに趣く、余の

白耳義滞在中に開館せるもの

戦前と館内の装置を異にし尚数多の

新らしき作品を集□したり、Luxembourg

のそれに比して遜色なきものなり

午後モデル写生、夕方、佐藤氏

旅行より帰る同氏のために

Grand Hommeに室を求むべく

同道す、夜Lilasに出席す、

9月10日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、Brugesを描く、午後モデル

写生、先般日本より英国に來学

中なりし太田君の友人羽田氏、訪

問さる、(森川智徳氏、京都仏大)と共に

夕方岡見君來訪

夕食に外出吉田君と活動

に入りて帰る、

五十号の午後描きつゝあるもの殆ど

終了す、

日記を一ヶ月間程と書き□れ

終る事怨念にたへず

【欄外左側（縦書き）】

○ 矩一にムニエ²⁵⁰の作品写真七葉を送□、
発妻、矩一

9月11日 土曜

【欄外上側（縦書き）】

快晴

【本文欄～欄外右側】

朝、日佛銀行に趣き3000受取

Beaux Artsに[?]趣く通知状と大蔵省

への引出切手を引更へらる、

大蔵省にて3000受取

- 248 森川智徳（もりかわ・ちとく、1880-1970）。僧侶。のちに龍谷大学学長。
- 249 岡見富雄（おかみ・とみお、1890-1965）であろう。洋画家。
- 250 コンスタンタン・ムーニエ（Constantin Meunier, 1831-1905）。ベルギーの画家・彫刻家。

午後、^{ママ}〔モデル〕来る、僅か三十分

ほと写生し得、

新井君来り吉田君と共に又

〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕

Belle jardinièreに洋服の

仕立のため趣く、

夕方吉田君と散歩す、

◎廣瀬²⁵¹氏より、黒田氏に計りて一九二二年展覧會の事決定の[✓]
旨申来る、

【欄外左側（縦書き）】

来 Pycke 廣瀬 矩一、伊藤、柿原

◎

9月12日 日曜

【本文欄】

〔装飾美術館〕
(Musée des Arts Décoratifs)

午前 musee decorative

に趣く、昨日午後の^{〔モデル〕}モデルを

今朝約せしも差支ありしか来

らず、午後のモデルも差支

の由、昼食後吉田君と須田

氏を宿に訪ひ、藤岡氏と

〔植物園〕
(Jardin des Plantes)

Jardin des Planteに遊ぶ

夕食後、カフェに時を過して

帰宅、

〔ブリュージュ〕

Brugesの絵はなかゝ思ふ様

に纏らず郊外に写生に出べ

くも其時を不得、

【欄外左側（縦書き）】

来 Pyck 矩一、加藤

発吉田小松太田、柳井

9月13日 月曜

【本文欄】

〔ブリュージュ〕^{〔モデル〕}
午前中Brugesを描き午後モデル

写生夕方散歩夕食に外出す、

此の春より買い求め度く切望せし

〔イスラーム美術の陶磁器〕
(Céramique dans l'art musulman)

Ceramique dans l'art Musulaman

〔装飾美術館〕
ママ (Musée des arts décoratifs)

を昨Musée l'art decorative

〔フラン〕

にて2200frsにて買求む甚た

の高價なりしか古物は一層の高

價らしく、此の一部にて買切との

話なりしたため遂に買ふ事としたり

印刷の精良嘆賞^{〔堪〕}に絶たり、

【欄外左側（縦書き）】

発羽田、須田

9月14日 火曜

【欄外右上（縦書き）】

快晴

【本文欄】

午前外出散髪など、

午後^{〔モデル〕}モテル写生、夕方中川君

来訪夕食に外出

カフェに立寄り十二時帰寓

【欄外左側（縦書き）】

発 Mariette、廣瀬、

来 羽田、福島、高杉

9月15日 水曜

【欄外上側】

晴

【本文欄】

午前^{〔ブリューシュ〕}Bruges 午後^{〔モデル〕}モテル

毎日の如[?]して変化なし

Brugesはな^{*}か終末を期

せず、午後^すの写生もさほど

興乗[?]なくなる、

【欄外左側（縦書き）】

発 Tardy²⁵² 自宅、妻

三橋

9月16日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、日佛銀行に金の引出に趣き

途中寄[?]なとして正午帰寓、

午後^{〔モデル〕}モテル写生

夕方、^{〔ロダン美術館〕}Musée Rodinに^{〔Bénédite〕}Benedit

氏を訪問 Beaux Artsより

受取たる3000を渡す、

夕方散歩、夕食後^{〔クロズリー・デ・リラ〕}Cofe Lilas^{〔Café Lilas〕}

の會食に夜を深す

【欄外左側（縦書き）】

来、辻

252 児島の住所録に「Tardy」という名前が
みえ、住所は児島と同じエルネスト・ク
レソン通り18番地となっている。児島
が利用した貸しアトリエに関係する人物
であろう。

9月17日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、Bon marches<sup>(ボン・マルシェ百貨店)
(Le Bon Marché)</sup>に支那のjupe^(スカート)

を買求めに出かく絵具屋などに寄り

昼食後帰寓 午後モデル^(モデル)、支那の

赤きjupeを着けたる絵殆と

完製す首のcolie<sup>(首飾り)
(Collier)</sup>なか^{*}

うまく落付かず 色は全体に於

て美しくなり来れり、顔の描き方[?]

未満なれとも此の上描けは折

角の感しを屠すべし[?]²⁵³

夕食後シネマに寄りて帰寓

【欄外左側（縦書き）】

発

奥田 目

9月18日 土曜

【本文欄】

午前モデル^(モデル)来る、百号バイオリン

の絵のjupe^(スカート)を先日買った支那の

黄色なjupon^{(ベチコート?)²⁵⁴}と描き改めた

矢張この方か調和が面白い

様である、²⁵⁵

午後前週のモデル来る夕方迄

にてこの式十五号描終りの

事となす

夕食後帰寓青山君又□か□

吉田君と外出して中川君を

訪ふ

帰朝迄三ヶ月を余すにみなる事に

氣つく、

【欄外左側（縦書き）】

来信加藤、

9月19日 日曜

【欄外上側】

快晴

【本文欄】

午前中始めてのモデル^(モデル)来る、目^{ママ}昨日描き

253 次の作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.406《手鏡を持つ婦人》116.0×90.0cm、高梁市成羽美術館蔵

この日「殆ど完製す」と記されていることから、午前のプリュージュの絵、即ち《プリュージュ舟宿》の制作と並行して、9月4日以来毎日午後モデルを用いて本作品に取り組んでいたものと推測できる。

254 「jupe（スカート）」の誤りか。

255 次の作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.412《寓憩》168.8×132.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No. 4073）

同作品は6月に制作が進められていたもの（前掲注144参照）。これ以降9月21日まで同作品の修正に関する記述が確認できる。

〔マドモワゼル〕

Mlleの友人なり丈高く丈夫そふな
Mlleなり外套を手に持ちたる立姿を
写生す²⁵⁶、^(blouseブラウス)ブルズの桃色と形かよ
く肉満たる体格に調和す顔
美しからされと温雅の味なきに非
ず、²⁵⁷午後吉田君と折角の快晴なれ
^(ブローニュの森)
^(Bois de Boulogne)
はと Bois de Blougneに出かけ林
中三時間余散歩す、夕方巴里に帰り
夕食後七八名の友人と會食カッフ
エにて腰を休む

【欄外左側（縦書き）】

来齊藤、伊藤、発齊藤、松永 ^(Meulemeester) 258 Mermeeester

9月20日 月曜

【欄外上側】

晴

【本文欄】

午前須田氏来訪、同道して絵具屋[?]に
出かく、午後、ホテル来る、黄な^{ママ}
^(スカート)
jupeを修作す、
^(スペイン)
午後五時須田氏西班牙に向
^(駅)
け出発のため Gareに見送り
に急行す五時半過くるも列
^(プラットフォーム)
車フラットボームに入らず須田
氏の姿見へず、
買物なとしつゝ、夕食後ホテルに
須田氏を訪ふ切符賣切の
ため明日に出発を延され
し由、

【欄外左側（縦書き）】

発齊藤

9月21日 火曜

【欄外上側】

曇

曇晴

【本文欄】

午前中在室、何かと、修作に時を過す
^(モデル)
午後モデル来り jaun jupe^(黄色いスカート)
^(jupe jaune)の
絵をつゝく 靴下と靴を
□色のものに改む これにて殆
と全体落付たり、

256 「25号」の意であろう。

257 次の作品について述べたものと考えられ
る。

児島油彩画総目録No.400《(婦人)》83.3
×59.2cm、個人蔵

以降、9月22日、25日（ただし消字あり）、
11月1日に同作品の制作に関する記述が
確認できる。

258 G de Meulemeester。児島がブリュー
ジュで滞在したカフェ兼宿。観光船も運行
していた。

夕方この頃例の如く安支
那飯屋に趣^く
八時半帰宅、吉田君と話す、
日本より返信来^ずらす

9月22日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、先日主曜目に写生した~~二~~
女の立つる絵の背面へルタ
サン~~デール~~の庭と噴水を
描き加^{259 (ルーヴル美術館)}へたルーブル行
午後モテル来る、五十号の絵の
首と肩の辺をつゝけた、
これ~~から~~明日からモテルを休め
て愈^(ゲント)ガンの製作を始め
る事にしよう帰る事を思出せ
は氣か非常に忙しくなつて
来た様である、

【欄外左側（縦書き）】

来 mariette 奥村

9月23日 木曜

【欄外上側】

曇

【本文欄】

午前中、少しかたつけをして、百号大の^(カ)
ンヴァス^(ゲント)にガンの製作の構図を
始めた写生の時の²⁶⁰は^(カ)武人の人物
であるか今四人を置く事にしたそれ
にて面倒か生²⁶⁰しるらしい、
午後、吉田君の外套注文に関し
て^(ベル・ジャルディニエール百貨店)
Belle jardinierに出かけた、
夜、^(クローズリー・デ・リラ)Café Lilasの會合に趣く
留守中又齊藤君か来訪して
居った、

【欄外左側（縦書き）】

来松永、

259 消字されているが、前掲注257の作品に
ついての記述と考えられる。アトリエで
描いたモデルにリュクサンブール公園の
風景が組み合わされていることがわか
る。

260 次の作品について述べたものと考えられ
る。

児島油彩画総目録No.394《お茶時》162.5
×152.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No.4076)

ゲントでの取材と習作（同年8月7～14日
欄および前掲注234参照）をもとに100号
大のタブローを制作しようとしているこ
とがわかる。以降、10月24日まで本作の
制作に関する記述がみられる。

9月24日 金曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

午前中 Gand の構図をつゝく、
午後も夕方迄、大体のデッサンに

下塗の色彩を施した、
Bruges の如く手古摺すに

出来上らせたい

白い布の上にとれたけの構

図を描いて何か自分の表現

を試み得られた時而して尚

未試の仕事を希望しつゝ布面

のデッサンを眺めて居る間は

実に何とも云ない愉快さである

こんな會心の思いこの頃やつと

味ふ事が出来そめた

【欄外左側（縦書き）】

来佐藤

発 妻、石井

◎上田君へ^{〔ポ ー ト サ イ}
^{ド〕}ポ ー ト サ イ
²⁶¹ト 鈴 木 店 員 の 事 申 送 る

9月25日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午後^{〔モデル〕}モテル来る、前週日曜日のつゝき

の外套持て立たる図をつゝく、

午後正午前散歩を兼ねて昼食に外

出す、午後

午前中 Gand の作をつゝく人

物の配列やゝ佳なれとも、各人

物の比較となかゝうま^{*}く

行か^ずす

夜吉田君と Comdie Francaise
^{〔コメディ・フランセーズ座〕}
^{〔Comédie-Française〕}

に Le Demi monde を

²⁶²観る

【欄外左上】

発 Mariette、

【欄外左側（縦書き）】

来三宅、疋田、柳井、斉藤、須田、目木内

261 「在ポーツサイドの鈴木商店の店員」の
意か。児島の住所録に「神谷徳重 鈴木
商店」として、ポーツサイドの住所が記
されており、これに関連するものと推測
できる。

262 アレクサンドル・デュマ・フィス (Alexandre
Dumas fils, 1824-1895) 戯曲による演劇
『ドゥミ・モンド (半世界)』。

9月26日 日曜

【本文欄】

午前中齊藤君来訪を約したるため
待つ、昼前来る、三浦氏と、
昼食に同道して、Musée
^(ギメ)
^(美術館)
Cluny Guimeを観る、
^(シャトーダン通り)
^(Rue de Châteaudun)
齊藤を案して rue Châteaudun
方面の^(骨)古董屋の方を廻つた
日曜日にて皆閉店なり、
夕方より日本倶楽部に夕食
^(ママ)
に出来かく、夜十時頃次の
^(サン＝ジェルマン)
^(Saint-Germain)
木曜日に Saint Geremain
行を約して別る、

【欄外左側（縦書き）】

来、

9月27日 月曜

【本文欄】

朝沢山日本より書信来る、午前中
殆と手紙読と新聞を観る、
午後、都鳥来訪、夕方迄談
合 夕食に外出、
²⁶³
廣瀬氏より、黒田先生にサロン出品
の事を相談したるに非常^(欣?)に近て
承諾の旨通信し来らるこれ²⁶⁴
からこの用事か忙しいのと大原^{*}
よりの送金で絵の買入れもなか
忙しいことである、

【欄外右上・右側（縦書き）】

発太田、山下、廣瀬三宅、柿原
発電
[?]
着為替の
事柿原
君へ

【欄外左側（縦書き）】

来柿原、大原、福島、金沢、原田昌、三橋[?]²⁶⁵
妻、矩一、林、藤島
正田、廣瀬
大原よりの一九六五〇〇来る

- 263 鉛筆にて「瀬」と書き添えられている。
児島本人の筆跡ではない。
264 前掲注136、139参照
265 原田昌平か。児島の住所録に名前がみ
え、住所は倉敷となっている。倉敷紡績
で重役を務めた人物。

9月28日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

天気も両三日曇かちてあつたか又再び

快晴の日に帰った

午前中、^{〔ゲント〕}Gandの絵をつゝく、

午後も夕方迄、中川氏夕方来訪

羽田氏も

夕食に外出、Belfortの御祭に

遊びて夜半帰る、

Gandの今度の作は^{〔ブリュージュ〕}Bruges

の方□無難に行きそふてある、

早く済せないで大原の用事かう

んとあるし展覧會日本出品の

件もあるし、

【欄外左側（縦書き）】

来矩一、柿原

9月29日 水曜

【欄外上側】

快晴

【本文欄】

午前十時^{〔サンラザール駅？〕}
^{〔Gare Saint-Lazare？〕}Gard St Azarより、齊藤

吉田、三浦氏と共に^{〔サン＝ジェルマン〕}
^{〔Saint-Germain〕}St Germai□□

に遊ぶ 折悪しく^{〔美術館〕}muséeは

閉館、昼食前後、附近を

散歩し 町内の各古道具屋

をうろつき廻りて帰巴す、

各廃物様のものゝみを買求む

この中両眼鏡を買求む、

松永氏、^{〔ブリュージュ〕}今午後Brugesより帰

寓せりとて夜深く迄談合す、

【欄外左側（縦書き）】

^{〔柿原、矩一〕}発松永、柿原矩一

来関近藤

9月30日 木曜

【本文欄】

午前中製作 午後吉田君と日佛

^{〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕}
^{〔Belle Jardinière〕}銀行、Belle Jardinierに趣く

夕方、帰寓夜^(クローズリー・デ・リラ)Cafe Lilas

に出かく、
一日蒸²⁶⁶し暑く夕方より降雨、

今朝、帰朝費不足らしければ
送金の旨申送り置たるに電
報為替にて送金さる、

【欄外左側（縦書き）】

◎リオン正金²⁶⁶より送金、一四、
日本より電報為替のもの

10月1日 金曜

【本文欄】

午前中手紙など書く、昼前^{(ラモレル(画材店))}Lamorelle
に寄りて帰る、午後夕方迄^(ゲント)Gandの
製作、
夕方、書籍店廻り、ルクサンブ<sup>(リュクサンブ
ール公園)</sup>ールの庭を散歩す秋葉
秋草秋色を競ふ昨年の
此頃はよく、写生に出かけ
たるに今年の夏秋は毎日室
に籠るの外なし、

【欄外左上】

来Marianne

【欄外左側（縦書き）】

リオン²⁶⁷
正金
発、大原、

10月2日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前~~午後~~^(ゲント)Gand製作、
午後前週土曜日のモデル来
る、小さきものに顔の写生
をなす、
夜神戸西村氏夫妻、新井君
来訪さる、

Gandの絵の左方の三人は
先描た右の^(Pycke)Pyckeを済せは大
体人物は終り風景の方にかゝ

266 横浜正金銀行リオン支店を指すと考えら
れる。

267 前掲注266に同じ。

れる早く済せねば
【欄外左側（縦書き）】
来加藤

10月3日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中^{〔ゲント〕}Gandの作
午後四時頃ロンドンより
加藤氏、来訪、
六時頃より^{〔フォントネー〕}Fontenay
に吉田君と三人連にて出か
く、
八時半頃巴里に帰り會食し
て帰る

【欄外左側（縦書き）】

発柿原近藤柳井疋田、関、金沢三橋、須田

10月4日 月曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前午後^{〔ゲント〕}Gandの製作
左方の□花より空の^目辺
を描く
夕方頭痛を催す外出、
加藤君来訪を約されて待
ちたるも来られ^ず

【欄外左側（縦書き）】

来有賀、^{〔石井母、伊藤〕}石井母伊藤、岡崎、金沢
²⁶⁸柿原氏より復証来る

10月5日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中、^{〔ゲント〕}Gandの製作僅か描きたる
のみ午後前週約したる^{〔モデル〕}モデル来る、
夕方より^{〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕}Belle Jardinierに趣
^{〔グランド・ホテル〕}きGrand Hotelに加藤氏を
訪問し十時過帰寓

268 復証とは、送金指示の内容を受取側で再確認・照合するするために、送金元銀行が発行する書類、またはその手続きを指す。

10月6日 水曜

【欄外右上】

晴、夕雨

【本文欄】

午前外出、銀行、C.N.P.

に趣く、書籍店などに寄り

昼過帰寓、

午後^{〔モデル〕}モテル来るクロッキーを

試む

夕方散髪、散歩、

昨夕アマンシヤン氏、²⁶⁹C.T.より

巴里に來られ余の留守中

來訪さる、先日来C.T.に訪問

すべかりしたため、幸に今朝先生

の宅を訪れて面談するを得、

日本より Salon 出品の件申傳ふ

【欄外左側（縦書き）】

來アマンジヤン

10月7日 木曜

【欄外右上】

晴

【欄外上側】

午後出かけ、Am

【本文欄】

午前中^{〔гент〕}Gand、の製作

午後、^{〔J. アラル画廊〕}Alardに^{〔Cottet〕}Cotteの²⁷⁰

作品を尋ぬ、作品の佳良

なるものなし、²⁷¹La Touche

に観るべきものあり

大原氏より依頼されし品

物などの買入に廻る此

日何物をも買^すず、

夕方、^{〔ロダン美術館〕}Musée Rodinに

^{〔Bénédite〕}Beneditを訪ふ

10月8日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

正午の汽車にて^{〔シャトー＝ティエリ〕}Chateau Thierry

269 アマン＝ジャンの居住地であるシャトー＝ティエリ（Château-Thierry）を指すと考えられる。

270 鉛筆にて「コッテ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

271 ガストン・ラ・トゥシュ（Gaston La Touche, 1854-1913）。フランスの画家・彫刻家・版画家。

に向ふ汽車延着三時頃
 Aman Jean氏の宅につく
 折悪しく先生不在、
 四時過迄家人と話合して
 帰途につく 午後七時着巴、
 此の日天気快晴秋色鮮
 美、幾何ほとにても写生出
 来そふなり
 夜深く迄日本への返事
 十数通をかく、

【欄外左側（縦書き）】

来伊藤、三宅、岡崎、柳井

10月9日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{リュクサンブール}
 {Luxembourg} ^{美術館}
 朝LuxembourgのMuséeを
 観 附近散策
^{モデル}
 午後モテル来りクロッキーを
 なす、
 夕方より写真器店に趣き
 折畳み1,580fを買求む
 小林、上田、柳井、青の吉田の諸
 兄よりの餞別にて1,000²⁷²、

【欄外左側（縦書き）】

発疋田、柳井、近藤、柳井、岡崎、原田、金沢、矩一、
^{柿原、妻}
 三宅、柿原妻、石井、林、伊藤、有賀、藤島、
 山田

10月10日 日曜

【欄外右上】

晴 来Aman Jean、

【本文欄】

午前中殆ど何事をもなさす
^{ルーヴル美術館}
 午後、久し振にLouvreを観る
 退出後昨日求めし写真器
^{チュイルリー公園?}
 {Jardin des Tuileries?}
 の試写を、Jardin T□□□□1□□
 になす、
 夕方迄散歩して夕食後帰宅
 す、
 Aman Jean氏より来信

(La Touche)

La Taucheの作品は買ふ

べきものならむと□

10月11日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ゲント)
午前中Gandを描く、

午後斉藤君来訪 日佛銀行にて

(J. ア ラ ール 画 廊)
(Galerie Allard)
金を引出しGalerie Arard

(Cottet) (セゴビア)
に趣き CottetのSegovia

(海 の 国 の)
(Douleur au
悲 し み)
pays de la mer

Pay de la merの習作二十五号大

のもの貳枚と La Touche

の六十号位のもの一枚(窓側

に女子の座せるもの)と都合三枚

(カレブジャン古美術店)
273 (Kalebdjian) (エトワール)
を買求むKarberjian (etoil)

に趣く、

【欄外左側(縦書き)】

(アマン=ジャン)
来福島 アマンシヤン

10月12日 火曜

【欄外右上】

晴、

【本文欄】

(ゲント)
午前中、Gand製作午後、

(モデル) (クロッキー)
(croquis)
モデル来りcroquieを試

む、夕方、外出、散歩して夕食

帰寓、手紙を書く、

【欄外左側(縦書き)】

発長谷川

10月13日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

毎日快晴にて暖かく此の節の気

候と思はれ^す

(ゲント)
午前中、Gand製作、午後

(古美術商)
(antiquaire)
外出、両三軒antiquir

を廻る大原より注文されし

273 次の3作品に該当する。

シャルル・コッテ《セゴビアの夕景》121.0
×190.5cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No.1061)

シャルル・コッテ《老婦と老漁夫》54.5
×73.5cm、同所蔵(同登録No.1062)

ガストン・ラ・トゥシュ《赤い部屋》173.7
×100.6cm、同所蔵(同登録No.1046)

後掲注277参照。ラ・トゥシュ作品の購入
については、10月7日および10日欄参照。

買物を集むるになか^{*}の苦心
なり、

【欄外左側（縦書き）】

来加藤 Desvallières²⁷⁴
(Mariette)
発 Mariete

10月14日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、^(ゲント)Gandの製作殆と終了
に近からむか
^(ベルネーム・ジュヌ画廊)
(Bernheim)
午後、Berneheimに趣きSimon
の祭の絵を9000にて購入
を約す²⁷⁵ Barone、^(ジョルジュ・)George
^(プティ画廊) Petit^(グラン・) Grand
Petitを廻り夕方、Grand
^(ブルーヴァール)
Bds.)^(映画) *
Baの活動に憩ふ
ママ
頃買物のため、非常に頭脳
の労れを覚ゆ、
^(オペラ大通り)
Av d'Operaにて杖を求む
^(クローズリー・デ・リラ)
夜Cafe Lilasの會合に寄る

【欄外左上】

来

10月15日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(グラン・パレ)
朝Grand palaisに昨日より開會の
^(サロン・ド・オートヌ)
(Salon d'Automne)
Salon d'Automの参観す、
点数に就て多数を極むれ
とも、佳品の比較的尠少
なると思ふ
^(パレ・ロワイヤル) (骨)
午後、Palais Royalの古董屋
にて一通陶器を點検す主
人留守なり
夕食後帰宅、

10月16日 土曜

【欄外右上】

晴、

- 274 ジョルジュ・デヴァリエール (Georges Desvallières, 1861-1950)。フランスの画家。
- 275 次の作品に該当する。
リュシアン・シモン《曲馬場》134.5×182.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.1063)
領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵) により、「Berneheim」はベルネーム・ジュヌ画廊を指すことがわかる。後掲注277参照

【本文欄～欄外上側】

^(ゲント)
午前中Gand製作、今日にて
筆を止むべき？

午後、加藤氏来訪、昼食を共
^(オペラ大通り)
にして、余のみ Av d'Opera

の写真屋に機械の修繕に

寄り、午後四時、手紙にて約せし

Desvalliere 氏の宅を14

^(サン＝マルク通り)
Rue St. Marc に訪ふ□丈高□

□の人何所か Beneditz 氏に風

彩態度の似たるものあり子息と共に

余のために数多の作品を示さる、

^(待ち時間)
^(L'Attente) La Attante 百号大のものと同 ^(縦?) 立 長の

^(キリストとマドンナ)
^(Christ et Madonna) Sacre Criste et Madonna □

の式点を買求□ 5000 4000共に旧作にて

1903と1905のもの²⁷⁶

残念なれと近作一つも

なし

夜加藤氏来り日本食をなす

【欄外左側（縦書き）】

来、林、笹川、加藤柳井、矩一、三宅

10月17日 日曜

【欄外右上（縦書き）】

終日終夜

雨、風

【本文欄】

朝早く、三浦氏来訪、松永氏、午後、青山

落合、及齊藤君など終日来談、

夕食を吉田、松永の諸と共^{ママ}に日本
食炊事、

今朝五時頃、腹痛を催す、

下痢せず、多分廻蟲ならむか^(回)

正午、も朝も食事せず^ず、気分悪し

からされとも衰弱を覚ゆ

終日筆とらず^ず、今日は大に

^(ブリュージュ)
Brugesを修製すべかりしに、！[?]

【欄外左上】

来

276 次の2作品に該当する。

ジョルジュ・デヴァリエール《ミュージック・ホール》153.0×138.5cm、大原芸術財団大原美術館（所蔵品登録No.1055）。原題は「L'Attente (souvenir de Londres)」。

同《キリストとマドレーヌ》241.5×99.8cm、同所蔵（同登録No.1056）

同日付のデヴァリエールの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

10月18日 月曜

【本文欄】

^(ブリュージュ)
午前中、Brugesの製作

夕方より吉田君中川君の伊太
利旅行のため、種々手傳なとす、
夜、九時十五分ミ^(ミラノ)ラン[?]經由にて
吉田中川両君発車さる

【欄外左上】

来Pycke

10月19日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(ブリュージュ)
午前中Brugesの製作、
^(モンマルトル)
午後、Montmartreの古道具
^(日仏銀行)
屋に寄り日佛にて支拂金として
50000受取
^(J.アラール画廊)^(ベルネーム・ジュヌ画廊)
^(Allard)^(Bernheim)
AlardとBernehaime²⁷⁷
に各残金の支拂をなす、
夜加藤氏来訪

10月20日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(サロン・ドートンヌ)
朝、加藤氏を宿に訪ね、Salon d'
^(ブティ・パレ)
AutonとPetit Palaisを
観る、午後、齊藤君を訪問
夕方迄話し夕食後、帰宅、
明日Monet氏²⁷⁸を訪問の約
をするため、
夜加藤氏来訪、夜半頃、
加藤氏の肖像を八号に
写生す、

【欄外左側（縦書き）】

[?]
来加藤静

10月21日 木曜

【欄外右上】

晴

277 J. アラール画廊およびベルネーム・ジュヌ画廊への支払い内訳は現存する領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）で確認できる。ただし、ベルネーム・ジュヌ画廊の領収書は前日の10月18日付となっている。購入作品については前掲注273および275参照。

278 クロード・モネ（Claude Monet, 1840-1926）。フランスの画家。

【本文欄】

午前中、何事もなさず 午後~~半~~一時の
汽車にて Giverny に Monet 氏を
齊藤君と訪問す、^(ジヴェルニー) 式時半^(ヴェルノン) Vernon
着、自動車にて五キロの道をたとり
Monet 氏を訪ふ三つの画室を見
庭園を見廻る、茶の御馳走になる、
氏は一個大なる画室を新築して殆
と終生の如き大作に従事す、
式メートルの高さにて巾四メートル
の^(panneau パネル)パノ一式三十枚悉く氏か庭園
の一部を描きしもの、写真沢山撮
夕方、六時半の汽車にて八時半帰巴、

【欄外左上】

Mariette

【欄外左側（縦書き）】

来原
林氏より郵便為替
四〇〇来着
天晴れて秋色美しく
セーヌの水静かなり

10月22日 金曜

【本文欄】

朝柿原君より何時立つかとの電文来る、
何か変事の起りしには非ず哉
柿原君へ返電す、尚此地に一ヶ
月滞在の予定なる旨
午前中^(ブリュージュ) Bruges の製作今日は
うんと描き改む昼迄静かにして
氣が乗て製作した
正午過長谷川潔君来訪、
午後ラモレルに^(デヴァリエール) Devallière の作
品を検す損所を生せり、
夕方^(グラン・ブールヴァール) Grand Bld に出て□と皿を求む
^(パレ・ロワイヤル?) Palais Lyal にて皿式枚を、
夜深く迄手紙数多書く

【欄外左側（縦書き）】

来、原氏より一~~日~~五~~日~~六
一五一六買物代来る
金山、山田、矩一、三宅、
加藤

10月23日 土曜

【本文欄】

午前中製作する筈なりしも何事をもなさず、
外出して古道具の用達^ずに費す、
〔サラ・ベルナール〕²⁷⁹ 〔稽古場〕²⁷⁹
午後Sara BernardのAtelieを
観る尚高齢に達したれと尚其のArt
は鮮なるもの何所となく調子の高き
ものなり、其の齒切のよき発音は力あり
て格あり、彼れは[?]三隻脚たる故殆と
座したるまゝなるも、如何にもよく其の
雙手の働きによりて其の感を現すに
遺憾なし、 夕方帰宅後珍らし
く早く就床、

【欄外右上（縦書き）】

発妻、加藤
笹川金山
柳井三宅
矩一、山田
柿原、原
都志

10月24日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔ブリュージュ〕
午前中、Brugesの製作殆と完結を
告ぐ午後少し筆とる、
夕方、散歩に出て写真をとる
先日 Monetの所にて影せし写
真の総ては、不注意によりて
殆と駄目らし何とも申訳のなき
事をしたり、
今日から時計か原の如く²⁸⁰
一時間遅れた時間となる、
夜手紙をかく、

10月25日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

279 サラ・ベルナール (Sarah Bernhardt, 1844-1923)。フランスの舞台俳優。

280 サマータイムが終わったという意。

午前九時半の列車にて Aman Jean
〔シャトー＝ティエリ〕
氏を Chateau Thierry に訪ふ、正午
着、駅前にて昼食、写真機を携へたる
ため戦跡を撮る Aman Jean 氏、幸
在宅午後四時の列車迄、話す、
サロン出品の日本出品の件、
など、写真数葉をとる、
この日秋晴、澄み渡りて、外
套不要なる位の暖さなり、
もう写生する暇なくなりたるは残
念この上なし

【欄外上側】

発 mariette

【欄外左側（縦書き）】

来、大使館、関、吉田、矩一
太田

10月26日 火曜

【本文欄】

午前中日本に発送すべき書籍の
荷造をした、午後一時過の列車
〔セーヌ＝ポール〕 〔デヴァリエール〕
〔Seine-Port〕 〔Desvallières〕
にて Sein Port に Devallier
〔セーヌ川〕
〔Seine〕
を訪ふ停車場より Sein を渡りて
向岸の氏の住宅に趣く、丁度
氏か散歩に出かける、戸口の所
にて會遇す、氏は再び向岸
の画室に導かれた今製作
中の大作は寺院の壁画
たるべきもの先日巴里にて画稿
を見たるもの再度氏の宅に帰り
茶の饗応を受け六時半の列車
にて帰巴す、

【欄外左側（縦書き）】

〔Desvallières〕 〔8月25日〕
Devallier 訪問の事²⁸¹ 25 Aout の餘白に記す²⁸²

【8月25日欄の欄外右上】

十月廿六日
〔Desvallières〕
Devallier

訪問
記

【8月25日欄の欄外左上】

十一月四日
記

281 後掲注284参照

282 この日デヴァリエールを訪問した際のこととを、「デヴァリエール訪問記」と題した文章にまとめ、空欄となっていた8月25日～31日欄、8月備忘欄、1月2日～16日欄に記している。

【8月25日の本文欄】

此夏殆ど暑を覚へなかつた^(なかった)巴里の生活は何時
の間にか夏か過ぎて秋に入つた秋に入つても
夏の間と殆ど同じ温度で毎日日々快晴か
続て雨の日は此の世から去つた様である、
出発か次第に天氣か変化なく、何日と
延へ続くのて其の期日の早く過ぎるに
は驚く位である、
昨日はChateau Therry^(シャトー=ティエリ)にAman Jean^(Château-Thierry)
氏を訪 今日約してDevallièr^(Desvallières)氏をSain^(Seine-Port)
Portに訪問したのである
Devallièr^(Desvallières)に先達て巴里で始めて會見^(初)

【8月26日欄の本文欄】

してその風格の崇高なると其生活
の質素さを好愛した、今日始めて^(初)
其の郷里のSain Port^(Seine-Port)に趣く
事は一方ならぬ快事である、
朝出かけて昼飯のテーブルに
つく事をすゝめられたか余は、
午後一時の列車でGard de^(リヨ)
Lyon^(Gare de Lyon)を出發した、Melun^(ムラン)に
行く、鉄道すして、Corbeill^(コルベイル)の
少し先きてある、
此の日も朝からの快晴である、
郊外に出かけるには適好な和い

【8月27日欄の本文欄】

日である列車の客は皆附近から巴里に
用達に通ふ人々の客である、一時間余て^(Seine-Port)
Sain Portに下車した
Montiny^(モンティニー) Bauron^(ブロン)などの駅も小さな
駅で乗降の客か稀たか此の停車場は格別
である、下車したのは余と他に只一人
の淋しそふな客であつた、停車場
にも、駅員らしいのは見へない妙齡の
Mlle^(マドモワゼル)か切符を受取つて居る諸種
兼^(兼)目化の駅員らしい、このMlleに^(Desvallières)
Devallièr氏の住宅を尋ねたアトリエ

【8月28日欄の本文欄】

は駅の前の庭の中に在つて住宅
は河向なりと云ふDevallièr^(Desvallières)は
今朝画室に来て居つた様である

283 デヴァリエールはパリの生まれ。1890年に結婚して以来、家族とセーヌ＝ポールで夏を過ごすようになったとのこと。

との話

踏切の柵を押通つて□□について数間少し
坂道を下つた左手の粗末な鉄
こふしの門かある、ベルも何にも[?]
ないから呼ぶ事は出来ないか鉄
の鎖てしはつた扉には錠か下し
てたので不在であると思はれた
十数間下をつゝ、^(セーヌ川)
^(Seine)それは直ぐ Sain
の川岸に出た其所に一軒の淋□

【8月29日欄の本文欄】

Cafe かあつた店女に[?][?] Devallier の^(Desvallières)
宅を尋ねた傍の横渡し舟に乗つ
て向に渡るのたとの事、
恰も渡守の小舎に近づいた時河
の中央迄漕出した舟を後に引
返し出した中の一人の婦人客は何たか
^(ふつぷつ)
^{*}ふづゝ云ふて居る
小さなこの横渡し舟の翁はゆるゝ^{*}静
かな水を漕て向岸に近付た再ひ
この渡守に^(Desvallières) Devallier の宅を尋ねと^(尋ねると)
又再び□よりも前方に進て居る
この乗合なりし婦人に声かけてこの

【8月30日欄の本文欄】

^(jeune homme)^(青 年) Jene Homme か^(Desvallières) Devallier 氏の
宅迄行くのたから道を共にしやつて
呉れと乞ふて居る、婦人は道すから
^(Seine-Port) Sain Port のよい所である事を自慢
して自分は今朝巴里に行つて帰り□
ある事をも話して婦人と辻の所で
別れて[?]教て貰た^(Desvallières) Devallier の宅の
目呼鈴を引いた小門に近づいた
時恰度其の小門から出かけ^{ママ}
人かある、瘦軀偉大の人は^(Desvallières) Devallier
氏であつた氏は突然に驚たらしい
半すぽん^(ズボン)を穿て指のない手袋をはめて

【8月31日欄の本文欄】

何れへか出かける所らしい来意を告げた、
来意と云ふて只氏の生活とアトリエか
見物したい為であつた、
氏は、この両三日、頭痛して製作
に親しめないから今散歩に出かける
所であると云はれた、

一寸氏の宅へ導れて入った、先達
巴里[?]で會た親孝行らしい息子さんは
全く見違へる様に仕事服を着て
本職の鍛冶屋さんに汗を流し
て居る、一忒枚写真を乞ふた
(Desvallières)
Devallier氏に向岸の自分の
〔アトリエ〕
Atelierに見て呉れとの事

【8月備忘欄】

最前の道を再び氏の色々の話
しを聞きながら川岸に出た
白ペンキで塗た渡舟に導れた
氏自身、オールをとつて川を横
切りそめた
氏は此の地に産れて此地に育て
られ此地を守つて早六十路に
も近きに盛に製作に親て居らる、
毎日この川を忒三度往復すると
の事夕方、^{ママ}の日光は川岸の秋
色の森に影して居る川の流れ
は実に静寂である、よい心地か
する何たか見る旧の国にても旅して

【8月備忘欄の欄外右側（縦書き）】

一月二日の所へつゝく △

【1月2日欄の本文欄】

(Desvallières)
Devallier氏訪問の事

八月三十日よりつゝく、
兩岸の森や林や丘か何たか不思議なほど優れて見へる崇高の念
か何所からか湧て来る様である
美しい鮮かな秋景かこの^(Des)De
vallières)
vallier氏の舟に乗せられ
て一層其の感しか□度になつ
た様[?]である、
向岸に上つて直傍の先に目付た
□□に□□□れた

【1月3日欄の本文欄】

画室は門を入れば直正面に見へる
半分[?]ほど落葉したこの庭の樹木は
淋しそふに並列して居る、
落葉は一度も秋に入て掃て入
れられた跡も見へぬ、
或樹幹の下に雨晒しになつた
一脚の机と一脚の籐椅子か

置れてある、

氏は余に一寸この椅子に椅つて見
る事をすゝめられた、余を腰^{ママ}をおろした
前に在る机の上には数本の絵筆と

【1月4日欄の本文欄】

常に雨露に濡ればなしの水
彩絵具とか乱雑に置れてある、
氏は『自分は仕事に勞れた時、
この椅子によって冥想^(瞑)に耽ける
のである、其時何か胸に浮たもの
を直に画構に描くのであると」
其机と絵具について説明
された、
画室は入口の方も内部も実に
乱雑に取乱されてあつた

【1月5日欄の本文欄】

天井は高いかあまり、廣い画室では
ない其の入口の向奥に窓がある
窓から^(Seine)Seinの岸か夕日に輝
て見へる
入口横と両側壁に大きな
四メートル位の高さのトワ^(画布)ル
か一面擴けられてある
それ^(コバルト色)へ全部にcobaltの
デッサンか描かれてある、入口
左側のトワ^(画布)ルは殆ど完き迄
に絵具で描上けられてある、

【1月6日欄の本文欄】

この^(パネール)panneauは或寺院の裝飾
絵であるそうた、今度大戦を²⁸⁴
画題としたので其左方の殆ど
□[?]から終つたものは
恰度、中央に位する、平和の
神か置れてある、
其左か人か死から榮に生きる
所て右方か人か生から死に
逝く所である、其の右方は戦
場の災禍を充分描き現さるゝ
積りらしい其平和の神の

【1月7日欄の本文欄】

直ぐ右方に天使か一人の斃た青い
兵士を腕にかゝへて神に近づい

284 制作時期とこの後に続く児島の記述から、サン＝プリヴァ礼拝堂（ヴェール＝ボン＝デュ＝ガール）の壁画を指していると考えられる。

て居るこれは其氏の次男の
十八才になれる親父の後をついて
画家となるべき有望であつた愛子
が戦場で不歸の客となつた所
であるそふな
其の息子さんの死た所は或松林
の岳であつたそうふた其を紀念する
ために其傍に樹葉か置れてあつ
た、氏に乞ふて其の筆をとられて
居る所を一式枚写真にとつた

【1月8日欄の本文欄】

少し急ぎ勝ちの氏は再び余を
導て氏の向岸の住に歸られた□
奥さんか来た茶の支度か出来ぬ
からとの事、て其娘さんか村
の娘達を集めて学校をして居
られるほど遠さに立派な屋敷に
趣た十人位の村娘か集つて
刺繡をやつて居られた なかゝ面白
いものか出来て居る様であつた、

【1月9日欄の本文欄】

此所ても一兩枚の写真をとつた
氏の宅へ歸つて茶を御馳走になつ
た汽車迄には尚時間もあるのて
色々日本の話しなと聞かるゝ
まゝにした 三四人の女の子供さん
か居られた皆可愛□□子供さん
てあつた
何所の間にかランプか運れ
て居る、其中に息子さんも室に入
つて来られた、皆親しく打解

【1月10日欄の本文欄】

けて話しをして呉れられる実に
氣持のよい家庭である、
外には月明かして居るらしい川岸
に夕霧か立そめて居る様である
このサロンの庭に面した両側
は大きな硝子窓であるか外
の光景か座してよく見へる、
氏は又余の歸りを舟で送るとて
同導して出かけた今日はよい心地
かした、先達 Monet の宅を訪れ
た時よりも、

【1月11日欄の本文欄】

四回目に渡る Sain の流れは
^(Seine)
日夕暗に一層静である、
氏は都の生活かつくゝ嫌て
ある事を話された、自分の様な
年輩では巴里に住む必要も
ないこの里に心静かに製作する
事か何よりの親しみと楽しみて
ある事を語られた
停車場に出たか汽車の時間
には尚少し間がある、

【1月12日欄の本文欄】

氏は宗教上の事について種々
話された、画室の中でも散歩
の道でも話され多くの美は
宗教の問題である、祈りか
氏の製作の生命である事は只画面
に表されて居る位の浅薄の
もので日はないらしい
今少し自分か仏蘭西語か
進むたなれはこの氏の尊い
話をすつかり聞味□事か
[?]
出来るのであろう

【1月13日欄の本文欄】

自分等の様の弱輩には氏の話は
あまりに高遠な様な氣かする
然しこの氏の態度に敬けん
の念の生ずる事は全く氏の値の
到す所であらうと思ふ
この停車場から乗客は一人もな
い其内に汽車か着た
^(さようなら) ^(良い旅を)
氏は Au revoir と Bon voyage
を告られて別れた

【1月14日欄の本文欄】

汽車の窓から静かな ^(Seine) Sein
の岸と澄た満た月光か鮮に
眺められる、
あゝ、美しき夜の光と美しき
高き人の光は今此所で
一刻合和の高調を味
ふ事か出来たのである
氏の作品は今一般にはあ
まり好評ではないらしいそ□て

【1月15日欄の本文欄】

繪商人などの相手にするほと流
行見てもないらしい、
生活の生活の素^マなる其辺
から生して居るらしい
然し氏の製作と人生に
は実に無限の榮がある、
氏の作は何所迄も眞剣て
ある、全くの□他てあろう
其品格の高調なる事は

【1月16日欄の本文欄】

或は現代其比を画壇に
見る事は出来まい、

10月27日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中、書籍の小包と製作をな
した、午後、散髪、写真店と、
(ラ・ベ通り) (古美術店)
Rue de la PaixのAntiquere
に寄り大使館に山中氏を訪²⁸⁵
れサロン日本出品の成行の
事を話す 夕食後帰宅、

【欄外上側】

(Pycke)
Pyck

Ar□□sse

来加藤

【欄外左上（縦書き）】

来三宅、
発加藤、大使館

10月28日 木曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(アトリエ・ダール・サクレ)
(Ateliers d'Art Sacré) 286
午前中外出、Atelie d'Art Sacré
(Desvallières)
にDevallierの作品を観に出か
くさほと、ものものならさる様感ず
(ベル・ジャルディニエール百貨店) (衣類)
(Belle Jardinière) (habit) 287
Belle JardinièreにてHaditを
注文す、正午帰宅、午後Cottet
の宅を訪問不在、掃除の婆

- 285 山中千之（やまなか・かずゆき）か。外交官。児島の住所録に名前がみえ、住所はパリおよびアントウェルペンとなっている。
- 286 アトリエ・ダール・サクレ（聖なる芸術工房）。ジョルジュ・デヴァリエールとモーリス・ドニによって1919年11月に設立されたアトリエ、芸術家グループ。
- 287 この時の注文書が現存しており（個人蔵）、その記載内容から「habit（衣類）」であることが確認できる。

さんに會談なるため歸寓、
(北 駅)
五時四十分 Gard du Nord
(Pycke)
着の Pay Pyck 君を出迎に
(オテル・デ・グランズ・オム)
趣く、Grand Homme に
(クローズリー・デ・リラ)
導く、夜 Lilas の會合
に出づ、松永氏の所にて
朝三時迄話す 不平談

【欄外左側（縦書き）】

発 齊藤、
来

10月29日 金曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中十一時四〇分の列車にて齊藤君と
(サン＝ジェルマン＝アン＝レー)
St German に Denie 氏を訪問す、
(Saint-Germain) (Denis) 288
昼食頃にて幸在宅来意を告ぐ
此日差支あるため、来週の水曜を
(サン＝トノレ)
約さる、三時巴里に帰り St Honore
(ラ・ボエシー)
Boelie の通りを散歩して、
(Boétie)
(marchand de tableaux)
方々の Marchan d'tablau に寄る、
(Ottmann) 289
Ottoman のもの一枚を買求む
(Pycke)
昨夜睡眠不足なりしたため
早く帰る、Pyck を訪ふ筈なりしも
見合す、

【欄外左側（縦書き）】

三宅
発
来 吉田

10月30日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(Cottet)
午前、Cotte 氏を訪問、画室の
作品を直接に譲りてもよけれ
はとの事、先日大原よりの
(フラン)
電報にて十萬法送金する絵を
買へとの事、若し着金すれば
買求める筈、を約す、

- 288 モーリス・ドニ (Maurice Denis, 1870-1943)。フランスの画家。
- 289 アンリ・オットマン (Herin Ottmann, 1877-1927)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「オットマン」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 290 次の作品に該当する。
アンリ・オットマン《風船売り（夏の頃）》、53×71cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明
販売元はオスマン画廊。同日付領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

直に Menard²⁹¹ 氏訪問不在、
午後齊藤君三浦氏来訪、[?]画室[?]
(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle Jardinier)
の事にて外出、夕方、Belle Jardinier
に趣く、夜都鳥氏
(Pycke)
と Pycke 氏来談

【欄外左側（縦書き）】

(Menard)
来、矩一、柿原、太田、Menar
武内、上田

10月31日 日曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前十一時、大使館に天長節の遙拜式
に趣く、無慮式百名の集りにして、軍人
の海陸の将士、半数をしむ
大使館の祝賀式に集参したるは今
(初)
回始めてなり大使より晚餐に招せ
られしも、不参を答ふ
日本倶楽部にて昼食を辻、岡田氏
と共にす
午後帰宅、夜松永氏と夕食
会を催す

【欄外左上（縦書き）】

M'
来 原

11月1日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、先般描きかけた、女の手袋を
手にした立た姿の背面とルクサンプール
の庭に描きかけたものを午前中に²⁹²
描きつゝけた、
午後、臺所に女と子供の絵を少し
修製した²⁹³
秋冷か催しそめて絵具が少しも乾
かなくなつた、今日は瓦斯ストーブ
を傍に置いて暖めた、
(Pycke)
夕食に外出して Pycke を訪ね、
(グラン・ブールヴァール)
(Grands Boul.)
Grand Boul. に散歩した、

291 鉛筆にて「メナール」と書き添えられて
いる。児島本人の筆跡ではない。

292 前掲注257および259参照

293 前掲注134参照

【欄外左側（縦書き）】

来岡本吉田、松尾、^{〔柿原、矩一〕}発柿原矩一、岡本
松尾、林圭母

11月2日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前 Menard²⁹⁴氏を訪問風景画一点
を求む、午後、Lebasque²⁹⁵氏を訪問²⁹⁶
して来意を告ふ氏、風邪にて
画室に入るを不得と再来を約し
て帰る、^{〔ジョルジュ・ブティ画廊〕}Georges Petitに展覧會
を観る、写真屋によりて帰寓
夜、辻氏来談、
Menard氏より小品を贈らる

【欄外左側（縦書き）】

発、上田、武内太田、関、妻
来
小包²⁹⁷1.2.3.を出す

11月3日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝日佛銀行より30000受取²⁹⁸
十一時の汽車にて齊藤君と St Germa^{〔サン=ジェルマン=アン=レー〕}□ t
に Denie^{〔denis〕299}を訪ふ画室に作品稀にして
やつと、海の絵を150000にて買求む³⁰⁰
帰途巴 Daurort^{〔オテル・ドルーオ〕}へ立寄りて Denie^{〔Drouot〕}
及 Flandrent^{〔Flandrin〕}などの作品を
見る、
夜、辻加藤、Pyck^{〔Pycke〕}、新井、住田[?]
の諸氏来訪

【欄外左側（縦書き）】

来
小包、³⁰¹4.6.7を出す、

11月4日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

- 294 鉛筆にて「メナール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 295 次の作品に該当する。
エミール＝ルネ・メナール《森の嵐（雷雨到来）》83×121cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明
同日付のメナールの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。
- 296 アンリ・ルバスク（Henri Lebasque, 1865–1937）。フランスの画家。なお、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 297 数字のみ横書きとなっている。
- 298 鉛筆にて「受取」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 299 鉛筆にて「ドニ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 300 次の作品に該当する。
モーリス・ドニ《波》100.0×124.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.1066）
同日付のドニの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）にて購入内容が確認できる。領収書によれば、購入金額は正しくは「15000」フラン。
- 301 数字のみ横書きとなっている。

午前齊藤、三浦氏来訪、画室の
事にて外出、
正午前の汽車にて三人にてVersaille
にLe Sidaner³⁰²氏を訪問す、
一式枚の作品はあれとも、
George Petit^{ママ 303}へ全分作品の
特約しありて直接売渡す事
不可能なりとの事、
近作にて百号以上の大の夕景の
海港、美しく見ゆ³⁰⁴
夕方の汽車にて帰巴、
【欄外左側（縦書き）】
小包、8. 9. 10 11 12 13. 14. 15 16.

11月5日 金曜

【欄外右上】

晴

後雨

【本文欄】

朝少し荷物の支度なとす、松永氏
の用事にてルーブル^(ルーヴル美術館)に趣く、銀行
Credit-Lyonnais^(パリ国際銀行) international^(internationale)にて電送を乞たる
100000fを受取る、写真屋により³⁰⁵
て夕方帰宅、Menard氏の所に
辻君か買ったスケッチの金を支拂に
行きLamorelleに寄る、
夜、藤岡、工藤氏³⁰⁶来訪、
小包郵送、5. 18. 20. 21. 22. 23. 24. 25
26. 27. 30. 32. 34. 35

【欄外左側（縦書き）】

◎

来 Duthu

発 柿原君へ十萬法着金の事を送電す、

11月6日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前本の荷造なとした、松永君の
ために今日もルーブルに趣く
午後帰途セン^(セーヌ)の河岸の古道具屋の
前て三宅氏と會遇三宅の宿に

- 302 アンリ・ル・シダネル (Henri Le Sidaner, 1862-1939)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「シダネル」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 303 鉛筆にて「(部) ?」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 304 後掲注380参照
- 305 鉛筆にて「メナール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 306 工藤三郎(くどう・さぶろう、1888-1932)であろう。洋画家。

導れ昼食を支那飯に共にす
午後三浦齊藤氏来訪、所用の
ため外出
夕方、写真屋にて埃及〔エジプト〕のコレクショ
ンを三十枚ほど求めた
夜三宅氏来訪されて夜半
に到る、

【欄外左側（縦書き）】

小包発36 17 24 33 39 40 37 30、

11月7日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔管 理 人〕
今朝Conciergeの娘を描きつゝける事を
約して置たか何か³⁰⁷都合て不可能と
なる十一時頃から兩三日前に買て来た
果物を卓上に置て菊の花を少し買て来
て弐十五号に写生した、久しく絵筆を
握る事か雑用のために出来なかつたので
何たか非常に興か湧た午後三時頃
迄に終た、夕方散歩に出てPyck〔Pycke〕
氏を訪れ夕食を共にして同導、夜半迄
話合す、

【欄外左上】

来Marianne

11月8日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕
〔Belle Jardinier〕
午前中、荷物支度、午後、Belle Jardinier
及、写真店に趣く、
〔Cottet〕
夕方前Cottet氏を訪問不在、
Lebasque³⁰⁸氏を訪れ、弐時間余ほど
談合す、
昨日より少し風邪の氣味早く
床に就く、

【欄外左側（縦書き）】

小包28. 31 41 42.

発妻、

307 鉛筆にて「かの」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

308 赤鉛筆で下線が引かれ、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

11月9日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中外出し不得、何かのた□つけ

午後前後^(サン・ドニ大通り)_(Bd. Saint-Denis)にて化粧図の^(版)

衣類一着を求む夜製作を試る³⁰⁹

つもりA^(代理店)_(Agence)日本郵船、約特約の

Ageanseに趣きて送荷の事を

問合す昼食後、夕方前Cottet氏

の処に趣きてMlleの肖像と馬の^(マドモワゼル)

絵を買求めた20000 10000 外にエッチング^(エッチング)

二十五枚を求む1000、³¹⁰

夜三宅氏辻氏来訪三宅氏明朝

マルセーユに向へ出発^(て)の筈、なる由

【欄外左側（縦書き）】

発柿原

来、三浦

11月10日 水曜

【欄外右上】

晴深霞

【本文欄】

午前昨日買て来た^(コスチューム)コスチュームを

着さしてクロツキーを試む、

^(オテル・デ・)_{(ラモレル(画材店))} Lamorelleに趣きHotel Grand

^(グラン・ゾム)_(Grands Hommes) Hommmesに来着の永地及³¹²

小松氏を訪問不在

午後、陶器を買求めに

^(グラン・ブールヴァール)_(Grands Boulevards) Grand Boulに出づ

^(Cottet) 夕方、Cotte氏より紹介され

たるVueiller氏をB^(マル)_(Bd)

^(Vuillard)₃₁₃ Maresherbeに訪問不在

夜、辻、永地氏に會見

夜約束せしモデル^(モデル)来らず電燈を

直しつゝ、終にスイッチ^(スイッチ)を損し^ず減燈となる

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、斉藤

^(Desvallières) Davallière

Aman Jean

発三浦

309 次の作品およびそれらの習作等関連作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.433《祭の夜》161.3×114.2cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.4071)

同総目録No.435《祭の夜(カーニバル)》162.4×114.2cm、同所蔵(同登録No.4103)

同総目録No.434《祭の夜(タンバリン)》、162.4×114.2cm、同所蔵(同登録No.4101)

以上3点は、仮装した女性像を描いた100号大による組作品として制作されたもの(12月19日欄参照)。これ以降12月19日まで、これらの制作に関するものと思われる記述が見られる。

310 次の作品に該当する。

シャルル・コッテ《J. L. B. 嬢の肖像》195.3×97.2cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.1058)

同《荒地の老馬》69.7×93.7cm、同所蔵(同登録No.1059)

シャルル・コッテによる版画作品19点、同所蔵(同登録No. 1554～1572)

同日付のコッテの領収書(大原芸術財団 大原美術館蔵)により以上の作品が確認できる。ただし、領収書本文には「un lot de 24 épreuves gravées à l'eau-forte (エッチング24点一組)」とあり、一方、領収書中の作品一欄にあげられている版画作品は19点である。いずれも児島の日記にある「エッチング二十五枚」とは数が合わない。

311 鉛筆にて「ホテル グランド」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

312 永地秀太(ながとち・ひでた、1873-1942)。洋画家。

313 エドゥアール・ヴュイヤー(Édouard Vuillard, 1868-1940)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「ヴイヤー」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

11月11日 木曜

【欄外右上】

霞

【本文欄】

午前中在宅、正午前 Aman Jean 氏
を訪問しサロン日本出品の事を計る、
今日は革明五十年^(命)記念を Ganbeta^{(Gambetta) 314}
のバンテオン^(移)遺葬、及び其他、無名の
戦死者のために国祭たり、
午後^(Cottet) Cotte 氏宅を訪れ数刻談合、
Cotte 氏より先日^(Cottet)の支拂受取書と eaufort^(エッチング)
を受取帰る³¹⁵
Cotte の小スケッチを一枚買求む³¹⁶
夜 Cafe Lelas に趣く、
^(クローズリー・デ・リラ)

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、

11月12日 金曜

【欄外右上】

霞

【本文欄】

朝、平瀬、永地氏来訪 正午前
Aman Jean 氏を訪ふ不在、
午後夕方にかけて Zingg³¹⁷ 氏を
訪問し、風景画5000を求む³¹⁸
夜^(モデル)モテル来る筈なるも余の
帰宅を後れたるため帰る
Pyck^(Pycke) 来談、

【欄外左側（縦書き）】

来斉藤、

11月13日 土曜

【欄外右上】

霞

【本文欄】

午前中、百号の構図、午後昼前
Aman Jean 氏を訪れ日本サロ
ン出品の事につきて今少し不決
定の件あれば日本にぞ見合せの事申
出す、
午後、夕方百号のデッサン

- 314 レオン・ガンベッタ (Léon Gambetta, 1838-1882)。フランスの政治家で共和国政府の樹立を宣言した人物。この日、無名戦士の遺骨の凱旋門への移葬とともに、ガンベッタの心臓がパンテオンに移葬された。
- 315 11月9日欄および前掲注306参照。
- 316 鉛筆にて「小」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 317 ジュール・エミール・ザング (Jules Émile Zingg, 1882-1942)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「ジング」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 318 次の作品に該当する。
ジュール・エミール・ザング《オーヴェルニュの風景》95×128cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明
同《ピカル風景》31.5×47.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No. 1552）
同《ピカル風景》31.5×47.5cm、同所蔵（同登録No. 1553）
同日付のザングの領収書（大原芸術財団大原美術館蔵）にて購入内容が確認できる。

夜、日本人倶楽部に余
都鳥、小倉氏のために送別會
催され出席、
夜半すきて写真現像、
【欄外左側（縦書き）】
来齊藤、

11月14日 日曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

朝都鳥氏来訪約せし如く吉田
君と美術学校に趣く、午後
より開門との事^(ルーヴル美術館)Louvreに行く
午後、参観^(モンパルナス駅)
午後齊藤君とGard Montparnasse
に出會を約したるありて共にSerusier³¹⁹
氏を画室に訪問す、
L'oiseau Bleu^(青い鳥)を7000にて³²⁰
買求む
夕方、齊藤君及³²¹Madame 三浦³²²
氏来訪、
夜佐々木氏の宅に招かれ夕食
に伊太利料理に出つ、

【欄外左側】

来
(Desvallières)
Devallier

11月15日 月曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

朝早く、Zingg³²³氏来訪五六人への
紹介状を持参さる、
昼前より、Madrin^(マドレーヌ寺院?)の附近に
(La Madeleine?)
道具屋を見物に行く
(裝飾美術館)
(Musée des Arts Décoratifs)
Musée L'arts Décorativに
(アルザス地方) (展覧会)
Alsacienのexpositionを見る
写真屋に寄り帰る、
夕方モテル写生、大体の色を塗
る、
(Pycke)
夜Pyck来談

- 319 ポール・セリュジエ (Paul Sérusier, 1864-1927)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「セルエジエ」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 320 次の作品に該当すると考えられる。
ポール・セリュジエ《二人のブルターニュ人と青い鳥》64.7×80.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.1027）同作品は領収書が現存する（大原芸術財団 大原美術館蔵）が、日付が記されていない。
- 321 鉛筆にて「及び？」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 322 鉛筆にて「環」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 323 鉛筆にて「ジング」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

【欄外左上】

(Marette) 324

Marette

【欄外左側（縦書き）】

来、矩一、三原、

11月16日 火曜

【欄外右上】

曇、晴、

【本文欄】

午前 Flandrin 氏を訪、外出の処

午後の往訪を約す、

昼前大使館に興味松田道一

氏を訪ふ、^(エジプト) 埃及行の旅券を

済す、

日本人倶楽部にて昼食す、

午後四時前 Flandrin 氏を

訪れ今春サロン出品の

^(聖母の歌) Chanson de la Vierge

の作

を買ふ6000、

夕方より^(仮)化粧の図を作る、

【欄外左側】

来

11月17日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝、写真屋と^(マドレーヌ寺院?) Madren の傍の^(古美術商) Antiquer

に興味、^(Flandrin) 昼前 Flandrin 氏を訪ひ

Madame Marval の画室に

て^(小さなクレオパトラ) Petite Cleopatra を求む

5000、^(Marquet) Marque 氏の画室

□も観る、—

午後、^(ベル・ジャルディニエール百貨店) Belle Jardinier に寄り帰

路 Aman Jean 氏を訪問、

夕方^(モデル) モデル写生、

夜辻君来談、

朝^(J. アラール画廊) Allard にて Menard の作

を買ふ7650、—

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、原、岡本

小笠原

324 欄外左側と同じく来信の記録と考えられる。

325 鉛筆にて「フランドラン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

326 松田道一（まつだ・みちかず、1876-1946）。外交官。

327 鉛筆にて「フランドラン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

328 次の作品に該当する。
ジュール・フランドラン《聖母によせる頌歌》114.2×162.4cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No. 1070）
同日付のフランドランの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

329 鉛筆にて「フランドラン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

330 ジャクリーヌ・マルヴァル（Jacqueline Marval, 1866-1932）。フランスの画家・版画家・彫刻家。ジュール・フランドランのパートナーであった。なお、鉛筆にて「マルバル」「=（画家）」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

331 鉛筆にて「の」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

332 次の作品に該当する。
ジャクリーヌ・マルヴァル《小さきクレオパトラ》97.1×137.7cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.1076）
同日付のマルヴァルの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

333 アルベール・マルケ（Albert Marquet, 1875-1947）。フランスの画家。なお、鉛筆にて「マルケ」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

334 次の作品に該当する。
エミール＝ルネ・メナール《アフロディテ》83×61cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明

同日付のJ. アラール画廊の請求書および領収書（いずれも大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

335 以上2行は引き出し線で本文4行目と5行目の間あたりへの挿入が指示されているが、挿入すべき場所が明確でないため、そのままとした。

11月18日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(J. アラール画廊)

朝 Allard より為替の事にて来て呉れ

との事趣く、

³³⁶ ^(オートウイユ)
Bonnard 氏を Auteuil に訪ふ

在宅なりしも今直に見せるものなし

との事昼食後、昨日約せし

^(Matisse) 337

Matiss の宅を訪ふニースにある

氏に電報し置きしもまた返事

なしとて M^{lle} Matiss ^(Mlle Matisse) 338 より数日

後来[?]らるべ返事あり次第、通知

するとの事、

^(野 生 ?)
^(Sauvage ?)

夕方、Sovage ³³⁹ の製作

11月19日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

³⁴⁰

朝 Martin 氏の宅を訪ふ不在、

³⁴¹
Guerin 氏を訪ひ画室を見て、

伊太利の女の作を求む10000

^{(ラモレル(画材店))} 343

Lamorelle の Atelier にて到来の

絵を見る、

^(ジョルジュ・プティ画廊)
^(Georges Petit)

午後 George Petie ^(Le Sidaner) 344 にて Sidanel

の價を聞きに寄る、

^(仮装した ?)
^(déguisé ?)

夕方、Degurge の作をつゝ

く、

【欄外左側（縦書き）】

発 小笠原岡本

原、

来斉藤

11月20日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(Agence ?) ??

朝 Ageans Straus に趣き

^(アントワープ)

船のアンベルス代理店の宛名を

^(ベルネーム・ジュヌ画廊)
^(Bernheim)

聞く Bernheim ^(J. アラール画廊) と Allard に

336 ピエール・ボナール (Pierre Bonnard, 1867-1947)。フランスの画家。

337 アンリ・マティス (Henri Matisse, 1869-1954)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「マチス」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

338 マルグリット・デュテュイ＝マティス (Marguerite Duthuit-Matisse, 1894-1982)。アンリ・マティスの娘。

339 三部作として制作が進められている100号大の仮装の女性像のうち、《祭の夜 (カーニバル)》を指すか。前掲注309および後掲注361参照。

340 アンリ＝ジャン＝ギヨーム・マルタン (Henri-Jean-Guillaume Martin, 1860-1943)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「マルタン」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

341 シャルル・ゲラン (Charles Guérin, 1875-1939)。フランスの画家。

342 次の作品に該当する。
シャルル・ゲラン《タンバリンを持つイタリアの女》116.5×89.3cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.1068)
同日付のゲランの領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵) により購入内容が確認できる。

343 鉛筆にて「ラモレル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

344 鉛筆にて「シダネル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

て荷物発送の事を依頼す、
〔Phs. ファン・オメレン〕³⁴⁵
Mrs Ph. Van Ommeren
〔アントワープ海運商会〕
Comptoir Matitime Anverso
〔アントワープ、ヨルダース河岸25番地〕
25 Quai Jordaens Anvers
??〔フラン〕
原氏書籍購入費1516fcs、銀

行にて受取る、

夕方、製作

夜、吉田、松永、Pyckの

諸氏とCasino de Parisに行く、

【欄外左側（縦書き）】

目来 藤島、金沢

11月21日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前室内整理、午後、松田氏藤岡君³⁴⁶

同道にて来訪、夕方迄話合ふ

夕方モデル^{〔モデル〕}遅れ来る、製作

せず、

夕食に出てシネマ³⁴⁷に寄りて帰る、³⁴⁸

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、柿原、大原、

11月22日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝Doro^{〔ドリュエ画廊〕}□eにMarquetの展覧会を^{〔D r u e t〕} 349

見る、bohet□□の絵商にてOttoman^{〔ラ・ボエシー通り?〕} 350
^{〔Boétie?〕} (Ottmann)

の絵をラモレルに送る様申つく³⁵¹

午後Belle Jardinier^{〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕}に洋服^{〔Belle jardiniere〕}

の終りのessayage^{〔試着〕}をなす、
^{〔essayage〕}

夕方製作、

夜、外出せず辻君来る、³⁵²

今日Academie d'Art Sacre^{〔アトリエ・ダール・サクレ〕}

に再びDevallier^{〔Desvallières〕} 353の作を

観る、如何にもよき作品なり

【欄外左側】

来matiss^{〔Matisse〕}

発matiss^{〔Matisse〕}

345 オランダの海運代理店フィリップス・ファン・オメレン。児島の住所録には、「Mrs PH. Van Ommeren」としてアントワープの住所が記されている。

346 鉛筆にて「整理」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

347 鉛筆にて「シネマ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

348 鉛筆にて「寄」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

349 この日から12月3日までアルペール・マルケの個展が開催されていることから、同展会場のドリュエ画廊を指すと判断。

350 鉛筆にて「オットマン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

351 オットマン作品の購入先は、現存する領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により、オスマン画廊であることが確認できる（前掲注290参照）。同画廊の住所はオスマン大通りであるが、領収書には画廊の住所の他に、「G. DANTHON, PEINTRE EXPERT, 29, RUE DE LA BOÉTIE, PARIS」という印字があり、このことから、この日児島はラ・ボエシー通りにオスマン画廊の代表者G. Danthonのもとを訪ねたと推測できる。

352 鉛筆にて「田」が挿入されている。児島本人の筆跡ではない。

353 鉛筆にて「デヴァリエ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

11月23日 火曜

【本文欄】

午前中宅に在り

^(サン＝ラザール駅)
(Saint-Lazare)

午後一時St Azarより斉藤、

³⁵⁴ (ジヴェルニー)

黒木氏と Giverny に Monet

^(フラン)

氏を訪問す、予定の壺萬法にて

はあまり楚々たる小品なれば、

^(睡蓮)
(Nymphaea)

遂に20000法にて Nymphaea を

求む30号

^(ヴェルノン) ^(停車場)

Vernon 夕方停車前に出て六時半の列

車を待ち八時半巴里着

前回訪問の時より僅かの間にモネ

氏、数多の大作を尽し居れり、

【欄外左上】

³⁵⁵

Allard

【欄外左側（縦書き）】

^(文部省、松田) ³⁵⁶

来、文部省松田

11月24日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(日仏銀行)

午前日佛より、30000引出により、

^(ジョルジュ・ブティ画師)

George Petit に寄りてシダネ^目ル

の豫約の事を計る

^(Matisse)

午後 Matiss の所にて肖像を求む

³⁵⁷ 10000前回見し作品に好みしも

のありしも売却を欲せず

^(Marquet)

Marque 氏の所により ^(Marseille) □ Marsaill

³⁵⁸ の作を求む7000、

夕方製作

^(Pycke)

夜三浦氏 Pycke 来談、

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、松田原、発松田、

11月25日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝辻君来訪、手紙を書く

昼前 Aman Jean 氏を訪問

し昼食の御馳走になる、

- 354 黒木三次（くろき・さんじ、1884-1944）。のちに伯爵・政治家。美術コレクターとして知られる。
- 355 欄外左側と同じく来信の記録と考えられる。
- 356 「文部省の松田から来信」の意ともとれるが、この時期児島が外交官の松田道一と（おそらく東久邇宮稔彦王の絵画教師の件や旅券の件で）頻繁にやりとりしていることから、「文部省と松田からそれぞれ来信」の意と解釈するのが適当であろう。
- 357 次の作品に該当する。
アンリ・マティス《マティス嬢の肖像》72.9×53.9cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.1030）
同日付のマティス夫人の領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。
- 358 次の作品に該当する。
アルベール・マルケ《マルセイユの港》65.0×81.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.1037）
同日付のマルケの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

午後、^{(Lebasque) 359} Lebasequ 氏を訪ふ不在

夕方製作、
^(クローズリー・デ・リラ)
^(Café Lilas)
夜Cofe Lilasに趣く、

今日は春の如く南の風にて

暖かし、夜月光澄み渡り

て氣持よし、

【欄外左側（縦書き）】

発 加藤
^(アントワープ)
^(Anvers ?)
Averes
代理店

11月26日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{(ラモレル(画材店))}
朝 Lamorelle に趣き荷造の事を依

頼す、午後諏訪に旅券の事を

依頼に行く、
³⁶⁰
^(サン・ドニ)
^(Saint-Denis)

St Dini にてペルシヤの假

装を求む

夕方より百号の新なるものに

製作を始む、

前回の百号と對作となる

べきもの、
³⁶¹

【欄外左側（縦書き）】

^(Matisse)
来 Mlle Matiss 斉藤、加藤、 発、斉藤、

11月27日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(野生 ?)
^(sauvage ?)
朝 Sobage の作に修作、後、外出青山君の所にて大原氏

へ乞目ふべき作品貳点500

^(フラン)
法にて求む、

昼食後、M^{lle} Matisse ³⁶²より

受Mr Matisse より何か申来たる用

事あれとて来信ありしたため出かく

日本の書籍店にて50 Dessins de

Matisse の賣方を依頼したけれとて

^(住所)
^(adresse)
adresse を聞かる 余に一部贈らる、
³⁶³

359 赤鉛筆で下線が引かれている。また、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

360 「諏訪」は諏訪ホテルまたはその主人の諏訪秀三郎のこと。諏訪は出入国などの手続の代行も請け負っていたようである。

361 次のいずれかの作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.433《祭の夜》161.3×114.2cm、大原芸術財団 大原美術館 (所蔵品登録No.4071)

同総目録No.436《祭の夜 習作》161.3×114.2cm、同所蔵 (同登録No.4081)

また、これにより11月9日に着手した作品は、仮装した女性像3点(前掲注309参照)のうち、《祭の夜(カーニバル)》または《祭の夜(タンパリン)》であることが推測できる。

362 鉛筆にて「マチス」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

363 同年にマティスが私費刊行した画集 *Cinquante dessins* について述べたものと考えられる。児島文庫中に同書が確認できる(大原芸術財団 大原美術館蔵)。

夕方製作昨日のデッサンに下
塗の彩色をなす

【欄外左側（縦書き）】

来矩一、岡崎、諏訪満谷堀

11月28日 日曜

【本文欄】

朝、十時過 Aman Jean 来訪
夫人共、百号大の作のみ示す
三枚程、明年サロン出品を勧
めらる、吉田松永遠山氏³⁶⁴
も作品の批評を受るる、
午後 Lebasque³⁶⁵ 氏を訪問、
先般見た絵、あまり進行せず、
小作式点を得かと考へつゝ次回
の来訪を約して帰る
夜モデル来る筈なりしも不参
夜 Pycke 来訪夜半を過く、

【欄外左側（縦書き）】

来 Mariette

11月29日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、Lebasque を訪問の筈なりしも、
少し製作改修中、瓦斯ストーブにて
冬洋服の上着の背を焼て式寸位の
穴を作る外出するに春服を着るの外
なし正午 Lebasque³⁶⁶ 氏を訪問不在
家人に托して7000法にて式点30号³⁶⁷
を求むる事とす、午後 Belle Jardinier³⁶⁸
にて外套を注文し冬服の焼穴の事
を計る友布賣切との事、
夕方帰宅、冬服の友布をトランクより見出
す夕方製作新なるカンパスに昨日迄の図作画
始む

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、

- 364 「遠山」のあとに鉛筆書きにて「五郎」と挿入されている。児島本人の筆跡ではない。
- 365 赤鉛筆で下線が引かれている。また、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 366 鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 367 上書きされており、数字の1、2文字目が判然としないが、領収書（大原芸術財団大原美術館蔵）に記載された購入金額より「7000」と判断。翌日欄に、金額が訂正された旨が記されていることから、日記の金額も書き換えられたものと推測できる。
- 368 次の2作品に該当する。
アンリ・ルバスク《二人の水浴女》79.5×92.8cm、西宮市大谷記念美術館蔵、大原美術館旧蔵
同《サナリー風景》73.2×92.3cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録 No.1069）
翌日付のルバスクの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

11月30日 火曜

【本文欄】

(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardinière)

朝Belle Jardinirに布片を持行

く昨日Lebasque³⁶⁹に支拂たる6000

(フラン)
法は千法不足にて7000法なりし由に

て来信のまゝ、昼前持参支拂、

午後、吉田君と布買に町を散歩

夕方製作、

藤岡君松田氏より太田君より

托送の^(カンヴァス)キャンパス代金159□法

持参さる、

夜藤岡、吉田、^(と)工藤氏を支那飯

に行く、

【欄外左側（縦書き）】

来 松田 Aman Jean

12月1日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中、旧作の加筆す、

午後Aman Jean氏を訪れ、て[?]

余の作品三点を贈る

小スケッチ

ルクサンブール

(シャティヨン)

Chatillon 式十号

花、紙に描きたる

氏の十五号位の

女の座せる習作を与へらる³⁷⁰

斉藤君か求めを乞ひAman^(アマン=ジャン)

氏の作を1500法にて譲受て^(フラン)

持行く斉藤風邪にて少し

閉口、中、

夕方製作、夜十一時頃

より二時頃迄<sup>{マネキン ?}
{mannequin ?}</sup>ma□□quinにて

作をつゝく

【欄外左側（縦書き）】

発松田、

12月2日 月曜

【欄外右上】

細雨

369 赤鉛筆で下線が引かれている。

370 次の作品に該当するか。

エドモン=フランソワ・アマン=ジャン

《女性の肖像》油彩・画布、67.5×54.8cm、

児島虎次郎旧蔵

【本文欄】

(ボン・マルシェ百貨店)
朝、Bon marcheにトランクを買に行
く、式個の大なるトランクと籠一

個を求む

(Aman-Jean)
午後A□□ Jeanを訪れて新
(ソルボンヌ) ソロボン化学教室に張付たれ ママ

たる氏の壁画、風火水土の
作を観る、³⁷¹ Aman Jean氏自ら

同道さる、

(クロズリー・デ・リラ)
夕方製作 夜Lilasの會

合に出席、

(エジプト)
埃及旅行を中止せんかと

(種々?)
種思考す、荷物のためなり

【欄外左側（縦書き）】

発三浦

12月3日 金曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

(オテル・デ・グランゾム)
朝、Grands HommesにPyckeを訪問
他に転宿したる由、一式古道具屋を
(ベル・ジャルディニエール百貨店)
廻りてBelle Jardinirに外套の
仕立合せに趣く、昼食後帰宅
夕方製作夜Pycke来談、

日本に送るへき買入れたる作品の持
運び等に関してなかゝの懸念に不
(エジプト)
堪一層、埃及旅行を中止して
平安に荷物の供をして帰るべき
事に決心し加藤君に丹波丸乗船の
事を断る

【欄外左側（縦書き）】

発電加藤

発黒木加藤、来加藤

12月4日 土曜

【欄外右上】

雨

【本文欄】

(カレブジャン古美術店)
朝、Karberjianに趣く正午後
迄皿参枚と壺を求む³⁷²4900

371 アマン＝ジャンによるソルボンヌ大学化学講堂のための壁画《四大元素》（パリ市所蔵）を指している。

372 同日付のカレブジャン古美術店の領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）の記載内容と作品に貼付けられているラベル、購入品リストほか関係資料との照合から、購入品4点のうち2点は次の作品に該当すると考えられる。

《刻線花文碗》イラン、サファヴィー朝、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.6069）

《ラスター彩糸杉文皿》イラン、サファヴィー朝、同所蔵（同登録No.6059）

午後諏訪に旅券を受取る
書籍店にて建築書を求む、独
逸書店に注文したる Segantiny^(Segantini)
の本を受取に行く賣^す目に
他の日本人に賣渡したりとの
事、
夕方製作^(マンドリン) 右方のマドリ³⁷³ンの
女を描く、³⁷⁴
夜少しかたつけ³⁷⁵をなす、

12月5日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔セルヌスキ美術館〕
朝 Musée Cernuschi を観る、重に
支那唐代の陶銅多し、漢周の
名品も少から^ず
午後、St German^(サン=ジェルマン) の附近にて陶器
数点を求む
夕方前帰宅、旧作を修作^す、
モデル^(モデル) 来^すらす
夜 Pycke 氏来談、明後日
伊太利に向て出発との由
始末終日多忙を極めしたため折角
の来巴も氏のために尽す所尠^すなりしを
怨む

【欄外左側（縦書き）】

発黒木、
来 Aman Jean

12月6日 月曜

【本文欄】

朝室内の少し整理³⁷⁶をして
昼前 Lamorelle に行く
午後弐時半、都鳥、永地、松
永氏を導きて Aman Jean
氏を訪問す、
夕方製作
夜、黒木氏来訪、

【欄外左側（縦書き）】

来加藤 書留にて郵船切付着^(符)

- 373 鉛筆にて「マンドリン」と書き添えられて
いる。児島本人の筆跡ではない。
374 児島油画総目録No.433《祭の夜》の画
面右奥に描かれたマンドリンを持った女
性のことを指していると考えられる。前
掲注309参照。
375 鉛筆にて「かた」と書き添えられてい
る。児島本人の筆跡ではない。
376 鉛筆にて「整理」と書き添えられてい
る。児島本人の筆跡ではない。

12月7日 火曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝、銀行にて20000引出し

〔カレブジャン古美術店〕
〔オイラー通り〕〔Kalebdjian〕

EulerのKarberjianに趣

き正午過ぎ迄かりて、数

点の陶磁器を求む12000³⁷⁷

〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕
〔Belle jardiniere〕

午後 Belle Jarenir に

寄りて帰宅、

夕方製作

夜陶磁器の荷造をなす

Pyckeの伊太利出発を

送る、

【欄外左側（縦書き）】

来電加藤書留にて加藤君に

船切符を送る、斉藤

12月8日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔ベルネーム・ジュヌ画廊〕
〔Bernheim〕

朝、Belnechainにシモンの

作品アンベルスより通告

なきため、取検を求めに行く

Petit³⁷⁸セザンヌの展覧会を

〔ジョルジュ・ブティ画廊〕〔Le
Sidaner〕379

観る PetitにてLe

Sidanelの豫約金、5000法

を渡して賣約をす、

〔デュラン＝リュエル画廊〕
〔Durand-Ruel〕

ベルDuranにてLenoirs

の陳列を観るなかゝに

見るべきものあり

夕方製作、

夜黒木氏来訪

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、来加藤、

12月9日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝早く三浦氏来訪同道してGeord<sup>〔ジョルジュ・
Georges〕</sup>

- 377 同日付のカレブジャン古美術店の領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）の記載内容から、この時の購入品10点のうち1点は次の作品と同定できる。
《青釉獸形双把手壺》イラン、12世紀後半～13世紀前半、陶器、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.6011）
- 378 ポール・セザンヌ（Paul Cézanne, 1839-1906）。フランスの画家。
- 379 鉛筆にて「シダネル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 380 次の作品に該当する。
アンリ・ル・シダネル《漁舟》165×201cm、大原美術館旧蔵、現所蔵不明
同日付のジョルジュ・ブティ画廊の予約金領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。同作品については、11月4日欄参照。
- 381 ピエール＝オーギュスト・ルノワール（Pierre-Auguste Renoir, 1841-1919）。フランスの画家。

プチ画廊) (サン＝ドニ)
Petit に趣く、帰途 St Denie に

(仮)
て化装衣、ポルトガル、セルビア、ペ
ルシヤ三着を求む⁶²⁰、
午後製作、先日来のキャンパス
(キャンパス)
を續く、
夜松永、織田氏の送別會
に日本人倶楽部に趣く

【欄外左上】
(アントワープの代理店)
(Agence)
Ageans d'Anvers
(バイクの友人) ³⁸²
Ami de Pycke

12月10日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardiniere)
朝、Belle Jardinir
に趣く、
昼前所用数多[?]をなす、
午後夕方より、製作、
(画布)
新なるトワルに始める筈
(ラモレール画材店)
なりしも Lamorelle より送りし
トワル粗悪なりしたため見合
す、
午後 Aman Jean 氏宅に寄
りて、黒木氏の所用を
傳ふ、
夜早く就床

12月11日 土曜

【欄外右上 (縦書き)】

晴寒氣強し
黒木氏
午後二時半[?]
来訪

【本文欄】

(ぐずぐず?)
朝少しくづして昼前町に出
づ構図に必要なる楽器を求
むるため、³⁸³ (エジプト)
埃及の木偶を
購ふ
午後二時黒木氏来訪同道して Am
(Jean) (Demeurisse) ³⁸⁴
Jean 氏を訪問、Demolise 氏
³⁸⁵
と共に東伯爵を訪ふ東伯爵、

382 後掲注390参照。

383 縦線が書かれている。内容の区切りを示
していると考えられる。

384 ルネ・ドゥムリス (René Demeurisse,
1894-1962)。フランスの画家。

385 東久邇宮稔彦王 (ひがしくにのみや・な
るひこ、1887-1990)。皇族・軍人、のち
に内閣総理大臣。身分を隠すため「東伯
爵」と通称されていた。

の絵画の教師として Aman Jean
(Demeurisse)
氏より Demorice 氏を撰定さ
れたるなり 東伯爵に拝謁す³⁸⁶
夜僅か一時間新なるデッサン
のため描く夜松田氏の夕食に招かる、

【欄外左側（縦書き）】

発坂本
佐々木、斉藤 Lebasque
来信太田、平野、斉藤
(Phs. ファン・オメレン)
(Van Ommereen)
Van Ommeron

12月12日 日曜

【欄外右上】

晴強寒

【本文欄】

朝、Digije の絵を修作、新井君
来訪、[?]正午過日本人倶楽部
にて松田氏と昼食を共にし
後、^(サロン・)佐々木氏と Salon d'
ドートンヌ)
Automne)
Auton を観る、
^(モデル)
帰宅モテルを約せしも来
らず、
三浦氏来訪、
夜深く荷造を始^{ママ}しめ、
書籍を詰込む、

【欄外左側（縦書き）】

来信太田—来信関、加藤
発溝口大佐

12月13日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝 Aman Jean 氏を訪問、
明後日東伯爵来訪の旨を
告ぐ
午後吉田君と日佛に趣き^(日仏銀行)
^(60000フラン)387 ^(オイラー通り)
□0000法引出 rue Euler
^(ラゼス)
(Rhazes) 388
にて Rages8200 と外に壺を
求む、
百[?]ポンドの為替を組むて船

- 386 以上2文字を鉛筆で囲い、「拝謁」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 387 金額を示す最初の数字はインク汚れにより判読不能。巻末の12月分出納ページの13日欄に「日仏より5935□」、同ページ欄外右上に「十二月十三日引出五九三五〇」とあり、これらのことから「60000法」と推測できる。
- 388 この当時、陶器の産地名と認識されていた。イランのテヘラン近郊の古代都市レイにあたる。

賃取替を支拂ふ

夕方製作

夜取かたつけ荷造をなす

【欄外左上】

発

12月14日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、〔ラモレル(画材店)〕Lamrelle〔額縁〕に趣く額縁と

絵の荷造殆と終へんとす、

午後都鳥氏、帰朝の途

〔リヨン駅〕
〔Gare de Lyon〕をGard Lyonに送る

夕方製作、

夜一時過迄マズール

を人形にて描く、³⁸⁹

【欄外左側（縦書き）】

来 Pycke Prils³⁹⁰

発加藤氏へ百ポンド

送る

12月15日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中取かたつけ、

午後一時半東伯爵邸

に趣き、Aman Jean

氏宅に同導し 後

〔Demeurisse〕Demorisse氏と四人に

〔ルーブル美術館〕391てルーブル参観をな

す

夕方、製作、

朝荷物箱造にて午前中

〔ラモレル(画材店)〕392多忙、Lamorelleの男来り手傳

【欄外左上】

発

〔Phs. ファン・オメレン〕
Van Ommeren

389 「マズール」はポーランドの民族音楽・舞踊のMazur（マズルカ）を指すか。その場合、児島が人形（マネキン）を用いて制作している作品は次に該当すると考えられる。

児島油彩画総目録No.434《祭の夜（タンバリン）》 前掲注305、356参照。

390 オスカー・プリルス（Oscar Prils）であろう。児島の住所録に名前がみえ、「Pyckeの友人」と記されている。住所はアントウェルペンとなっている。

391 鉛筆にて「ルーブル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

392 鉛筆にて「ラモレル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

12月16日 木曜

【欄外右上（縦書き）】

強寒○、四

晴

【本文欄】

^{〔ラモレル(画材店)〕}
朝 Lamorelle の男来りて

箱造りの手傳をなす、

夕方より製作

夜、藤岡、³⁹³ — —

氏の饗応を支那飯店

に受く

^{〔クローズリー・デ・リラ〕}
夜 Lilas の夕会に、

12月17日 金曜

【欄外上側】

○ 朝自宅より四個 ^{〔ラモレル(画材店)〕}
^(L a m o r e l l e) Lamorelle より

六個 及松永氏

^{〔トラック輸送業者?〕}
^(camionneur ?)
の托一個を Camoner をして

^{〔リヨン駅〕}
^(Gare de Lyon)
速達便にて Gard Lyon より送る

【欄外右側（縦書き）】

強寒○・四、

晴

【本文欄】

^{〔J. アラール画廊〕}
朝荷物かたつけ、午後 Allard

^{〔カレブジャン古美術店〕}
と Kalebdjian に趣く

両者不在、所用不達、

夕方前買物して帰る、

^{〔モデル〕}
夕方モデル写生、

何たか元氣なく製作に

氣乗せず、

夜夕食を羽田氏と

支那飯に共にす

室内荷物木箱にて四個、運送

店をして速達にて発送せしむ

【欄外左側（縦書き）】

^{〔代理店〕}
^(Agence ?) 来電、Agians ^{〔アントワープ〕}
Anvers

発電

^{〔Desvallières〕}
発 Devallier

小包にて錦絵□□送す

○○。

393 あとで出席者の名前を書き入れようと下線を引いておいたものと推測される。

12月18日 土曜

【本文欄】

朝 Aman Jean 氏を訪問す、明日
来宅するとの事、
(ボン・マルシェ百貨店)
午後 Bon marche に買物に趣く、
(モデル)
夕方モデル来りて製作を
つゝく
夜吉田君と Belle R□ste を
(シャンゼリゼ座)
(Champs-Élysées)
観る、Champs Elisées

12月19日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中新作をつゝく、十一時
Aman Jean 氏来訪新作に
つき批評を乞ふ
ペルシヤ風俗をしたる女を中心と
して三枚つゝきとして出品する筈な
りしも左右の貳枚のみにしたる方
よからむとのとの事³⁹⁴
午後三浦氏来談、
(リヨン 駅)
夕方松永氏を Lyon 停車場に
送る、夜中原氏来談、
深夜荷物のかたつけをなす、

12月20日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中少し取かたつけ、
大使館に旅券の事目て出か
ける、山中氏に面会松田氏
不在
(装飾美術館)
(Musée des Arts décoratifs)
午後、Museum L'art Decorative
に Le □□s □□s の展覧會を観る
(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardinière)
Belle Jardinier にて買物し
五時帰宅、製作
夜、松田氏来談、
新井氏、松永氏の跡に引越
来る、
夜深く荷かたつけをなす、

394 前掲注309参照。

12月21日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(J. アラルル画廊)

朝、Allardに荷造箱代の支拂か

(ベルネーム・ジュヌ画廊)

Berne^(B e r n h e i m)ghaime同様に余の方より

支払^(カレブジャン古美術店)ふ必要なき事を話して

承諾さる ^(K a l e b d j i a n)Karbdiantにて

大原の指環貳個を求む

午後、帰宅、夕方製作と

かたつけ頃日毎夜の如く

朝式時頃迄吉田君を

煩して荷造をなす

【欄外左側（縦書き）】

来松田、³⁹⁵榎藤

坂本鍵造

12月22日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(ラモレル(画材店))

朝、Lamorelleに出かけ絵具を

買求む _____

絵具屋 olive Frère N°150

Bou l . _____ に訪る、昼

過ぎて閉門

午後帰宅、数点の修作をなす

三時半より光線弱し、今日

は新春の如き快晴にて日光

鮮明なるに、

夕方、工藤、 — 両氏来訪、

深夜迄荷物かたつけ

【欄外左側（縦書き）】

発、斉藤、加藤、

12月23日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、書信数通をかく、昼前日佛

銀行に趣き、10000引出す、

395 児島の住所録に坂本鍵造という名前が
みえ、「三島丸機関長」と書かれている。
住所は神戸。

〔ボン・マルシェ百貨店〕
午後、Bon Marche に古布

を求む、
〔リヨン 駅〕
(Gare de Lyon)
Gard de Lyon にて切符
〔マルセイユ〕³⁹⁶
月曜夜八時半 Marseille

行の切符を求む

午後荷物たつけ、

夜松田氏を案内して支那

飯に趣き Theatre Cluny を観
〔クリュニー 座〕

朝四時明日発すべき荷造をなす

【欄外左上（縦書き）】

来矩一、

12月24日 金曜

【本文欄】

朝早く荷物を運搬すべく

運送人来る、

六個差出す、

日佛銀行に引出しに趣く

大原、余の分共に全部残

共引出す

〔ラモレル(画材店)〕
(Lamorelle)³⁹⁷

Lamorelle にて支拂なす

[?]
6901— 午後斉藤来

訪 Aman Jean 氏を

同導して訪問す、

【欄外左側（縦書き）】

発電

³⁹⁸
Young

発信

Dei□

〔Marianne〕
Marrette

〔Lebasque〕
Lebasque

12月25日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

昨夜半より夏洋服の修繕にて

遂に夜□□す朝となりて

床に就とするも不能

林氏原氏の書籍の買物に出

す、午後不睡のため精神

明快ならず

396 鉛筆にて「マルセイユ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

397 鉛筆にて「デヴァリエール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

398 マルセイユにある日本郵船の代理店と思われる。

夜も何事もせず^ず早く眠に就く

【欄外左上】

来

12月26日 日曜

【欄外右上】

快晴

【欄外右側（縦書き）】

暖かく春四月頃の如し

【本文欄】

朝、^(Bartholomé)Barthorome 氏を訪問す、

正午過 Aman Jean 氏の所

にて展覧會の件につき相談

に行く

午後、少し諸作に加筆す、

夕方より荷造をつゝく、

如何ほとたかつけてもかたつか

ぬと荷物の次第に益すのみ

にて閉口、

夜式時迄吉田君を煩して

荷造をなす、

【欄外左側（縦書き）】

発齊藤

12月27日 月曜

【欄外右上】

200

晴

【本文欄】

朝ラモレルに趣き荷物発送の受

取を得、絵具の不足を求む

午前中習作をつゝく、

午後齊藤君来る、Aman Jean

氏を訪問 Mr. Jzack 来談

[?]話サロン日本画出品の事に及ぶ

四時帰宅、少し荷かたづけを

つゝけ六時愈々画室引揚

七時頃^(リヨン 駅)Lyon 停車場に趣く、

八時三十分発、

【欄外左側（縦書き）】

来電

[?]Young

12月28日 火曜

【本文欄】

昨夜はうとゝかなり睡^{*}睡^{ママ}され
たり汽車は六人詰の所五人にて^(リヨン) Lyon
より三人となる、
十時半着のもの延着して十一時
半頃となる、Hotel Geneve
泊す、午後直横の Young の
店に訪る 荷物は都合
よく運ふらしとの事、
夜少し買物と散歩して
帰る、

12月29日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝十時の電車に投して^(エクス=アン=プロヴァンス) Aix に
向ふ車上弐時間なれとも谷の
奇景なか〜にあかず
正午 Aix 着昼食をなし、^(博物館・美術館) Musée
を見る、あまり見るほどの所も
^(アロヴァンスの古都)
^(ancienne capitale de la Provence)
なし、Ancien Captal de Provence
たけありて古風なる雅趣ある
都なり、空晴れて土色したる、
伊太利風の建築なかゝに^{*}美し
弐時発四時、帰宿、夕方買物
に町を廻る、

【欄外左上（縦書き）】

発吉田、

12月30日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

松永氏と昨夜會遇す、
朝、来訪^(博物館・美術館) Musée を観る、
午後、市中を散歩す、
日本及、巴里への通信をなす、

加藤君よりの送金するべき筈の
書留待たれと来^ずらす

12月31日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今朝早暁三島丸入港して

今午後発船の筈なりしか

通信出来^ず入港未定と

の事

遠方に出かける訳に行か^ず

市中に暮す、

午後Hali□□の古街を散歩す、

夕方に至り船は明暁にあら

されは入港せ^ずとの事、

【欄外左側～12月控え欄外左側（縦書き）】

発吉田、加藤、辻、自宅、柿原、

上田、

来信加藤来電田代

人名索引

- 本表は、児島虎次郎日記（1920年）に登場する人物の名前・呼称と日付をまとめたものである。
- 各欄について

「日記に記された名」

- 日記に記された名前・呼称を五十音順に示し、続いて、欧米人のみ姓のアルファベット順に示した。
- 欧米人の名前については、姓が不明、または姓、名、あるいはその他の呼称のいずれかであるか不明なため、漢字で記された名前については、読みの誤りのため、いずれも正しい順に配置されていない可能性があることをご了承いただきたい。
- 「氏」「君」などの敬称は人物の特定に役立つ場合があるため、敬称が用いられている名前は敬称もあわせて示した。なお、「鈴木・佐藤君」のように敬称が複数の人物に係っている場合、敬称が直接係っている名前については「佐藤君」のように直接敬称をつけて示し、それ以外については「鈴木（君）」のように敬称を（ ）内に入れて示した。
- 「鈴木一郎の姉」のように続柄で示された人物については、児島虎次郎との続柄で示された児島の親族と一部の例外を除き、名前の示された人物（例の場合は「鈴木一郎」）の情報として取り扱った。

「氏名等」

- 日記の記述や関係資料から得られた情報をもとに人物の特定・推定を試み、「氏名等」欄に示した。なお、これらは更なる精査を要する段階のものであることをあらかじめご承知いただきたい。
- 該当する可能性のある人物が複数考えられる場合は、特定を避けて空欄とした。ひとりの人物であるが氏名がわからないものは「不明」、空見出しの場合は「－」とした。

「日記の日付」

- 名前・呼称が記されている箇所を日記の日付で示した。「備忘」とあるものは該当月末の備忘欄を指している。

「参照先」

- 本文の脚注に人物についての情報を掲載している場合は、「参照先」欄にその脚注番号を示した。

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
青野			
青野	青野俊一郎	6/ 備忘	注39
青野兄	〃	6/14, 6/19	
青の	〃	2/6, 2/25, 2/29, 3/18, 3/24, 4/20, 4/26, 5/3, 5/21, 5/24, 6/11	
青の（兄）	〃	10/9	
青の（氏）	〃	4/26	
青山			
青山	青山熊治	8/15	注45
青山君	〃	2/8, 3/9, 9/8, 9/18, 11/27	
青山（君）	〃	2/9, 10/17	
青山（氏）	〃	4/5	
赤木	赤木萬二郎？	7/26	注198
足立	足立桂次？	3/31, 4/11	注106
阿藤	阿藤秀一郎	8/15, 8/26	注240
兄上	－	→ 児島徳太郎	
姉	－	→ 谷田タキ	
アマン＝ジャン	－	→ Aman-Jean, Edmond-François	
	アマンシアン氏／アマンジャン／アマンシヤン／アマンシヤン氏／アマンジャン／アマンジャン氏		
新井			
新井完氏	新井完	6/ 備忘	注153
新井	〃	6/19	
新井君	〃	9/8, 9/11, 10/2, 12/12	
新井氏	〃	6/20, 6/23, 12/20	
新井（氏）	〃	11/3	
有賀	不明	10/4, 10/9	
有島	有島生馬	8/1	注210
井川	不明	2/8	
石井			
石井	石井家	3/18, 3/24, 3/29, 6/11, 7/3, 8/1, 9/24, 10/9	注93

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
石井母	石井辰子	10/4	注138
日向の母	〃	6/3	
伊藤			
伊藤	不明	5/5, 8/1, 9/11, 9/19, 10/4, 10/8, 10/9	
伊藤氏	不明（三越関係者）	9/3, 9/6	
井上	不明	7/17	
今関	今関天彭？	8/1	注208
上田			
上田	上田喜平？	3/18, 6/5, 9/1, 9/2, 10/30, 11/2, 12/31	注94
上田	〃	8/1	
上田（兄）	〃	10/9	
上田氏	〃	9/24	
上田（氏）	〃	4/26	
遠藤	不明	2/25, 3/14	
太田			
太田	太田喜二郎	2/14, 3/8, 3/14, 3/28, 4/2, 6/11, 7/3, 7/26, 9/12, 9/27, 10/25, 10/30, 11/2	注57
太田君	〃	3/14, 3/26, 3/27, 3/30, 3/31, 4/1, 7/11, 9/10, 11/30, 12/11	
大原			
大原	大原孫三郎	1/2, 2/11, 2/13, 2/18, 3/29, 4/3, 4/7, 4/21, 6/17, 7/6, 7/24, 8/1, 9/8, 9/27, 9/28, 10/1, 10/3, 10/30, 11/21, 12/21, 12/24	注2
大原氏	〃	4/17, 10/7, 11/27	
岡崎	岡崎常太郎？	3/2, 3/31, 4/2, 6/5, 6/17, 6/25, 7/11, 8/1, 8/15, 8/26, 8/30, 9/2, 10/4, 10/8, 10/9, 11/27	注75
小笠原			
小笠原	小笠原長丕	2/21, 2/23, 4/28, 4/29, 7/3, 11/17, 11/19	注60
小笠氏	〃	5/7, 5/8	
岡田			
岡田君	岡田毅	2/24, 3/19, 4/14	注49
岡田（君）	〃	2/9	
岡田氏	〃	10/31	
岡見君	岡見富雄	9/10	注249
岡本	不明	8/1, 8/15, 8/26, 11/1, 11/17, 11/19	
奥島	不明	8/1	
奥田	不明	9/17	
奥村	不明	4/20, 5/16, 5/23, 9/22	
小倉			
小倉氏	不明	11/13	
小倉（氏）	不明	4/5	
織田氏	不明	12/9	
落合（君）	不明	10/17	
乙骨	乙骨安昌	2/22, 2/29, 8/1, 8/30, 9/2	注63
小野	不明	8/1	
小野田	小野田鉄弥？	4/14, 4/21	注115
柿原			
柿原政	柿原政一郎	8/1	注224
柿原得	柿原得一	8/1	注223
柿原	柿原政一郎または柿原得一	2/18, 3/18, 3/24, 4/1, 4/5, 6/28, 7/21, 7/24, 8/3, 8/15, 9/11, 9/27, 9/28, 9/29, 10/3, 10/9, 10/22, 10/23, 10/30, 11/1, 11/9, 11/21, 12/31	注223, 224
柿原君	〃	10/22, 11/5	
柿原氏	〃	10/4, 10/22	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
加藤			
加藤	加藤虎之助	2/11, 2/13, 2/23, 3/8, 3/9, 4/6, 4/9, 6/9, 6/13, 6/19, 6/25, 7/2, 7/3, 7/11, 7/17, 7/21, 8/3, 8/31, 9/2, 9/3, 9/8, 9/12, 9/18, 10/2, 10/13, 10/16, 10/22, 10/23, 10/27, 11/3, 11/10, 11/11, 11/17, 11/21, 11/24, 11/25, 11/26, 11/29, 12/3, 12/6, 12/7, 12/8, 12/12, 12/22, 12/31	注51
加藤君	〃	2/24, 2/25, 3/1, 3/2, 6/13, 6/20, 10/4, 12/3, 12/7, 12/30	
加藤氏	〃	2/19, 2/26, 2/28, 2/29, 3/3, 3/4, 6/21, 10/3, 10/5, 10/16, 10/19, 10/20, 12/14	
加藤静児君	加藤静児	6/8	注141
加藤静	〃	10/20	
加藤（氏）	加藤静児？	6/12	
金沢	金沢巖	3/31, 4/1, 4/6, 4/11, 6/28, 7/11, 9/1, 9/2, 9/27, 10/3, 10/4, 10/9, 11/20	注105
金山	金山平三	3/14, 6/5, 7/26, 8/1, 10/22, 10/23	注90
Kawaguchi 氏	川口軌外	2/7, 2/8	注44
河原君	河原賀市	3/3, 8/1	注77
木内	不明	9/3, 9/25	
木村			
木村	木村半蔵	2/6, 4/9	注40
木村氏	〃	2/12	
切山	切山篤太郎？	2/23, 2/24, 8/1	注64
矩一	—	→ 兄島矩一	
矩一／矩			
草野	不明	8/1	
工藤氏	工藤三郎	11/5, 11/30, 12/22	注306
久保田	不明	2/6, 2/13	
クラウド	—	→ Claus, Emile	
クロース／クロース先生			
黒木			
黒木	黒木三次	12/3, 12/5	注354
黒木氏	〃	11/23, 12/6, 12/8, 12/10, 12/11	
黒田			
黒田	黒田清輝	2/23, 2/24, 6/8, 8/1	注67
黒田氏	〃	9/11	
黒田先生	〃	6/6, 9/27	
虻一郎	—	→ 兄島虻一郎	
郡	郡虎彦？	6/25	注155
兄島／兄島			
兄島	兄島家 (兄島徳太郎)	7/24, 8/29, 9/2	注173
成羽	〃	7/11	
矩一	兄島矩一	2/22, 2/26, 2/29, 3/24, 3/29, 3/31, 4/2, 4/23, 4/27, 5/16, 5/21, 6/11, 6/28, 7/3, 7/11, 7/24, 8/1, 8/15, 8/23, 8/26, 8/30, 9/1, 9/10, 9/11, 9/12, 9/27, 9/28, 9/29, 10/9, 10/16, 10/22, 10/23, 10/25, 10/30, 11/1, 11/15, 11/27, 12/23	注62
矩	〃	9/2	
虻一郎	兄島虻一郎	6/3, 8/1, 9/2	注137
兄上	兄島徳太郎	3/14, 4/11	注89
妻	兄島友	2/24, 2/29, 3/14, 3/18, 3/23, 3/24, 3/25, 4/11, 4/20, 4/23, 5/3, 5/24, 6/3, 6/5, 6/11, 6/25, 7/3, 7/6, 7/11, 7/17, 7/21, 7/24, 8/1, 8/15, 8/26, 8/29, 8/30, 9/1, 9/2, 9/10, 9/15, 9/24, 9/27, 10/9, 10/23, 11/2, 11/8	注70
直平	兄島直平	2/29, 4/22, 5/5, 5/16, 6/11	注72
廣子	兄島廣子	3/6, 6/4	注81
広子	〃	3/24	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
母	児島雪	8/19	注243
ゴッホ	—	→Gogh, Vincent van	
ゴッホ			
小林			
小林	小林寿美太	2/12, 2/13, 2/26, 3/18, 4/22, 5/16, 5/21, 6/5, 7/21, 7/24, 8/1, 8/3, 8/15, 8/26, 8/29	注52
小林君	〃	2/26	
小林（兄）	〃	10/9	
小林（氏）	〃	4/26	
小松			
小松	不明	9/12	
小松氏	不明	11/10	
近藤	不明	2/23, 2/24, 5/5, 6/5, 6/25, 9/29, 10/3, 10/9	
斉藤			
斉藤	斎藤豊作	2/14, 8/1, 8/26, 9/19, 9/20, 9/25, 9/26, 9/29, 10/28, 11/10, 11/12, 11/13, 11/19, 11/26, 12/1, 12/7, 12/11, 12/22, 12/24, 12/26	注58
斉藤君	〃	8/24, 9/4, 9/7, 9/23, 9/26, 10/11, 10/17, 10/20, 10/21, 10/29, 10/30, 11/3, 11/14, 12/1, 12/27	
斉藤氏	〃	11/6	
斉藤（氏）	〃	11/4, 11/23	
坂田	不明	8/1	
坂本			
坂本鍵造	坂本鍵造	12/21	注395
坂本	不明	12/11	
笹川	笹川慎一？	8/1, 10/16, 10/23	注215
佐々木			
佐々木	不明	12/11	
佐々木氏	佐々木信造？	2/13, 11/14, 12/12	注56
佐藤			
佐藤	不明	8/29, 9/2, 9/24	
佐藤氏	不明	9/9	
皿井	皿井立三郎	8/1	注217
下田			
下田将美	下田将美	5/8	注130
下田		6/13	
シモン	—	→Simon, Lucien	
シモン／シモン氏			
シャヴァンヌ	—	→Chavannes, Édouard	
シャバンヌ			
鈴木	不明	3/28, 4/10, 4/14, 4/15	
須田			
須田	須田国太郎	3/11, 3/16, 4/12, 4/20, 7/21, 8/15, 8/24, 9/13, 9/25, 10/3	注88
須田氏	〃	6/23, 6/24, 6/27, 6/28, 7/1, 7/3, 7/7, 7/9, 7/22, 7/23, 7/24, 9/4, 9/8, 9/12, 9/20	
須藤	須藤祐七	8/1	注216
住田？	不明	11/3	
炭谷	炭谷小梅	8/15, 9/2	注239
諏訪	諏訪秀三郎	11/26, 11/27, 12/4	注360
セガンティーニ	—	→Segantini, Giovanni	
セガンニー			
関	関五夫？	8/1, 8/31, 9/29, 10/3, 10/25, 11/2, 12/12	注218
セザンヌ	—	→Cézanne, Paul	
妹尾	不明	8/1	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
高杉	不明	9/14	
武内	武内潔真	3/24, 3/28, 8/1, 10/30, 11/2	注100
田代	不明	12/31	
田邊	田辺至	8/1	注213
谷田			
姉	谷田タキ	6/27	注157
都志	都志太郎	2/6, 7/24, 8/3, 10/23	注41
辻			
辻永氏	辻永	6/8	注140
辻	〃	7/11, 7/24, 9/16, 12/31	
辻君	〃	6/8, 6/13, 11/5, 11/17, 11/22, 11/25	
辻氏	〃	6/22, 11/2, 11/9	
辻（氏）	〃	6/12, 6/14, 6/23, 10/31, 11/3, 11/10	
妻	—	→児島友	
デシャネル	—	→Deschanel, Paul	
デシヤネル氏			
デルヴァン	—	→Delvin, Jean-Joseph	
テルバン先生／デルバン氏／デルバン先生			
遠山			
遠山	遠山五郎	2/13	注54
遠山君	〃	2/13	
遠山氏	〃	3/7, 4/5, 11/28	
都鳥			
都鳥	都鳥英喜	6/13, 9/27	注83
都鳥氏	〃	3/8, 4/1, 4/23, 6/9, 6/23, 10/30, 11/14, 12/14	
都鳥（氏）	〃	6/14, 11/13, 12/6	
富永	富永勝重	8/1	注214
都山君	〃	4/25	
直平	—	→児島直平	
長尾			
長尾一平氏	長尾一平	4/27	注47
長尾	〃	2/8, 3/8, 3/10, 4/27, 4/29	
長岡外史	長岡外史	2/29	注72
中川			
中川君	中川紀元	5/24, 9/14, 9/18, 10/18	注46
中川（君）	〃	10/18	
中川氏	〃	2/8, 3/8, 6/7, 9/5, 9/28	
中川（氏）	〃	6/9	
永地			
永地氏	永地秀太	11/10, 11/12	注312
永地（氏）	〃	11/10, 12/6	
中原			
中原	中原實	3/22, 4/6	注98
中原氏	〃	4/24, 5/12, 12/19	
長原	長原孝太郎？	8/1	注209
成羽	—	→児島家	
西村			
西村	西村磯右衛門	2/23	注66
西村氏	〃	10/2	
橋本	不明	8/3	
長谷川			
長谷川潔君	長谷川潔	10/22	注103

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
長谷川	〃	3/28, 3/29, 10/12, 10/22	
羽田			
羽田亨	羽田亨	4/8	注97
羽田亨氏	〃	3/31	
羽田	〃	4/9, 4/16, 4/20, 4/21, 5/8, 9/13, 9/14	
羽田氏	〃	3/21, 4/19, 4/20, 9/10, 9/28, 12/17	
母	—	→児島雪	
林			
林	林源十郎？	3/18, 3/29, 4/2, 4/11, 5/16, 5/21, 6/11, 6/28, 7/3, 7/21, 7/24, 8/1, 8/3, 8/15, 8/23, 8/26, 9/1, 9/2, 9/27, 10/9, 10/16, 11/1	注92
林氏	〃	6/5, 10/21, 12/25	
原			
原	原澄治	2/8, 3/30, 4/5, 6/25, 6/28, 7/3, 7/21, 7/26, 8/1, 8/3, 8/15, 8/29, 10/21, 10/23, 10/31, 11/17, 11/19, 11/24	注48
原氏	〃	10/22, 11/20, 12/25	
原田			
原田瓊生	原田瓊生	6/17	注152
原田瓊生氏	〃	6/ 備忘	
原田	〃	7/2, 8/3, 10/9	
原田氏	〃	6/18, 6/19, 6/20	
原田昌	原田昌平？	9/27	注265
バルトロメ	—	→Bartholomé, Paul-Albert	
バルトロメ氏			
東伯爵	東久邇宮稔彦王	12/11, 12/13, 12/15	注385
疋田	疋田直太郎	4/14, 4/16, 6/28, 7/2, 7/3, 7/26, 8/15, 9/2, 9/25, 9/27, 10/3, 10/9	注116
ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ シヤンバンヌ	—	→Puvis de Chavannes, Pierre	
日向の母	—	→石井辰子	
平瀬			
平瀬君	不明	6/15	
平瀬（氏）	不明	11/12	
平塚			
平塚	平塚英吉	4/16, 4/29, 5/8, 7/21, 8/3, 8/15	注118
平塚氏	〃	5/10, 5/11	
平野	不明	12/11	
廣子／広子	—	→児島廣子	
廣瀬／広瀬			
廣瀬勝平氏	広瀬勝平	3/8	注82
廣瀬氏	〃	4/1, 4/7	
広瀬哲士氏	広瀬哲士	3/10, 5/31, 6/6	注85
廣瀬	〃	4/16, 6/9, 8/15, 9/11, 9/14, 9/27	
廣瀬氏	〃	3/21, 4/11, 6/6, 9/11, 9/27	
福島	不明	8/15, 8/26, 9/3, 9/5, 9/14, 9/27, 10/11	
福田氏？	不明	6/6	
藤	藤彦衛？	3/14	注91
藤岡			
藤岡	藤岡昇	12/16	注145
藤岡君	〃	11/21, 11/30	
藤岡氏	〃	9/12	
藤岡（氏）	〃	6/12, 11/5, 11/30	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
藤島			
藤島	藤島武二	2/23, 2/24, 6/8, 8/1, 9/1, 9/2, 9/27, 10/9, 11/20	注65
藤島先生	〃	3/26, 6/9	
細田氏	不明	6/30	
堀	不明	7/21, 8/3, 11/27	
堀久	不明（岡山県人）	4/8, 4/9	
正木	正木直彦	8/1	注221
松尾	松尾哲太郎？	8/1, 8/3, 11/1	注220
松田			
松田道一氏	松田道一	11/16	注326
松田	〃	11/23, 11/24, 11/30, 12/1, 12/21	
松田氏	〃	11/21, 11/30, 12/11, 12/12, 12/20, 12/23	
松永			
松永	松永津志馬	2/22, 5/7, 5/8, 7/6, 7/11, 7/21, 7/24, 9/3, 9/5, 9/8, 9/9, 9/19, 9/23, 9/29, 10/17, 11/20	注42
松永君	〃	4/14, 5/13, 11/6	
松永（君）	〃	2/9	
松永氏	〃	2/7, 2/22, 2/27, 3/1, 3/5, 3/9, 3/11, 3/12, 3/13, 3/18, 3/20, 3/24, 3/27, 4/4, 4/18, 4/25, 5/10, 5/11, 5/21, 6/6, 6/9, 6/20, 9/3, 9/29, 10/17, 10/28, 10/31, 11/5, 12/6, 12/17, 12/19, 12/20, 12/30	
松永（氏）	〃	6/7, 6/9, 6/12, 11/28, 12/9	
松原	松原三五郎	8/1	注219
三浦			
三浦	不明	11/9, 11/10, 12/2	
三浦氏	〃	9/26, 9/29, 10/17, 10/30, 11/4, 11/14, 11/24, 12/9, 12/12, 12/19	
三浦（氏）	〃	11/6	
溝口大佐	不明	12/12	
満谷	満谷国四郎	2/23, 2/24, 8/1, 11/27	注68
三橋			
三橋	三橋玉見	3/2, 3/6, 4/20, 6/5, 7/24, 8/1, 9/15, 9/27, 10/3	注74
三橋氏	〃	3/6	
三原	不明	8/1, 11/15	
三宅			
三宅専	三宅専一？	8/1	注225
三宅克	三宅克己	8/15	注241
三宅		3/30, 4/10, 4/11, 4/12, 6/12, 6/13, 7/21, 8/26, 8/30, 9/2, 9/3, 9/25, 9/27, 10/8, 10/9, 10/16, 10/22, 10/23, 10/27, 10/29, 11/6	
三宅氏		11/6, 11/9	
東京三宅		8/30	
ムーニエ	—	→Meunier, Constantin	
ムニエー			
迎氏	不明	8/24, 8/30	
村上	不明	9/8	
メナール	—	→Ménard, Émile-René	
モネ	—	→Monet, Claude	
モネ氏			
森川智徳氏	森川智徳	9/10	注248
森田	森田恒友？	8/1	注222
柳井			
柳井	柳井新太郎	2/24, 3/10, 4/2, 4/11, 5/16, 5/24, 6/5, 7/11, 7/21, 7/24, 8/1, 8/3, 8/30, 9/1, 9/2, 9/12, 9/25, 10/3, 10/8, 10/9, 10/16, 10/23	注69

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
柳井君	〃	4/2	
柳井（兄）	〃	10/9	
柳井（氏）	〃	4/26	
山内	山内愚僊？	8/1	注212
山口（君）	不明	2/9	
山下	山下新太郎？	3/28, 8/1, 8/26, 9/27	注102
山田			
山田穆	山田穆	3/3	注76
山田氏	〃	3/3, 3/4, 3/11, 4/6, 4/7	
山田放天	山田毅一	9/3	注246
山田		10/9, 10/22, 10/23	
山中			
山中	不明	4/9	
山中氏	山中千之？	10/27, 12/20	注285
山本	山本森之助？	8/1	注211
吉田			
吉田	吉田苞	2/22, 2/24, 3/31, 4/4, 5/4, 5/16, 6/11, 7/21, 7/24, 8/11, 8/15, 9/12, 10/17, 10/25, 10/29, 11/1, 12/29, 12/31	注61
吉田君	〃	4/4, 6/12, 8/11, 8/15, 8/24, 9/5, 9/8, 9/9, 9/10, 9/11, 9/12, 9/18, 9/19, 9/21, 9/23, 9/25, 9/30, 10/3, 10/18, 11/14, 11/30, 12/13, 12/18, 12/21, 12/26	
吉田（君）	〃	10/18	
吉田（兄）	〃	10/9	
吉田氏	〃	4/26	
吉田（氏）	〃	9/29, 11/20, 11/28, 11/30	
吉政氏？	不明	6/17	
ル・シダネル	—	→ Le Sidaner, Henri	
シダネル			
ロダン	—	→ Rodin, Auguste	

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Aman-Jean, Edmond-François（エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン）			注50
	Aman Jean	9/9, 10/10, 10/25, 11/10, 11/28, 11/30, 12/5	
	Aman Jean氏	2/9, 10/8, 10/10, 10/25, 10/26, 11/11, 11/12, 11/13, 11/17, 11/25, 12/1, 12/2, 12/6, 12/10, 12/11, 12/13, 12/15, 12/18, 12/19, 12/24, 12/26, 12/27	
	A□□ Jean	12/2	
	Aman氏	12/1	
	Am Jean氏	12/11	
	アマンシアン氏	3/3	
	アマンジャン	4/8	
	アマンシヤン	5/24, 10/11	
	アマンシヤン氏	3/8, 4/6, 4/7, 4/19, 6/28, 10/6	
	アマンジャン	2/18, 3/19, 10/6	
	アマンジャン氏	4/17, 4/19, 5/31, 6/6, 6/7	
Angèle			
	Angele	7/11, 7/12, 8/8, 8/9	
	Angeles	7/30, 8/1	
Anna			
	Anna	7/17, 8/1	
Bartholomé, Paul-Albert（ポール＝アルペール・バルトロメ）			注122
	Barthorome氏	12/26	
	バルトロメ氏	4/19	

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Bénédite, Léonce (レオンス・ベネディット)			注86
	Benedit	10/7	
	Mr Benedit	3/11	
	Benedit 氏	9/16	
	Beneditz 氏	10/16	
Bernhardt, Sarah (サラ・ベルナール)			注279
	Sara Bernard	10/23	
Bonnard, Pierre (ピエール・ボナール)			注336
	Bonnard 氏	11/18	
Carte, Anto (アント・カルテ)			注172
	Carte 氏	7/10	
Cézanne, Paul (ポール・セザンヌ)			注378
	セザンヌ	12/8	
Chavannes, Édouard (エドゥアール・シャヴァンヌ)			注109
	シヤバンヌ	4/6	
Claus, Emile (エミール・クラウス)			注114
	Claus 氏	4/16	
	Claus 先生	7/6	
	クロース	4/16	
	クロース先生	4/13	
Cottet, Charles (シャルル・コッテ)			注147
	Cottet	10/28	
	Cottet 氏	11/9	
	Cotte	10/7, 11/11	
	Cotte 氏	6/14, 6/16, 10/30, 11/10, 11/11	
	Cottee 氏	11/8	
	Cotter	10/11	
De Bruyn, Mariette (マリエット・ド・ブライン)			注245
	Marette	11/15	
	Marrette	12/24	
	Mariete	10/13, 10/21	
	Mariette	8/29, 9/4, 9/14, 9/22, 9/25, 10/1, 10/25, 11/7, 11/28	
Demeurisse, René (ルネ・ドゥムリス)			注384
	Demolise 氏	12/11	
	Demorice 氏	12/11	
	Demorisse 氏	12/15	
Denis, Maurice (モーリス・ドニ)			注288
	Denie	11/3	
	Denie 氏	10/29	
Deschanel, Paul (ポール・デシャネル)			注121
	デシャネル氏	4/19	
Desvallières, Georges (ジョルジュ・デヴァリエール)			注274
	Desvallières	10/13	
	Desvallière	10/22, 11/10	
	Desvalliere 氏	10/16	
	Devallier	10/26	
	Devallier 氏	10/26	
	Devallier	10/26, 10/28, 11/14, 11/22, 12/17	
	Devallier 氏	10/26	
Duncan, Isadora (イサドラ・ダンカン)			注156
	Isadora Duncan	6/27	
Duthu, Laurent (ローラン・デュトゥ)			注117
	Duthu	4/14, 4/20, 7/26, 8/1, 8/15, 8/23, 8/29, 11/5	

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Dyck, Anthony van	(アンソニー・ヴァン・ダイク)		注183
	Van Dyc	7/23	
Eugène			
	Eugène	6/25	
	Eugene	6/24	
Flandrin, Jules	(ジュール・フランドラン)		注123
	Flandlin	4/19	
	Flandrin 氏	11/16	
	Flandrn 氏	11/17	
	Flandrent	11/3	
Frédéric, Léon	(レオン・フレデリック)		注170
	Frederique	7/10	
Gambetta, Léon	(レオン・ガンベッタ)		注314
	Ganbeta	11/11	
Gogh, Vincent van	(フィンセント・ファン・ゴッホ)		注185
	ゴッホ	7/23	
Goya, Francisco de	(フランシスコ・デ・ゴヤ)		注28
	Goya	1/20	
Guérin, Charles	(シャルル・ゲラン)		注341
	Guerin 氏	11/19	
Hoffmann			
	Hoffmann	6/24, 6/25	
Jzack			
	Mr. Jzack	12/27	
La Touche, Gaston	(ガストン・ラ・トゥシュ)		注271
	La Touche	10/7, 10/11	
	La Tauche	10/10	
Le Sidaner, Henri	(アンリ・ル・シダネル)		注302
	Le Sidaner 氏	11/4	
	Le Sidanel	12/8	
	Sidanel	11/19	
	シダネル	11/24	
Lebasque, Henri	(アンリ・ルバスク)		注296
	Lebasque	11/29, 11/30, 12/11	
	Lebasque 氏	11/2, 11/8, 11/28, 11/29	
	Lebasqu	12/24	
	Lebasequ	11/25	
Marguerite			
	Margeritte	8/8	
Marquet, Albert	(アルペール・マルケ)		注333
	Marquet	11/22	
	Marque	11/17	
	Marque 氏	11/24	
Martin, Henri Jean Guillaume	(アンリ＝ジャン＝ギヨーム・マルタン)		注340
	Martin 氏	11/19	
Marval, Jacqueline	(ジャクリーヌ・マルヴァル)		注330
	Madame Marval	11/17	
Matisse, Henri	(アンリ・マティス)		注337
	Matiss	11/18, 11/22, 11/24	
	Mr Matisse	11/27	
Marguerite Duthuit-Matisse	(マルグリット・デュテュイ＝マティス)		注338
	Mlle Matiss	11/18, 11/26	
	Mlle Matisse	11/27	

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Maurice	Mr Maurice	8/12	
Ménard, Émile-René (エミール＝ルネ・メナール)	Menard	3/3, 6/13, 6/14, 11/17	注80
	Menard 氏	10/30, 11/2, 11/5	
	Menar	10/30	
	メナール	6/16	
Meunier, Constantin (コンスタンタン・ムーニエ)	ムニエー	9/10	注250
Millet, Jean-François (ジャン＝フランソワ・ミレー)	Millet	7/27	注200
Monet, Claude (クロード・モネ)	Monet 氏	10/20, 10/21, 11/23	注278
	Monet	10/24, 10/26	
	モネ氏	11/23	
Montigny, Jenny (ジェニー・モンチニー)	Mlle Montinie	7/6	注164
Muñoz Degrain, Antonio (アントニオ・ムニョス・デグライン)	Degrain	1/20	注29
Ottmann, Henri (アンリ・オットマン)	Ottoman	10/29, 11/22	注290
Poree ?	Poree ?	8/29	
Potter, Paulus (パウルス・ポッテル)	Pottey	7/26	注192
Poulette	Mlle Poulette	4/13	
Prils, Oscar (オスカー・プリルス)	Prils	12/14	注390
	Ami de Pycke	12/9	
Puvis de Chavannes, Pierre (ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ)	シヤンバンヌ	7/26	注193
Pycke, Francois (フランソワ・パイク)	Pycke	5/5, 8/4, 8/5, 8/6, 8/9, 8/10, 8/11, 9/11, 10/18, 11/28, 12/3, 12/7, 12/14	注129
	Pycke 君	8/7	
	Pycke 氏	12/5	
	Pyck	8/29, 9/3, 9/12, 10/2, 10/27, 10/28, 10/29, 11/1, 11/3, 11/12, 11/15, 11/20, 11/24	
	Pyck 氏	10/30, 11/7	
	Pyike	8/1, 8/8	
	Pyike 君	7/29	
	Pyike 氏	8/7	
	Pyke	7/4	
Rembrandt van Rijn (レンブラント・ファン・レイン)	Rembrant	7/23, 7/26	注182
Renée	Renée	6/15, 7/19	注150
Renoir, Pierre-Auguste (ピエール＝オーギュスト・ルノワール)	Lenoir	12/8	注381
Rodin, Auguste (オーギュスト・ロダン)	ロダン	3/11, 4/7	注87

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Segantini, Giovanni	(ジョヴァンニ・セガンティーニ)		注184
	Segantiny	7/23, 12/4	
	セガンニー	7/27	
Sérusier, Paul	(ポール・セリュジエ)		注319
	Serusier 氏	11/14	
Simon, Lucien	(リュシアン・シモン)		注79
	Simon	3/3, 3/4, 10/14	
	シモン	12/8	
	シモン氏	4/17	
Sorolla y Bastida, Joaquin	(ホアキン・ソローリャ)		注27
	Zorala	1/20	
Tardy			注252
	Tardy	9/15	
Velázquez, Diego	(ディエゴ・ヴェラスケス)		注26
	Velasques	1/20	
Vuillard, Édouard	(エドゥアール・ヴュイヤール)		注313
	Vueiller 氏	11/10	
Zingg, Jules Émile	(ジュール・エミール・ザング)		注317
	Zingg 氏	11/12, 11/15	

大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について－2

On the Letters from Kojima Torajiro to Ohara Magosaburo, Part 2

水島博（公益財団法人有隣会研究員）

MIZUSHIMA Hiroshi (Researcher, Yurinkai Foundation)

柳沢秀行（公益財団法人大原芸術財団シニアアドバイザー）

YANAGISAWA Hideyuki (Senior Advisor, Ohara Art Foundation)

要旨

本「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について－2」においては、大原孫三郎(1880–1943)が生活の拠点とした倉敷市の大原本邸に残された、大原へと児島虎次郎(1881–1929)が送った書簡のうち、「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について」(「大原芸術研究所紀要第1号」 大原芸術研究所 2025年5月。以後【紀要1号】)で取り上げなかった55通の書簡を紹介する。

書簡の発信時期は、1902(明治35)年10月8日から1906(明治39)年1月19日にわたるもので、【紀要1号】で紹介した1903(明治36)年6月30日より1907(明治40)年11月27日までの40通の書簡と時期的にも重複するものである。

【紀要1号】で紹介した40通は、1907(明治40)年3月より開催された東京府勧業博覧会美術展へ児島虎次郎が出品した《なさけの庭》、《里の水車》の制作過程と、その後、渡欧するまでの児島の動向を把握できる書簡を優先的に選んだ。今回の55通は、【紀要1号】の40通が知らせる動向を補足するとともに、いくつかの新たな事実を伝える。

ひとつは、児島が、須磨の住友家別荘で同家のコレクションを見たことである。逆に言えば、住友友純(春翠)によるクロード・モネ、ジャン＝ポール・ローランス、鹿子木孟郎、浅井忠などのコレクションが、画学生に限定的な形でであろうが公開されていたことを示す。

それから、東京府勧業博覧会美術展を境に、児島虎次郎と対照的な人生を歩むことになる青木繁(1882–1911)が、発表当時から高い評価を得た《海の幸》1904(明治37)年制作のために滞在した房総布良海岸の至近の場所に、青木滞在の翌年に児島も訪ねていたことが明らかとなった。児島が、青木の存在をどのように意識していたのかを考える一つのきっかけとはなろう。

Of the letters Kojima Torajiro (1881–1929) sent to Ohara Magosaburo (1880–1943) and which were kept at the Oharas' principal residence in Kurashiki-shi, Okayama, where Magosaburo was based, the fifty-five letters which were not included in "On the Letters from Kojima Torajiro to Ohara Magosaburo" in *Bulletin of Ohara Art Institute 1* (Ohara Art Institute, May 2025, referred to hereafter as *Bulletin 1*) are introduced.

These letters were sent between October 8, 1902 (Meiji 35) and January 19, 1906 (Meiji 39). Date-wise, they overlap with the forty letters from June 30, 1903 (Meiji 36) to November 27, 1907 (Meiji 40) introduced in *Bulletin 1*.

In *Bulletin 1*, priority was given to forty letters describing the process through which Kojima produced *Garden of Sympathy* and *Watermill in the Village*, two paintings he submitted to the Tokyo Industrial Exposition in March 1907 (Meiji 40), and Kojima's activities before leaving for Europe. The fifty-five letters introduced here supplement the content of Kojima's activities introduced in the forty letters presented in *Bulletin 1* and also convey some new evidence.

One newly confirmed point is that Kojima saw the Sumitomos' collection at the Sumitomo family's villa in Suma, Hyogo. This conversely indicates that the art collection including works by Claude Monet, Jean-Paul Laurens, Kanokogi Takeshiro, and Asai Chu assembled by Sumitomo Tômoito (Shunsui) was shown, though probably in restricted form, to art students.

Secondly, we found out that Kojima visited Mera, Chiba the year after Aoki Shigeru (1882–1911) stayed there. Following the outcome of the Tokyo Industrial Exposition, Aoki was to lead a life in stark contrast to that led by Kojima. In order to produce *A Gift of the Sea*, 1904 (Meiji 37), Aoki stayed in a location close to Mera Beach on the Boso Peninsula. The fact that Kojima visited Mera the following year prompts us to give thought to Kojima's awareness of Aoki's existence.

「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について」(「大原芸術研究所紀要第1号」大原芸術研究所 2025年5月。以下【紀要1】)において、大原孫三郎(1880-1943)が暮らした岡山県倉敷市の本邸に残された児島虎次郎(1881-1929)からの書簡のうち、特に児島の学業と画業に注目して1903(明治36)年6月30日より、1907(明治40)年11月27日まで40通の書簡を紹介した。

引き続き、この「大原孫三郎宛児島虎次郎書簡について」2において、前回取り上げなかった1902(明治35)年10月8日から1906(明治39)年1月19日までの55通の書簡を紹介する。

前号と同じく、大原孫三郎宛児島虎次郎書簡の翻刻は、水島博が行った。水島による【凡例】も参照のこと。

柳沢秀行は、すでに前号で紹介済の書簡と時期的に重複するため、書簡の日付の前後関係にも注意しながら、※以下に字体を変えて、内容と注意点を示した。

【凡例】

- 一、史料の体裁はできるだけ原本に従ったが、改行はいちいち指摘していない。
- 一、異体字・俗字などについては、一部を除き、常用漢字・正字へ改めた。
- 一、繰り返し記号は、「々」(漢字)・「ゝ」(ひらがな)・「ゝ」(カタカナ)で表記し、二文字以上の繰り返しは、「く」で示した。
- 一、史料の判読を考慮し、適宜、「」(読み点)・「・」(並列点)を挿入した。
- 一、誤字や脱字・衍字については、該当箇所「」(カ)・「」(カ)・「」(カ)・「」(カ)・「」(カ)と記した。また、意味不明な箇所には「(ママ)」を付けた。但し、助詞や濁音などの軽微な誤りや多数の誤記が連続するなど、煩瑣に過ぎると判断した場合は、訂正を省略した場合がある。
- 一、本文の訂正抹消は、二重取り消し線で示し、訂正文字を右行間に記した。抹消などで文字が判読できない場合は、■で示した。また、行間等に挿入されている文字は可能な限り行間に記し、必要に応じて「」で括り右肩に(朱印)・(朱書)・(異筆)などと示した。
- 一、判読に疑念の残る文字については、右行間に(カ)と記した。
- 一、封筒の表・裏書については、改行を「」で示した。
- 一、書簡の年月日については、本文・封筒裏書・消印等から特定を行っているが、疑問の残る年月日は、()で示している。
- 一、記載を配慮すべきと判断した人名は□□^(人名)、などと記した。
- 一、今回記している「F」と「別」で始まる史料番号は、飽く迄も仮番号であり、今後大原家文書整理が進んだ場合、番号が変更されるものである。

以上

(1) 大原家文書 F・193 明治三五年一〇月八日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)

「東京下谷区谷中上三崎／南町四拾四番地 雲衣象潭方／九月八日 (十カ) 児島虎次郎」

次郎」

拝啓、

御高堂益々御壮栄の段奉賀候、陳バ本日為替券在中の御書簡正に拝受仕候、就而ハ領収証差送り候間、御落手被下度候、先ハ当用迄、不具

(十カ)
九月八日

児島虎次郎

大原様 侍史

※この年9月、児島虎次郎は東京美術学校西洋画科選科に入学する。また夏に倉敷の大原家を訪ねて、大原家による奨学金の支給を受けることとなる。

(2) 大原家文書 F・194 明治三五年一二月一〇日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)

「東京下谷区谷中上三崎／南町四四、雲衣象潭方／十一月十日 児島虎次郎」

拝呈、

御高堂愈々御清栄の段奉賀候、本日御送付被下候本月分学資正に落手仕候、別紙領収証へ記名調印封入致置候間、御改手被下度、此段御通知申上候、敬具

十一月十日

児島虎次郎

大原孫三郎様

※前月の書簡とあわせ、大原家による奨学金は月毎の支給で、都度、受給者は領収書を送ったことがわかる。

(3) 大原家文書 F・195 明治三六年五月二日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)

「東京下谷区谷中上三崎／南町四四、雲衣象潭方／五月二日 児島虎次郎」

拝啓、

御高堂愈々御壮栄之段奉大賀候、四月分学資、^(人名一)□□君共拾四円正に落手仕候間、此段報知仕候、領収証小生の分丈け封入致置候、^(人名一)□□君ハ同氏より送付有之べく候、

次に甚た申兼候へ共、本月九日より九月十日迄夏期休暇に付、本月より九月

迄の学資ハ備中成羽町新町児島虎次郎宛にて御發送被下度御依頼申上候、何れ休暇中にハ御伺申べく候、

(抵力)
岡山孤児院へ御寄附に相成油絵、大抵本月中に差送られ可申候、藤島先生方話され候由、一寸御報知申上置候、同図案(下画)ハ揮毫され次第差送り可申候、

先ハ当用迄如斯に御座候、草々

五月二日

児島虎次郎

大原孫三郎殿

※東京美術学校の夏季休暇は5月9日より9月10日まで4ヶ月にも及び、その間、児島は故郷の現在は高梁市成羽町に帰省したことがうかがえる。

「岡山孤児院へ御寄附」「藤島先生」と記された作品は、藤島武二作《獅子の子落とし》(1903年 社会福祉法人 石井記念友愛社蔵)で、この年の8月2日に大原孫三郎より岡山孤児院へ寄贈されている。同孤児院を創設運営した石井十次に強い感化を受けた大原孫三郎だが、同年3月17日より同孤児院の評議員となったばかりであった。そうした時点で、児島を通じて藤島へと依頼制作を行い、孤児たちを鼓舞するような画題の作品を岡山孤児院へ贈ったわけである。児島は、岡山孤児院で制作した《なさけの庭》(1907年 皇居三の丸尚蔵館蔵)により、1907年の東京府勸業博覧会の美術展で一等賞となり、さらに大原の支援による5年間の滞欧後には石井十次の娘である友と1913(大正2)年に結婚する。

(4) 大原家文書F・196 明治三六年五月一六日

(封筒上書)
「倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「成羽町新町／五月十六日 児島虎次郎」

拝啓、昨日ハ罷出失敬仕候、昨五時無事帰郷仕候間、然様御承知被下度候、本日領収証差送り申候間、御落手被下度候、何れ近日中、日を定め御訪問可仕、此段御通知申上候、頓首

五月十六日

児島虎次郎

大原孫三郎様 侍史

(5) 大原家文書F・197 明治三六年六月一三日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／六月十三日 児島虎次郎」

拝啓、

先日中ハ罷出で種々御配意に預り、尚帰省の際には一方ならざる御心配被下候段、厚く奉謝候、昨日四時無事帰宅仕候、
末筆ながら御高堂皆々様へ深く御礼申伝へ被下度、先は御礼申述べ度如斯に

御座候、頓首

六月十三日

児島虎次郎

大原先生 机下

別に学資受領証封入致置候間、御落手被下度候、

(6) 大原家文書 F-198 明治三六年六月一日

(封筒上書)

「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)

「川上郡／成羽町新町／六月十五日 児島虎次郎」

拝呈、

本日、藤島先生より別紙到着仕候間、手紙之趣御承知被下度候、

尚、荷物の送先は御手元より都合宜敷方、先方へ御一報被下度願上候、

次に、恐れ入り候へ共、報酬其他の費御送金願上度、同氏に代て御依頼申上候間、悪からず御承引被下度候、

先ハ当用迄如斯に御座候、敬具

六月十五日

児島虎次郎

大原先生 貴下

(別紙藤島書簡)

拝啓、

愈々御雄健奉慶賀候、 拟予而貴君の御紹介ニ依而大原氏方御依頼ニ相成居候油絵ハ、今両三日中ニ可完成致候処、右ハ大原氏御住宅宛ニ而可送出哉、

又岡山孤児院の方へ直ニ御送り可申上哉、其辺の便宜、貴君方御問合せ被下

(敷脱カ)

間哉、尚、別紙額縁代並ニ運賃等の見積書送呈仕候間、甚だ恐縮之至ニ奉

(共カ)

存候得処、油絵報酬の残額と共に御送与被下候様、先方へ御申入被下度奉願候、現品ハ右到着次第、直ニ可送出申候、

右要事のみ、勿々敬具

六月十三日

藤島武二

児島虎次郎君

追伸、油絵額縁外圍の寸法左の通り、

一、 縦六尺一寸三分

一、 横三尺八寸二分

尚、運賃ハ大概の見積二付、多少の増減あるはものと御含み置可被下候、

※書簡(3)で触れた、藤島武二作《獅子の子落とし》が完成し、作品を額装し、岡山孤児院へと送付する次第がうかがえる。

(7) 大原家文書 F-200 明治三六年七月一日

(封筒上書)

「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)
「成羽町新町／七月一日 児島虎次郎」

拝呈、

御華邸愈々御清福之段奉賀候、

陳バ先日御依頼申上置候件、本日又藤島先生より何卒都合有之候故、至急依頼する様申越有之候に付、甚だ恐入り候へ共、至急御運び被下度、此段御願申上候、額面の儀ハ、何時なりとも發送可致旨通知有之候、先ハ当用迄如斯御座候、敬白

七月一日

児島虎次郎

大原先生 閣下

(8) 大原家文書 F-201 明治三十六年七月七日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／七月七日 児島虎次郎」

拝復、

御芳墨拝誦仕候、御封入之為替証式枚合計額九拾円参拾銭記入、正に落手仕候、只今早速藤島先生宛にて發送仕候間、然様御承了被下成度候、

(抵力)
本月下旬御旅行之由、大低差支無之事と存じ居り候間、御一報被下候へバ、

罷出可申候、

先ハ御返事迄如斯に御座候、頓首

七月七日

虎次郎

大原先生 閣下

(9) 大原家文書 F-202 明治三十六年七月一三日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／七月十三日 児島虎次郎」

拝啓、

愈々御多祥之段奉慶賀候、

昨日、藤島先生方報酬金額正に拝受致され候旨通知有之候間、然様御承引被下度候、就而ハ外函荷造り等額椽屋へ依頼致され候処、同店目下歌舞妓座にて活人画行業準備の為め、此十五日迄ハ非常之繁忙にて、其方済次第、直に着手荷物發送致べき様都合にて、少日遅延致候処、不悪御承知可下御依頼有之候間、御聞済被下度願上候、

今回御依頼之絵は、閣下の御芳志に感じ、万事殊に注意致置候様、先生方特に通知有之候、

先ハ不取敢御報知旁御断申上候、敬白

七月十三日

児島虎次郎

大原先生 閣下

岡山にて 児島虎次郎

(10) 大原家文書 F-203 明治三六年七月一九日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／七月十九日 児島虎次郎」

拝啓、

御芳簡拝誦仕候、就而は其趣家人に相計り申候処、度々罷出るは因て閣下へ迷惑を相掛けるべき事故、此度見合せ遠慮可致様申勧め候に付、家人の言に従ひ、昨日取急ぎ発電致置候、何卒不悪御海容被下成度、此段御断り旁々御返信申上候、頓首

七月十九日

児島虎次郎

大原先生 閣下

(11) 大原家文書 F-204 明治三六年八月二四日

(表面)
「都窪郡倉敷／大原孫三郎様」

(裏面) (美力)
「拝啓、沙見の吉田方小生の古靴送り来る筈に付き、到着仕候へバ、甚だ失敬

の至りに候へ共、■湛井の河田運送店迄御送り被下度御願申上候、

(12) 大原家文書 F-205 明治三六年八月二六日

(封筒上書)
「都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／直披」

(封筒裏上書)
「川上郡成羽町／八月廿六日 児島虎次郎」

拝啓、

御旅行後御勞れ等は御座なく候哉、伺上候、今回の趣味多き一ヶ月間の旅行に因て未知の好風景に接し、大なる自然美を発見する事を得しと共に、閣下の惠深き慈愛の念に感謝するの外無之事に御座候、此旅行は余生涯の最も楽しき旅行の一つと終生忘れまじき事に候、
(人名2)
□□君の受領証、小生のと共に封入致置候間、御落手被下度候、

一昨日帰途、岡山孤児院を拝観仕候、ライオン額中々傑作と存じ候、

二宮尊徳翁の油絵も面目なる傑作と覚江申候、
真

閣下の御揮毫になれる土瓶の絵、小生の手元へ持帰り失敬仕居候間、出京の節持参致べく候間、然様御承引被下度候、

何れ出京の節罷出で御札申述べ、先は当用迄如斯に御座候、敬具

八月廿六日

児島虎次郎

大原大兄 閣下

— ※児島が岡山孤児院を訪ね、藤島武二作《獅子の子落とし》を見たこと —

を伝える。「二宮尊徳翁の油絵」は不明。

(13) 大原家文書 F・206 明治三六年九月一二日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／直披」

(封筒裏上書)
「東京下谷区谷中／上三崎南町四四雲衣方／九月十二日 児島虎次郎／「扇」」(異筆)

拝啓、

朝夕次第に凌ぎよく相成り候処、御高堂愈々御清栄之段奉賀候、小生一昨日午後九時過、無事着京仕候間、乍憚御放神被下度候、先日御依頼有之候書籍、慥に人生の快樂と承り候が、右書は何所の書店にても皆品切之由に候、若し小生の聞誤りにて、高橋五郎氏之著、人生観にてハ候ハざりしや、若し人生観に候へバ、御一報被下候へバ、至急御送り可申候、先ハ御返事被下度待入候、頓首

九月十二日

児島虎次郎

大原先生 台下

※児島が東京へ戻ったことと、大原の希望する書籍の購入にもあたって
いたことを伝える。

(14) 大原家文書 F・207 明治三六年九月二八日

(封筒上書)
「備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)
「東京下谷区谷中／上三崎南町四四雲衣方／九月廿八日 児島虎次郎」

謹啓、本日林氏の広告図案三枚郵送仕候間、御落掌被下度候、図案に就ての参考、一寸相述へ可申候、

甲は薬種染料医器械なる文字を蜘蛛の網に擬したるものに候、若し読み苦しく候へバ、全体の網を去て、右文字を階書(楷カ)か行書かに改むる方宜敷かるべく存候、

乙の文字は只其位置の配合のみ示し置候、丙も同様なる事に御座候、以上、福田君と共に考案致候へ共、未だ浅学の事に候へバ、御氣に適ひ不申候共、不悪御承了之上、充分なる御意見にて訂正之处御示し被下度御依頼申上候、三枚の内にて、使用する分のみ一枚御送り被下度願上候、
描改て
外に薬瓶形の図案は少々御猶予被下度願上候、
先ハ当用のみ如斯に御座候、頓首

九月廿八日

児島虎次郎

大原先生 閣下

※児島が、大原が関係する広告図案も手掛けていたことを伝える。「林氏」は、大原家近くで薬問屋を営み、大原や石井十次とも密接な交友をもった11代林源十郎と想定される。

福田君については、GACMA東京美術学校在籍者一覧(明治22年昭和9年入学者)」(<https://gacma.geidai.ac.jp/archives/GACMA-enrollment-list03.pdf>)に1902(明治35)年入学者として岡山出身の「福田淡」の記載があり、その可能性が高い。

(15) 大原家文書 F-209 明治三十六年一〇月九日

(封筒上書)
「備中国都窪郡／倉敷町」(朱印)／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)(朱書)
「下谷局濟書ニテ通知ノ」／東京府南葛飾郡／隅田村字三在百拾壹番地／

長尾奎太郎方／十月九日 児島虎次郎」

謹啓、

御高堂益々御清適之段奉大賀候、

陳バ本日小包にて油絵習作三枚差送り申候間、御落掌被下度候、甚た延引致し候段、不悪御海容被下度候、次に先日差送り候林氏の広告図案御落手被下候哉、就而は如何致すべきや、失敬ながら御一報を煩し度願上候、

小生儀数日前表記の所へ転居仕候間、然様御承引被下度候、当地は鐘ヶ淵の傍綾瀬と申処に御座候、東京上野へは殆んど二里近くも有之候、極田舎にて景色之宜敷事は東京の名所の一つと数へらえ候、隅田川も恰度側に流れ居り候、小生は通学往復三時間の徒歩を厭ず、塵煙深き都を去りて、清けく淨なる此田舎の空気の内自然のに景色を友として、汲々勉強致すべく企て候、

三時間の徒歩は健脚を鍛へるに足るべく、周囲の景色は我頭を満し、己が腕を養ふに足るべき事に御座候、

小生の今度転居致候宅は、同じ故郷より出でられし先輩の画家の住家に御座候、

是れより愈々聖書を以て無二の友と致すべく候、

甚だ役立たざる事なと書加へ候段御断り申上候、頓首

十月九日

大原先生 台下

児島虎次郎

追啓、為替取次局は(下谷郵便局)に願上候、

※児島が、同じ成羽出身の先輩画家長尾奎太郎の家へ転居したことを伝える。上野まで2里あり、往復徒歩3時間という距離だが、周囲の環境を気にいつてのものか。

注目すべきは「聖書を以て無二の友と致すべく」の記述である。石井十次は熱心なキリスト教信徒であり、その宗教心ゆえに岡山孤児院の運営に尽力し、大原孫三郎もその感化もあり一時期聖書を熟読した時期もあった。ただ児島虎次郎はその近くにありながら、キリスト教とは距離を置いていたと考えていたが、一時的にでもあれ、児島が聖書読解に取り組んだことは今後のさらなる考察の対象となるであろう。

(16) 大原家文書 F・210 明治三六年一〇月九日

(封筒上書)
「備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)
「東京府南葛飾郡／隅田村字三在百十一番地／長尾奎太郎方／十月九日 児島虎次郎」

拝呈、

本月分学資、本日正に拝受仕候、領収証封入致候間、御落手被下度、此段御通知旁々奉鳴謝候、敬白

十月九日

児島虎次郎

大原先生 台下

(17) 大原家文書 F・212 明治三六年一二月一三日

(封筒上書)
「備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)
「東京府南葛飾郡／隅田村字三在百十一番地／長尾奎太郎方 児島虎次郎／十一月十三日」

拝啓、本月分之学資金八円也、昨日為替にて拝受仕候に付、別紙領収証へ記名調印致置候間、御改め被下度候、

外に壱円絵はがき代御送付に相成、正に落手仕候、本日買求め郵送仕候間、御落掌被下度候、方々相尋ね申候へ共、是れ位之物より上等之品無之候に付、然様不悪御承引被下度候、此犬之種類も三軒にて漸く買纏申候、内には高価

之品も混じ居候間、御覧被下度候、

先は取敢ず御通知申上候、草々頓首

十一月十三日

児島虎次郎

大原先生 足下

【別紙1】

記

一、金三拾六銭 はかき 拾弐枚

右請候也、

十一月十三日

山城屋 (印)

上

【別紙2】

記

金弐拾七銭 絵はかき 八枚

〆

右正ニ請取申候也、

第十一月十三日

海雲堂 (印)

上

【別紙3】

記

金卅六錢也 絵はがき 四枚

ノ

右正ニ受取候也、

明治卅六年

十一月十三日

(印) 〔東京市神田区表神保町二番地
文房堂池田治郎吉〕(印)

上様

上様

(18) 大原家文書 F-214 明治三六年二月二七日

(封筒上書)

〔備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展〕

(封筒裏上書)

〔東京府南葛飾郡／隅田村百十一番地長尾方／十二月廿七日 児島虎次郎〕

拝啓、

寒さ厳しく相成候処、御高堂愈々御清適之段奉大賀候、小生儀無事健全にて
勤学致居り候間、然様御承引被下度候、

本年も僅か数日を余すのみと相成候、学校は去る十九日より冬期休業と相成
候、日々郊外写生やら遠足などして新なる年を相待ち居り候、当地は隅田の
川風烈しく、寒気は東京之比に無之候へ共、霜之朝、冬枯の月夜など景色の

美しさわ中々話しに相成り不申候、まして此上にも雪降初めなば、嘸かし好
景は層一層之美を増さんものと相待居り候へバ、寒さも川風も意とする程に
は御座なく候、此の寒さ加り此の風起ればこそ、此の美しき景色に^{を眺める事を得此景}励まれ筆とる
勇気を呼起し得る事を考へ申候へバ、実に自然と神とに感謝する之外御座な
く候、

次に本月分学資正に拝受仕候、別紙受領証差送り申候間、御落手被下度候、
末筆ながら御自愛專一に御高堂之万福を奉祈候、頓首

十二月廿七日

児島虎次郎

大原先生 台下

(19) 大原家文書 F-215 明治三七年一月九日

(封筒上書)

〔備中国倉敷町／大原孫三郎様／侍史〕

(封筒裏上書)

〔東京府南葛飾郡隅田村／百十一番地長尾方／一月九日 児島虎次郎〕

拝啓、

本月分之学資正に拝受仕候、就ハ領収証差送り申候間、御改め被下度、右御
報知申上候、

先日、上野美術協会のセントルイ博覧会出品美術品陳列を參觀仕候、
全体を通して見るべきもの無之、寂寞之方に御座候、西洋画の出品は大低諸
氏の旧作のみにて、僅か新に博覧会出品として描きたるもの有之候、日本画・^(抵力)

彫刻などには、目に留るもの殆ど無之候、陶磁器にては、稍傑作を見受申候、然し大坂の博覧会に比すれば、粗製品少なく、傑作多き方に御座候、此頃は上野公園も物淋しく、展覧会も今は皆無に御座候、雪消へ桜色つく頃、此公園も人を以て満さるゝ、近き間に御座候、草々

一月九日

児島虎次郎

大原先生 閣下

※「上野美術協会のセントルイ博覧会出品美術品陳列」とは、1904（明治37）年4月からアメリカのセントルイスで開催された万国博覧会に向け、その美術部門への出品作を、上野公園内にあった日本美術協会列品館で1903（明治36）年12月26日、27日に展覧したもの。準備期間が短かったため、児島も記すように、内国勧業博覧会出品作からの選択であった。

（20）大原家文書F・216 明治三十七年二月一三日

〔封筒上書〕
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／執事」

〔封筒裏上書〕
「東京府南葛飾郡／隅田村百十一番地長尾内／二月十三日 児島虎次郎」

拝啓、承り候へば、此程より御病氣之由、御容体如何に御座候哉、奉案候、早速御伺申上べく之処、誠に御無沙汰仕り申訳無之候、時下寒氣強烈之候、

折角御養生專一に奉祈候、

先ハ御病氣御見舞申述度如斯に御座候、敬具

二月十三日

児島虎次郎

大原先生 台下

（21）大原家文書F・217 明治三十七年二月二五日

〔封筒上書〕
「岡山市／岡山県病院内／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕
「東京府南葛飾郡／百十一番地長尾方／二月廿五日 児島虎次郎」

拝啓、御病氣追々御快方の由承り安心仕候、御入院などの事とは存申ず失敬仕候、嘸々御淋しき事と奉察候、尚御養療專一に御全快の期をのみ待入候、次に本月分の学資金八円也正に拝受仕候間、収領証差送り申候に付、御改被下度御報知申上候、

梅一輪一輪づゝの暖さとは相成申候、当地之梅も赤く白く香ばしく成初申候、墨堤の春も近づき申候、本冬は例年に無き寒さの強き事に候へ共、降雪は一度有之候のみにて写生之為めには残念の事にて候へ共、人々の多くは悦び居り候、

戦争話も一時は非常なりしも、此頃は余程冷却したる様に見受られ候、小生は幸に戦争熱に浮されず専心勉強致居り候間、然様御承引被下度候、不一

二月廿五日

児島虎次郎

大原先生 台下

— ※日露戦争勃発直後の児島的心情が記される。 —

(22) 大原家文書 F-310 明治(三七)年三月一四日

(封筒上書)

「備前岡山市／岡山県病院にて／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)

「東京府南葛飾郡隅田村／百十一番地長尾方／三月十四日 児島虎次郎」

拝復、

其後御病氣次第に御快方之由承り、誠に不及ながら心嬉しき事に御座候、最早御全快の期も程近き事と奉察候、

次に昨日三月分之学資正に拝受致候間、受領証差送り申候に付、御落掌被成下度候、

昨朝来より之吹雪、夜に入て烈しく、今朝戸を開けバあわれ此世も一夜の中にたくみの女神の御手により、美しき淨き銀の天の国土と化し去りぬ、春之雪筆とるひまもあらむこそ、午過ぎ宅に帰る時には空しく消へて影もなし、雪も去り梅の見頃も何時の間にか過ぎ申候、此次き桜之花も近づき申候、其れにつれ思出され候ハ、去年の夏に候、如何に楽しき夏なりしか、富海之淨き浜辺、宮島の鏡之如き月之夕、月之夜五日市山上之物語、櫓音揃へて旅路急だ波の上、名も仙酔の島遊び、清き沙見之浜辺の日の出夕陽、皆一つとし

て吾記憶を去るものは御座なく候、

次の週間より試験始まり可申、此週は臨時休暇と相成り候、されと次の週迄に成績として差出すべき裸体画一枚描き置くべき事に御座候、裸体画は各々自宅にて製作すべき事と相成り候に付、一昨日より友人なる田端にある画室を借り、モデルを雇描き始め申候、

先般来より御病床のつれ／＼を慰め候はん為め、何か拙作御目に懸け度考へ候へ共、別に見るべきもの出来不申差控へ居り候処、御教訓に従ひ、よし其画は見るかげもなき拙き筆には候へ共、小生が御病床を飾り御慰め候はん和本意のまゝ、失敬ながら本日小包にて最近の習作画式枚差送り申候間、御笑覧被下度願上候、此頃小生は

「活きる為めに描かず、描く為めに活きよ」

「己のあるを知て己を忘れよ」

と云ふ事を我理想として自然に接し居り候、是は全く神の黙示に寄て、我心の底へ伝へられ候事と存居り候、

四五月頃御上京之噂承り楽み待居り候、其節は親しく平素之御無沙汰謝し可申候、頓首

三月十四日

虎次郎

大原先生 台下

※大原孫三郎が長期にわたり体調を崩していることがうかがえる。

児島の学業に関しては、裸体画が課題として出されながら、学生が自宅にて制作のうえ提出を求められていることが注目される。田端の画室を借り、モデルを雇って制作を進める記述があるだけに、職業モデルを、

―― 学生が独自に雇える時期となったことがわかる。――

(23) 大原家文書 F-189 明治三十七年八月二〇日

(封筒上書)

「播州明石相生町／中崎交中館／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「備中国成羽町／八月廿日 児島虎次郎」

御芳墨拝誦仕候、

時ハ何時の間にか消へ行き候、甚た御無沙汰致し申訳も無之候、酷暑之候にもかゝらず、御健全にて候哉伺上候、

生儀變りもなく消光致居候、思ひ望む程の勉強出来不申閉口致候、

御教示被下候「新しき夫婦」とも云ふべき画題に付き深く考へ候に、未だか、

る大なる思想を世人に語るべき余に技の熟せざるを思ひ起し候、余ハ後日、

此の画題の下に研究を積み、忠実なる製作を成さん事を決し候、今より展覧

会などに人に観せんなどの企ハ余り大胆に、又余り不責任なる仕事と感じ候

ま、余ハ此の休暇を以てモデルの研究をなさばやと、余が^友の諾するま、

或ハ隣家の小女などを乞ふて只無意味なる写生を始め居り候、かゝる研究の

致方は、余の本意とする所に候、然し充分の勉強出来ざるハ愚の至りに候、

帰郷してより毎日、友など、此地の小学校に午後打寄りて、テニスの仕合を

致居り候、技術の上達は致さゝるも、心身の壮快を覚江候、

去る十四日の頃より、我祖母の大患に^(か脱カ)かり医士の診断にて局部肺炎と語り候、

年老ひたる身の其苦しみ思やらるゝまゝ、病床を去るに忍びず、絵筆捨て傍

に看護する事茲に六昼夜に候、一日たり共余か天職を怠るは余の意ならず候

へ共、出て、家のあらざる身の此期を幸に出来る丈けの看病致さんものと存

居候、此間か余の職を怠るは大に天に謝する所に候、

生の上京は^{多分を}当地九月上旬出發可致考へ居り候、

八月分学資拝受仕候に付、受領証差送り候、

先ハ当用迄に候、末筆ながら諸君へ宜敷御伝へ被下度、幸に先生御保養專一

奉祈候、頓首

八月廿日

大原先生 台下

虎次郎

※大原孫三郎が、「新しき夫婦」とも云ふべき画題」を児島に示したことを伝える。この時、すでに大原は妻帯しているが、画学生である児島に何を求めたのか興味深い。郷里成羽に帰省中の様子を伝えつつ、児島が巧みにその課題を受け流していると読めるだろうか。

(24) 大原家文書 F-219 明治三十七年一〇月一日

(封筒上書)

「播州明石相生町／交中館／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京府南葛飾隅田村百十一長尾方／十月一日 児島虎次郎拝」

秋冷相催し候折から御変り無之愈々御壮栄之段奉大賀候、

御送りに相成候写真一葉落手仕候、早速描始め可申候、

先日御依頼申上候処、早々御返信被下奉謝候、

先般小生上京之際御話し被下候通り相成り候へば、小生にとりてハ此上なき

好都合之事に御座候、

今凡そ一ヶ月の学資として申述べ候、

絵具代として普通に勉強して凡そ五円位費し可申、尚勉強次第により以上を

要する事に御座候、食料掛用品雑費拾円と見積り候へばよからん、是の他に余の望

む所はモデル費に御座候、余は今後絵画の組立に付研究すべき必要を認め申候、

毎日の午後を是の研究に費し度希望致居り候、モデル費は一ヶ月の内二十日

間、半日雇ふ事として、三四円位あればよからんかと存し候、

此の他参考書(をカ)と要する場合有之候へ共、皆価高き品に候へば、当分見合る事

と致すべく候、

御存しの通り、かゝる道は勉強すれバする程、費用の嵩む事に御座候、

かゝる次第に御座候へば、何卒宜敷御計り被下度、小生が運ハ只足下の御手

まかせ置べく候、余は足下が多なる御好意は、余が天職の上に忠実に務む

る事に於て決して無視せさらん事を契申上候、

右余が心のまゝを以て懇願仕り候間、宜敷御聞取り被下度、伏して御返信之

程待入候、

前途尚深遠されど余は慥に一つの光明を此間に見とめ申候、此の輝きに照ら

されて余が本分を全くし得られん事、心の中嬉しく望み居り候、

末筆ながら御令室様・古藤君へ宜敷御伝へ被下度願上候、

先ハ当用迄如斯に御座候、不具

追啓、

白馬会十一月十三日迄開会に付、閉会次第、油絵御送り可申候、他にも一式

枚有之候間、共に御送り申べく候、

十月一日

大原先生 台下

虎次郎

※児島が、経費を細かく知らせながら、「かゝる道は勉強すれバする程、費用の嵩む事に御座候」として支援額の増加を願ひ出ている。第9回となる白馬会展へは《習作―少女》、《風景》を出品したことが知られるが、その他の作品とあわせて大原へと送る旨が記される。

(25) 大原家文書 F・218 明治三七年一〇月二八日

(封筒上書)
「播州明石相生町／中崎交中館／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京府南葛飾郡隅田村／字三在百十一長尾方／十月廿八日 児島虎次郎」

拝啓、

其後も御変り無之愈々御清適之事と奉大賀候、

生儀無事勉学致居り候間、然様御承引被下度候、

陳バ先日御願申上候件、如何なる御都合に御座候哉、御返事無之に付き待案

じ居り候、

甚た勝手ケ間敷次第に候へ共、我希望のために小生は是非共御許可被下様何処迄も嘆願して止まざる儀に御座候、

御多忙中と察し候へ共、相成るべくは早速何とか御一報被下度御願申上候、
(か脱カ) かる事ハ足下か御感情に障る様の事ハなきかと恐れ入り候、不敬の罪謹で謝し可申候間、何卒不惡御承了之程願上候、敬白

十月廿八日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、甚た恐れ入りたる次第に候へ共、小生等の如き当地にあまり知己なきものは、学資の後れた時ハ勉強上^(ら脱カ)一方なさる困難にかゝり申べく候間、御手元の都合の出来る通り勉強上の御便利御与へ被下度、謹で御願申上候、以上、

※支援額の増額願いへの返信がないことを尋ねているのだろうが、追伸部分で、「学資の後れた時ハ勉強上^(ら脱カ)一方なさる困難にかゝり」と所信を伝えている。

(26) 大原家文書 F・220 明治三十七年二月七日

(封筒上書)

「播州明石町相生／中崎交中館／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏上書)

「東京府南葛飾郡／隅田村百十一番地長尾方／十一月七日 児島虎次郎」

玉章拝読仕候、貸資増額御許可被下候段、誠に感謝之至りに不堪候、

本月分と昨月分との学資為替にて正に拝受仕候に付、受領証差送り申上候、
(衍カ) 御申越被下被下候通り、一ヶ月廿四位あれば、小生の志す道に向て研究出来る可き事と考へ居り候、精しき事ハ知れ不申候へ共、多分出来る事と存じ候、

兎に角実行致さハ大低^(抵カ)之事も知れ可申候と存候、閣下高き御恵之程、終始念頭を去るなく、充分勉強可致候、

肖像の額^(縁カ)、明日額縁屋へ問合に参上可致候、恰度符合の形有之候へバ幸に候へ共、若し品切にて調製するに余り時日を要する様に候へバ、肖像丈後れさる様差送る考へに御座候、大分持合せ居る事と察居り候、

白馬会の模様、一寸申上候、大概ハ当地の新聞紙などにて御承知之事と奉察居り候、

本年の会にハ余り目立つ程の傑作ハ殆んど見受け不申候、昨年迄ハ小生ハ白馬会場^々へハ開会幾度^中入場して彼所此所之絵画の前にイミ、又隅みからすみ迄^を彷徨候、かゝる身なりしに、本年余か帰郷の節又上京の際、須磨の住友の別荘に立寄り、欧洲大家の作品を參觀したる目にハ、白馬会場^{今度などの}へ幾度も足を運ぶの勇なく候、只々余か頭中^のに何となく我芸術界の現状に就而、或る大なるものに恥する様な感堪へさる次第に御座候、少し生意氣過きるかも知れませぬが、一笑被下度候、別紙古びたる目録御一覽被下度候、現時大家と称へる、黒田・和田・岡田・藤島諸先生の内にて、和田氏の八百屋御七と、吉三、を描たるものは、製作前よりの呼物なりしも、余りの出来にハ無之、小生の目にハ岡田先生の冬の図一寸宜敷候、藤島先生ハ特意の図案的のもの数枚を出品され候、変て居て面白く候、他に目に付くものも御座なく候、会ハ本月十三日迄に御座候、何れ其中に御様子申上べく候、

本日ハ当用迄に申述置き候、寒氣追々加り候折柄、御養身專一奉祈候、不具
十一月七日
虎次郎拝

大原先生 台下

※支援額の増額がかなう。

注目すべきは、白馬会の作品に言及しつつ「本年余か帰郷の節又上京の際、須磨の住友の別荘に立寄り、歐洲大家の作品を參觀したる目にハ」と伝える点である。「住友春翠―美の夢は終わらない」図録（公益財団法人泉屋博古館 2016年2月）が紹介するように、住友家15代当主である友純（春翠）が集めたクロード・モネ、ジャン＝ポール・ローランスなどの西洋絵画と、鹿子木孟郎、浅井忠など日本人による洋画が住友家須磨別邸にて縁故者などには公開されていたが、児島がそこを訪ねたことがわかる。文面の書きぶりや、大原と住友のこの時点での距離感からして、紹介者は、黒田清輝か藤島武二と推測される。

〔27〕大原家文書別2152 明治三十七年一月一三日 【図1】

〔表面朱書〕

〔播磨明石町／相生中崎交中館／大原孫三郎様〕

〔裏面朱書〕

〔御手紙拝読、高き御言葉に恐縮仕候、十三日 虎次郎／五尺に七尺位の大／吉三と御七〕

〔28〕大原家文書F1221 明治三十七年一月二三日

〔封筒上書〕

〔播磨国明石町／相生町中崎／大原孫三郎様／親展〕

〔封筒裏上書〕

〔東京府南葛飾郡／隅田村字三在百十一七長尾方／十一月廿三日 児島虎次郎〕

小春の日和打過き心地よろしき候に御座候、嘸明石の浜辺あたりながめ美しき事と奉察候、

白馬会へ出品中なりし少女の顔の絵、本日小包にて御送り申上候、

額縁も差送り候間、先日（縁カ）の肖像へ御嵌有之度候、此の

外に一枚静物画差送り申上候、此の絵ハ小生の今秋上京したる時、余が庭の草花美しく咲盛りたる何となく余の心を起さしめ候、折から友の房州より土産にとて、綾なす貝の色々を贈りければ、幸直に写生致し候、貝を見てハ昨夏の旅行思出され、花をながめてハ行先しのぼる、秋の様を思ひわづらはれ候、此絵ハ余が目ハ一寸趣味ある事に候、

肖像も此絵もあまりうまくも無之候へ共、余が心にハ當時に相応して真面目に描たる積りに御座候間、幸に御一覧の上、批評給り度、余が望む所に御座候、御遠慮なく充分に願上候、余が技の発達を計り給はゞ、此外描たるもの少く有之候へ共、第二次恤兵展覧会あるやの尊有之候に付、其節充分奮て出品仕り会の趣旨を全致度、其為め準備として止置可申候間、然様御承知被下度願上候、

此頃ハ何となく張合よく勉強致居り候、卒業製作なる自画像殆んど一ヶ月振

にて此頃出来上り候、花凋み葉散りつる此頃、郊外の写生最早や望み無之候、是れより室の内にてモデル写生の候と相成り候、其れに付て甚だ申兼候へ共、来月分の学資相成るべく候へバ、来月早々御送り被下度、勉強上の勝手を計り無遠慮に御依頼申上候、額縁の代価式円取替置候、右不惡御聞取被下度候、次に本日差送り候小さき絵方の適當の額縁錦地にて御調製有之度望み居り候、後々同様の大きさのもの差送り可申候間、其度に額縁に入れ御覽被下度候、額縁ハ如何なるものにも宜敷候、錦地に鏡の商店有之候へバ、其所へ其注文あらバ出来る事と存候、若し無之候へバ、大工に造らしむるも宜敷事に候、椽の形ハ御好にまかせ置候が、通当ハ金地か木地かの式種に候、毎度我俣なる事のみ申上甚た恐縮の至に不堪候、

末筆ながら御療養專一に奉祈候、

十一月廿三日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、

来月よりモデルを雇ふ充分勉強致度望み居り候、

※白馬会出品作を含め、大原へと送った自作についての記載。現存作品で同定できるものは見いだせず。またモデルを雇うため送金を早めにと請いつつの追伸の記載が児島らしい。

(29) 大原家文書別2-54 明治三十七年一月二十九日【図2】

(表面)
「播磨国／明石相生町／大原孫三郎様」

(裏面)
「先日送出し候小包御落手被下候哉、伺上候、銀杏の黄な葉も楓の紅の葉早やいつの間にか散はて候、野辺ハ淋しき冬枯と相成り候、十一月廿九日 虎次郎拜／此絵二尺一尺五寸位」

※ここまで書簡の送り先が、明石相生町となっているが、これは大原孫三郎が体調がすぐれず療養のため長期間、明石に滞在したため。ただその間、家督相続の話が進み、この書簡が送られて間もなく一切の事務手続きが終わり、孫三郎は大原家当主となる。

(30) 大原家文書F-222 明治三十八年一月一七日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／煩親展」

(封筒裏上書)
「東京市本郷千駄木林町／二二四 中川方／一月十七日 虎次郎拜」

寒さ追々加り候へ共、早梅の花のちらほらと咲初め候に何となふ心楽しく相成り候、

御華邸御揃愈々御清栄之事と奉賀候、

生儀無事勉強怠りなく候、本月分の学資拝受仕候間、受領証差送り候、就而ハ何となく云にくき次第に候へ共、少々御願申上候間、不悪御聞取被下度候、御約束申置候通り、本月習作絵差送るべき筈の所、展覧会之挙行あるやに承り延引之儀願上候所、約束の違反より学資に不足を生じ、折角やり初めたる勉強研究もこゝに一時中止せざるべからざる事と相成候事、実に残念至極に御座候も全く不肖の罪に候、

しかしかゝる場合、歩を止むる事ハ甚た馬鹿ばかりき事に候へバ、御約束の通り習作画近日之中何るべく早速発送可致候間、前月の通り余分之学資御貸与被下度間敷候哉、毎度我ま、勝手なる事のみかさねゝ御願申上候、然し生ハ拙きものゝみ差送り候事、甚だ御氣の毒千萬なる事と恐入候へ共、何卒御機嫌悪しく思召さず、尚此上も御同情を煩し度、こゝに嘆願申上候、

前申上候通り、小生ハ前月の通りの学資額をあてにして研究おはじめ居り候に付、其だけの額は如何にしても得ねバ、今の所研究中止の不幸に帰るべく候間、何卒其辺御高察之程願上候、其だ御手数^(甚力)なから小生より習作画発送するも苦しからず候哉如何、御伺申上候間、右御承諾可否と共に御一報の労を煩し度く、右御願申上候、

目下、研究科の競技中、少々多忙之様子乱筆にてあらゝかき奉り候間、御推読之程願上候、草々

正月十七日

虎次郎

大原先生 台下

※長尾奎太郎宅から、東京美術学校へも近い千駄木へ転居している。

書簡の内容から、児島は研究報告的に絵画を大原へと送っており、そ

れが展覧会などの事情で送れなかったことから、送金が減額された様子がうかがえる。かなり厳密な相互のやり取りによって支援が行われたことがわかる。

(31) 大原家文書 F1235 明治三十八年二月三日

(封筒上書)
「備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様」

(封筒裏上書)
「東京本郷千駄木林町／二二四 中川方／二月三日 児島虎次郎」

拝復、

早速御貸与被下候学資、昨日正に拝受候、

一昨夜来の降雪、見事に積み飾り候、昨朝写生を校内之林之間に相はじめ候処、稍より落ち来る雪之塊は、頭の上やら調色板、画布や絵具箱の内やら、処きらわず非常の困難と烈しき寒さと戦た揚句、やつと一枚の写生は出来致し候へ共、絵具箱をかたづけかゝる頃よりぼつゝ頭か痛み出し、未だ今日当りも痛去ず、全く風引の災難を給り候事に御座候、

先日⁽¹⁾の雪にも出懸て写生も得せず、風を頂戴して帰り候、中々油断之ならぬ時節に御座候、

此頃少々用事差かゝり居り候に付、此位にて失敬仕るべく、何れ後便にて御報導致度存居り候、

御正月之元日は明日だそうで、嘸御宅は御賑な事と奉察候、

末筆ながら御令室様へ宜敷御伝へ被下度、御自愛專一に奉祈候、敬白

二月三日

虎次郎

大原先生 台下

※【紀要1】掲載「(3)大原家文書F・223 明治三十八年一月二十六日」、

「(4)大原家文書F・311 明治(三八)年一月二十八日」で、東京美術学校での様子を詳細に伝えているが、荒天での制作(支援対象)の大変さを伝える本書簡の内容からは、継続的な支援への切実な要請の気持ちが感じ取れる。

(32)大原家文書F・224 明治三十八年二月二日

(封筒上書)

「備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京市本郷区駒込／千駄木林町二三四／中川方／二月廿一日 児島虎次郎」

久しく御無沙汰仕候、時候も大分春めき候処、御高堂皆々様御変せもなく御
壮栄之事、謹而慶賀奉り候、
生儀、幸に勉強怠りなく候間、御放神被下度候、
先月、競技試験が済み候まゝ、やれ／＼と思ふ矢先、またぞうらう研究科の
競技(試験に同じ)は相始められ候、
今度のハ少々大役にて、甲は静物之写生、乙は八大伝を題として図を構製す

る事に候、

静物之分はかなり大なる画布に候、乙之方ハ只下絵に候、(静物とハ活きざる
総て之物を云ふ言葉に候、即ち器具・野菜・草花之類・魚類も此の内に含み
居り候、生なき鳥獣も加へられ候、先般御送り置候貝殻など描た小さきもの、
絵は静物画と云ふべきものに候、) 以上は共に自宅製作と云ふ有様に候故、余
等素寒貧之連中はほと／＼困り居り候、道具類や美しき布など面白く候へ共、
中々集める事出来不申、花と云ふて未た色美しきものも少なく、果物に於て
もおなじき事に候、

然し何か描かねばならぬ事に候故、考へ暮し居り候、期限は三月の中旬頃に
候、一つ骨折りてやる考へに候、面白る美しるものは費用を要する事、此辺
ちと苦しき事に候、

かゝる都合に御座候へバ、毎度には候へ共、本月分之学資、何卒御手数なか
らせら／＼早く御送り被下度、礼を忘れ勝手のみ申上、恐れ入り候へ共、不
肖をして真面目なる日科に就くの幸を与へられむ事を切に御願申上候、右不
悪御聞取被下度候、本日小包郵便にて風景画式枚御送り申上候間、御落手被
下度候、一つは先日申上置候雪の景色、小生之寒氣と戦るまけて風引きたる
時の製作に候、

一つは旧寓綾瀬の辺に候、夕日は早や空に見江ずなりぬ、薄紫之富士の高き
峯は、かなたの薄雲の間に現れたり、風なきて無心の白帆はうす墨と色かへ
てかなたの岸辺の森近く見られたり、墨田の水は流止めて恋しき友なる夕瀬
を待つと見江たり、

御高覧の上御一評被下度待入り候、

二月廿一日

虎次郎

※研究科の課題に取り組む様子を伝えるが、いわゆる構想画として「八犬伝」に取り組むとしているのが興味深い。想定される作品は確認されていない。

後半は大原へと送った2点について伝えるが、そのうち「旧寓綾瀬の辺に候、夕日は早や空に見江ずなりぬ、薄紫之富士の高き峯は、かなたの薄雲の間に現れたり、風なきて無心の白帆はうす墨と色かへてかなたの岸辺の森近く見られたり、墨田の水は流止めて恋しき友なる夕瀬を待つと見江たり」と記述されているのは、「児島虎次郎油彩画総目録（WEB版）」（以後、【総目録】（https://www.ohara.or.jp/collection/kojima_reisone/）にNo.12として掲載した作品とすべき可能性が高い。それゆえ同作品は、児島が長尾奎太郎宅に住んだ1903（明治36）年10月から翌年12月頃までの間の制作と想定される。

（33）大原家文書 F・225 明治三十八年三月六日

（封筒上書）
「備中国／倉敷町／大原孫三郎様／親展」

（封筒裏上書）
「東京市本郷区千駄木／林町二二四 中川方／三月六日 児島虎次郎」

花之節句はすぎ去り候へ共、まだ春之味とてハつき不申候折から、閣下御変

せもなく御清福之段奉謹賀候、

本日、別紙受領証の通り、学資金拝受仕候、今度は少々例より多額に候が、如何なる御考へに御座候哉、伺上候、

（絵はかき代拾円としては驚き入り候が）

閣下が深き同情を以て不肖が研究に一層之御尽力を給り候にや、とんと了解致され不申候、

若し愚考之如くに候へば、余ハかくまで閣下之誠なる情を寄せらるゝ事を以て、身にあまる光栄と奉存候、余ハ己が研究せんとする上にかゝる血ある資を得たるの幸福なる事を真に奉感謝候、

今夕方御絵葉書着、御高説とくと拝承仕候、

余は正しき永久不変之強き意志を以て此の無限の務めを真面目なる研究を以て実行可致誓置き候、

次に御申越之小供の絵はがきは如何様なる品に候哉、日本製と外国輸入のもの

（抵力）

のと有之候、大低写真版之事と察し置き候、数は如何程に候哉伺上候、御はがきに「一〇」と有之候ハ金高なるにや、又拾枚に候哉、判じ難く候まゝ、

兎に角拾枚程早速御送り可致候、

競技の静物画は、野菜、果物、瓶など取集め写生中に御座候、

八犬伝は伏姫富山の洞にて神童と語る所を構図可致考へに候、此の所之訥は、伏姫が実に烈婦たる高き心操を現したる所にて、宗教の味と詩の美とを充分含み居る様考へ居り候、

小石川植物園温室内の写生、今般許可され候へ共、例の競技中にて暇無之候まゝ、相延す事と致候、然し其頃には早や菜種の花も野に見ゆる頃と相成り候はんか、

末筆ながら謹而御高堂の愈々御壮栄ならむを奉祈候、頓首

三月六日夜

虎次郎

大原先生 台下

※研究科の課題に取り組む詳細を伝える。静物画も現存確認できない図様である。

〔34〕大原家文書別2156 明治三十八年四月四日 〔図3〕

〔表面〕
備中国／倉敷町／大原孫三郎様

〔裏面〕
「先日は御鄭重なる御手紙を賜難有拝謝奉り候、

一昨日東京出發、当沼津へ滞在致居り候、毎日之降雨にて閉口致居り候、早く材良を採訪せねバ心配でなりませぬ、期限が短くなりますので、何れゆる／＼御音信致すべき考へに御座候、

四月四日

東海道沼津港橋東際

大橋屋旅館にて

虎次郎拝

大原先生 台下

〔35〕大原家文書F1226 明治三十八年五月四日

〔封筒上書〕
備中国倉敷町／大原孫三郎様／煩親展

〔封筒裏上書〕
「東京本郷区千駄木林町／二二四中川方／五月四日 児島虎次郎」

花之曇りも晴れすぎて、若葉之露たなひき候折から御許にハ御変せもなく御清福之事と喜び居り候、

ゐつも／＼も疎遠かちにて申訳無之事に候、手紙かく位の暇なきにあらざるに、思ふ事のみ重なり行きて、筆とる事之後れ勝なる誠に自分之不規律さを何時も手紙認め候節ハ思ひ出で候、沼津滞在中にもろ／＼之御音信不仕、帰宅後引続き少々用事にかゝり居候、

旅行は誠に心地よきものに候、其うちにも春之旅ほどよろしきものはあるまじく候、山間に生育たる私共は、海辺に日を送り候へバ、全く地極（獄力）の人が極樂へ行きたる様の思ひ浮び候、

朝之海・夕之海実（威力）に罪なく美しく覚江候、

我入道之浜は極平和な静けき所に候、

若芽もへ出たる浜一面老松之影朝日受けたる伊豆之山々、薄赤く氣持よく前に蟠れり海水は、染料にもならむと思はるゝ程青く候、薄色の品之よる空に入残た月がぼんやりと軽く浮び居候、沖には白帆之あちこちに輝き、一夜を海之上にて働き明し、労れながらも意勢よく帰る舟、ゑもの望みて漕き行く舟之等しく金色なしてゆき来ふこそ嬉しく候、

あちらこちらより寄りつどふ老婦小女之手にさる桶などさけて沖なかめつ、

歸る舟まちて打かたれり、

噫人誰虚榮を望む、世の汚れたる人に見せ度きハ、漁父が平和なる此の生活なれ、

静けきこの浜に住む事一ヶ月、稍その平和之味覚江られ候、私の今度之製作も此の味を世の人に分たんと骨折り候、

されど不幸なる事にや、一ヶ月の間晴天わづか五六日、其内嵐二日を差引き候へバ、三四日位の事、頭に止まり候感しも少なく、写生も出来不申、残念の外無之事に候、

今度描き候図は、画面之大サは先般送り置き候秋草之庭を描き候絵の倍位に候、

老たる漁父一人、手拭かぶりて浜辺に干したる網之手入致居る処に候、浜にハ暖かく日当れり、空はや、曇り気味にて、静かなる海のかなたに田子の浦、遠く富士の裾引連なれり、網すく漁父の只一心に働く傍に、極無邪氣なる幼き子の食物を口にしあるあり、浜に寄せたる漁舟一二艘^ゑ外、別にかき現したるものなく候、平凡と云へバ誠に平凡なる図に候、私は平凡なる頭を以て、平凡なる図を作りたる事に候、意味に於て平凡なる丈け正直と平和を現したる積りに候、何分描く日少なく、期日せまり来り候ま、致方な^く帰京仕り候、此のま、学校に差出す事ハ如何にも私の忍びさる所に候ま、昨日黒田先生之語らるゝにまかせ、先生の宅へ持行き批評を乞ひ、其上にて修製する事に致候、

全体の構図はよろしく、漁夫の穏なる生活の様現れ居れる様申され候、今少しと云ふ^へ写生の不足なる所に候由承り、もとより写生は思ふ半分も出来居らず候事に候へ、構図（組立）之悪しくなきと云ふに、余程自分なから力つき

勇み候、されバ私も思ひたけ之製作を終へて学校に差し出す^(き脱力)様願候処、心

よく来月の中旬迄にて宜敷故骨折てやつて見るがよゐ、力之つくは斯様な場合にあるから、充分やるならバ君の為めになるのだからと申され候、私も

今一ヶ月半も時日のある事に候へバ、別に描きかへる考を述へ候処、同じ描き更へるなら、此の図の倍位な大さの物に改めた方よからん、骨折も加るから費用など考へずに無中でやつて見るべき様、ゐと親切に教示被下候、斯くの如く何となく大なる力ら我身に加りたる様思れ、強き意志と深き感情を以て此の製作にかゝらむとする所に候、如何にしても私ハ今度之責任を充分尽し終る決心に候へバ、何卒其辺御心安く思召し被下度候、深々思ひ厚く考へ

候へバ、最早や筆とる力も無之候、色々之感し心頭に満来り候、あゝ我ハ斯くして恵み高き閣下の愛に謝する事の出来き得へきし期あらむかを、

不幸なる力なき我を斯く迄救る、誠ある閣下に、我ハ常に煩し^を加へつゝ、あるにハあらざるにや、

閣下に安き心与ふるハさても何時の事ならむ哉、我ハ閣下の厚き情に向ふて涙なかつ事之禁せざるに候、我ハ救れつゝある此の高き恩と愛^とに對して、よく感謝之意を表しつゝあるか、

よし其心ありせばとて、よく閣下の恵みに謝するの力あるか、思へバ思ひ来る程罪ある我のかなしきをうらみ居り候、

幸に不肖をして立たしめ給へ、我をして愛の子たるを得せしめ給へ、噫此の上の言葉は出で不申候、謹而一言致すべく候、

閣下の暖かき情に反し、私の感謝之情に於て冷かなる事を自覚致し居り候、かき続ける事も打堪へ候、

^{さて}御約足致置き候静物之絵、学校より今少し返し来らず候故、受取次第早速御

送り可申候間、然様不惡御待ち被下度願上候、今度之漁夫の絵も一枚は学校に、一枚は御許へ差送る考へに御座候、都合により又旅行致かく知れ不申候、右製作の為に候、

前途を思へば程々の希望満ちく思苦しく候、此の夏休暇にハ、親しく拝顔之上申語らんと待ち望み居り候事も少なからず候、

留学、あゝ羨しき事に候、我友は去月仏国留学の途に就き候、見送りたる我と進んで学ばんとする彼とを比せば、心中共に思ひやられ候はずや、されど我も刻一刻に於、勇気の加り進んで前に来る所を得んとしつゝ、あり、志強されハ何の得難き物のあり候はん、奮起發展我理想に候、

昨日しほく降りたる雨は、実に数万之血ながしたる同胞弔ふ涙なるにや、昨日より神の列に入りし勇士を祭る九段上之招魂社、今日は霽れて日暖かに候、私も同胞之恨みある霊に心ある感謝を捧げんと致す処に候、あゝ天にさまよへる数万之霊よ、兄等何を思ひつゝ、あるか、親二別れ、妻を置き愛子に離れて、心なき戦場に出で、罪もなき同胞に剣向け弾丸交へつゝ、遂に勇しの姿を此の世の外に置きぬ、

噫さても不幸なる世の様や、

平和々々我ハ聖なる神之命を受けて実に平和之使徒たらむ、

誠に戦ほと馬鹿くしきものもある間敷候、

戦わされバ平和続かすとハ、さても愚かなる人の集りたる世の中二候、

役にも立たぬ事申述べ失礼致し候、

まだかく事共山々有之候ゐしに、頭つまりてとんと何事も思出されず候まゝ、

筆止め可申候、

末筆ながら謹而閣下の健全を祈り居り候、

陛下の賢き御恵に接したる岡山孤児院之光栄と院長石井氏之名誉を称揚致居候、

五月四日

虎次郎

大原先生 台下

※1ヶ月におよんだ沼津滞在を回顧。制作中の「老たる漁父一人、手拭かぶりて浜辺に干したる網之手入致居る処」と記す作品は、【総目録】No. 50、No. 51であり、黒田の助言を入れたことや、今後の所蔵についてもふれているが、現在の所蔵者も児島の記述に齟齬のないものとなっている。

また留学に関しては、【紀要1】掲載「(5) 大原家文書F1230 明治三八年七月十四日」の露払い的に友人の留学について触れ、自らの思いを伝えている点が注目される。

(36) 大原家文書別125 明治三八年五月六日 【図4】

(表面)
「備中国／倉敷町／大原孫三郎様」

(裏面)
「絵はがき九枚、本日郵送致候間御落手被下度候、

和製にては六品之絵ハカキ最も高尚にして真面目なるものに候、他の三枚ハ舶来品に候、

和製にてハイカラ的の極輕薄なるもの沢山有之候へ共、見るに堪へぬ品多く

候、御氣に召か否かと案じ候へ共、私の氣に向た品少々送り置候、

各学年の試験始まり候故、研究科は休暇の有様に候、

御全家へ宜敷御伝へ被下度候、謹で高堂の万福祈居候、

五月六日朝

東京にて 虎次郎

大原先生 足下」

(37) 大原家文書 F・190 明治三十八年六月一日

(封筒裏上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「安房国那古町赤井の下／田村虎吉方 児島虎次郎／六月一日」

拝呈、

暑追々相加り候処、御華邸愈々御清栄之段奉大賀候、

其後ハ御無沙汰仕り申訳無之事に御座候、小生儀一昨々日東京出発、房州に

向て乗船仕り候処、風波烈しき為め、浦賀へ寄港、一泊致居候、此日九里浜

の米提督ペルリ上陸地を訪れ候、

翌日、無事当地へ着仕り滞在致居り候、

此日も随分の波風にて、少し閉口致候、

着房以来、日々好天気にて、何より幸福の事に御座候、面目に製作に従事致

居り候間、御安神被下度候、

当地滞在ハ今度ハなからざる考へに候へ共、製作の都合によりて未定に御

座候、然し製作の提出期日も定まり居り候事とて、一方ならざる心配と骨折

ニ御座候、

毎度勝手間敷存じ候へ共、学資を当地の方へ向け御送付被下度き様御願申上

候、当地にハ那古郵便局有之候、

今度の製作にハ誠に閉口致居り候、然し何ても勇氣を以て責任を全ふ可致お

誓申置べく候、私費のかゝる事に就而も一方ならず苦しみ居り候、

先日より天気よき為め大分忙き方ゆゑ延引致居り候段、不悪御海容被下度、

先ハ御報知旁々御願申上候、

六月一日夜

虎次郎

大原先生 梧右

(38) 大原家文書 F・227 明治三十八年六月八日

(封筒裏上書)

「岡山県倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「安房国那古町赤井の下／田村虎吉方 児島虎次郎」

※1904 (明治37) 年に青木繁が、坂本繁二郎、森田恒友、そして恋人の福田たねと共に滞在中、《海の幸》(アーティゾン美術館蔵 重要文化財)を描くこととなった千葉県館山市を、児島もまたその翌年に訪ねていたことを知らせる重要な書簡。滞在地の那古は、青木たちが逗留した布良にも近く、児島もまた同様の海岸風景を目にしたであろう。

謹啓、

御高堂愈々御清適之段奉大賀候、小生儀無異勉勵致居り候間、乍憚御放神被下度候、

本日、為替にて五月・六月分之学資正に拝受仕候、別紙受領証の通に御座候、

次に、御申越相成候御尊嚴之御肖像之儀、拝承仕り候へ共、とても不肖の如き初学之ものにて御尊嚴が人格なと描き出さん事不可能之事と存じ居り候なる事に候へバ、今少し研究之後、製作致度事に御座候、

然し万事御承知之上之事に候へバ、不及ながら製作可仕候間、然様御承引被下度候、然し閣下の御満足に相成る様之事ハ無論出来不申候へバ、前以て御断り申上置き候、

学校之休暇も近づき候間、休暇と相成り候て帰国参堂可仕候、

画面の大きハ、先日御送付致候静物絵より少し大きき位のものに可致、其積りに

て準備可致候、

最も御望みも候へハ、東京之宿所宛にて御一報を煩し度願上候、

本年ハ国元の老たる親父母の是非帰省する様、切に申越居り候間、帰郷致す

考へに御座候、何分共に高齢之事に候故、何となく慕しく思ひやられ候、

九州福岡にも伯母と従兄と本年転居致居り候に就き、写生旁々旅行致す考へに御座候、

当地滞在早くも二週日を経過致候、製作も大分捗り候故、近き頃帰京可仕心得居り候、

今度の旅行は幸に好天気引続き、誠に都合よき事と感謝致居候、此の神の意ある所に報るんため、心清く誠の心を以て製作に従事致居り候、

野のあちら、田のこちらと蛍飛びはじめ候、蛍光る頃、蚊の唸る声烈しく相

成候、

末筆ながら閣下の御幸福を謹而奉祈候、

六月八日之夜

虎次郎

大原先生 梧右

※房総での滞在制作を伝えるが、具体的な作品内容が記されていないのが残念なところ。ただ書簡冒頭に、大原孫三郎の肖像制作の依頼があり、帰省時に制作に取り組む用意のあることを伝えている点は注目される。大原孫三郎をパステルで描いた作品が現存するが（『総目録』No.55）、それを取材時の習作とした油彩画が完成したのだろうか。

〔39〕大原家文書F1228 明治三十八年六月二八日

〔封筒裏上書〕

「摂津国有馬町／兵衛旅館にて／大原孫三郎様」

〔封筒裏上書〕

「東京本郷区千駄木林町／二二四中川方 児島虎次郎拝／六月廿八日」

芳墨拝誦仕候、

御肖像之大きハ御申越に従ひ準備致すべく候、

御尋ね被下候帰省の日ハ未定に候、なるべく早く帰郷参堂可仕考へ居り候、旅行中製作の絵、未成に付、此頃毎日修作致居り候に付、何れ近日製作品を学校へ提出致し候上、帰国致すべく候へバ、何れ来月早々とも相成るかも知

れ不申、なるべくなれば、御滞在中に有馬へ御訪れたき望みに御座候、同郷の知友、上京中の処、先般中より脚氣病にて、今度帰国する様医師の勧めにまかせ候由に就き、保証人より呉々小生に同行を望まれ候まゝ、同車致すべき事に致居、就而ハ病人の都合にて、二三日位延引するかも知候へ共、何卒其辺不惡御承引被下度御断り申上候、有馬へ御滞在は何日頃迄に候哉、伺上候、

帰省之節御尋ね可申候へ共、御出立後にてハ駄目なる事に候へば、一寸御一報を煩し度願上候、先ハ不敢取御返事迄申上度候、

梅雨の候毎日面白くもなき天氣続きにて、誠に閉口致居り候、時節柄御自愛專一之程奉祈候、

六月廿八日

虎次郎拝

大原先生 台下

※大原から、肖像画のサイズ指定もあったことが分かる。大原はしばらく有馬に滞在し、同地での面会と取材制作を児島が想定しているが、病気の友人への同伴が必要なことを伝えている。

(40) 大原家文書 F1229 明治三八年七月五日

(封筒裏書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏書)
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方 児島虎次郎／七月五日」

拝復、

本日正午後当地出発可仕候、病人同道に候故、成羽迄直行可致、帰郷早々参堂可仕候に付、何卒不惡御承引被下度、右御報知申上置候、草々

七月五日

虎次郎拝

大原先生 台下

— ※病気の友人への同伴を理由に、大原と会えなかったことを伝える。 —

(41) 大原家文書 F1231 明治三八年七月二五日

(封筒裏書)
「都窪郡倉敷／大原孫三郎様／侍史」

(封筒裏書)
「川上郡成羽町／七月廿五日 児島虎次郎」

御深情なる御芳志拝承仕り感涙の至に不堪候、何事も閣下の高き理想に相まかし可申候、

来るべき望みある年を頼しみに充分なる準備的研究を可致候、小生ハ何所までも我天職の爲め、献身的戦闘をなさんとするものに御座候、我ハ人にして世の人たらず、靈界の一粒たらんと欲するものに御座候、

先日之図案今一応考案仕るべく候、

絵ハかき二三枚描き候へ共、かきなれざる為めか、思ふもの出来候はず、今

少し御待ち被下度候、

製作ハ怠りなく務め居り候間、然様御承引被下度候、

未筆ながら御病勢ハ其後如何に御座候哉、御伺申上候、家内一同よりも安否之程案じ居り候、暑気愈々酷しく相成居り候候、折角之御養生專一に奉折候、頓首

七月廿五日

虎次郎

大原先生 謹呈

※【紀要1】掲載「(5)大原家文書F・230 明治三十八年七月十四日」で、滞欧希望を伝えているが、それに対する大原からの返信は、児島にとっても望むべき内容であったことが察せられる。

(42) 大原家文書F・232 明治(三八)年八月二日

(封筒裏上書)

「都窪郡倉敷／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「川上郡成羽町／八月二日 児島虎次郎」

謹啓、

御母堂様の御容体如何に御座候哉伺上候、暑さ烈しき頃、嘸御心配之事と奉察候、小生儀先日中より齒痛にて閉口致居り候、就而ハ御依頼相成候もの延引仕り、誠に申訳無之事に御座候、甚た勝

手ヶ間敷候へ共、今少し御待のへ被下度、気分も快よく相成候ハ、早速御送り申上べく、呉々も御願申上候、

今更申上へき程の事にてハ御座なく候へ共、人の身の上に病ほとかなしきものハ無之かと覚へられ候、少しの病にても自分の思ひ通り身^自の体を自由に使ふ事の出来さる此頃、誠に残念の至りに不堪候、

此身先苦しみて大に世の病める人々の上に心よりの同情を表したる次第に御座候、

面白くもなき事申のべ恐入候、

右不惡御承引被下度願上候、不備

八月二日

大原先生 梧右

虎次郎

※児島からは、孫三郎の母患以の体調への気遣いや、自身の齒痛などが伝えられている。ちょうどこの時期に、大原孫三郎は石井十次など周囲のキリスト教プロテスタント関係者の勧めもあり、洗礼を受けているが、このことを児島は知らなかったのであろう文面となっている。

(43) 大原家文書F・233 明治三十八年一〇月二日

(封筒裏上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京本郷千駄木林町／二三四中川方／十月二日 児島虎次郎」

時下寒氣覚そめ候処、高堂愈々御清適之段奉大賀候、

先日中ハながく御厄介に相成り、一方ならざる御厚情に預り候段、謹而深謝奉候、

着京後無事勉強致居り候間、然様御承引被下度候、耳病も追々快方にて、最早医師にかゝる程の事も無之相覚へ居り候、

受領証三ヶ月分差送り置候間、御引合被下度候、慥此丈なりし事と考へ居り候間、一応御検へ被下度願上候、今日、^(人名3)□□君より来る六日金曜日に茶話会開催の旨申来られ候、当番ハ小生と^(人名2)□□君に御座候、会費ハ^(人名3)□□君の説に拾八名に候へバ、十五円申送る様云加られ候間、其御考へにて御見計ひ御送金の程願上候、

白馬会開会中、本年八十周年とかにて、黒田・久米・和田・岡田・藤島諸氏の旧作品など陳列有之、中々面白く感し候、一寸一通り見物致候のみ、悉しき様子申上かたく、何れ其内模様申上べく候、

末筆ながら向寒の折から御養生專一に奉祈候、御内皆々様へ宜敷御伝言願上候、

先ハ当用のみ申述置候、草々

十月二日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、今度の茶話会会費の内、八円ハ^(人名1)□□君の処に預り居る様子に候へバ、

残^{幾かを}■円御送り下さるべく願上候、^(人名1)

□□君ハよくハ覚へ居られども、慥預り居る様にも思はれ候とかに候へバ、一応貴下の御手元にて御しらべ被下度願上候、^(人名1)□□君の預り居る八円とかハ、^(人名4)□□君に渡すべき学資とかに候由承り候、右一寸申加へ置候、

※児島が耳病であつたこと、白馬会10周年展への期待が語られている。
茶話会は、大原孫三郎より支援を受けていた在京者の集いである。その際の資金も大原が提供していたことがうかがえる。

(44) 大原家文書 F1208 明治三八年一〇月八日

〔封筒上書〕
備中国／都窪郡倉敷町／大原孫三郎様

〔封筒裏上書〕
「東京本郷区千駄木／林町貳百貳拾四番地中川方／児島虎次郎」

拝復、早速公森君に問合仕り候処、同君ハ少しも承知し居らざる様申越され候、

^(人名1)□□君ハ今回分の会費の内、八円を預り居る様な記憶も少しハ有之候につき、^(人名1)八円ハ^(人名1)□□君の手元より差出す様申され候、あまり慥に^(人名1)□□君も覚へ居られざるに、小生の受取と云ふ事ハ何となく気の毒に思はれ候につき、貴下の御考へにまかせ申置べく候、^(人名1)□□君ハしきに自分より渡す故、何卒大原氏の方へ申送らざる様申され居り候、

兎に角私の考へにハ相成さる事に候故、貴下の御考へにまかせ度願上候、前回の分にて算用違出来、^(人名1)□□君が一人にて支払居らる、費用有之候と^{少し}か、^(人名3)□□君より聞及居り候故、今回の会費の中より差引、同氏に相渡し度存居り候、右取あへず御報知申上候、

着京以来専心勉勵致居り候、希望明々大に力づき楽しく学の道に従ひ居り候、張合ある事ほど人に勢力をつけるものハ御座なく候様考へられ候、非常の勤勉と充分の決心と誠の信仰を以て、大に猛進せんとする覚悟に御座候、

滞倉中の御高説、此頃思出してハ嬉しく味居り候、人ハ誠に働けバ何事と云へ、ならざる事のあるべき精神一到何事かならざるらむの金言実に面白く候、

此の荒漠たる大海の中、底根もなき浮島に生る立ちてうかくして居れば、底の藻屑となるハマのあたり、荒き波暴き風と戦ふべき覚悟と準備なくてハ駄目の事と考へ居り候、

閣下の厚き恵に謝せんため、充分務むる決心のものに御座候、あまり失礼の言葉出で恐れ入り候、草々

十月八日

虎次郎

大原先生 梧右

※茶話会に関わる担当者の思惑や経費の流れの面倒さを感じさせる。先の書簡とあわせて、児島が倉敷で大原としばし時を共にして語らったことがわかる。

(45) 大原家文書 F1192 明治三十八年一〇月一三日

(封筒上書)
「備中倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷千駄木林町／二三四中川方 児島虎次郎」

拝復、

京都よりの御手紙拝受仕候、茶話会の会費として拾円為替券落手致候、八円の分の事ハ前便にて申上置候通り、判然たらざる事に候へバ、御考へにまかせ可申候、

此頃の旅行、何処とてよろしからざるハあるましく、まして古き都に色つく木々や山の姿なかめ暮すハあまり悪しき^事とも察せられず候、

今日此頃の明月を京の名所になかむるハ、誠に羨しき事に候、

今宵の茶話会も恰度十五夜の明月、友と楽しく月を賞する、実に快よき事ならむ、

月をながむれハ、何時も宮島の海上の月、明石の夕月など思出されてうたる^(ママ)夢の様なる感起り候、

忘れられぬものハうれしき時とかなしきものに御座候、今年ハ春より毎月月まろくなる頃ハ何時も夕空はれて、月かけ美しき事のみ、誠に月なかむるにハよろしき年に候、

毎度勝手なる事のみ申上候へ共、本月分の学資至急御送付被下度御願申上候、夜学へ通ふため、先日月謝や束脩、教科書やら辞書など買求め候ため、不都

合を来し閉口致居り候に付、何卒御察し被下至急御送付被下度、呉々も御願申上候、

ゐつも音信する度に何とかとか自分勝手なる事のみ申上、何だか御迷惑計り相かけ相済み不申候へ共、其辺不悪御免し被下度願上候、

昨日、英国海兵入京、当市にハ歡迎とか何とかさわき立て居る様なれとも、市民全体が理わかりて歡迎して居るのかどうか、誠にうたかわしく候、虚礼ほと見苦しきものハ無之き事と覚へ候、われ／＼門外者ハ知らぬ場所に候と顔横けず候、

十三日

虎次郎

大原先生 台下

※語学学習のため夜学に通い始め、その経費負担に苦慮していることを伝える。

(46) 大原家文書 F・236 明治三八年二月一日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方 児島虎次郎」

風寒く木の葉色つき候処、御変せもなく愈々御清福之事とうれしく奉賀候、

小生無異勉強と修養に心尽し居り候間、御放神被下度候、

御送り可申油絵延引致、誠に申訳無之事に御座候、本日、小包にて式枚差送り候間、御落手被下度候、先生の批評を乞ひ、欠点少なきもののみ送り置候、日を追ひ月をへて怠る事なく勉め進ま、何時かハ己の志す所に達すべし、神に誓し清き誠の道守りて心ある祈さ、げつ、尽さば、何時か神の住居に達する事を得む、我一身ハ神にさ、げし処、只信する神之命に従ひて全力を尽して其職分に務むべきものに御座候、

先日申上置候件、御承知被下候哉、目下必要にせまれ居り候間、至急先月分の学資御送り被下度願上候、本月分の学資も勝手ケ間敷候へ共、ともに御送付被下度、小生にとりてハ、勉強上都合よき事に候、右御依頼申上候間、悪しからず御承引被下度候、

茶話会の会計の事も申上置き候通りに候へバ、宜敷御考へ被下度願上候、

末筆ながら御高堂の万福を奉祈候、

十一月一日

虎次郎拝

大原先生 台下

※「先生の批評を乞ひ」とあるところから、児島が大原へと研究の成果として送る絵画作品に関して、東京美術学校の教員のアドバイスがあったことが推察される。他に、教員への作品揮毫の依頼のケースもあるので、黒田清輝や藤島武二に、児島と大原の支援関係はよく把握されていたと言えるだろう。

(47) 大原家文書 F・211 明治三八年二月一日

(封筒裏上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方／十一月十三日 児島虎次郎」

羽風寒く木の葉吹きしく頃、明月さゆる此頃の夜、如何に閣下はなし給ふらんと慕しく思居り候、

秋と云へば悲しきものと語る人あれども、さも思はれず、春にかわらぬ樂しみと望みともちて勉強致し居り候、

自己の天職を忠実につくしたる時^(ママ)ばと樂しきもの嬉しきものもよもあらさるべく候、

幸に美しき巧の神の教へに導かれ、その日／＼を働にくらし居り候、神の愛と閣下の同情とを感謝しつ、

先月分の学資、^(人名3)□□君より先日拝受致候、領収証延引仕り申訳無之事に候、学資つきた時ほど苦しき事も御座なく候、求め度き絵具も用る度きモデルも意の如くならず、誠に残念なる時もある事に御座候、

先月分例月より余分に御送り被下候段、深く感謝致居り、全く御同情のある処とそのまま、拝受致すべく候、

来る冬の休暇にハ、銚子方面へ写生旅行致し度く望み居り候が、如何に御座候哉、御許しも被下候へバ、旅費を来月始頃迄に御送り置被下度、充分なる製作を致すべき考へに御座候間、然様御承了之程願上候、

末筆ながら御全家様へ宜敷御伝へ被下度、謹て閣下の幸福奉祈候、頓首

十一月十三日

虎次郎拝

大原先生 閣下

※通常より多くの送金のあったことに感謝しつつ、写生旅行のプランを伝え、そのための支援を要請している。児島の画業への研鑽への没頭と、そのためには大原への経済的支援要請は当然といった関係が伝わる。

(48) 大原家文書 F・237 明治三八年二月二八日

(封筒裏上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方／十一月廿八日 児島虎次郎」

窓前之桐一葉二葉散りゆきて、梢淋しくなりそめ候、然し未たさほどの寒も無之、秋の心持なかむるにハ尤もよろしき時と覚へ候、嘸御門前の新川の水の面にも色美しき木の葉の浮び居る事と奉察候、御華邸皆々様にハ何の御変りも御座なく候事と奉^(カ)遥賀候、

本日御送付被下候為替金参拾円正に拝受致候、内拾円^(人名1)□□君に相渡し申候、

実ハ先日より閉口致居り候、早速借金も済せ、絵具・材良も買求め可申候、^(ママ)私なとバ毎月のはじめに買求むべき品多くて、誠に閉口致す事有之候、相な

るへく候へバ、月の始めに御送り被下候へバ、勉強する上に甚だ都合よろしき事に御座候、

御送り可申油絵、先日学校に差出し置候間、返り次第早速御送り申へく候、

右不悪御許し被下度候、

此の絵ハ

植木屋の庭に花さきたる所に、温室の入口見へたる図に御座候、私ハ此頃何務むるにも涙たゝへられ候、此の涙ハ決して悲しみのそれにてハ御座なく、全く感謝と祈りの涙と覚り候、色々と静に己が身の上を考へる時、誠に自分の身の幸なる事は感じ候、それ同時に自分の責任の重大なる事をも感じ候、益々高潔なる品操と勇ましき精力とを以て己が職分を尽さんと存じ居り候、あまりながく申述へまじく、只私ハ閣下の高き恩愛に泣きつゝ、清き涙もて眼浄めつゝ、自然に對し怠りなく忠実に己が天職に向て務め居り候間、うれしくもおぼしめし被下度候、

御全家様へ宜敷御伝へ被下度願上候、頓首

廿八日夜半

虎次郎

大原先生 閣下

※「植木屋の庭に花さきたる所に、温室の入口見へたる図」は確認できていないが、学校の課題として提出した作品が、手元に戻り次第、大原へと送られるケースがあることがわかる。研究の成果報告として、そうした状況が常態だったのだろう。

(49) 大原家文書別2・57 明治三八年二月九日 【図5】

(表面)
「備中倉敷／大原孫三郎様」

(裏面)
「本日小包にて油絵壹枚差送り候、願ハくハ額縁へ御嵌め被下度候、

(縁カ)

学校は此頃休業に候(研究科のみ)、夜学も十五六日頃より休業の由に候へバ、其頃より直に写生旅行に銚子方面へ出発致度き望みに候、

一ヶ月位かゝりて少し大きな物描き度考へ居り候、其内出来るだけ一日も早く出発致すべく候に付き、何卒至急御送り置き被下度、呉々御願申上候、絵具・材良など用意致し置き度、冬の休み頃になれば、絵具など品切になるかも知れず候故、早き方凡てに都合よろしき事に御座候、

十二月九日

虎次郎

東京中川方」

(50) 大原家文書F・213 明治三八年二月一四日

(封筒上書)
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京本郷区千駄木林町／二二四中川方／十二月十四日 児島虎次郎拜」

御手紙只今拝見致候、

直に心こめて黙祈をさゝげ候、祈終りたる時、我眼の涙もて満されたるを感

じ候、

御手紙の僅なる文字を通して、閣下の高き人格と親しき愛情に接し候我心の奥の奥に、閣下の美しき心を受け候事、誠に感謝の外無之候、我靈魂の内に誠の感化を与へられたる事、此上の賜物ハ無之候、如何で余ハ奮励せすに居られさらむ（君の歴史に付て静思の一句ハ非常に余の心を射り候、余と余の及ハざる所を謝し候）、親が子を見るがごとき厚き閣下の真情に接し、余ハ誠に嬉しく一命を捧けて充分天職の為に奮闘致すべく候、

あまり多く語る事のうるさきも免し給へ、

信仰尚浅けれども、余ハ神を信するの熱心を持ち居り候、我に誠に神の前に尽す時、常に大なる不可思議なる力の余の心の内行の上に行はる事を深く信られ候、

年暮れたりとして、何ぞ嘆せむ、已に尽す所誠ありせば、古人の落花を嘆するあり、何の愚そや、花咲くも花散るも神の言ならずや、其の間に神の命を尽す、是れ己が務めなりと信じ候、されど日一日と過ぐる間、その日／＼を己が失敗の下に送りつゝあるを自覚致居り候、

噫今日も戦に敗れたり、又勝利の境に進まれさりしかなしさを、されと其の敗るゝごとに愈々自己の決心の厚くなり行く事を覚へ候、何日かハ怠りなくハ勝利のよき日見る得んと楽しみつゝ、神の教のもとにその日を送り居り候、我に常に告ぐるものハ、汝の責任を自覚せよと云ふ事に候、噫思へバ我が責任ハ重大に候、天晴れ己の責任を全く致すべく誓居候、

御貸与被下候金三拾円、正に拝受仕候間、受領証差送り申上候、
出発ハ何日か未定に候、夜学が十五日過迄である様子に候、

末筆ながら御全家皆々様へ宜敷御伝へ被下度願上候、謹て閣下の幸福を祈り

居り候、

嬉しからずや我に希望の満ち／＼たるあり、神の救の大なるあり、誠に余ハ幸福なる身ならずや、

不敬の所幾重にも御免し被下度候、

年暮れかゝりたる十二月半なれとも、小春の暖かき日、西日あたる三畳の住なれる室に御手紙を前になかめつゝ、

十四日

虎次郎拝

大原先生 閣下

〔51〕大原家文書別2・59 明治三八年二月二五日【図6】

〔表面〕
「備中国／倉敷町／大原孫三郎様／銚子犬吠岬東館／児島虎次郎」

〔裏面〕
「昨夕星の光輝きそめたる頃、銚子へ着し候、宿を海に近き犬吠灯台の近くに
とり候、昨夜ハうれしく人声絶たる此の浜に、荒岩砕く波音聞きつゝ夢むす
び候、名しおふ波ハ高く、海ハ限りなきながめに候、かゝる美しき自然に接
するの幸なる事を切に感謝致候、

十二月廿五日

クリスマスの朝

清き浜風うけつゝ、

虎次郎

大原先生」

※希望を伝えてきた銚子行きが実現したことがうかがえる。次に紹介する書簡でも写生に苦しむ様子が伝えられるが、この成果となる作品の現存は確認出来ない。

〔52〕大原家文書別2158 明治三十九年一月一日【図7】

〔表面〕
備中国／倉敷町／大原孫三郎様」

〔裏面〕
「毎日写生に苦しみ居り候間、御安神被下度候、
苦しむほど面白く相成り候、

銚子観音前吉野屋にて

虎次郎

明治卅九年元旦

大原先生 梧右

うれしく新年を迎へ候、謹而同胞の幸福奉祈候、」

〔53〕大原家文書F1238 明治三十九年一月一〇日

〔封筒上書〕
「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

〔封筒裏上書〕
「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方／一月十日 児島虎次郎」

幸なる新なる年にむかへられてはや一週日をすこし候、その日／＼のすみやかさおとろくより外無之候、旅行より帰りて数日、写生の修製に忙しく、思はず御無沙汰仕り申訳無之候、何れ数日のうち製作を終り可申、画面の干き次第御目にかけ可申候、今度の旅行ハ私に一方なさる力を与へ候、やかにたりたる年、此等の感想が美しき画題となりて現る、事を信じ居り候、

うるハしく感せし此の自然の味ハ、とても只今の私の技術にてハ人に語れ申ましく、又自身に於ても承知致されず、誠に憐なるものに候、

大空浸せる広海の面に、よせてハかへす男波女波の奏つる曲、

夢であろうか、現であろうかとうたがわれし事磯に幾度か、

如何にして此の極美の様が写せるならむと筆もちつ、力弱りし事又幾度、されと此の稚き筆を画面に添ゆるそのうちに、おのれにも無き力の宿り来て、

覚へもうとき何時の間にか絵のなる事もあるべく候二ハ、

自然にあこがれのおもひ熱きが恵みかと考へられ候、此の身に切なるあこがれと誠の恋のある時、そこに巧の神の美しき愛の手ハ、此の憐なる身をも導

くならむと信じ居り候、

あゝわれハ清からむ、誠たらむ、

わか心にくもりなく、わか心にうれるとうたかゝるなくバ、何とて見るもの聞くものに愛と情との無らむ哉、あゝわが心の楽しさ、神の衣に涙を染めて感謝致すべく候、思ひ起す思へバおもふほど、厚き閣下の情うるはしき閣下の姿かな、言の失するをゆるし給へ、

上野に響く夜半の鐘声を今耳にき、候、万物静なる此の刻、両眼としてすき

し事共思ひかへす時、我心の中にやとるもの、そハ何事ならむか、神の御前に閣下の高き恩恵を告げつゝ、心ゆく感謝の黙祈にて候、

ゆるし給へわが情の足らざる所を、

かく心の行く時、われハ無限の美しき園にさまよる行く事を現つながら夢み候、わが眼に涙みつ今、その園の草木の上にも露のみつを覚へ候、

噫夢心地な^{りし}今、われハ何ものならむ、如何にしても我に我なき様覚へられ候、

尚かくべき用事なとあり候へ共、今ハ語らむ事の何となくうるさ^くも覚へられ候まゝ、今宵ハ此のよき心地懷きてねむりの床につき、より美しき夢地にたとるべくうれしき事に御座候、

その園にてハ、遠くまします閣下の姿、とく此の世ゆきし我親しき父なども会して楽しく語る事も出来候はん、あゝ嬉し、九日の夜半に、

ねむり覚て今朝此の手紙読みかへし候へバ、何たか訳のわからぬ事のみに候、心の底ハとても筆や言葉にてハ語れましき事と存し候へバ、御ゆるし被下度候、

上野の学校も昨日より始まり、夜学ハ十五日より候、新なる年と共に、新なる力加へて充分なる勉勵致すべく候、

先日御依頼申上置き候本月分の学資、目下閉口致居り候間、至急御送付被下呉々も御願申上候、毎々都合よき事のみ申上、何とも恐れ入たる次第に候へ共、致方もなき事に候へバ、不惡御免し被下度候、

我学校に今度音楽部の新に設けられ候も、私の夜学の時間と突合て出る事も

出来ず候、我師のすゝめと我心の好むまゝ、ゆく末の友としてバイオリンの音覚へ度く、先月^{より}日曜日の半日をのみ此方に費す事と致候、此の清き音につかれし時の頭浄めむとする心やり御ゆるし被下度候、夜学と此方にて月謝の嵩むにハ少々くるしく候、

われハ常に慕しき閣下のなつかしき言葉聞かむと望^(むカ)くものに候、如何に楽しく閣下の文に接する時、わか心のおとる事を、閣下の心の中に宿せらるゝあつきおもひに恋しく候、もしわか心のうたかわしき時も生せし時ハ、われに其の由御聞せ給らハ、如何にうれしく其の罪あらため申べく切なる望に御座候、心せまりきて語る事も出来不候、

悲しき時の事共回顧すれば、僅の喜もより楽しき事に候、人生ハ勝利にあらず戦争なりと誠の諺に候、登校の時間とも相成り候、是にてかき止め可申、くたらぬ事あまりなく^がきつゝ、け失礼致候、

謹而感謝の黙祈をさゝけ可申候、

御巖父・御令室へ宜敷御伝へ被下度候、頓首

一月十日

虎次郎

大原先生 膝下

※近況としては、銚子旅行でのスケッチからの制作の継続を伝える。

ただ【紀要1】掲載〔6〕大原家文書F1309 明治三十九年一月二九日」では、大原より児島の滞欧が許された様子が垣間見えるが、そうしたやり取りもあるためか、この前後の児島が純粹な向上心を持ち、大原

への深い感謝を伝える内容が増えている。

また児島が、バイオリンの練習を始めたことを伝えている。

(54) 大原家文書 F-240-1 明治三十九年一月一八日

(封筒上書)

「備中国倉敷町／大原孫三郎様／親展」

(封筒裏上書)

「東京本郷区千駄木林町／二三四中川方／一月十九日 児島虎次郎」

梅もぼつ／咲きそめ候へバ、桜もほと遠からさる事と相成候、此頃毎日の晴れつ、きにて、心地よき事に御座候、

御貸与被下候本月分の学資、本日慥に拝受仕居り候間、受領証差送り申候、本日小包にて海の絵御送り申居り候、実ハ二日程延引致候段御ゆるし被下度候、少し手元都合よろしからさる為めと御察し被下度候、

毎度なから小生より御送り候絵につゐてハ、閣下の批評承りたく、只閣下の如何なる点が気に入わぬか、如何なる所が意にかなるたるかを一口御知せ被下候へバ、小生にハ少なからざる益と相成る事に御座候、梓へ張りて後、御覧被下度願上候、何るべくハ額縁へ御入れ被下度願はしき所に候、場所ハ少し暗き所望ましく候、

此頃何となく望み多く、絵を作る事うれしく覚江居り候、

何をやるにも時間の不足なるハ残念の事に候、

人の云ふ事ながら、自分にて二つの体持ち度きものに御座候、

自分の心のうちに何たか立派なる絵の出来上りた様考へられ候へ共、画布に写すためにハモデルも色彩も要する事に御座候が、己の描かんとする様なモデルは中々広き都にも求めがたく、錢で雇れ候モデルにハ、ろくなものハ無之、それとて無暗に頼む訳にも行かず、中々六ヶ敷事に御座候、よき賞牌を得るにハ、よきモデルを要するとハ誠の言に御座候、

自分の意のまゝの製作をなして、其絵の前に腰すゑてなむる時ほど心地よき時ハ無之候、

幾十百年其絵の前になかめて尚あきたらさると云ふほどの絵が早く描きて見度く候、然しこれも一生懸命にやれハ、何時かハ得られましきものにてハ無之かと存候、必ずやつて御目にかけるつもりにて候、

それにつけても、早く一目見たきハ古人の身血をそゝきてなせる多くの名画にて候、

泰西の名画や風光の夢に入る事少なからず候、またしてもあまりなか／＼しく相成りて失敬仕候、先ハ当用迄に御座候、尚、寒さきひしき頃御養生專一に奉祈候、不具

一月十八日

虎次郎

大原先生 台下

追啓、御願申度き事有之候へ共、次便にゆづ可申候、皆様へ宜敷御伝へ被下度候、

※心情を伝える記述が多いが、最後には明確な渡欧の希望が述べられている。

(55) 大原家文書 F-240-2

明治三十九年一月一九日

【F-240-1と同封】

今朝、海の絵小包にせんと粹去らむとする時、幾度かためろひて、絵の前に立つ事一時、

もとより深々なかむる程の絵ならむ、人の目にハ拙なき筆とも見られむ、

何を恨まん、如何様に評さるゝとも、

されと我にハ実になつかしき絵にて候、なかめてあれバ氣ハ何時しか遠く太

平洋の波間に通ふ事に候、

筆とる時の苦しさと、絵なりし時のうれしさと、思くらふれハ、楽しき事に候、

遠き／＼海の向にハ亜米利加と云ふ国のある事、人の語れとも、我れにハ誠と考へられず候、如何なる天国の海の彼方にあるならむと、無我の思に沈み候、

我に情と誠とを以て描きたる絵ハ、例へ人にハ美しく見へさるにもせよ、我のみにハ幾度長くなくなかむるもあかす候、此の絵も自分の理想の様な

(縁カ)
額縁へ嵌て一目見度きものに御座候、

今此の絵と別を告げ可申候我室ハ、淋しく相成るべく候、

夜の床につく時、一時なかむるを例とせる我製作の一つなる此の絵、此宵よりハ影もなくなる事と思へハ悲しく候、

閣下、心あれハ我製作も我身と等しく愛し給へかし、

我製作ハ余か誠の愛子にて候へバ、

閣下、心あれハ余が送りし幾枚の絵、写真に影して、昔の製作を恋しく思ふ

余を慰め給らむ事を祈り居り候、

一寸、心せしまゝかきそへ候、

十九日

大原先生 台下

虎次郎



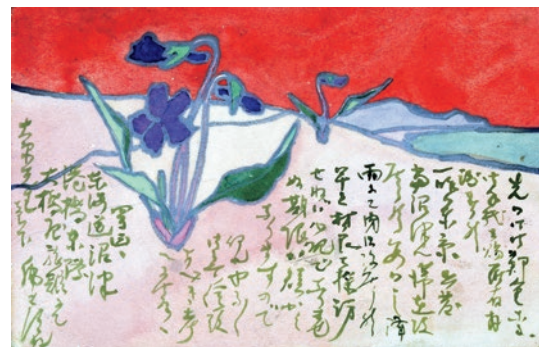
【図2】「元禄のおもかげ（白馬会出品）岡田三郎助君筆」
絵葉書



【図1】「有るかなきかのとげ（白馬会出品）和田英作君筆」
絵葉書



【図4】風景 絵葉書



【図3】児島虎次郎自筆 スマイルと風景 絵葉書



【図6】児島虎次郎自筆 灯台と岬の風景 絵葉書



【図5】川辺の西洋画 絵葉書



【図7】児島虎次郎自筆 利根河口の風景 絵葉書

編集・投稿規定

公益財団法人大原芸術財団は、『大原芸術研究所紀要』(以下、『紀要』)を、原則として一年度に一回刊行する。『紀要』は、当財団ならびに大原芸術研究所における調査研究の成果を発表することにより、当財団の所管する分野の専門的研究の深化、事業活動への反映のみならず、国内外の芸術研究活動の普及に資することを目的とするものである。

1. 投稿資格

- (1) 当財団職員
- (2) 当財団職員との共同研究者
- (3) 当財団が執筆者として認めた者

2. 投稿原稿

- (1) 未発表の論文
- (2) 未発表の研究ノート
- (3) 未発表の資料紹介
- (4) 未発表の調査報告
- (5) 未発表の書評、展覧会評
- (6) その他(当財団におけるシンポジウムおよび講演会での発表の報告等)

- ・ 論文は本文・註を含めて一偏20,000字以内、挿図は10枚以内を基準とし、600～800字程度の日本語と英語の要約を付ける。また、掲載内容によっては、字数や図版の制限は公益財団法人大原芸術財団の判断で変更される可能性がある。
- ・ (1)、(2)、(3)、(5)については、投稿原稿の内容に鑑み、専門知識を有する研究者に査読を依頼し、採択された原稿のみを掲載する。
- ・ 採択された原稿を紀要に掲載する権利は公益財団法人大原芸術財団が有する。このほか、投稿者は、著作権法上の複製権及び公衆送信権の利用を同財団に対し認めるものとする。
- ・ この規定に記されていない事項については、公益財団法人大原芸術財団が判断する。

執筆者(五十音順)

大下浩司(吉備国際大学外国語学部外国学科教授)
小林俊介(山形大学教育学部教授)
申旻正(韓国外国語大学特任教授)
塚本貴之(公益財団法人大原芸術財団研究部研究員・学芸員)
水島博(公益財団法人有隣会研究員)
柳沢秀行(公益財団法人大原芸術財団シニアアドバイザー)
吉川あゆみ(公益財団法人大原芸術財団特命上席研究員)

査読委員(五十音順)

大原秀行(絵画修復家〔吉備国際大学名誉教授〕)
小野絢子(大阪日本民芸館学芸員)
児島塊太郎(倉敷芸術科学大学加計美術館館長)
萩原敦子(パナソニック汐留美術館主任学芸員)
濱田琢司(関西学院大学文学部教授)

大原芸術研究所紀要 第2号

令和8年4月1日発行

発行

公益財団法人大原芸術財団
岡山県倉敷市中央1-1-15 電話:086-422-0005

編集

大原芸術研究所紀要編集委員会
第2号編集委員 大塚優美／孝岡睦子／寺元静香／洪性孝

表紙デザイン

横田惇史(株式会社中野コロタイプ)

印刷

株式会社中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏390

翻訳

小川紀久子(pp. 5, 27, 41, 55, (5))

Bulletin of the Ohara Art Institute

No. 2

Date of Issue: April 1, 2026

Published by the Ohara Art Foundation

1-1-15, Chuo, Kurashiki, Okayama, 710-8575, Japan
Tel. +81-86-422-0005

Edited by OTSUKA Yumi / TAKAOKA Chikako / TERAMOTO Shizuka / HON Sonhyo

Printed by Nakano Collotype

